

令和2年度
ESDティーチャープログラム
ESD学習指導案集

2021年3月
近畿ESDコンソーシアム
国立大学法人 奈良教育大学

この資料集を手にとられたみなさんへ

みなさん、こんにちは。奈良教育大学の中澤です。奈良教育大学では、E S Dの推進・普及を目的に、近畿E S Dコンソーシアムを組織し、研究成果を活かした社会貢献を行っています。その中心が平成27年度に開発した、E S Dを適切に指導できる教員を育成する研修システム「E S Dティーチャープログラム」です。

E S Dティーチャープログラムは5つの研修から構成されています。

①SDG s の理解促進

E S DはSDG sの達成に貢献する教育と言われていますから、まずSDG sを理解する必要があります。SDG sの成り立ちや目標間のつながりなど、講義とワークショップで理解を深めます。またSDG s絶対ではなく、クリティカルに考察します。

②E S Dの学習理論の理解促進

E S Dは人々の社会づくりに関する価値観と行動の変革を促す教育です。そこで、E S Dで育てたい価値について、また社会状況や人やメディアの言動を評価するE S Dの視点、E S Dで育てたい資質・能力について考えます。さらに、行動化を促すソマティック・マーカー仮説についても学びます。

③優良実践事例の分析と単元構想案の作成

E S Dの優良実践事例を分析することで、E S Dの単元デザインについて理解した上で、3つの発問から作成する単元構想案の作成方法を伝え、自らの地域において教材開発をします。地域の課題解決に向けた学習を展開することは、社会に開かれた教育課程でもあります。

④単元構想案の相互検討とE S D学習指導案作成

⑤E S D学習指導案の相互検討

④・⑤は参加者が作成した単元構想案、学習指導案の相互検討です。遠慮することなくビシバシと意見を戦わせることで、互いの理解が深まり、実践研究する仲間意識も生まれ、ネットワークづくりのきっかけにもなります。

このような活気ある研修プログラムによって、これまでに75名の現職教員と23名の学生がE S Dティーチャーとなっています。令和2年度はコロナ禍にゆれた1年でしたが、そのような中でも、大牟田市、山形市、長浜市立永原小学校、奈良教育大学附属中学校、奈良教育大学の5カ所でE S Dティーチャープログラムを展開し、42名の現職教員と8名の学生をE S Dティーチャーに、2名の現職教員をE S Dマスターに認定し、認定証を授与いたしました。

持続可能な社会を創るには3つのことが重要です。1つは国際協力、2つ目に技術やシステムの革新、そして一番重要なのが市民参加です。教育は持続可能な社会づくりに能動的に参加する市民を育てる草の根運動ともいえるでしょう。この資料集を手にとられたみなさん、私たちの仲間になって、ともに持続可能な社会の創り手の育成に取り組んでいきましょう。

近畿E S Dコンソーシアム 事務局長 中澤 静男

総合「なら」科 学習指導案

奈良市立朱雀小学校

教諭 中村友弥

学年 第5学年

単元名 平城ニュータウンの主人公

1 単元の目標

まちづくりについて興味をもち、中心となってまちづくりをしてきた人との話し合いやまちづくりに参加する活動を通して、自分たちが住むまちは自分たちがつくっていくという当事者意識を育てる。

2 単元について

・教材について

本校の校区は、主に大阪、京都のベッドタウンとして発展してきた地域である。1970年からニュータウン建設が始まり現在に至る。本単元では、まちづくり活動の中心を担っている方々や場所に焦点をあてた活動を行う。ニュータウンのあゆみを学び、現在まちづくりに取り組んでいる方の話を聞く活動やフィールドワークを通して「自分たちもまちづくりに参加したい。」という意欲を高める機会を設定している。まちづくりとは何なのかを考え、公園の整備や防災への取り組み、地域の行事運営や自治体の各活動などがまちづくりにつながっていることに気づくことができる教材である。また、実際にまちづくりに参加する活動を設けることで、自分たちもまちづくりに貢献することができる実体験を通して、まちづくりの当事者意識を高めたい。

・児童について

本学年の児童は、地域の行事に参加する児童が多く、11月に地域で行われたキッチンカーフェスタ（感染対策は厳重に行った上で実施されている。）はコロナ禍にもかかわらず大賑わいであった。地域の各行事を楽しみにしていて参加率は高いが、主催者側として地域行事に参加したり関わったりしたことがある児童はほぼいない。各行事がどのように運営されているか、そこで活動する人々の考えや思いを知る児童は、ほとんどいないであろう。特に今年度は 感染予防対策のため、地域の方と意見交流をする機会や活動する機会が少なかった。そこでこの単元を設定し、この学習を通して、日々の地域の活動がまちづくりにつながっていることに気づかせたい。さらに、まちづくりを行うのは自分たちであるという当事者意識や自ら考え、積極的に意見交流する力を育むとともに、地域や自分の良さも実感してほしい。

・指導について

導入段階では、平城ニュータウンのまちづくりに目を向けさせるために、平城京ロータリークラブ主催の標語づくりに取り組む。この標語は、未来の高の原がテーマで平城ニュータウンにある小学校が取り組んでいる。「自然豊かなまちにしたい。」「笑顔あふれるまちにしたい。」など、児童のまちに対する期待や願いを、標語づくりを通して、ふくらませていく。「まちづくりとは何なのか。」「これからのまちづくりをどのようにすればいいのか。」という児童の疑問を基に、学習課題を設定し、ニュータウンのあゆみや現在まちづくりをされている方から話を聞く活動、フィールドワークを通してまちづくりとはどういうことなのかに気づかせていく。また、「自分たちもまちづくり参加したい。」という意欲を高め、まちづくりに参加する活動を取り入れながら、学習を展開していく。

まちづくりに参加する活動は、地域と連携しながら主催者としての企画、準備、運営、片付けをできるだけ児童が担うことができるようなものを準備していたが、緊急事態宣言が関西で発令されたため、大幅に活動内容を変更することになった。社会科の情報を扱う単元と連携し、フィールドワークを中心に取材活動を行う。取材内容は、ニュース番組として制作発信することにした。例えば、まちの憩いの場である平城第2号公園へ行き、いつもきれいに整備されていることや防災用品が保管されていることに着目させ、公園を整備している人たちの存在に気づかせ、まちづくりにつながっていることを気づかせる。気づいたことはニュースの形で動画制作を行い、発信していく。制作した動画は、言葉遣いやモラル、肖像権、著作権など、メディアリテラシー意識してチェックし、振り返る。このような活動を通して、自治体が行っている各行事だけでなく、日々の地域活動がまちづくりにつながっていることに気づかせ、誰でもまちづくりにつながる活動ができることを実感させることで当事者意識を育ませたい。

3 単元で育成を目指す能力・態度

【この題材で働かせるESDの視点（見方・考え方）】

○連携性

まちづくりは、各団体や各個人がそれぞれに行うものではなく、世代を越えて連携協力しながら進めることが大切であるということ

○責任性

今の世代がまちづくりを担っているが、新しい若い世代（子ども含む）もまちづくりに参加する当事者意識をもつこと

【この学習を通して育てたいESDの資質・能力】

○コミュニケーションを行う力

地域での活動がまちづくりにつながっていることについて、意見交流を通して、自分の考えをつくりあげる。

○他者と協力する態度

まちづくりの活動は様々な世代と協力して行うことが大切なので、積極的に協力していこうとしている。

○つながりを尊重する態度

地域の行事を企画運営することや建物を建てることだけがまちづくりではなく、各自治体の活動もまちづくりにつながっているので、自分たちも参加することができる。

【この学習を通して育てたいESDの価値観】

○世代内の公正

共に住むまちだから、ある世代ばかりがまちづくりを行うのではなく、全ての世代がまちづくりに貢献する。

【関連するSDGs】

○目標11:まちづくり

4 単元の計画

次	活動① これからの平城ニュータウン ～標語づくり～	評価規準	評価物等
第一次 2時間	○テーマ 未来の高の原 標語をつくってみよう!	○つながりを尊重する態度 ・テーマにそって、進んで標語をつくっている。	・ワークシート① ・標語作成用紙
活動② わたしたちのまちのあゆみ → まちづくりは人づくり			
第二次 4時間	○むかしの平城ニュータウンを写真で見よう 【奈良県立情報館の河本さん】 ・現在の写真と見比べて残っているものやなくなったものの、新しいものを整理する。 ○街づくりに関わっている人に話を聞いてみよう 【朱雀地区自治連合会 会長 作間さん】 まちのイベント 学校とのつながり 作間さんの思い まちづくりとは、何だろう? 新しい世代が担ってほしい! まちづくりは人づくり、人づくりは『コトづくり』 これからの平城ニュータウンを考えるのわたしたち! 『コトづくり』に参加してみよう!	○つながりを尊重する態度 ・学んだことから課題や「コトづくりをしてみよう」という学習課題を見出そうとしている。	・ワークシート② 「むかしと現在をくらべて」 ・ワークシート③ 「まちづくりとは?」

	活動③『コトづくり』をしてみる！ →		
第 三 次 8 時 間	○『コトづくり』～主催者として企画する～ ・朱雀まちづくり協議会と連携して実施する。 企画 → 準備 → 運営 → 片付け <u>※関西に緊急事態宣言が発令され、できなくなったので変更。</u> ○調べ学習（歌姫近隣公園の瓦窯跡と平城京） ・瓦窯跡って何？ ・どうして今も保存されているのだろう？ ○フィールドワーク（平城第2号公園、3号緑地公園） ・どうしていつもきれいなのか？ →公園を整備している人たちがいる。 ・防災倉庫って何？ ・なぜここに水道施設があるのかな？ →災害が起こったときの備えをしている。 →生活用水を確保している。 ・行事があるときはどんな様子かな？ →まちの人たちや参加者がいっしょに楽しむことができる。 ○まちづくり協議会会長へのインタビュー ・なぜ活動しているのか？ →<u>日々の活動全てがまちづくりにつながっている！</u> ・困っていることは？ →<u>新しい世代の参加者が少ない。まちづくりは、だれでも参加することができる。</u> ○ニュース番組形式で動画を制作し発信する。 ・構成を工夫して伝えたいことが伝わる動画を作りたい。 ・著作権や肖像権などモラルは大丈夫かな？ ○振り返り ・動画を見た人に、感想を聞いてみる。 ・ここまでの学習を振り返り、考えが変わったことややってみたいと思うようになったことを中心に感想を書く。	○コミュニケーションを行う力 ・自分の考えをもち、友だちや地域の人と意見を交流している。 ○他者と協力する態度 ・役割分担しながら、協力して活動している。 ○つながりを尊重する態度 ・地域の活動がまちづくりにつながっていることに気づいている。 ・まちづくりは、誰でも参加できることに気づいている。	・ワークシート④ 【コトづくり提案書】 ・ワークシート⑤ 【振り返り用紙】

5 本時案(11時間目)

(1) 目標

まちづくり協議会会長へのインタビューを通して、地域の活動がまちづくりにつながっていることに、気づくことができる。

(2) 展開

学習活動	指導上の留意点	評価規準
①前時までの振り返りをする。 ・フィールドワークで公園を整備している人たちや災害への備えをしていることを知ったよ。	・振り返やすいように、記録写真を活用する。	
「まちづくりとは？」のテーマでインタビューをしよう。		
②まちづくり協議会会長へインタビューする。 ・まちづくりとは具体的にどういうことですか？ ・まちづくりの楽しさは何ですか？ ・困っていることはありますか？	・事前に用意したインタビュー内容を基にインタビューさせる。 ・オンラインで行う。 ・事前に質問項目は、伝えておく。	
③インタビューした感想を伝え合う。 ・まちづくりとは、建物を作ったりイベントをしたりすることだと思っていたけど、公園の整備や災害への備えもまちづくりにつながっているんだね。 ・社会体育で活躍することもまちづくりにつながるのかな？ ・自治体の活動もまちづくりにつながっているんだね。 ・私たちを含めて若い世代がまちづくりを意識して参加することが大切だと思った。	・インタビュー内容を基に意見交流ができるように、内容を板書しておく。 ・協議会会長にも、オンラインで意見交流に参加してもらおう。	○つながりを尊重する態度 ・地域の活動がまちづくりにつながっていることに気づいている。 ・まちづくりは、誰でも参加できることに気づいている。
④本時の振り返りをする。	・友だちの意見を尊重して伝え合うことができたか。 ・学んだことを生かして意見をもつことができたか。 ・まちづくりについて自分なりの意見をもつことができたか。	

「ひとに出会う」を通して学ぶ ESD の価値実現の教育実践の構想Ⅲ

ー コロナ禍における地域フィールドワークの可能性を探る ー

吉田寛

(奈良教育大学附属中学校)

中澤静男

(奈良教育大学 教育連携講座)

河本大地

(奈良教育大学 社会科教育講座 (地理学))

佐竹靖・竹村景生・市橋由彬・新谷太一・有馬一彦・山田耕士

(奈良教育大学附属中学校)

The plan of educational practice to realize the value of ESD learned through 'meeting the people' III

- Exploring the possibilities of regional fieldwork in Corona (COVID-19) related chaos -

Hiroshi YOSHIDA

(Junior High School attached to Nara University of Education)

Shizuo NAKAZAWA

(Department of Educational Cooperation, Nara University of Education)

Daichi KOHMOTO

(Department of Geography, Nara University of Education)

Yasushi SATAKE, Kageki TAKEMURA, Yoshiaki ICHIHASHI,

Taichi SHINTANI, Kazuhiko ARIMA, Kouji YAMADA

(Junior High School attached to Nara University of Education)

要旨：奈良教育大学附属中学校では ESD の理念を軸に「総合的な学習の時間」を学びの系統性の中に位置づけて学校づくりを行っている。本稿では、コロナ禍のなか、10 月に実施した地域フィールドワーク「奈良めぐり」で得た知見を紹介する。多様性・多文化共生を学ぶコースでは、ゲストティーチャーとの対話（ひととの出会い）を通して、外国人問題や障害者に対する視点の変化、さまざまな生き方に触れた。できないと嘆く前に「たくましく、できることを探し、一歩踏み出す人々」との出会いを契機に、まとめを経て「自分ごと化」していく生徒の変容を分析する。

キーワード：総合的な学習の時間 The Period for Integrated Studies

ESD (持続可能な開発の為の教育) Education for Sustainable Development

SDGs Sustainable Development Goals

「ひとに出会う」 Meeting the people

コロナ禍 Corona (COVID-19) related chaos

昨年度の実践では大きく以下の 3 つの成果を得ることができた。

1. はじめに

本研究は、地域に根をおろして活動されている方々との出会いや語りの傾聴を通して、中学校の生徒自身が ESD 的価値観に基づいて主体的に社会に関わる力を身に付け、将来、豊かな社会づくりの創り手としてつなげていくことを目的としており、3 年目の研究である。

具体的には、昨年度 (2019 年度) に引き続き「総合的な学習の時間」の一環として、1・2 年生合同による地域フィールドワーク「奈良めぐり (10 月 27 日実施)」を構想し、昨年度の実践における成果と課題を整理したうえで、取り組みを発展させていった。

表 1 2019 年度の実践で得た 3 つの成果

- | |
|--|
| (1) 個人の取り組みでなく、組織として ESD・SDGs に取り組む (ホールスクールアプローチ) |
| (2) 子どもと地域で活動される方々をつなぐ (ひとに出会う学び) |
| (3) 子どもと教師が共に学ぶ (協働的な学び、学び合い) |

一方、課題としては、昨年度は教員間の制約を設けず、試行的に推進した部分が大きかった為、中学校での 3 年

間を見通した学びの中で「どんな生徒を育てたいか」、そして「その為にすべきことは？」といった、取り組みの前提となる教員間の意識合わせが不十分であった点も否めなかった。

そこで今年度は、あらかじめ1・2年生の教員間で話し合いを進め、これまでの自由度を残しながらも、「学習を通して大切にしたい思い・願い」を意識共有した上で、8つのコースで実践を積み重ねていくことにした(表2)。

表2 学習を通して大切にしたい思い・願い

- | |
|--|
| <p>(1) 豊かな社会の創り手を育てよう。
その為の学習の手だてとして、「地域」「地域で活動される人々の思い・声」に多様な視点から迫り、単に観光地をめぐる奈良めぐりではなく、「ESD・SDGsにつながる学び」を創ろう。</p> <p>(2) 「こだわり」を持とう。
その為に「問い」を深め、これからの「答えのない世界」をたくましく生きる力を身につけよう。</p> <p>(3) 生徒と教師が共に主体的に学び合い、他者の意見に耳を傾けよう。(2学年合同の協働的な学習)</p> |
|--|

2. 新型コロナウイルス感染症拡大による影響

2020年2月末から5月末までの新型コロナウイルス感染拡大防止に伴う長期間の休校措置・外出自粛を経て、学校再開後も検温、消毒、ソーシャルディスタンスの確保等に細心の注意を払う「新しい生活様式」が始まるなか、「With コロナ」でできることの模索が続いている。

奈良教育大学附属中学校(以下、本校)においても、5月に予定されていた2年生と3年生の宿泊行事が共に10月に延期され、行き先変更や学習計画の規模縮小を余儀なくされた。これまで行事での取り組みを核に学びを深めてきた本校の教育活動にとって、今回のコロナ禍は中学3年間を通した「総合的な学習の時間」のカリキュラム編成の面においても、大きな痛手を被ることになった。

社会全体が閉塞感に陥り、身動きが取りづらい状況下で、人々はどうのような動きをとれるか。

このような社会情勢のなかで筆者にとって現状打破のヒントとなったのが、興南中学校・高等学校(沖縄県)の興南アクト部が行っている活動である。

沖縄では2019年10月31日に首里城が燃えたあと、現地の中高生がいち早く見学案内ボランティアを、バーチャルで再開したというニュース⁽¹⁾を耳にした。

「なぜ、こんな状態で立ち上がることができるのか。」

それが筆者の第一印象(疑問)であった。

そして同時に、こんな今こそ、できないと嘆く前に、奈良の地でも「たくましく、できることを探し、一歩踏み出す人々」に出会う機会をつくり、共に頭をひねり、

一歩ずつでも未来へ足を進めていくことが必要ではないかと考え、「奈良めぐり」の構想を膨らませていった。

3. 「2学年合同 奈良めぐり」実践の記録

3. 1. コース概要

今年度も昨年度に引き続き、8つのコース(うち新規開設3コース)にて1・2学年合同奈良めぐりを実施した(表3)。本稿では、限られた紙面の関係上、[C]と[G]の2つのコースの実践について、紹介する。

表3 「奈良めぐり」8つのコース概要(2020年度)

★は2020年度新規開設コース

- | |
|--|
| <p>★ [A コース] 茶道の歴史を受け継ごう</p> <p>★ [B コース] 文化・墨・筆</p> <p>[C コース] 観光とホスピタリティ</p> <p>[D コース] 共生 奈良シカ</p> <p>[E コース] 奈良公園ランドスケープ</p> <p>[F コース] 春日山を鹿が喰う!?</p> <p>★ [G コース] 共に奈良で暮らす～多様性・多文化共生～</p> <p>[H (特別支援学級)] 先輩の働く姿・身近な世界遺産</p> |
|--|

3. 2. Cコース「観光とホスピタリティ」

「観光とホスピタリティ」コースは、昨年度に引き続き開設されたコースである。昨年度は外国人観光客やゲストハウスへのインタビュー活動、そして、奈良教育大学で学んでいる留学生との意見交流などの学習活動を行えたが、今年度はコロナ禍で社会情勢が激変し、壁にぶつかりながら手探りでの実施となった。

奈良の観光業は、外国人観光客が訪れない日々が続き、大きな影響を受けることとなった。奈良でゲストハウスを経営されている方の中には、テレワークの職場としての活用や、医療関係者向けの宿泊施設として提供されたりするなど、次なる一手を模索されている方々がおられる⁽²⁾。一方で、外国人の観光客が戻ってこられる日を心待ちにして、ひたすら耐え忍んでおられる方もいる。経営面で事業継続が厳しい状態になっているゲストハウスもあるなか、生徒には興味本位だけにまかせた質問をさせることは極力避けなければならない。そこで、事前学習として、奈良市観光戦略課の方々をゲストティーチャーとして学校に招き、奈良市の観光の現状や課題、現在進めているコロナ禍への対策について話をうかがったうえで、フィールドワーク当日を迎えた。

当日の観光客インタビューでは特に近畿地方と関東地方からの観光客が多く、奈良の鹿や奈良公園を目当てに来県される方が多かった。また、ゲストハウスやホテルなど7軒の宿泊施設の協力を得て、コロナ禍での対応や宿泊者の変化などについて直接お話をうかがうことができた。

表4 学習前と学習後の変化（生徒記述より）

学習前（生徒の予想）	学習後
Go To キャンペーンによる効果はかなり大きいものだと考えていた。	実際には大きなホテルでは宿泊客が増え、経済が潤っていた。 しかし、ゲストハウスなど小さな宿では、その影響で大きな宿泊施設に客が移り、効果が少なかった。
観光業は、「しんどそう。大変そう。」	お客様の笑顔に助けられる。しんどさだけでなく、楽しさがある。
ホテルは客が多ければ多いほど良いと思っていた。	ホスピタリティを重要視し、1組1組のお客様を大切にしたいので、増えすぎも良くない。
数字で出ている課題を把握するのみ。	道路の舗装や駐車場の数など、新たな課題や改善点が見えた。

（表4）の生徒の記述からは、インタビュー活動を通して、観光業に携わっておられる方々の視点が加わったことで、単純に観光業についての調べ学習で終わることなく、「ホスピタリティ（心からのおもてなし）」についても思いを巡らすようになったことが読み取れる。

また、事後学習では、今回の学習を通して気づいたSDGs とのかかわりについて意見を出し合い、「Goal8：働きがいも経済成長も」や「Goal11：住み続けられるまちづくりを」との関係性に触れる生徒が多く見られた。

特に、「住み続けられるまちづくり」では、町家の活用や地産地消といった意見に加え、観光客が再び訪れたいと思えることを大事にしながら、住んでいる人も住み続けたいと思えるような持続可能な奈良について考えていきたい（観光と市民生活の両立）という意見も出された。

3. 3. Gコース「共に奈良で暮らす～多様性・多文化共生～」

「共に奈良で暮らす～多様性・多文化共生～」コースは、今年度、初めて開設したコースである。

現在、奈良県に住んでいる外国人は1万人を超え⁽³⁾、今後もますます増えていくことが予想されるが、言葉の問題や文化の問題など、壁に感じておられることは多いと思われる。

1996年の設立から約20年以上にわたって、地域で暮らす外国人の子どもや家族に、日本語の会話や読み書き、生活支援を行っている市民団体「ナラ・ファミリー&フレンド」の代表を務めておられるアダルシュ・シャルマ氏からは、今回のコロナ禍による緊急事態宣言期間中、地域の公民館が使用できず、週2回の活動が思うように

開けず、影響を受けたという話をうかがった。

また、事前学習では、奈良市立春日中学校夜間学級で外国籍の方々に日本語指導支援をされている小尾二郎氏を中学校に招き、外国人に正しい情報が伝わりやすく、行政支援の手が届きづらい実態が起きている話をいただいた。具体的には、特別定額給付金等の申請において、市町村はホームページ等を通じて案内を掲げているが、その情報にたどり着くことができていない外国人が相当数いるのではないか、という問題提起であった。

このコースを選択した生徒のうちの1人が、学習を始める前の、コース選択希望調査用紙に次のような言葉を記している。

SDGsで大事にされていることの1つに「誰ひとり取り残さない」というものがあります。世界規模の目標を「奈良」だけで考えたときに、できているのでしょうか。世界を目指すなら、まずは「奈良」から見直して改善していくことが必要だと思います。なので、実際に人の声を聞いて、もっと深く学びたいです。

この生徒が書いているように、SDGsは日本以外の世界のことでだけではない。自分の身近な暮らしの延長線上に世界の課題を見つけだすことができるようになってこそ、「自分ごと化」につながる手掛かりがあるのではない。その為には、遠い存在だと認識している問題が、実は近い存在であったり、今まで気づいていなかった課題に気づくことから始めることが必要ではないかと考え、学習計画を組み立てていった。

当初は奈良で暮らす外国人に着目することから始めたが、外国人技能実習制度を活用して来日されている方々は、平日の日中は仕事がある為、ゲストティーチャーとして招きづらいことが判明し、対象を、もう少し広く捉えなおすよう方針転換し、「奈良にはどんな立場の方々が暮らしていて、どんな悩みや課題を抱えておられるだろうか。」「豊かな社会づくりにおいて、誰ひとり取り残さない。」という視点をベースに、当日のゲストティーチャーの人選を図っていった（表5）。

表5 [Gコース] 当日のゲストティーチャー一覧

	どんな人	学んだこと（生徒まとめより）
1	元・青年海外協力隊員 吉原由紀子氏（ヨルダン） 反田博俊氏（マラウイ）	・外国での生活を経験したからこそ気づいた、外の世界から見た日本の姿。 ・当たり前は当たり前ではない。 ・何か相談できるつながり（友達）の必要性。
2	日系ブラジル人 奈良県外国人総合相談窓口 ポルトガル語通訳 玉田エミリア氏	・文化・表現の違い。 ・他者との違いを理解して、寄り添う気持ちが大切。

3	コミュニティワーク「こっから」 施設長 古木一夫氏	・人それぞれに弱みがある。 ・「障害=かわいそう。」ではない。 ・障害について“不自由さ”と“不幸”は違う。
4	奈良への移住支援 まちづくり推進 TOMOSU 中島章氏 池山加奈子氏	・「奈良は好きですか？」 ・奈良の持つ「個性」とは？ ・奈良の魅力を創り出す。 ・多様性を考える。 ・交流の「場づくり」
5	奈良県まちづくり プロジェクト推進 課 甲賀晶子氏	・誰もやらないことをやるのが公務員。 ・答えがないから色々なことができて楽しい。
6	イラストレーター 兼 ならきたまの 雑貨屋「ハニホ堂」 店主 尾崎旬美子氏	・奈良県外からの移住者。 ・クラウドファンディングで資金を集めて、「ならきたま おさんぽガイドブック」を制作。 ・王道でない自分らしい生き方。

上記のゲストティーチャーに共通している点は、「問題意識を持ちながら、こだわり・信念（自分らしさ）を持った生き方をされている方々」ということである。

しかし、経歴や職種が多様多様でありすぎた為、生徒の中には点と点が結びつかず、ゲストティーチャーとの対話が進んでいく間に、焦点がぼやけ、まとまりがつかなくなってしまった生徒もいた。

そこで2年生の事後学習では、ゲストティーチャーへのお礼状作成とともに、どんな学びがあったか、生徒の意見を引き出し、整理することに時間を割くこととした。

キーワードとして「多様性」「個性・自分らしさ」「つながり」「壁」「寄り添う」などが挙がり、次のような意見に集約・整理された。結果的に、考えを整理する活動を事後学習に組み込んだことで、「ひととの出会い」を通して学んだことを、子どもたち自身の等身大の身近な言葉で紡ぎなおすこと（SDGsの解釈）につながった。

- ・「違い」を認めあえることができる世の中（マイノリティが過ごしやすい社会）を目指したい。
- ・誰もがしたいことを叶えられる奈良をつくりたい。
- ・「弱みを共有できる社会」をつくりたい。
- ・ボランティアをする側は、自分が出来ることをする。
ボランティアを受ける側は、正解を求めてはいけない。
- ・普段自分と関わらない方々と出会ったことで考えが広がり、「自分を見つめなおすことが大切」ということに気づかされた。

なお、事後学習は学年別で実施し、1年生が学年文集の為に作文とルートマップを作成している間に、2年生はコースごとのまとめ・整理をし、コース紹介のリーフレット制作と学年発表報告会を行った。後述の事後アンケートの結果（図1）からは、1年生よりも2年生が学

びを深めることができたことが読み取れる。来年度以降は、事後学習での振り返りや考えの整理（学習のまとめやSDGsとのつながりを考える）についても、2学年合同で行うことが望ましいと考える。

4. 「ひとに出会う学び」と「自分ごと化」の関係性

ESDは「価値観と行動の変容を促す教育」である。しかし、現実問題として「自分ごと化」することは困難を伴う。

中学生段階では、おそらく価値観の変容は起きたとしても、行動の変容まで引き起こすことは稀であると考えられる。

そこで、「ひととの出会い」を通して行動化のロールモデルを示すことによって、具体的な行動イメージをつかみきっかけや刺激を中学生に与えることが、「自分ごと化」を図っていくうえで影響を与えると仮説を立て、事後アンケートでは次の2軸で生徒に質問を投げかけてみた。

まずは横軸として「奈良めぐりを通して、地域の課題が具体的に目に見えてきたか。」をたずね、ゲストティーチャーからの問題提起や対話を通して、これまで以上に身近なこととして感じ取ることができるようになったかを確認し、一方の縦軸「具体的な行動イメージが浮かんできたか。」では、ゲストティーチャーとの出会いによる学びが、どれだけ行動の変容を促す契機となったかを計る指標とし、グラフの右上に近づくほど「自分ごと化」に結びつけて捉えることができていたと考えた。

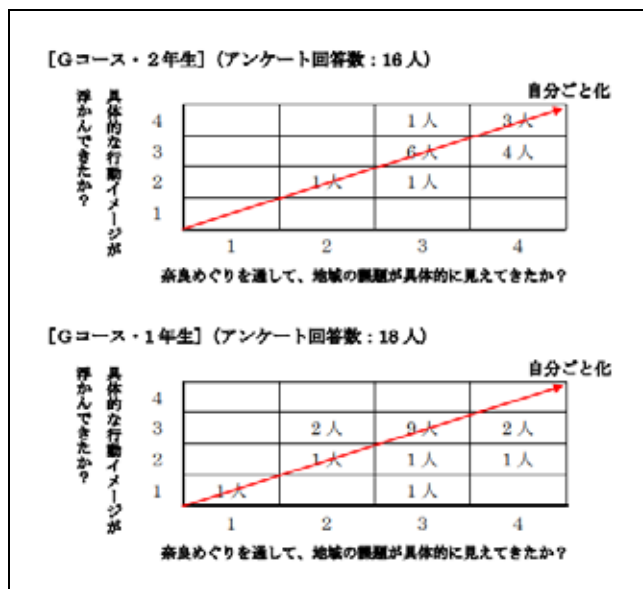


図1 「Gコース」事後アンケート結果（自分ごと化）

事後アンケート結果（図1）からは、概ね大半の生徒が充実した学びが出来ていたことを読み取れたが、2年生と1年生と比較してみると差が見られた。学年による差は、次のような要因が影響したと考えられる。

1 つ目は先述したように、2 年生は考えの整理をする振り返りの時間が確保されていたということ。

そして2 つ目は、2 年生は昨年度に引き続き2 年目の学習であり、数名の生徒は実行委員として企画段階から担当教員とともに、どのようなゲストティーチャーに出会いたいか、また、当日のゲストティーチャーとの対話の進め方等の計画策定においても、中心的役割を果たしていたことが、起因していると考えられる。

なお、事後アンケートでは、「問いの意識や課題を持ちながら取り組みましたか？」という質問も行った(表 6)。1 年生は、奈良めぐりを何の為に実施するのかという点において、主体的というよりは受動的に、不十分な理解のまま進めてしまったことがアンケート結果から推測でき、コロナ禍による学習時間の縮減が、多少なりとも影響を及ぼしたのではないかと懸念している。

表 6 [G コース] 事後アンケート結果
「問いの意識や課題を持ちながら取り組みましたか？」
(4 : 大変よく取り組めた。1 : 全然取り組めなかった。)

	4	3	2	1	小計
2 年生	6 人	8 人	1 人	1 人	16 人
1 年生	2 人	10 人	5 人	1 人	18 人

5. 大学生との協働

本実践は、奈良教育大学の有志学生が「学校フィールド演習 I」の一環として関わり、生徒実行委員による下見の段階から継続して参加し、本番当日も生徒引率でサポートしてもらった。

G コースのサポートに携わった2名の学生の感想を一部ではあるが、以下、紹介する。

G コースは、話を聞く時間が長いので、退屈する場面があるのではないかと考えていたのですが、2 年生に聞いてみると、「このように色々な話を聞ける機会はあまりないので面白かった。」と話していて、自分の知らない情報、知らない視点で奈良を見る機会になって良かったのではないかと思います。

中島さん、池山さんとの対話の中で、「奈良は何もない。もっと都会を見習ってほしい。」と話している生徒がいましたが、お話を聞いて、自分で価値を見出す大切さや、自分たちで持続可能な街を作っていく大切さを学ぶことが出来たと思います。今まで持っていなかった視点が沢山得られたのではないのでしょうか。

また、奈良にとどまらず、玉田さん、吉原さん、反田さんの話を聞いて、世界に出ていくことも考えられたのではないかと思います。

古木さんの話は、特に子どもたちにとって印象的で、「みんなの幸せって何？」など、たくさんの問いを投げかけてくださっていたので、生活を振り返る機会に

もなったと思います。

午後からの活動では、甲賀さんに「住みやすい奈良を創る為に、今の私たちに出来ることはありますか。」という質問が出て、1 日を通して、「自分たちで奈良を創っていく」という発想の転換が見えました。その為、この奈良めぐりを通して、学習のねらいであった「将来の地域を担う主権者としての学び」が達成されたのではないかと思います。

今回は下見の活動から見学させていただき、総合の授業の作り方を学ぶことが出来ました。

(数学教育専修 S・C)

今回のテーマであった奈良で外国人との共生をはかることをどこまで学べたかは分かりませんが、私は奈良に住む外国人の方のお話を聞き、もっと奈良を開かれた街にする為には観光だけの街といった概念を壊す必要があると思いました。奈良は観光地である為、どうしても外国人の方を見かけても観光客と思ってしまい、よそ者感を抱いてしまいます。下見で訪れた中部公民館で、奈良に住む外国人の方のお話を聞き、日本語を学ぶ姿勢や、外国人同士で繋がろうという姿勢を知りました。奈良教育大学にも留学生はたくさんいます。留学生たちも奈良に住む外国人です。まずは、身近な留学生から、外国人が奈良に住むやすくするにはどうすればいいか、を聞けたらいいなと思いました。今回の奈良めぐりは奈良という街をどう変えればいいのか、どのような街を目指せばいいのか、それらを深く考えるきっかけになりました。(社会科教育専修 S・Y)

大学生は、教師でも中学生でもない為、どのように関わっていけばいいかと、距離感に悩んだことが推察される。記述からは、大学生が、今回の学びをどちら側の立場からも考え、悩むことによって、自分ごと化しようとしている様子をうかがい知ることができた。

今回、サポートとして関わった大学生には、できるかぎり教師側の手の内を包み隠さずオープンにし、どのようなねらいをもって生徒の学びを深めていくかを伝えつつもりではいるが、将来、学校現場で教鞭をとるようになったとき、今回学んだ ESD 的価値観から捉えなおす行事づくりを是非、実践してくれることを期待している。

6. 成果と課題

6. 1. 成果

今年度の成果は、まずは何よりもこのコロナ禍において、「奈良めぐり」を実施できたということである。さまざまな行事を授業振替していく中で、奈良めぐりを「総合的な学習の時間」の1つの大きな柱として学校全体で位置づけ、外部の方々の協力も得て、face to face の関係(顔の見える関係)を大切にしながら、子どもたちの学

びにつなげることができたことは大きな成果といえる。

なお、今年度からは学びのまとめとして、2年生が中心となってコース別のリーフレットを作成し、アウトプットを図ったことにより、学んだことを校内・校外の人々でシェアしやすくなったという利点も生まれた。

ゲストティーチャーとの関係性は、専門家に詳しい話をしてもらうだけでなく、「なぜ、そのゲストティーチャーがそのことにこだわりや信念を持っているか。」まで迫る活動を通して、共に学びを深めるパートナーシップ関係の段階まで、徐々にではあるが築きつつある。

社会に開かれた教育活動という点において、今後も社会全体で教育を支えていく仕組みを構築していきたい。

6. 2. 課題

昨年度からの懸案事項として、「総合的な学習の時間」と「教科」の接続を意識したうえで、カリキュラム・マネジメントに努めていくことが挙げられていたが、結果的にコロナ禍で行事の組み換え等が発生し、3年間を見通した「総合的な学習の時間」の全体像はこれまで以上に見通せなくなり、教育活動を関連させる難しさが改めて浮き彫りになった。

点と点のように途切れるのではなく、つながりを意識しながらESD的価値観の育成を、「総合的な学習の時間」を軸にしながら推進することが求められる。

その一翼を担う手法として「ひとに会う学び」は有効的であると考えるが、対話を楽しむだけに留まらず、その人がこだわりを持つ背景まで迫ることについては、今後もさらなる研究と実践の積み重ねが必要である。

なお、今後研究を深めていく上で大切にしていきたいことは、お互いのケアや、寄り添う気持ちである。多様性を認め合い、多文化共生社会を創っていく上では「支援する側・支援される側」「日本人・外国人」という二極の関係性で見えていくのではなく、「対等な関係性の中で、人と人とのつながりを伴う、公正な社会を創っていく視点」が求められる。これからも学び合いの積み重ねからESD的価値観が培われ、豊かな社会の創り手が一人でも多く育っていくことを願っている。

謝辞

本研究を進めるにあたり、各コースのプランニングには関係各位のご協力を得た。[A コース] 中上雅世氏(茶論)、喜多誠一郎氏(慳舎)、元興寺、称名寺、ならまちセンター、[B コース] 谷川雅夫教授(奈良教育大学)、奈良市杉岡華邨書道美術館、宝文堂、古梅園、一心堂、[C コース] 奈良市内の宿泊施設の皆様(ゲストハウス神奈寝、ゲストハウス桜舎、奈良町宿 紀寺の家、ホテルアジュール奈良、江戸三、登大路ホテル、ふふ奈良)、くるみの木(鹿の舟)、氷室神社、吉岡祐輔氏・青柳信吾氏・田中久美子氏(奈良市観光戦略課)、奈良市奈良町にぎわ

い課、奈良県地域振興部観光局 ならの観光力向上課、奈良県観光局 外国人観光客交流館、おちゃのこ、[D コース] 渡邊伸一教授(奈良教育大学)、小川清氏(文洋堂)、[E コース] 竹田博康氏(奈良県県土マネジメント部地域デザイン推進局奈良公園室)、[F コース] 杉山拓次氏(春日山原始林を未来へつなぐ会)、酒井有紀氏(株式会社スペースビジョン研究所)、[G コース] アダルシュ・シャルマ氏(ナラ・ファミリー&フレンド)、小尾二郎氏(奈良教育大学ボランティアサポートオフィス)、反田博俊氏・吉原由紀子氏(元青年海外協力隊員)、玉田エミリア氏(奈良県外国人支援センター内 奈良県外国人総合相談窓口 ポルトガル語通訳)、古木一夫氏(社会福祉法人こぶしの会)、中島章氏・池山加奈子氏(一般社団法人TOMOSU)、創業支援施設 BONCHI、尾崎旬美子氏(ハニホ堂)、甲賀晶子氏(奈良県県土マネジメント部まちづくりプロジェクト推進課)、嶋田智沙恵氏・柴田侑人氏(奈良教育大学 学生)、[H コース] 植村牧場、東大寺、興福寺、[全コース共通]奈良教育大学 学生有志の皆さん。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

注

- 1) 沖縄タイムスプラス(2019年11月4日)、「焼失しても首里城の魅力伝えたい 沖縄の生徒が「バーチャルガイド」大阪の修学旅行生に」、<https://www.okinawatimes.co.jp/articles/-/493102>
- 2) ならしみんだより(2020年7月号)、「ゲストハウスをテレワークの職場へ。地域のつながりを生かす新しい観光産業のカタチ」、No.1196, pp.4.
- 3) 2017年法務省資料によると11,921人

参考文献

- 吉田寛・市橋由彬ほか(2020)、「「ひとに会う」を通して学ぶ ESD の価値実現の教育実践の構想Ⅱ - ESD の価値観の根っこに迫る「総合的な学習の時間」の具体化に向けて-」, 奈良教育大学次世代教員養成センター研究紀要, 第6号, pp. 257-264.
- 榎井縁(2019)、「第8章 多文化共生のまちづくり」, 『SDGs とまちづくり』, 学文社, pp. 148-162.
- 太田満(2016)、「第9節 排外主義(ヘイトスピーチや反ムスリムの風潮など)に対抗する多文化の共生をめざす社会科の授業とは」, 『社会科教育の今を問い、未来を拓く』, 日本社会科教育学会編, 東洋館出版社, pp. 138-152.
- 日本文教出版(2020)、「奈良県の外国とのつながり」, 令和2年版小学校社会副読本『奈良県のくらし』, pp.152-155.
- 毎日新聞出版(2019)、「働く外国人の受け入れ拡大」, 『News がわかる 2019年1月号』, pp.14-17.

ESD学習指導案 第4学年 総合的な学習の時間

奈良市立平城小学校 第4学年 教諭 村上 雄太

1. 単元名 ゆかし里に流れる秋篠川の魅力を発見し、言葉で未来へつなげよう

2. 単元の目標

- ・秋篠川や音無川には様々な役割があることを理解することができる。 (知識・技能)
- ・秋篠川を未来につないでいくため、他の地域と比較しながら、自分ができることを考え、言葉によって表現することができる。 (思考・判断・表現)
- ・秋篠川に関心をもつとともに、未来へつなぐ担い手として自分たちができることを実践し、言葉で伝えることができる。 (主体的に学習に取り組む態度)

3. 単元について

(1)教材観

本学習は、わが校の校歌にある「ゆかし里」という言葉をもとに、秋篠川という子どもたちにとって当たり前にある地域の川に注目させ、秋篠川の役割に気付く、この役割が様々なつながりをもっていることを知り、自分たちも未来へつなぐ担い手としての行動宣言を地域に発信すること目的とした。この目的を達成するために、「川上村の音無川の役割」と「秋篠川の役割」を教材化した。

1 つ目の「川上村の音無川の役割」とは、水源の森としての役割である。川上村では、1996年全国に向けて『川上村に暮らす住民はもちろん、下流域の人々とも手を携えて、かけがえのない水と森を育てていきたい。』という考えのもとに「川上宣言」を発信している。この宣言を知ることで、源流に住むものとして美しい水を下流や海まで流し続けていく責任感に気付くことができる。また、川の環境を守ることは下流の地域を豊かにすることができるという自己有用感に気付くこともできる。このように、「川上村の音無川の役割」を教材化することで「川は人々の思いをのせている」ことに気付かせることができる。

2 つ目の「秋篠川の役割」とは、平城京の時代に人の手で作られたという歴史的な役割である。この川が作られたことにより、物流を運搬し繁栄させたことや、地域の米作りの農業用水として活用されてきたことなど平城の町の歴史を紡いできた存在として気付くことができる。また、川沿いの桜並木は、景観をととのえているだけでなく、桜を見に来た人々により、川沿いが踏み固められ、川の氾濫を防ぐ助けにもなっている。このように、「秋篠川の役割」を教材化することで、「川は歴史的な思いがある」ことに気付くことができる。

また、2つの川の役割には、上流にある川(音無川)と中流にある川(秋篠川)としての違いもある。水質や見た目の違い、有機物量に起因する確認できる生物の違い、森林と住宅などの周り環境の違いである。役割の異なる川を教材化し比較することで、地域の秋篠川の魅力に気付けると考える。

さらに、「川上宣言」を教材化することは、人の思いを言語化して発信していることへの気付きになる。この気付きにより、児童が自分の思いを言語化し未来へつなぐ担い手になるための一助となると考える。

このように、「川上村の音無川の役割」と「秋篠川の役割」を教材として使用することで、「ゆかし里に流れる秋篠川の魅力を発見し、言葉で未来へつなぐ」ということを自分事としてとらえ発信できるようになると考えた。

(2)指導観

まず、地域の秋篠川について知っていることを出し合う。児童は秋篠川が地域に流れている川という認識だけで、どのような川なのか知らないことに気づく。また、地域の人に出会い秋篠川が農業用水というお米をつくるためにかけがえのないものだを知る。そこから、「地域の秋篠川はどのような川なのだろう？」という学習問題を設定する。しかし、秋篠川が自分事になっていないので、なかなか興味を持たない。

そこで、森と水の源流館と連携をし、秋篠川ではなく、少し離れた音無川について「音無川には様々な役割がある」ことを体験する遠足行い、学んだことを模造紙にまとめる。ここで、森と水の源流館より古山氏を招き学習した気づきを発表させるなかで「川上宣言」について説明をいただき、川上村の人々の思いや考えにもふれさせる。また、古山氏より児童に「秋篠川は平城京の時代に人によって作られたこと」「秋篠川にも役割がある」というアドバイスから、秋篠川の調査へとつなげていく。

秋篠川の調査では、奈良市河川課と連携し、谷氏を講師とまねく。それぞれの川を調査しまとめることで、音無川と秋篠川の役割に気付く。その後、それぞれの役割を画用紙にまとめ、みつけた役割と関連する(つながる)役割を考えて毛糸でつないでいく活動を行う。この活動を通して、秋篠川のもつ多様な川の役割には、つながりがあることを見つける。このつながりを見つける中で自分とのつながりにも気づき、自分事として、秋篠川を感じられるようになっていく。

この自分事にするために、大切にしたいのが言語化と視覚化である。言語化するということは、自分が体験や経験したことをよく思い出し、言葉を精選しながら、俳句や詩を作るということである。言葉を精選するときに、体験や経験の見方・考え方を深めながら、何度も考え直し新たな気づきが生まれる活動になる。また、言語化した作品を交流させることで、友達の考えからも新たな気づきが生まれるだろう。本単元では、音無川・秋篠川それぞれの調査活動のあと、体験や経験したことから俳句を書く活動を行う。また、二つの川の役割をつなげた時に、「なりきり詩」を書かせる。「なりきり詩」は、川に関係するもの(魚・水・桜の木)の視点から、詩作を行う活動である。違う視点を取り入れることで、いままでの学習を新たな視点で振り返ることができる。詩や俳句を作り、自分の思いを言語化することで、秋篠川について一層深く見つめなおすことができる。と考える。

視覚化するために、役割を毛糸で結ぶという活動(しあ「環」せの糸)を行う。川の役割を画用紙にまとめ、毛糸でつなぐ。この役割をつないだ毛糸を束ねて、児童一人一人が手にもち、円状に広がらせる。毛糸が円状に広がることで、一つ一つの事柄のつながりをより強く印象づけさせる。(5、単元の展開の写真参照)強く印象づけたところで、しあ「環」せの糸と名付けていることを伝える。児童は、この「環」について考えめぐらせる。「環」には、取り囲むやめぐるという意味が含まれている。この後、しあ「環」せの糸の写真を見返させる。自分で見つけた気づきや川の役割は、「環」のように巡り、自分たちの生活やこれからの未来に関係していることや、今までゆかし里を守ってきた人々がいることに気づき、責任感や感謝の気持ちが生まれるだろう。これは、人が生きていくための幸福感につながっていくと考える。

このような活動から「秋篠川は自分たちに関係している魅力ある川だ」という気づきさせる。秋篠川を自分事として感じることで、「秋篠川の魅力を守るためには、自分たちになにができるだろう」という問いが生まれる。そこで、実際にできることを実践する。しかし、児童のできることは限られているので、インターネットなどで、自分のできることを調べ、共有し、再び実践するということを繰り返し行う。この繰り返しの中で、自分が今後も続けていけることを見つける。最後に、「川上宣言」を参考にしながら、「平城宣言」として言葉にして自分のできることを地域に宣言し、児童から川への思いを発信する。

この時、国語科との連携を図る。いままで、学習してきたことや感じてきたこと、ゆかし里として受け継がれてきた思いなどを紹介する文章を書かせた上で「平城宣言」の作成に挑ませる。言語化することで、これまで

の活動を俯瞰的にみることができ、「平城宣言」が自分事の思いとなる。

これらの活動の中で、実践したことで自覚し、未来へつなぐ担い手として自分たちができていることを問い続けられるような自己の生き方を見つめられる児童を育てることができると考える。

(3)この題材で働かせる ESD の視点(見方・考え方)

【責任性】 秋篠川の役割を守り未来につなげていくために、自分たちできていることを考える。

【相互性】 川の多面的な役割が自分たちの生活に深く関わっている。

・本学習で変容を促すESDの価値観

【世代間の公正】自分の世代だけでなく秋篠川の魅力を未来へつないでいこうと考え行動する。

【幸福感】秋篠川の役割の恩恵により生活が豊かになっていることに感謝し、秋篠川を大切にする。

・SDGsとの関連

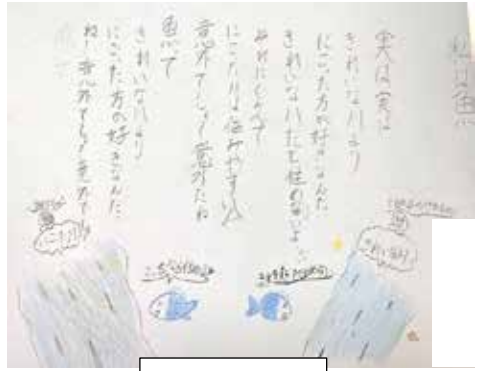
目標11 住みよいまちづくり 目標14 海の豊かさを守る 目標15 森の豊かさを守る

4. 評価の規準

知識・技能	思考力・判断力・表現力	主体的に学習に取り組む態度
①秋篠川、音無川には様々な役割があることを理解している。	①秋篠川、音無川の役割はそれぞれことなることを理解している。 ②自分の思いを詩や文章、宣言に表現している。	①秋篠川の様々な役割を、意欲的に調べたり考えたりしている。 ②自分のできることを見つけて、取り組んでいる。

5. 単元の展開

	学習内容	●留意点 【評価】
1 学 期	○秋篠川について知っていることを確認する。 ○学習問題を作る。	●秋篠川の環境について興味を持たせる。
	平城地域の秋篠川は、どのような川なのだろう	
2 学 期	○遠足で川上村の吉野川源流へ行き、生物調査をし、森と水の源流館の見学から、音無川の役割を気づく。 ○気づきを模造紙、画用紙にまとめる。 ○まとめを源流館の古山さんに発表して評価をもらう。 ○新しい学習問題をつくる。	●音無川の生態系を理解させるために、水中、陸上の生物調査や植物観察をさせる。 ●音無川に多面的な役割をグループに分かれて調べまとめさせる。【知・技】 ●調査で感じたことの俳句を書かせる。
	秋篠川のさまざまな役割をさがそう	

	○県河川課の方と秋篠川の水生物指標調査を行う。 	●指標調査から秋篠川の水質を分析し、秋篠川がどのような川であるかを考えさせる。 ●音無川の多面的な役割が秋篠川にもあるか、興味のある役割をグループに分かれて調べ、まとめさせる。 【知・技】【思・判・表①】 ●しあ「環」せの糸を活用し、つながりを視覚化させる。 ●なりきり詩を書く。
	一人一本つないだ毛糸を束ねると、円状に広がる。環のようにつながっていることを視覚的に捉えさせる。  しあ「環」せの糸 ○音無川と秋篠川のつながりに気づきから、新しい学習課題をつくる。	 なりきり詩
3 学 期	○問題の解決につながる行動を考えて実践する。 ○調べ学習で、自分にできることを調べ、まとめ、発表する。 ○再度、実践する。 ○自分にできることを「平城宣言」としてまとめる。	秋篠川の魅力を守るためには、自分たちになにができるだろう ●自分たちが今まで当たり前にしてきたことを振り返らせる。 ●実践を記録し、共有させる。 ●国語科とつなげ、いままでの学習をまとめてから、「宣言」を書かせる。【思・判・表②】

授業題目 「奈良市の未来地図～豊かな暮らし方を考えて～」

1. 単元 身近な地域の調査

2. 単元の目標

○（知識・技能）

・将来の日本で起こる高齢化や人口減少問題を知り、奈良市でも同じ課題を抱えていることを理解する。

○（思考・判断・表現）

・豊かさとは何か、様々な立場や世代を超えて公正に考えられる。

・奈良市のまちの発展を「過去」、「現在」、「未来」の時間軸からその変化を予測し、考察できる。

○（主体的に学習に取り組む態度）

・「豊かさ」とは何か考えることを通して、ものごとをはかる「物差し（尺度）」を様々な視点から見つけようとしている。

・未来地図を作製し、1回目と2回目を比較して、自分がもつ「豊かさ」の価値観を深めようとしている。

3. 単元について

（1）教材観

本単元は、「身近な地域の調査」について奈良市の未来地図（まちづくり）を想像し、そこで生活する人々の「豊かな暮らし」とは何かを考えることを目的とする。これまで学んできた日本の諸地域の特色を生かすことや、地理的分野の単元「世界と比べた日本の地域的特色『日本の人口の変化と特色』」にふれながら、学習を進めていく。

「身近な地域調査」の単元は、学習指導要領に取り扱いが示されてきたものの、授業時間数の確保や評価の難しさなどから、実施されていない状況が多く見られた。新学習指導要領における中学校社会科では、地域調査に関わる内容構成が見直された。そこでは、これまで行われてきた世界の様々な地域又は国を対象とする「世界の様々な地域の調査」、生徒の生活舞台を対象とする「身近な地域の調査」のように、「対象地域のスケールの違いによって項目を分けるのではなく、技能の習得を中心とする学習と、地域の地理的な課題の解決を中心とする学習との目的の違いによって項目を分けることで、学習のねらいを明確にし、その確実な実施を意図した」と示されている。つまり、これまで多くの学校現場が様々な理由で、地図記号や等高線、縮尺などの地形図を読み取るための学習（「技能の習得を中心とする学習」）にとどまっていた現状を変えなければならないのである。

そこで、自分たちが暮らす奈良市の未来のまちづくりを想像すれば、その地域が抱える課題に対して、より切実性を感じ、その解決を自分事として取り組めるのではないかと考える。また、課題については、日本の諸地域の問題と比較することで、場合によっては、国家や国際社会が抱える問題として重層的にとらえ直すことができる。

（2）生徒観

比較的発言が多い男子と活発な言動を寛大に受け止める女子が多いと感じている。主体的に発言する生徒が多い一方で、発言が一部の生徒に偏ってしまうところもある。また、社会科の学習が特に苦手と感じている生徒も多いため、学級生徒がそれぞれ学び合えるようにしていきたい。

（3）指導観

中学校社会科の学習は、子どもたちにとって、ややもすると単なる暗記教科にすぎないと感じられてしまうことがある。例えば、世界中でみられる環境問題、貧困問題、紛争による難民問題などは一見すると、自分たちの

生活には関わりのないようなことに感じられ、どこか他人事である。このような捉え方は自分たちから物理的に距離があり、遠い存在として感じられてしまうからと考えられる。自分たちが暮らす日本国内で起こっている諸問題でさえ、どこか他人事に感じている様子が見られる。その理由として、授業で教師が設定する課題が、子どもの関心領域とずれ、自分事になっていないことが想像される。より切実性があり、将来を担う自分たちが主体的に学べる課題を設定することが求められていると考える。

今回行われた学習指導要領の改訂では「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進が示されている。改訂の背景には、変化が激しく、予測困難な時代を生き抜くために「生きる力」を育むことが大切だと考えられていることがある。特に、少子高齢化が加速している我が国では、学習指導要領に「一人一人が持続可能な社会の担い手として、その多様性を原動力とし、質的な豊かさを伴った個人と社会の成長につながる新たな価値を生み出していくことが期待される」と記述されているが、文言は抽象的で具体的な方法を示す必要があると考える。その具体的方法として、「奈良市の未来地図～豊かな暮らし方を考えて～」を提案し、実践した。

（４）ESD との関連

	【公平性】	【多様性】
多面的・総合的に考える力（システムズ・シンキング）	2回の未来地図作製を通して、不公平さや今さえよければいいという考えでなく世代間をこえた豊かな暮らし方を考えられることを目指す。	奈良市に暮らす様々な立場の人、動植物の存在に気づく。ハード面だけでなく、ソフト面を考えたまちづくりを通して、それぞれの立場がもつ価値観を広げたり、深めたりできることを目指す。
他者と協力する態度	未来地図のフィードバックをもらって、自分だけでなく班員で練り直した考えのほうがより公平性があることに気が付く。	お互いが考える未来地図の構想を受容しながら、仲間同士の考えを練り上げて、より良い奈良の未来地図を考えられる。
進んで参加する態度	自分たちが暮らす奈良市は、自分たちの手で変えることができると感じられる。社会参画することが、将来の自分が望む社会へと近づく第一歩である意識を育ませたい。	他者の発表にコメントし合うなどして、それぞれの考えを受容しながら、自分の考えを伝えられることを目指す。

（５）達成される SDGs の目標

目標３：健康と福祉、目標１０：不平等解消、目標１１：まちづくり

4. 単元の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
・将来の日本で起こる高齢化や人口減少問題を知り、奈良市でも同じ課題を抱えていることを理解する。	・豊かさとは何か、様々な立場や世代を超えて公正に考えられる。 ・奈良市の街の発展を「過去」、「現在」、「未来」の時間軸からその変化を予測し、考察できる。	・「豊かさ」とは何か考えることを通して、ものごとをはかる「物差し（尺度）」を様々な視点から見つけようとしている。 ・未来地図を作製し、１回目と２回目を比較して、自分がもつ「豊かさ」の価値観を深めようとしている。

5. 学習活動の概要と評価（全４時間）

次	主な学習活動	評価の観点			評価規準及び評価方法
		知・技	思	主	
一	○奈良市（奈良公園周辺地	○	○		自分が暮らしたい将来の奈良市（奈良

	区)の未来地図を作製する。				公園周辺地区)の地図を作製できているかどうか。 ⇒作製した地図から判断する。
二 本 時	○自分たちがつくった未来地図の中で現在の地図から変化したところをとりあげ、なぜ変化させたのか、その理由を発表する。 ○奈良市が抱える課題を把握し、まちづくりに必要な視点を考える。 ○奈良市が、両方(都会と田舎)の良さを兼ね備えたまちであることや豊かな自然や歴史遺産を有していることから身近な地域の価値や可能性に気がつく。		○	○	・作製地図で、再開発した部分を示し、その理由を発表できているかどうか。 ・物質的な豊かさと精神的な豊かさをできるだけ多く考えられているかどうか。身近にある歴史的な文化財・世界遺産や春日山原始林などの自然の価値に気づけているかどうか。 ・世代や立場で暮らしやすさの違いがあることや、求めることが異なることを理解できているかどうか。また、それらを考えることが将来の自分たちの暮らしにもつながることに気づけているかどうか。 ⇒授業中の発言やワークシートの記述から判断する。
三	○前時までに考えた「豊かさ」を生かした奈良市の未来地図を作製する。	○	○	○	・前時までにまとめた根拠をもとに豊かな暮らしが実現するまちづくりを地図上に示せているかどうか ⇒作製した未来地図から判断する。
四	○作製した第1次の未来地図と第3次の未来地図を見比べ変化を考える。 ○他者の未来地図にどんな豊かさがあるか評価する。		○	○	・「豊かな暮らしとは何か」を、未来地図から考えられているかどうか。 ⇒発表者への評価コメントやG-suite for Educationを用いたアンケートによる自己評価から判断する。

6. 成果と課題

○本実践の結果、次のような成果が得られた。

- ・楽しんで主体的に授業に参加するようすが見られた。
- ・お互いの未来地図をフィードバックし合うことで、価値観の違いを考えさせることができた。
- ・駅周辺に機能を集約し、集中させる様子が多く見られたことからコンパクトシティの概念を体感できた。
- ・1回目よりも2回目のまちづくりの方が「どこに」、「何を」、「どのように」つくるかなど建物や景観に意味づけや根拠付けができるようになった。
- ・区分け(エリア)をする者も多数見られたことから、多様な価値に気づけた。また、自分がその時々を求める暮らし方によって住み分ける二拠点居住の考えが生まれていた。
- ・まちづくりを通して、様々な立場や世代を意識できるようになっていることが視覚的にわかった。

多くの生徒が意欲的かつ主体的に学べた。その理由として、授業の題材が自分たちの暮らす地域であり、身近であることから具体的な変化をイメージしやすかったことがあげられる。また、実際に総合学習(「奈良めぐり」)

を行うことで、地域が抱える課題を発見し、探検することで、放っておけない事実として切実性を感じやすかったからだと考えられる。切実性を感じられたかどうかは、地図で奈良めぐりの内容が反映されているかどうかから確認できた。そこで、それらを可視化させるために、第1回目の地図作りから第2回目の地図作りに生かすときには、作製した地図をみて奈良で多くの人や動植物が暮らしているという多様性に気づかせた。多くの出会いから学んだことを繰り返しの発表とフィードバックによる対話の中から思い出させ、練り上げさせられた。実際に、完成した生徒の未来地図では、価値あることやものをどのように保護するか考えられており、その代表例として区分けするまちづくりがあげられていた。

区分けすることから考えられる生活のあり方として、二拠点居住があげられた。この考えは、政府が推奨する政策の1つである。子どもたちが考えた地域のまちづくりの案から政府の政策に触れることができたことは、身近な社会から国家という社会の一員として、所属する地域のとらえ方をより大きなスケールでとらえるきっかけとなった。

以上のように、授業実践を通して、身近な地域の課題解決を考えたことでESDの様々な価値に触れられた。さらに、身近な地域社会の問題からよりスケールの大きい社会（国家）の諸問題を考えることができた。

○課題としては、以下のことがあげられ、今後の実践で改善していきたい。

授業を通して、ESDの視点を授業者や生徒たちは意識できたと考えられる。しかし、ESDはあくまでも持続可能な開発目標であるSDGs（Sustainable Development Goals）を達成するための手段である。本実践ではESDの学び方（学習者の主体性を尊重する、ただ一つの正解をあらかじめ用意しないなど）を意識するあまり、社会科で身につけさせたい資質や能力といった本来達成すべき目的が薄れてしまったのではないかと反省している。つまり、社会科での学びや目標を達成するからこそESD学習の成果へとつながりSDGsに行きついていくわけである。目的と手段を整理すれば、教科教育的にもESD的にも、より深い学びが得られたと考える。

そのためには、より深い学びが実現できるように次年度以降の実践においては、単元構成を見直したい。1回目の未来地図作りでは、生徒の主体性に委ねて教師の言葉がけや働きかけを極力控えた。しかし、これでは日本の諸地域の学習で得られた知識や理解を生かし切れない。本単元は、日本の諸地域の学びのまとめとして設定される意味をもつ。そのため、単元の初め（第1次）で、日本の諸地域の学習を振り返る時間を取り、諸地域が抱える課題とそれを克服する事例をおさらいしてから単元の中身に取り組みさせる方が良かったと考える。他地域との比較を行うことで、身近な地域の良さや課題といった特徴が明確になり、より一層学びが深まることが考えられるからである。このような単元構成に作り直せば、1回目は諸地域の学びを生かした未来地図となり、2回目の地図作製では、そこからさらに奈良市で豊かな暮らしに必要なまちづくりの視点を深められるのである。

次に、深い学びへと誘う「発問」を見直したい。2回目の未来地図を作製する授業では、世代間を意識した子どもたちが多くの老人ホームをつくった。しかし、高齢者にとって老人ホームでの暮らしが本当に「豊かな暮らし」なのだろうか。高齢者には老人ホームや福祉施設があれば幸せなはずだ、という固定観念がみられたにもかかわらず、その固定観念を払拭することができなかった。まちづくりでは、施設だけつくれば満足が得られるわけではない。真に豊かな暮らしでは生活を支援してくれたり、会話を楽しんだりできる人と人がかかわれる場が重要になる。だからこそ、多様性や世代間を意識し、多角的・多面的に考えなければいけない。

ただし、多角的・多面的にまちづくりを考えるためには、中学校1年生の学習段階では限界がある。例えば、未来地図で変化させずに保護された歴史的な建造物の見方には、偏りがあった。そのほとんどが、奈良時代のものにかたよっていた。

歴史的な価値への理解は、歴史的分野の学習を通して深められる。また、世代を超えたまちづくりや持続可能な社会づくりの追求は、公民的分野の学習を通して深められる。すなわち、3年間を通して、必要な資質や能力を身につけ、高められるのである。今回の実践は、その第一歩としてとらえるべきだと考える。今後3年間の授業のみならず学校行事とも協働して取り組む中で、より一層地域学習を深化させていきたい。

1. 単元名 コロナ社会での生き方を考える

2. 単元の目標

- ・ウイルス、細菌についての知識を持ち、正しく判断・行動することができる。(知識・技能)
- ・様々な価値観を交錯させる中で、新たな問いや答えを導くことができる。(思考・判断・表現)
- ・自身とは異なる価値観の意見に対しても傾聴し、その考えを柔軟に受け入れ、新たな考えを導きだそうとする。(主体的に学習に取り組む態度)

3. 単元について

(1) 教材観

2020年1月以降、世界中で新型コロナウイルス感染症(COVID-19)が流行し、現在も余談を許さない状況となっている。諸外国では、製薬会社が開発した新型コロナウイルスワクチンの摂取が始まり、集団免疫獲得の可能性も示唆されているが、日本で摂取が可能になるのは早くとも2021年3月以降ではないかとも言われている。今後も、国民全員の行動や意識の変化が求められ、いわゆる「新しい生活様式」を長期間継続していかなければならないことが予想される。中学生などの年代は、重症化のリスクが低いと言われているが、昨今は学校でのクラスターも流行当初より発生しており、電車やバス通学をする生徒が大半をしめる本校もいつ感染者が出てもおかしくない状態であると言える。

新型コロナウイルスに関しては、未だ分かっていないことも多い。感染者や、感染者を出した会社などへの誹謗中傷や、先行き不安な状況下でのデマの拡散などによる消毒液やマスクの不足など、別の社会問題も引き起こした。正しい知識を持った上で、「正しく恐れる」ことがいかに重要か、我々は再認識する必要がある。

本教材は、ウイルスに対する正しい知識を持ち、間違った情報に左右されることなく適切に対応すると共に、生徒自身が感染しないだけでなく、感染源にならないためにどのように行動すべきかを、生徒一人一人が自分事として考えるための教材である。

(2) 生徒観

生徒は3月から5月の間、学校が休校するという初めての経験をした。学校再開後も、分散登校や行事の中止・オンライン集会など、異常な状況の中を生活することで、新型コロナウイルスに対する危機感を持ちながら、緊張感のある学校生活を送っていた。休み時間など、可能な限り密をさせると共に、手洗いや消毒を意識的に行っていた。しかし流行が長期化すると共に、社会がある程度日常を取り戻しつつあった9月ごろからは、徐々にその緊張状態を継続することに疲れを感じているようすが見受けられた。実際に生徒たちは不用意に密になったり、飛沫への意識が乏しくなったりしている。教師側から注意する機会も増えている。緊張と緩和の中で生徒のストレスを軽減させつつも、各々がコロナウイルスに対する危機意識を継続的に持たせる必要がある。

ウイルスや細菌に対する正しい知識を持ち合わせておらず、区別が付いていない生徒も多い。新型コロナウイルス感染症の流行と共に注目されるようになったエタノールや消毒・除菌液などの違いも理解せず、何の疑いもなく設置されているものを利用している生徒が多々いる。

他者から感染することを警戒している者は多いが、自身が無症状かつ感染源となることもあるということをイメージできていない者が大多数であり、決して「正しく恐れる」ことが出来ているとは言えない状態である。

(3) 指導観

よって指導にあたっては、ウイルスや細菌についての正しい知識を得た上で、昨今耳にするよう

になった「消毒」「殺菌」「除菌」「抗菌」「滅菌」の違いを学ばせる。具体的な商品掲示などをあげながら、用途に合わせて正しく選択できるように指導する。デマの拡散によりトイレトペーパーなどが不足したニュース映像（最近の映像とオイルショック時の映像）を比較させ、その原因が「よく分からない」「不安だ」という気持ちによるものであることに気付かせる。また、その流れが世界規模となり、今後起こるであろう国家レベルのワクチンの困り込みに対する問題提起へと繋げる。

2次では実際にコロナウイルスのワクチンができたとき、どのような順番で国や人に配れば良いのかを、各々に考えさせる。その際、必ず理由をもって順番を決めさせる。考えたことを班で共有させることで、多様な価値観があることを実感させると共に、正解が1つでない難問に対して、生徒たちなりの落としどころを見つけさせる。生徒の話し合いがまとまった後、実際に自分たちの年代にワクチンが届くのはいつになるのかを問いかけ、ワクチン接種が始まったとしても、自分たちが注意して生活を送らなければいけない状況がしばらくは続くことに気付かせる。巡視の際には、生徒の葛藤を多く引き出す声掛けをすると共に、生徒同士でその解決策を導いた後、自分たちのことに思考を戻させ、自分の置かれた状況を客観的にとらえさせることで、主発問をより自分事としてとられるように支援する。

3次で生態系での細菌類、ウイルスの役割について学び、生物がそれらと共生関係にある事実を知るとともに、正しい知識を持って「正しく恐れる」必要性に気付かせる。

(4) ESDとの関連性

○本学習で働かせるESDの視点（見方・考え方）

【公平性】人間には不安に駆られるがあまり、自己中中心のかつ瞬間的にしか物事をとらえられず、冷静な判断ができなくなる面がある。

【連続性】目先の利益や欲求にとらわれて、排他的に考えるのではなく、人類全体・地球全体のことを考えて行動することが重要である。

【責任性】責任転嫁することなく、1人1人が自分事として問題をとらえ、行動に移す必要がある。

○本学習で育てたいESDの資質・能力

- ・批判的に考える力（クリティカル・シンキング）
- ・多面的、総合的に考える力（システムズ・シンキング）
- ・コミュニケーションを行う力 ・つながりを尊重する力
- ・未来像を予測して計画を立てる力

○本学習で変容を促すESDの価値観

- ・世代間の公正 ・世代内の公正

○達成が期待されるSDGs

- 3・・・健康、福祉 16・・・平和、公正

4. 単元の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
① ウイルス・細菌についての知識を身についている。	① 自分の考えを具体的な理由を含めて伝えることができる。	① 自分の考えを積極的に発言することができる。
② 知識をもとに、論理的な判断をすることができる。	② 他者の意見を傾聴し、自身との共通点・相違点を見つけることができる。	② 様々な場面、状況を想像しながら、問題を解決しようと励んでいる。
	③ 様々な価値観を交錯させる中で、新たな問いや答えを導くことができる。	③ 異なる価値観の意見に対しても傾聴し、受け入れることができる。

5. 単元の指導計画（全3時間）

次	主な学習活動	学習への支援（・）	評価（△） 備考（・）
1	○写真から考える。 “除菌用スプレー”とかかれたスプレー、これはコロナウイルスに効果あるの？ ・ワークシートをもとに、班で意見交換する。 ○コロナウイルスについて学ぶ。 ・ウイルスと細菌の違いを学ぶ。 ・「消毒」「殺菌」「除菌」「抗菌」「滅菌」の違いを学ぶ。 ・コロナウイルスを不活性させる方法を学ぶ。	・事前にワークシートを配布し、宿題で自分の考えをまとめて来る。 ・班員の意見を聞いたのち、自分の考えを変更しても良いものとする。 ・スライドをもとに説明し、同じものをclassroomに掲載し、生徒自身が復習できるようにしておく。	△ウ2 △ア2 △イ2 △イ3 △ア1
2	○ニュース映像から、なぜ次の事象が起きたのかを考える。 トイレットペーパー・マスク・うがい薬の品切れ、買い占め、転売 ○どうして同じことをくり返してしまっているのかを考える。 オイルショック時、トイレットペーパーを取り合っているようす	・コロナが流行し始めた3月以降、社会で何が起きたかを思い起こさせ、発表させる。 ・実際のニュース映像を見せ、それぞれの状況を想像（思い起こす）させると共に、共感させる。 ・生徒同士で意見交流させることで、多くの人が未曾有の事態で不安になると、間違った情報などにも行動が左右され、正しい判断ができなくなってしまうことに気づかせる。	△ウ2 △イ1
	私たちはコロナ禍の社会で生きる上で、どのように生活していけばいいのだろう		
	○コロナウイルスのワクチンができたとき、どのような順番で国や人に配ればいいのか考える。 ・自分がすべての権限を持っているものとして、順番とその理由を考える。 開発した国が優先？お金のある国から？貧困に苦しむ国から？医療体制の整っていない国から？政治家から？医療従事者から？高齢者から？子どもから？低所得者から？高所得者から？ ・班で意見交流する。 補助発問 コロナウイルスのワクチンでも、トイレットペーパーのときと同じことが国家レベルで起きてしまわないかな？	・インフルエンザの予防接種を例に、開発が進むコロナウイルスのワクチンは「治療薬」ではないことを押さえる。 ・必ず理由を説明できるようにさせる。 ・個人で考えさせる。 ・自分の考えと比較させ、どうあることが最善かを再考させる。 ・国と国とのつながり、人と人とのつながりを意識させる。 ・経済的に裕福な国による、ワクチンの囲い込みが起こる可能性に気づかせる。 ・実際にWHOが注意喚起するニュース映	△イ3 △ウ1 △ウ3

	○実際に自分たちの年代にワクチンが届くのはいつになるのかを想像する。 ・班での話し合いの中で、自分たちが優先順位の低いところにいたことに気づく。 ・ワクチンなどに頼るのではなく、自分たちの行動や、考え方を変えていかなければ、事態は好転しないことを実感する。 ○ふり返りを書く。	像を見せ、今後起きる可能性があることを具体的に想像させる。 ・自分たちの年代は、重症化率なども低いため、かなり後になってからワクチンなどが手に入るようになるという可能性に気づかせる。 ・ワクチンの効果や副作用など、未知の部分が多いことを伝える。 ・自分自身の行動を具体的に想像し、書かせるようにする。	△ア 2 △ウ 2
3	○全ての細菌、ウイルスが人にとって危険な存在なのかを考える。 ・食物連鎖、食物網について学び、細菌類が分解者として重要な役割を担っていることを知る。 ・ウイルスが遺伝子を運び、生物を進化させたという説を知る。 ・腸内細菌の存在を知る。	・細菌、ウイルスの存在が全て悪なのではなく、人類は昔から共存してきたことに気づかせる。	△ア 1
	身近な細菌類を顕微鏡で観察しよう。 ○ヨーグルト内の乳酸菌を観察する。 ・菌形態の違い気づく。 ・ワークシートに観察したことをスケッチする。 ○気づいたこと、わかったことをまとめる。	・ヨーグルトの他に、ヤクルトも準備しておく。 ・スケッチのやり方を簡単に確認した上で、活動に取り組ませる。 ・これまでの学びを総括し、具体的にまとめさせる。	△ア 2

6. 成果と課題

生徒は1次、2次と授業を行った直後は緊張感や危機感を持って生活する姿が見られた。手洗い・手指の消毒の徹底、生徒間のソーシャルディスタンスも十分に取ることができていた。一方で、問題が長期化するにつれて、さまざまな取り組みが形骸化し、緊張感が薄れていく様子が見受けられた。また、休み時間の過ごし方など、教師から改めて話をする機会も増えた。

理科の授業では、WHO 関連のニュース、ワクチンに関するニュース、世界情勢のニュースを授業の冒頭で扱い、国家レベルのワクチンの囲み込みや、国家間の格差、優先接種の問題について生徒に小まめに投げかけた。その都度生徒は、自分たちが授業で予想した事態が現実問題として起こっていることに驚いている様子を示した。また、その驚きが、生徒の緩んだ緊張感や行動を改めさせるきっかけになっていた。

コロナ禍における社会において、生徒も多くの制約を課せられながら生活をしている。緊張感を保ちながら自粛生活を継続することは、大人子供問わず非常に難しいことである。いわゆる新しい生活様式が定着するまでは、教師からニュースの情報などを頻繁に発信し、生徒自身の気づきや変容を促していくことが必要であるといえる。その導入として、本単元の取り組みは有効であると考えられる。

第3学年 理科 学習指導案

奈良教育大学附属中学校 教諭 佐竹 靖

1. 単元名 「緑の石の成分は何か～孔雀石の成分を調べる学習（中学3年物質領域）～」

2. 単元の目標

- ・「緑の石」の成分を調べる実験を、既習事項を踏まえて計画・実施できる。（知識・技能）
- ・「緑の石」の成分を調べる実験について、論理的に計画を立案し実施することができる。また、実験結果から「緑の石」の成分を科学的に判断できる。（思考・判断・表現）
- ・「緑の石」の成分が何であるか進んで調べようとし、論理的に実験計画を立案するなど、科学的に探求しようとすることができる。（主体的に学習に取り組む態度）

3. 単元について

（1）教材観

生徒にとって、本当に身の回りの物質が、全て原子・分子でできていると実感を伴って理解しているのだろうか。本単元では、ただの「緑の石」が実験によって分解され、構成する元素が特定される。この経験を機に、生徒の物質観（物質の見方）をより実感の伴ったものへと変容させたい。中学校理科では、岩石の分類や成因については学ぶが、構成する鉱物の化学組成が化学式で表せることまでは学ばない。そこで、いわゆる薬品庫から出てきた薬品について調べるのではなく、敢えて自然から得られた「緑の石」の成分を明らかにする学習を仕組むことで、生徒の物質観を大きく変容させることができると考えた。

「緑の石」と称して扱うのは孔雀石（ $\text{CuCO}_3 \cdot \text{Cu}(\text{OH})_2$ ）である。孔雀石はその色と模様の美しさから、古くは顔料として利用され、現在はアクセサリーの材料としても使われている。自然界では銅鉱床周縁に生じる二次鉱床として産することが多い。また、銅製の寺院の屋根などに現れる銅サビ（緑青）の主成分と同じである。孔雀石は粉末にして加熱すると二酸化炭素を発生し、黒色の酸化銅が生じる。さらにその酸化銅と炭素粉末を混合して加熱すると還元されて銅が得られる。また、塩酸に溶かすと二酸化炭素を発生させ、溶液は青緑色の塩化銅水溶液になる。さらにその塩化銅水溶液を電気分解すると陰極に銅が付着する。そのため孔雀石は、中学校3年間で学習する気体の性質や分解、酸化還元反応、水溶液とイオンといったすべての知識や実験技能を動員することで成分を明らかにすることができる（例えば古賀・田中 2006、岩手県立総合教育センター2012）。

また、本単元では、自然の石から化学変化によって銅が得られることが実体験できる。そのため、資源の有限性や、宇宙や地球における物質の循環性という ESD の視点を働かせることが可能である。さらに、身の回りの物質をどう認識するかといった自然環境や生態系の保全の基盤となる概念を形成することは、持続可能な社会の創り手に育てたい価値観を育むことにつながると考える。

（2）生徒観

さて、生徒はどのような物質観をもっているのだろうか。本単元を学習前に、図のようなアンケートを実施した。その結果、化学式で表せると答えた生徒は、「炭素」や「水素」といった理科で学習した具体

的な元素名や化学物質名に近いものほど多く、「木」や「石ころ」といった身近に見られる生物的なものや抽象的なもののほど少なかった(佐竹 2016)。このことから、生徒は、身の回りの物質が全て原子・分子でできているとは実感されておらず、化学物質と自然の事物を分けて考える傾向があると推察される。

Q1. 次のうち、化学式を使って表すことができる(できそうな)ものはどれですか？丸をつけて下さい。

ヘモグロビン、土、光、花こう岩、プロパンガス、ガラス、10円玉、木、水、
磁力、お米、太陽、落ち葉、食塩水、紙、熱、ブドウ糖、人間、水素、火、骨、
マグネシウムリボン、筋肉、砂糖、ビタミンC、海水、空気、石ころ、炭素

図 アンケートの内容

(3) 指導観

実験計画を立案する際には、これまでに生徒が行ってきた実験を想起させ、マインドマップを活用して既習事項の想起及び整理を行う。また、生徒は、イオンの学習でマグネシウムを塩酸に入れると水素が発生するしくみは学習しているが、物質を塩酸に入れて二酸化炭素が発生するしくみは学習していない。そのため、炭酸カルシウムを塩酸に入れる実験を行うことで補うことにした。さらに、「緑の石」の成分は、1つの実験で全てを明らかにすることができない。実験の過程でわかってきた結果をもとに、実験計画の修正や追加の実験を考えさせた。

○本学習で働かせるESDの視点(見方・考え方)

- ・有限性：実験で銅が生じる場面において、元の孔雀石の量に対して取り出せる銅が少量である気づきや、かつ熱分解や電気分解にかかるエネルギーに着目させることができる。
- ・循環性：化学変化によって銅を取り出す場面において、硬貨などに使われる銅が、自然からもたらされたことを実感できる。

○本学習で育てたいESDの資質・能力

- ・協働的問題解決力：実験計画立案や、実験中に実験計画を修正する場面において、グループのメンバーで考えを出し合いながら問題を解決していく。

○本学習で変容を促すESDの価値観

- ・天然資源の保全：生活の中で用いる銅は大量の天然鉱石と電気エネルギーから生産され、大量の鉱滓が廃棄されることを知り、天然資源の資源浪費を防ぐ価値観を養うことにつながる。

○関連するSDGsの目標

12. つくる責任 つかう責任：天然資源の有限性を実感することで、資源浪費を防ぐ価値観を養い、よりよい消費者としての責任に気づくことができる。

4. 単元の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
①既習の学習内容を踏まえて実験を計画・実行できる。	①論理的に実験計画を立案し、必要に応じて実験計画を修正できる。 ②実験結果から、「緑の石」の成分が何か判断し、他者に説明できる。	①「緑の石」の成分が何であるか進んで調べようとし、論理的に実験計画を立案するなど、科学的に探求しようとする。

5. 単元の指導計画（全5時間）

主な学習活動	学習への支援	◇ESDの視点 ○ESDの資質能力	◇評価 ○備考
1. 石灰石と貝殻の成分を調べる（1時間目） ・炭酸カルシウムを塩酸に入れた際に、二酸化炭素が発生する理由を説明する	実験方法はこちらから提示し、モデルを使って現象を説明させる		
2. 実験計画を立てる（2, 3時間目） 「緑の石」は何でできているのだろうか？ ・イオンの知識をマインドマップでまとめる ・グループで実験計画を立てる	・マインドマップで伸びないブランチについて、教科書や資料集、実験動画などを見せて想起させる	○協働的問題解決力	○実験計画は、フローチャートで計画させる ◇ウ①「緑の石」の成分が何であるか進んで調べようとしているか ◇イ①. 論理的に実験計画を立案しているか
3. 「緑の石」の成分を調べる（4時間目） ・実験計画に従って実験を行う ・結果を共有する	・実験の結果、何がわかって何がわからないか整理させ、わからないことについて追加の実験を考えさせる	○協働的問題解決力 ◇有限性・循環性	◇ア①. 実験計画通りに実験ができているか ◇イ①. 必要に応じて実験計画を修正しているか ◇イ②. 実験結果を科学的に判断し、他者に説明しているか
4. まとめ（5時間目） ・結果を確認するための演示実験を行う ・次単元へと繋げる	・必要に応じて追実験を演示し、残る疑問を解決する	◇有限性・循環性	○得られた銅の量や科学変化に用いたエネルギーなどに着目させる

6. 成果と課題

事後アンケートの結果、物質観の変容は6つのタイプに大別された（佐竹 2016, 2020）。例えば、「一部の物質原子説→全ての物質原子説」（原子でできているものは限られていると考えていたが、全ての物質が原子でできているように考えるようになった）に変容した生徒が45%、「物質単純説→物質複雑説」（緑の石はただの石で、他に何か入っていると考えなかったが、様々な元素からできていることを知った）に変容した生徒が28%おり、ねらいとしていた物質観の変容を促したことが一定認められた。併せて、インタビューでは、石以外の物質を構成する元素に対しても興味を持つようになったというコメントもあり、本実践による変容が生徒の日常生活の文脈まで影響したことも伺えた。

また、授業の中で「この量から、これだけしか銅がとれないんだ」といったつぶやきも得られたことから、ESDの視点である資源の有限性・循環性にも言及できた生徒がいた。

これらのことから、ESDの価値観を育む基盤の形成には一定の寄与ができたと考える。しかし、これらを自分事化や行動化の次元に引き上げるためには、今日的な社会的問題に対してどのように育まれた価値観が生かされるのかについて検証する必要がある。

参考文献

- 1) 岩手県立総合教育センター（2012）, 「中学校理科観察・実験書-学習指導要領改定に伴う中学校理科観察・実験指導資料-」, pp. 10-16
- 2) 古賀信吉・田中春彦(2006), 「マラカイトの合成と化学実験教材への応用」, 化学と教

育, Vol. 54, No. 2, pp. 102-105

- 3) 佐竹靖 (2016), 「中学校理科『化学変化と原子・分子』における生徒理解に基づいた授業改善の試み—量的分析とナラティブの視点からみえる生徒の物質観の変容とその要因を手がかりに—」, 奈良教育大学附属中学校研究紀要, Vol. 45, pp. 31-40
- 4) 佐竹靖 (2020), 「これからの自然科学に関する社会問題に対応する力を中学校理科でどう養っていくのか—身近な自然の見方や捉え方を変容させる授業を例に—」, 理科の教育, Vol. 69, No. 810, pp. 29-31

第2学年 家庭科 学習指導案

奈良教育大学附属中学校 教諭 中嶋 たや

1. 単元名 食生活からエシカル消費について考える

2. 単元の目標

- ・ (知識・技能) エシカル消費とは何かを理解する。
「レジ袋有料化から考える」の朝日新聞の記事の内容を理解する。
- ・ (思考・判断・表現) エシカル消費の視点で食品を選ぶことが出来る。
- ・ 「レジ袋有料化」はプラスチックごみ減量に有効かどうかを自分の視点で検討する。
- ・ (主体的に学習に取り組む態度)
- ・ エシカル消費の視点で食品を選び購入することが出来る。
- ・ エシカル消費の考え方を身近な人に伝えようとする。
- ・ 「レジ袋有料化」に関することを自分の問題として考え、積極的に仲間と意見交流する。

3. 単元について

(1) 教材観

新学習指導要領では、「消費生活・環境」の領域で「(1)金銭の管理と購入」で「物資・サービスの選択に必要な情報の収集・整理が適切にできること。」とある。これについては、中学生にとって身近な商品の購入の学習と関連させて学習するよう述べられている。1学期、教科書にある消費生活の基礎(「物資とサービス」「契約の成立」など)について学習した後、「エシカル消費」についての学習を行っている。

食生活の学習の一環として、事前レポートで「エシカル消費について」というテーマで、いくつかのキーワード(フェアトレード・オーガニック・持続可能な生活など)について調べ学習をさせた上で、エシカル消費とは何かについて共通理解をはかり、昼食の例としてのカレーの例の中から「エシカル消費」の視点で選択をさせた。仲間と話し合いを行うと、エシカルの視点だけでなく、食品の安全性などについての意見が出た。

課題「週末 買い物に行ってみよう!!」をもとにエシカル消費の視点で商品を購入できた場合・購入できなかった場合の原因について話し合いを行っている。本時では、夏休みの課題とした「『エシカル消費』企業の取り組みを調べてみようレポート」をもとに、自分が何を選択し購入するかが、企業への1票となることを確認させたい。また、そのためにも提示された商品の中から選択・購入するだけでなく、企業に自分の望む食品を求めるプロシューマーとしての力を付けることを目指したい。

今年度は、今までの学習の延長にある学習として、レジ袋有料化の問題について考えた。

「波と共に押し寄せ、海岸を埋め尽くすゴミの山。洋上はるかな無人島の浜にも打ち上げられる空のペットボトル。海流に乗って何千キロも流され、浮遊を続けるビニール袋、海底の泥の中に大量に堆積するマイクロプラスチック…今、海に大量に流入するプラスチックが、世界的な問題となっています。経済の成長や便利なライフスタイルへの移行と共に増加の一途をたどってきた、この海洋を汚染するプラスチックごみ。多くのプラスチック製品を生産、消費している日本も、無関係ではありません。国際的にも大きな責任を持つ国の一つとして、この『海洋プラスチック問題』の解決に向けて早急に対応していく必要があります。」(WWF ジャパン HP)

今、海洋プラスチックごみの問題は深刻性を増している。しかし、私たちの日常生活は大きく変

わることはなく、相変わらずプラスチックに頼る生活を続けている。まずは、このプラスチックの問題に目を向け、自分ごととして考えていくことが大切であるとする。この授業をそのきっかけとしたい。

(2) 生徒観 2年生は、家庭科で身近な生活の課題について考えることに対して積極的であり、しっかりと自分の考えを文章にまとめることはできる。エシカル消費の学習については、具体的な例を知り、企業へのインタビューにも積極的に取り組んだ。エシカル消費は大切なことであるのに、なぜ、大人達が知らないのかと憤り、自分が身近な大人達につたえていく必要性も感じている。

しかし、プラスチックの問題について、意識しているとはいいがたく、日常的にペットボトルの飲料を購入する生活を送っている。この授業を通して、プラスチックごみの問題を自分ごととしてとらえ、考えていく姿勢を身につけさせたいと考える。

(3) 指導観

エシカル消費の授業から続くレジ袋有料化についての授業では、プラスチックゴミの問題を自分ごととしてとらえて、今後の自分の生活を考えるきっかけとして考えている。資料となる新聞記事から学ぶだけでなく、今後も継続的にこの問題について、自分の生活と関連づけて考えていけるよう指導したい。

・本学習で働かせるESDの視点（見方・考え方）

○相互性：つながっている、循環している

○有限性：もったいないの文化がある。物を大切に長く使う文化がある。

○公平性：世代内と世代間を考えている

・本学習で育てたいESDの資質・能力・批判的に考える力（クリティカル・シンキング）

○未来像を予測して計画を立てる力

○多面的・総合的に考える力（システムズ・シンキング）

○コミュニケーションを行う力

○他者と協力する態度

○進んで参加する態度

・本学習で変容を促すESDの価値観

○世代間の公正

○自然環境、生態系の保全を重視する。（生物多様性の重視）

・達成が期待されるSDGs

目標1：貧困をなくそう、

目標12：つくる責任使う責任

目標14：海の豊かさを守ろう

目標15：陸の豊かさを守ろう

4. 単元の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
○「エシカル消費」とそれに関わるキーワード(フェアトレード・オーガニック・地産地消など)を理解する。 ○「レジ袋有料化」の朝日新聞の記事の内容を理解している、	○「エシカル消費」の視点で食品選択の条件を考え、よりよいものを検討し、発表する。 ○「レジ袋有料化」はプラスチックごみ減量に有効かどうかを自分の視点で検討することができる。 ○今回の学習を通して、今後の消費行動について考えたことをまとめることができる。	○自分の消費行動について、現在の生活だけで無く、地球環境の持続可能性なども考えて決定しようとする。 ○「レジ袋有料化」に関することを自分の問題として考え、積極的に仲間と意見交流する。

5. 単元の指導計画（全〇時間）

次	主な学習活動	学習への支援（・）	評価（△） 備考（・）
第一次	中学生も消費者だ(消費生活についての基本事項を知る)	自身も消費者であることを認識させ、契約・販売方法を示す	
第二次	エシカル消費を考えた食生活(1)・・・あなたの一步が世界を変える (エシカルの視点で昼食としてのカレーを選択する)	3つの配慮(環境への配慮・地域への配慮・人々への配慮)に分類出来ることを確認する。	
第三次	○エシカル消費を考えた食生活(2)・・・「週末買い物にいてみよう」を下に話し合う(1時間) ○エシカル消費を考えた食生活(3)・・・エシカル消費となる商品を購入しやすくするには(1時間)	3つの配慮のうち、どの視点で選んだのかを、理由と共に発表させ	
第四次	○小学生の「プラスチックごみの問題を解消するために紙を使っているけど、木の問題は考えなくていいの」についてこたえるために考えることを知る。 ○朝日新聞の「レジ袋有料化」に関する記事を読み、わかったことをまとめ	・今、プラスチックゴミのことが問題になっているが、お菓子のパッケージが紙になって、それが解消されても新たな問題が生まれることについて悩んでいる小学生に答えるため考えてほしいと伝える。 ・今、レジ袋のことで何が問題になり、どのような解決法が模索されて	・朝日新聞「レジ袋有料化1・2」 △ア1

	る。 ○小学生の「プラスチックは減らすことが出来ても、紙に変えたら木が減ってしまいますことは問題じゃないの」と言う問いにどう答えるかを考える。 ○考えたことを仲間と交流する。小学生によりわかりやすく伝えるためには、どう伝えるのが良いかについても考える。 ○今日考えたことをきっかけにプラスチックごみの問題について、継続的に考えることを確認する	いるかを理解させるよう、助言する。 ・小学生の子にわかりやすい言葉で伝えることを意識してまとめるよう指導する。 ・中学生の仲間ではなく、小学生であることを意識させる。 ・すぐに解決することの出来る問題でなく、多様な問題を含むものであるので、みんなで継続的に考えていくことが必要であることを確認する	△イ △ウ
課題	考えた事に対する小学生の返信に対して考えたことをまとめる。	・小学生のコメントから更に自分の考えをまとめるよう指示する。	・小学生の返信を載せた教科通信
第五次	「エシカル消費～レジ袋有料化について考える」までの一連の授業を通して考えたことを新聞に投書する。	・企業へのインタビューや小学生のやりとりを元に今後の消費行動について考えたことをまとめさせる。	△イ

第1学年 社会科 学習指導案

奈良教育大学附属中学校 教諭 中村 基一

1. 単元名 日本の諸地域 ―関東地方―

2. 単元の目標

①知識・技能に関わる目標

○関東地方の自然環境や東京大都市圏の特色や都市問題について理解する。

○全国から人が流入し、ニュータウンが建設されたことを理解する。

○ニュータウンが現在抱える問題を理解する。

②思考力・判断力・表現力に関わる目標

○関東地方の人口問題を多面的・多角的に課題を把握する。過密化の解消のためにつくられたニュータウンが、少子高齢化や、施設の老朽化などの問題を抱えている。首都東京には世界中から人が集まり、多様な人々がそれぞれの文化を持ち生活している。そうした人々と、どう共生していくのかを考える。

③主体的に学びに向かう態度に関わる目標

○関東地方の課題を通して、自分たちの街の課題を見つけ、その解決に向けた方策を考える。

3. 単元について

①教材観

関東地方には人口が集中し、東京は政治・経済・文化の中心地となっている。東京は中枢管理機能を備えており、他の地方に比べて社会インフラが整備され利便性も持った都市であることを捉えさせたい。その中で、他の地方からの人口流入が多く、そこにすむ人々のコミュニティの弱さが、指摘されている。コミュニティの弱さが引き起こす問題が、過密都市東京において持続可能な開発にどのような影響を及ぼすのか、生徒自らが考えさせるとともにグループワークで共有し、深化させたい。本時では、高齢化したニュータウンの再生を取り上げる中で、世代間の公正を意識することができると考える。

②生徒観

本学級の生徒は、男女ともに積極的に発言することができ、意欲的に話し合うことができる。過密や関東地方の産業といった基礎的な知識は定着しており、様々な問いを深める下地ができている。

③指導観

住民の高齢化や、施設の老朽化、モータリゼーションへの対応、災害に対策など、多摩ニュータウンの課題を踏まえて、その再生を考えることにした。多摩ニュータウン地域再生ガイドラインは、2018年に東京都都市整備局によって策定されたものである。ガイドラインは2020年がゴールではなく、2040年、さらにその後と、これからも多摩ニュータウンが永続できるための「道しるべ」となっている。SDGsの11.7を実現し、様々な立場の人々が住み続けられるまちづくりを考えも取り入れて学ばせたい。

4. ESDとの関連

①学習を通して主に養いたいESDの視点

多様性：ニュータウンが作られたころから住んでいる高齢者と、入居を希望している若者、外国人などが入り交じりそれぞれ住環境に異なるニーズを持つことに気が付く。

有限性：50年以上前に開発が始まった多摩ニュータウン。街としても、建物としても老朽化が進んでいるが、街並みや街路樹などは、これからも価値あるものとして残っている。こうしたものを資産ととらえ、これからの世代にどう伝えていくかを考える。

連携性：住民や地方自治体、国などが連携しニュータウンを維持するためにどのように協力しているか、どんな協力が必要かを考える。

公平性：高齢者や子育て世代など様々なニーズを持った住民たちが、自分たちの住みやすさを追求しながらも、他者に配慮してどんな世代の人でも住みやすい街を維持していくかを考える。

責任性：ニュータウンという地域社会を維持するために、住民ひとりひとりができることを考える。

②学習を通して主に養いたいESDの資質・能力

・クリティカル・シンキング：新しいものがよいという価値観を打破し、ニュータウンの良さを残しながら都市再生計画を考える。

長期的思考力：20年後・40年後までニュータウンが維持され、住民のニーズにこたえ続けている計画になっているかを考える。

協働的問題解決力：生徒たちがニュータウン再生計画を考えるなかで、それぞれが、異なる視点で話合わせ、より良い解決策を見出していく。

③本学習で変容を促すESDの価値観

・世代間の公正

④達成が期待されるSDGs

目標9：インフラ

目標10：不平等解消

目標11：まちづくり

5. 単元の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
①関東地方の自然環境や人口、産業の特色を捉え、その知識を身につけている。	①関東地方の地域的特色を、他地域との結びつきを柱とした考察をもとに、その過程や結果を適切に表現している。	①関東地方の人口問題について、住民の立場から課題解決策を提案することができる。

6. 単元展開の概要

○指導計画（全5時間、本時は第2次）

第1次（1時間） ○多くの人が集まる首都、東京

第2次（2時間） ○交通網の整備と商工業の発達

○多摩ニュータウンから見る東京の課題(本時)

第3次（1時間） ○開かれた世界都市 TOKYO

第4次（1時間） ○きみも都市プランナーになろう

7. 学習展開過程

主な学習活動	学習への支援	◇ESDの視点 OESDの資質能力	◇評価 ○備考
1. 多摩ニュータウンの写真を見せる	○この街がいつ頃開発されたのか考える。	○クリティカル・シンキング ◇多様性・有限性	
発問：多摩ニュータウンのできた頃と現在を比較して日本の課題を考えよう。			
2. 多摩ニュータウン開発の経緯や、多摩ニュータウンの現在の問題について確認する ○ニュータウンの課題から、東京の課題を確認する。 ○仮説を立て、調べてまとめる。	○東京オリンピックの頃の高度成長期で、乱開発を防ぎ、当時の理想をもとに街作りが行われたことに触れる。 ・多摩ニュータウンはどんな理想のもとに街作りが行われたのか、考えよう。 ○ニュータウンの過去と現在の違いを話し合う。 ○過密状態の東京で起きている、コミュニティの低下とはどのようなものか、考える。	○コミュニケーション力 ○システムズ・シンキング	◇協力して調査する ◇調査内容を関連付けてまとめる ○パワーポイント
3. ○解決策をまとめ発表する	○グループで話し合う。	○長期的思考力 ○コミュニケーション力	◇事実やデータに即した話し合いをする。
4. ワークシートを記入する	理由を明らかにしながら自分の言葉でまとめさせる	○システムズ・シンキング ○協働的問題解決力 ◇連携性・責任性	◇協力して取り組む ◇リーダーシップを発揮する。

8. 成果と課題

多摩ニュータウンの再生計画を立てた後に、アンケートをとると、高齢化や求められる都市機能の変化などの問題を解決しなければならないという意識が明確になっていた。また、ニュータウンで起きている問題が、奈良でもおきているのではないかと気づく生徒もいた。しかし、町の再生計画というスケールの大きい話しであるが故に、自分事にはできない生徒もまだまだいたことは課題である。

多摩ニュータウンの課題

- ・ニュータウンとは…高度経済成長期に大都市の（ ）を解消するために開発された都市。 多摩ニュータウン（東京）や千里ニュータウン（大阪）が有名。」

Q1. 写真を見て、ニュータウンのイメージしてみよう。」

当時の人々の理想の都市とはどのようなものだろうか？」

Q2. モータリゼーションが日本に与えた影響を考えよう。」
※モータリゼーション…自動車 が急速に普及し、生活に不可欠になること。」

Q3. 現在のニュータウンの課題を若い子育て世代目線と高齢者目線から考えよう。」

4. ニュータウン再生に必要な取り組みとは何だろう？」

☆今日の授業の感想を書きましょう。」



1 年()組 ()番 名前 _____

第2学年 美術科 学習指導案

奈良教育大学附附属中学校 教諭 長友 紀子

1. 単元名 ナラノヤマノカミノキ ―吉野杉でカミサマをつくろう―

2. 単元の目標

- ・吉野杉の素材感・手触り・色などの特徴から奈良の山々や自然の美しさや良さを理解し、発想したイメージを表現することができる。
- ・吉野杉を素材とするカミサマのイメージを豊かに思い描き発想を深めることができる
- ・イメージを具体化して作り出す活動を楽しみ、自分や友達の作品を通して奈良の山々や自然の持つ価値を感じとることができる。

3. 単元について

(1) 教材観

奈良県吉野郡は、奈良県の面積の約60%を占め、古くから林業の盛んな地域である。吉野で育てられた吉野杉は、現在は主に酒樽などに加工されており、本題材で素材とした吉野杉は、それらの酒樽の蓋をつくる際に出た端材である。触ると柔らかく、香りが良く、心材の赤みや年輪の色など、触覚・嗅覚・視覚を通して木材の良さを感じとることができる。吉野という身近な地域で育てられた木を作品の素材とすることで、作品へ向き合う時の生徒の気持ちが、親密なものになるのではないかと考えた。奈良の山々は、そこに暮らす人々の手によって豊かな森林を育んできたという歴史を持っている。奈良の人々が大切に育んできた吉野の山々について知り、その山々にいる「カミサマ」とはどんな形をしているのだろうか、と考えることを通して、自分たちの身近にある自然の美しさや価値に気づくことができるのではないかと考えた。また、総合学習で行っている、奈良めぐりの時期と重ねて題材を実施することで、奈良という地域を多面的に捉え、考えることができる教材となっている。

(2) 生徒観

第2学年の生徒は、落ち着いて学習に取り組むことのできる集団である。相手の話を聞く力があり、対話的な雰囲気を持っている。自分の意見や考えを述べる際は、安心のできる環境を整えたとのびのびと発言できる。主題を与えられれば深く考える力はあるが、表現したいという能動性についてはやや弱さがあると感じるため、考えることの面白さ、制作の楽しさや友だちと作品について対話することの良さを実感することで、生徒の能動性を育てたい。奈良の自然から作品の材料をとり、イメージを膨らませることに重点をおいた題材設定、作品を通じた対話の導入をすることで、生徒が自ら考え、つくり出す力をつけることができると考えた。

(3) 指導観

「カミサマ」をつくる、というテーマは、生徒にとってはこれまで考えたことのない内容だと思われる。まず、テーマをやや新奇性のあるものにすることで、生徒の意識を刺激するようにした。本題材で扱う

「カミサマ」は、宗教的な意味ではなく、自然を概念として捉えるものがある。目に見えない概念的なものを形にするということは、作品の完成に対して正解となる形がないということで、生徒は自分にとっての「カミサマ」がどんな形なのかを自分の価値観によって考えることになる。

次に、素材として吉野杉を提示し、吉野杉が育てられてきた奈良の山々について考える場面を設定する。吉野林業について説明を加えたり、奈良の山々の風景を想像させる場面設定を行ったりして、奈良の自然の美しさや良さを想起させることで、奈良の山々にいる「カミサマ」のイメージを膨らませる手がかりとする。

素材を教室の中央に置き、のこぎりやホットボンドなどの道具類を使えるスペースを作って、制作する間中、生徒らが互いの様子を自然に目にできるような教室環境を整えて、自然な対話が生まれやすい状況を作った。作品の完成後、鑑賞の場面では自分の作った「カミサマ」について、互いに紹介しながら鑑賞を行うようにした。作品の造形の意図を言語化することで、自分の思いや考えを振り返ることができるようにした。

・本学習で働かせる ESD の視点（見方・考え方）

相互性：奈良の自然が自分たちの身近にあり、奈良の自然を育んできた人々の思いがあることを知る。

公平性：今ある自然のを大切さを感じ、自分たちの次の世代につなげていくことを意識する。

多様性：作品を通して、同じ素材・テーマから多様な見方・感じ方があることを知る。

・本学習で育てたい ESD の資質・能力

つながりを尊重する態度：自然とのつながり、人とのつながりを意識する

コミュニケーションを行う力：自分の作品の意図を相手に伝え、相手の話を聞いて、作者の思いについて考える。

進んで参加する態度：テーマに対して自分の発想を膨らませ、表現することを楽しむ。

・本学習で変容を促す ESD の価値観

世代間の公正：今ある奈良の自然の美しさや良さを自分たちの次の世代につなぐという意識を持つ。

幸福感に敏感になる。幸福感を重視する：奈良の自然の中にある「カミサマ」を考えることで、そこに暮らす自分を含む人々を大切に思う気持ちを持つ

自然環境、生態系の保全を重視する。（生物多様性の重視）：奈良の自然の美しさや良さを大切に思う気持ちを持つ

・達成が期待される SDGs

目標 15・目標 16・目標 11

4. 単元の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
①材料の吉野杉を育んだ奈良の山々の自然の美しさについて理解する ②テーマからイメージを膨らませ、素材の加工の仕方や組み合わせ方などの表現方法を工夫することができる	①テーマから、自らの表現の意図について考えを深め、構想を練ることができる ②作品を相互鑑賞することで、自らの意図を言語化し、見方・感じ方を深めることができる	①制作することを楽しみ、自分のイメージを形にしようと取り組むことができる ②制作と鑑賞の活動を通して、奈良の自然の持つ美しさや良さを感じることができる

5. 単元の指導計画（全〇時間）

次	主な学習活動	学習への支援（・）	評価（△） 備考（・）
1	○テーマを知る ○今持っている「カミサマ」のイメージを書き出す ○材料に触れ、触り心地や香り、色などを観察する。吉野杉に触れて気づいたこと、感じたことを書き出す ○奈良の山々について知り、身近な自然の良さについて考える	・テーマについて説明する ・生徒が既存で持っている「カミサマ」のイメージを書き出すことで、作品に対する意識を向けさせる ・吉野杉の木材に触れることで感覚を刺激しイメージを膨らませやすくする ・吉野林業や奈良の山々について説明を加え、身近な地域の良さを感じることができるようにする	△ア① ・ワークシート ・木材
2	○アイデアスケッチを描く ・木材に触れながら考える ・カミサマの性質について考える ・奈良の山々の自然について意識しながらイメージを膨らませる	・奈良の山々の自然からイメージを膨らませるように促す ・どんなカミサマをつくるか、性質から形を考えるように促す ・材料を豊富に用意し、イメージにあった色や質感の材を選べるようにする	△イ① ・ワークシート

3 ～ 6	○制作する ・木材を観察し、作りたいイメージにあった材料を選ぶ ・360 度から作品を見て、一つ一つのパーツの形や組み合わせ方を試行錯誤する。 ・アイデアスケッチに書き加えながら作業を進める ・作りたい形に合わせて道具を使うようにする（ノコギリ、電動ノコギリ、金やすり、紙やすり、ホットボンド、木工ボンド）	・材料を豊富に用意する ・道具類の置き場所と作業スペースの動線を考えて、作業しながら自然に対話が生まれるように状態を保つ ・木材を触って作業する中で、発想が膨らみ変化した場合は、アイデアスケッチに適宜書き加えをしたり、変更したりしてもいいことを伝える ・一定の方向からだけでなく、360 度から見て形を決定していくように促す	△ア② △ウ① ・ノコギリ、電動ノコギリ、金やすり、紙やすり、ホットボンド、木工ボンド
7	○鑑賞 ・自分の作った「カミサマ」について語れるように準備する ・ポスター発表形式で作品を友だちに紹介する ○鑑賞シートに振り返りを記入する	・自分の作った「カミサマ」について、作品にこめた思いや造形の意図について、他者に伝わるように言語化させる ・クラスを 3 つのグループに分ける。発表グループの生徒は発表を 2 回行う。聞くグループの生徒は異なる生徒の発表を聞くようにさせる。 ・友だちの作品発表を聞いて感じたことや考えたことを記入する ・自分の制作を振り返る ・奈良の山々の自然について改めて考えるように促す	△イ② △ウ② ・ワークシート

第 3 学年 保健指導案

奈良教育大学附属中学校
養護教諭 成田 菜津美

1. 単元名 感染症の予防 ―新型コロナウイルスの流行から考える―

2. 単元の目標

(知識・技能)

○新型コロナウイルスに関する基本的な知識を理解する

○感染症の流行に伴う社会的な危機を理解する

(思考・判断・表現)

○新型コロナウイルスに関する知識をもとに、予防に取り組む意義や、ワクチン接種の有無、などについて、自分で考え言語化できる

(主体的に学習に取り組む態度)

○自分の想いや考えを、ワークシートや発表というかたちで表現できる

3. 単元について

(1) 教材観

令和2年12月に、中国・武漢で新型コロナウイルスの感染が報道されてから、長期間にわたり脅威にさらされている。日本国内でも流行がみられてからさまざまな対策を行い、自粛生活が続けているが、未だに流行は収まらず、経済への影響も大きくなっている。そんな中、各国でワクチン開発がすすめられ、ついにワクチン接種を開始する国が出てきた。しかしながら、数の確保が難しいため、優先順位がつけられての接種開始となっており、健康な中学生は優先順位としては後になるだろう。それらに対する不公平感や、優先順位の必要性を考えることで、新型コロナウイルスを身近なものとしてとらえ直してほしい。また、感染症予防の観点から、任意の予防接種についても、考える機会としてほしい。

(2) 生徒観

本校3学年の生徒は130名おり、京都府南部と奈良県の各地から通学している。そのため、通学や通塾等で日常的に公共交通機関を利用することが多く、新型コロナウイルスへの感染リスクが比較的高いと考えられる。また高校入試を控え、インフルエンザ等への関心も高いため、不安が強い様子もみられる。

(3) 指導観

まず、新型コロナウイルスに関する基礎的な知識を確認し、感染拡大の現状とその対処方法について学ばせる。その際、必要以上に恐れるのではなく、きちんと対処をすれば感染予防がで

きることを押さえておく必要がある。世界中を混乱に陥らせている新型コロナウイルスにもワクチンが開発され、近日中に接種が始まるという新聞記事から、国民全員が早期に受けることができないことを読み取らせる。そこで、ワクチンを誰から接種することが公正・公平なのかを考えさせる。その中で世代間の格差や経済格差などの問題に気づくことができ、みんなが幸せになるための方法を模索することができる。

- ・本学習で働かせる E S D の視点（見方・考え方）
D 公平性 E 連携性
- ・本学習で育てたい E S D の資質・能力
 - ・批判的に考える力（クリティカル・シンキング）
 - ・未来像を予測して計画を立てる力
 - ・多面的・総合的に考える力（システムズ・シンキング）
- ・本学習で変容を促す E S D の価値観
 - ・世代間の公正
 - ・幸福感に敏感になる。幸福感を重視する。
- ・達成が期待される S D G s
目標 3：健康・福祉
目標 10：不平等解消

4. 単元の評価規準

※観点別評価を行わないため、割愛。

5. 単元の指導計画（全 1 時間）

次	主な学習活動	学習への支援（・）	ESD の視点
I	○新型コロナウイルスに関する基礎知識をつける ・新型コロナウイルスについて考える ・新型コロナウイルスという感染症について学ぶ	・今もなお流行している状況のなか、感じていることを自由に発言させる ・基本的な知識を得る ・“新型”という事が何を意味するのか理解する ・基本的な予防法について再確認し、各々がきちんと予防すれば、恐れ過ぎる必要がないことを理解する ・予防法の 1 つとして、予防接種があることに目を向ける	

	○ワクチン（予防接種）について考える ・新型コロナウイルスのワクチンが開発され、接種が開始されている記事を引用 ・新型コロナウイルスのワクチンを接種したいか ・ワクチンについての説明 ○ワクチン接種の実際について考える ・新型コロナウイルスのワクチン（モデルナ社）供給契約の記事を引用 ・文科省の HP の優先順位を参照 それって本当に公平なのだろうか ○まとめ	・新型コロナウイルスのワクチンの現状を知る ・自分が打てるとしたら、どう選択するか、またなぜそう思うのか考えさせる ・接種するかしないか、またそれぞれのメリットとデメリットを考えてみることで、多面的、総合的に考えてみる ・ワクチンの種類や効果、また社会全体への影響などについて知る ・初めに確保できたのは 2500 万人分のワクチンでしかなかった。このときにワクチンを接種するなら、その優先順位をどのようにするか考える。 ・文科省の優先順位と自分の考えた優先順位を比較してみる。 ・みんなが公平だと思う優先順位について考える ・感想を書かせる	※多面的、批判的 ※未来像を予測、不平等解消 ※世代間の公正、幸福感
--	---	--	---

第1学年 中学校技術科 学習指導案

奈良教育大学附属中学校
教諭 葉山 泰三

1. 単元名 情報の技術 ― 情報技術を活用し、国際教育問題を学ぶ ―

2. 単元の目標

- ・ 実践的・体験的な活動を通して、生活や社会で利用されている情報の技術についての基礎的な理解を図る。そして、それらに係る技能を身に付け、情報の技術と生活や社会、環境との関わりについての理解を深める。(知識・技能)
- ・ 生活や社会の中から情報の技術に関わる問題を見だし、課題を設定する。次に、その解決策を構想し、作品制作等を通じて解決策を具体化する。そして、その実践を評価・改善しながら、課題を解決する力を養う。(思考・判断・表現)
- ・ より良い生活や持続可能な社会の構築に向けて、適切かつ誠実に情報の技術を工夫し創造しようとする実践的な態度を育成する。(主体的に学習に取り組む態度)

3. 単元について

(1) 教材観

本実践は、学ぶ機会を失った人に、教育の機会を提供するために日本ユネスコ協会連盟がESDプログラムとして行っている途上国への教育支援活動「世界寺子屋運動」の国際支援を推進するリーフレットをコンピュータで制作する授業である。リーフレット制作を通して、子どもたちは、途上国の厳しい教育現状について詳しく学び、今の自分たちにできることについて深く考え、さらに「情報活用能力」や「表現力」、「デジタルデザイン能力」、「プレゼンテーション能力」、「社会にはたらきかける力」等の育成を図ることができる。

この学習は、「情報の技術」の学習とESDプログラムを、融合させた総合学習型教育プログラムであり、授業のみならず、総合学習としても展開することが可能である。さらに学習内容は、グローバルな視点で持続可能かつ幸せな未来社会を創っていく力や姿勢を育む構成にもなっている。

(2) 生徒観

一般的に児童・生徒は、世界には経済的に厳しい国があり、教育を十分に受けることができない子どもが多く存在することを、メディアなどからの情報等で漠然とではあるが知っている。ただし、大事な問題であると認識しながらも、その詳細について学習した経験のある生徒は少ない。また、情報発信のために、コンピュータを有効活用した本格的な資料作成を行った学習経験のある生徒も少ない。そのため、本教育プログラムのように、ESDと「情報の技術」の学習内容を融合させることは、生徒達の学習意欲・関心を高める上でも非常に有効な学習方法となりうる。

(3) 指導観

本授業プログラムにおいては、「情報の技術」の学習で活用するコンピュータの学習内容を深めていく上で、E S Dの内容（国際教育支援等）を盛り込み、学習意欲や学ぶ目的意識をより高め、コンピュータを用いた作品制作の学習効果を向上させる工夫を加えている。

本校では、カンボジア現地へ教員が取材に赴いて作成した自作教材を用いて、より効果的に学べる工夫も加えているが、一般的には、ユネスコから提供される教材やユネスコのホームページ上にある教材を有効活用するとよい。いずれにせよ、指導する教員が途上国の状況について詳しく事前学習しておくことが、学習効果をより高める上での大変重要なポイントになってくる。

(4) E S Dとの関連

①学習を通して主に養いたいE S Dの視点（見方・考え方）

途上国の厳しい教育の現状について詳しく学び、持続可能な社会を創る上で、教育の持つ重要性、教育を支える環境を整える必要性に気づく視点を養う。さらに、問題解決に向けて行動を起こす大切さにも気付く視点を養いたい。

②学習を通して主に養いたいE S Dの資質・能力

途上国の厳しい教育現状の改善に向けて深く学ぶ中で、持続可能な未来社会の創出に向けて、グローバルな視点も持ちながら、主体的かつ積極的な行動を具体的に起こしていく資質・能力を養う。

③学習で変容を促すE S Dの価値観

持続可能な未来を創り上げていくためには、問題について学ぶだけに止まらず、問題解決に向けた具体的な行動を起こすことこそが最重要、という価値観への変容を促したい。そして、その根幹を支える教育の大切さにも気づかせ、学ぶ姿勢の変容も促したい。

④達成が期待されるS D G s

S D G sとの関連においては、「1. 貧困をなくそう」「4. 質の高い教育をみんなに」「10. 人や国の不平等をなくそう」の3つの目標に、しっかりと繋がっている。そして、これらの目標と絡めながら深く学び、問題改善に向けて、「今の自分にできることは何か」などの具体的な提案も考え、S D G sの理念に沿った学習が展開できる。

4. 単元の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
①コンピュータ等の情報端末を有効に活用しながら途上国の教育問題について深く学んでいる。	①より良い作品を制作する上で、そのための手法を的確に判断できる。	①途上国における厳しい教育の現状を深く学び、その改善に向けた策を主体的に考案できる。
②問題解決に向けて、より実践的な技能や知識を身に付けている。	②どのような文言や表現方法を作品に盛り込むとよいかについて、深く思考することができる。	②積極的な学習活動や問題解決に向けた行動を起こすことができる。

5. 単元の指導計画（全5時間）

次	主な学習活動	学習への支援	評価・備考
1 現 状 を 知 る	- 途上国の教育の厳しい現状について学び、厳しい現状を知る。 - 学んだことを、パソコンを活用してまとめる。 - パソコン教室のLAN（Local Area Network）システムを活用して意見発表や意見共有を行い、他者の意見からも学ぶ。	- 学習効果を高める動画や資料の活用（ユネスコのホームページに様々な情報有。） - カンボジア現地で撮影した動画や写真を用いて制作したオリジナル教材を活用 - 途中に、クイズ的な質問も交えながら、子ども達の意欲や関心を高める。 - パソコン教室のLANシステムを活用し、各自の意見の発表や共有を効果的に行っていく。	情報端末を有効活用しながら途上国の教育問題について深く学んでいる。
2 調 べ る	- 途上国の教育の厳しい現状について、詳しく調べてまとめる。 - パソコンを活用して、情報を効率よく収集していく。 - 調べた問題点をパソコン教室のLANシステムを活用して発表し、情報共有しながら、お互いに学び合う。	- 学習効果を上げるためにコンピュータを有効活用する。（インターネットやLANシステムの活用） - グループを編成し、共に学び合える協働学習を行う。	情報端末を有効活用しながら途上国の教育問題について深く学んでいる。
3・4 制 作	- コンピュータを活用し、ユネスコ世界寺子屋運動を推進するリーフレット制作を行う。 - 他者の意見も参考にしながら、作品のブラッシュアップを繰り返す。	- 作品制作を効率よく進めるための資料などを提示。 - お互いの作品への意見交換をさせながら、ブラッシュアップを効果的に行わせる。	問題解決に向けて、作品制作に意欲的に取り組んでいる。
5 ま と め	- これまでの学習や制作を通して学んできたことをまとめ、発表し、お互いに意見交換も行いながら、学びをより深める。 - 途上国の教育問題の改善に向けて、自分達ができることを主体的かつ具体的に考える。 - この学習におけるESDやSDGsとの関わりについてまとめる。	- コンピュータを用いた効果的なまとめ方や発表方法を指導する。 - 学習効果を上げるためにコンピュータを有効活用する。（LANシステムの活用） - ESDやSDGsの理念の実現に向けて、本学習が主体的かつ具体的な行動に繋がっていくように導いていく。	問題解決に向けて、主体的かつ具体的な発案をし、行動を起こしている。

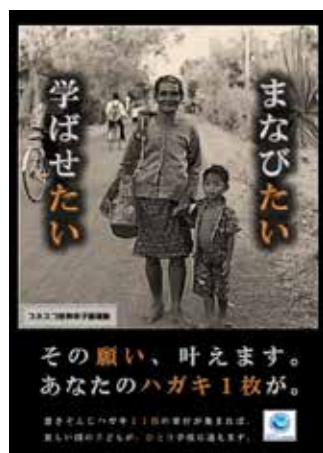
6. 成果と課題

本実践の大きな成果の一つとしては、生徒達が高い意識を持ち、大変意欲的にリーフレット制作に取り組んでいることである。その結果、この教育プログラムに参加するユネスコスクールが集う全国リーフレットコンテストにおいて、本校の生徒は毎年のように入賞している。勿論、生徒達はコンテストの入賞を目的としているわけではないのだが、熱心に作品制作に励むので、自ずと情報活用能力も高いレベルまで向上する相乗効果が生まれている。

さらに、この授業の影響で、途上国現地でより深く学びたいと希望する生徒が現れてきている。その生徒達は、高校に進学した際にユネスコ主催のカンボジアスタディツアーに応募し、高い選考倍率をも突破してカンボジアでの研修を積み、帰国後、ユネスコの様々な活動にも積極的にかかわり活躍している。このような生徒達の変容の事実からも明確になっている高い教育効果こそが、この教育プログラムの大きな魅力である。

また、コロナ禍で海外研修が中止になってしまった際に、この授業で学んだ生徒が、オンラインでのカンボジア研修をユネスコに提案し、なんと実現に漕ぎ着けた、という驚くべき成果も生まれている。まさにESDの理念を体現させたような事例である。

課題としては、この授業の実践ノウハウの共有を、より多くの学校で図っていくことが挙げられる。



生徒が制作した作品の一部

第1学年 音楽科 学習指導案

奈良教育大学附属中学校 教諭 挽地 夕姫

1. 単元名 『奈良の大仏さん』をつくって、わらべうたについて考える

2. 単元の目標

- ・ (知識・技能) わらべうたの構成音とフレーズを理解し、それを生かして表現するために課題に沿った音の選択や組み合わせなどの技能を身に付ける。
- ・ (思考・判断・表現) 選択した音や組み合わせてできるフレーズを知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら表現したいわらべうたのイメージをもち、どのように創作表現するかについて思いや意図をもつ。
- ・ (主体的に学習に取り組む態度) 創作活動を楽しみながら、わらべうたと生活との関わりや、音楽によって生活を明るく豊かなものにすることについての学習に主体的・協働的に取り組む。

3. 単元について

(1) 教材観

奈良県の愛唱歌集に掲載されている『奈良の大仏さん』とは歌詞と旋律が少し異なるもう一つの『奈良の大仏さん』を教材とし、わらべうたの多様性や持続発展性について考えさせる。多様性のある『奈良の大仏さん』やわらべうたに触れることができると考える。

今回扱う『奈良の大仏さん』は4小節×4フレーズで構成されており、わらべうたの中でも構造的でわかりやすい。そのため、その特徴を利用して曲をつくることは音楽の構造を理解する上で効果的である。

また、奈良の歴史や文化的背景と関わらせて学ぶことにより、世界遺産や地域文化への理解を深められるとともに、郷土の伝統音楽は人々の身近な暮らしや地域の風土と関わって生み出された貴重な文化であり、今後も大切に継承していかなければならないことを実感させたい。

(2) 生徒観

幼い頃にわらべうたで遊んだ経験がある生徒は多い。また、奈良市音声館でわらべうたについて学習している小学校もある。わらべうたについて、改めて全員で学習し、「わらべうたの今までとこれから」について考える。創作に関しては、歌唱や器楽演奏よりも学習経験は少ない。そのため、創作に対して消極的な生徒もみられる。歌うことは好きな生徒たちなので、自分たちがつくった作品を歌うことを通して、創作する楽しさや喜びを味わわせたい。

(3) 指導観

4人×4グループに分かれ、グループで1フレーズを創作していく中で、1人ひとりが1小節を担当し、試行錯誤・意見交換を通して責任感と連帯感をもって主体的・対話的に取り組む力を育む。

グループで創作した旋律をつなぎ合わせて出来た作品を全員で歌い、つくった旋律を評価し合うことで、歌いやすさや仕上がりのイメージなど、練り直しのポイントを考える。完成させた作品を通して達成感や、わらべうたの楽しさやよさを味わい、なぜ昔から受け継がれているのか、わらべうたを

継承していくために、自分たちにはどのようなことができるのかを考えさせる。

- ・本学習で働かせる E S D の視点（見方・考え方）
 - 多様性：よく知られている『奈良の大仏さん』ではない曲との比較
 - 責任性：わらべうたを伝承していくために考えること
- ・本学習で育てたい E S D の資質・能力
 - 他者と協力する力：グループで 1 フレーズを創作すること
 - 批判的に考える力：意見交換により作品を練り直すこと
- ・本学習で変容を促す E S D の価値観
 - 人権・文化を尊重すること：なぜ、わらべうたが歌い継がれてきたかを考えること
 - 幸福感に敏感になり、それを大切にする：わらべうたで遊ぶことや創作活動によって、楽しみを感じる
- ・達成が期待される S D G s
 - 目標 4：質の高い教育をみんなに
 - 目標 17：パートナーシップで目標を達成しよう

4. 単元の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
わらべうたの構成音とフレーズを理解し、それを生かして表現するために課題に沿った音の選択や組み合わせなどの技能を身に付けている。	選択した音や組み合わせでできるフレーズを知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら表現したいわらべうたのイメージを持ち、どのように創作表現するかについて思いや意図をもっている。	創作活動を楽しみながら、わらべうたと生活との関わりや、音楽によって生活を明るく豊かなものにするについての学習に主体的・協働的に取り組んでいる。

5. 単元の指導計画（全 2 時間）

次	主な学習活動	学習への支援（・）	評価（△） 備考（・）
1	○わらべうたについて知る。 なぜ、わらべうたは歌い継がれてきたのか？ どのように伝承していくのか？ ○グループごとに『奈良の大仏さん』を 1 フレーズ創作する。 ○創作した旋律をつなぎ合わせて 1 つの曲にする。	・旋律の構成音とフレーズを確認する。 ・創作はタブレットの鍵盤アプリを使用して行う。	△ア・ウ

2	○前時の作品を練り直し、完成する。 ○創作活動の感想文を書き、また、自分なりのわらべうたの伝承方法を考えて、発表し合う。	・前時の作品をプリントにして配布し、歌わせる。 ・感じたことや気づいたことを、自分の言葉でまとめさせる。	△イ △ウ
---	--	--	---------------------

宮下俊也(2019)『ESDとしての音楽授業実践ガイドブック ー小学校・中学校・高等学校・教員養成大学ー』平成 27～30 年度科学研究費補助金 基盤研究(C)(課題番号 15K04434)研究成果報告書 課題研究「21 世紀を生きる人材育成を指向した ESD としての音楽科カリキュラムと授業実践開発」

劉麟玉(2016)『奈良県のわらべうた教材作成と授業実践プランの開発 ーESD としての音楽科教育を実現させるためにー』平成 27 年度奈良教育大学「ESD を核とした教員養成の高度化(運営費交付金)」プロジェクト研究成果報告書

わらべうた『奈良の大仏さん』のリズム型と構成音を使って曲を作ろう

奈良の大仏さん

奈良のわらべうた

な ら の な ら の だ い ぶ つ さ ん

なん で セ が ひ ゅ い

たっ て み ま う す わっ て み ま

う し ろ に だ れ が い る

活動2♪ 自分たちのグループに与えられたリズム譜に、活動1で確認した音を好きなようにはめてみよう。

※リズム譜1～3のグループの最後の音は「ミ」か「ラ」を選ぶこと。
リズム譜4のグループの最後の音は必ず「ラ」で終わること。

リズム譜1 $\frac{4}{4}$ ♩ ♩ ♩ ♩ ♩ ♩ ♩ ♩

リズム譜2 $\frac{4}{4}$ ♩ ♩ ♩ ♩ ♩ ♩ ♩ ♩

リズム譜3 $\frac{4}{4}$ ♩ ♩ ♩ ♩ ♩ ♩ ♩ ♩

リズム譜4 $\frac{4}{4}$ ♩ ♩ ♩ ♩ ♩ ♩ ♩ ♩

活動1♪ 『奈良の大仏さん』の階名を書いて、使われている音を確認しよう

() 音階

活動3♪ できあがった旋律を下の五線譜に書き起こそう

活動4♪ グループごとに創作した旋律を組み合わせて1つの曲を完成させ、みんなて歌ってみよう

組 番 名前

(資料1 ワークシート わらべうた『奈良の大仏さん』のリズム型と構成音を使って曲をつくろう)

第 2 学年 英語科 学習指導案

奈良教育大学附属中学校 山田 耕士

1. 単元名

Let's Read 2 Landmines and Aki Ra

2. 単元の目標

- ・ 英語の文章を「聞くこと」、「読むこと」を通して理解する。 (知識・技能)
- ・ 当時カンボジアに住んでいた人の状況や感情を考え、考えたことを英語で表現する。 (思考・判断・表現)
- ・ 文章が書かれた当時と現在、Aki Ra と自身を比較し、未来の平和な世界のために何ができるのかを主体的に調べ、考える。 (主体的に学習に取り組む態度)

3. 単元について

(1) 教材観

本単元では、カンボジアに生まれ、多くの困難を経験した 1 人であるアキラが書いた文章を扱う。2 年間を通して学んだ文法や単語を用いてこの文章を理解し、地雷の恐ろしさと、その恐ろしさを伝えるために尽力した 1 人の人生について知り、平和への社会貢献について、関心を高め、自らが現在の社会問題を調べ、その解決のために何ができるかを考え、英作文にする。

この文章の舞台であるカンボジアには現在も推定 400～600 万の地雷が埋まっており、埋設密度は世界一と言われている。今でも多くの人が傷付き、命を落とし、危険と隣り合わせで暮らしている。政府機関や非政府組織などが地雷除去に取り組んでいるが、その数はなかなか減っていない。この文章の 1 人称であるアキラは 5 歳の時に両親を殺害され、10 歳の頃には兵士として戦闘に駆り出されていた。停戦後は地雷処理を手伝い、1999 年にはカンボジアを安全な国にしたい一心で、自宅兼「地雷博物館」を開設した。そこでは資料の展示だけでなく、戦争孤児の受け入れ先として子どもたちをそこに住ませ養育している。そしてそそ子どもたちと劇を通してカンボジア内戦の歴史を伝えている。

本単元を ESD 教材として取り上げる意義は、アキラの半生を知り、未来の平和のための社会貢献について、考え、話し合うことができる点にあると考える。また、カンボジアの地雷除去のために国際的に協力している団体を取り上げ、生徒が実際に現地で社会貢献をするための情報を伝えることで、生徒自身が国際協力について考える 1 歩にしてほしい。

(2) 生徒観

多くの生徒は平和学習において、過去の出来事として学んでいる。また、それらの多くは日本に関連することである。現在の日本において、地雷での被害はないため、カンボジアで戦争が起こったために地雷で苦しんだ人がいること今でも被害を受けている人がいるということを想像するのは難しいと考える。そこで、実際に地雷に苦しみ、地雷のない世界を目指したアキラの話を読み、平和への社会貢献について、関心を高め、考えたい。2 学期には人権学習として、沖縄戦を扱った映画を視聴した。そこで感じたことと、今回の学習を重ね合わせ、来年度の修学旅行での平和学習に繋げる。

(3) 指導観

本単元と学習指導要領との関わりは以下の通りである。

(2) 読むこと

ウ 社会的な話題について、簡単な語句や文で書かれた短い文章の要点を捉えることができるようにする。

(4) 話すこと〔発表〕

ウ 社会的な話題に関して聞いたり読んだりしたことについて、考えたことや感じたこと、その理由などを、簡単な語句や文を用いて話すことができるようにする。

(5) 書くこと

ウ 社会的な話題に関して聞いたり読んだりしたことについて、考えたことや感じたこと、その理由などを、簡単な語句や文を用いて書くことができるようにする。

今回取り扱う「社会的な話題」は地雷をはじめとする負の遺産、そしてその先にある平和である。地雷が今も人間を苦しめていることを学び、平和について考えることを通して自分に何ができるかを考える。

第1次では文章の理解を主に取り扱う。すべての文を訳すのではなく、段落ごとに区切り、その段落の要点を確認する作業をグループで行う。その後、TF、Q&Aを解き、内容が理解できているかどうか確認する。

第2次では前次で把握した内容をもとに、音読の練習を行う。その際、要点、キーワードを強調し、文章に抑揚をつけることを意識するようにする。

第3次では前次までに学んだ内容を深め、平和のために自身ができることを考え、英作する。そして、それを共有することで生徒同士の意見交流の場を設ける。

・本学習で働かせる ESD の視点（見方・考え方）

D 公平性：自分自身だけでなく、世界の人々や将来の世代にとってのよりよい世界を考える。

F 責任性：Aki Ra の「地雷のない世界、平和な世界」のための取り組みについて考え、自分にできることを探す。

・本学習で育てたい ESD の資質・能力

○多面的・総合的に考える力（システムズ・シンキング）

自分の身の周りだけでなく、世界平和のためにできることを考える。

・本学習で変容を促す ESD の価値観

○世代間の公正

地雷などの社会問題を考え、解決し、より良い世界を将来の世代に残す。

・達成が期待される SDGs

16 平和・公正：地球上のすべての人が安心して暮らすことができるように考え、行動する。

4. 単元の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
①文章中の英単語や文法を理解し、内容を理解している。	①当時の状況を知り、考えたことを表現する。	①未来の平和のためにできることは何か、興味・関心を持って考えている。
②感情を表す表現を使って自身の文章を作る。	②内容が伝わるように感情豊かに音読する。	

5. 単元の指導計画（全4時間）

次	主な学習活動	学習への支援（・）	評価（△）
1	●プレ活動 YouTube や、教科書の写真を見て、感想を英語で伝え合う。 ●新出単語の確認 正しい発音を確認する。 ●内容理解 グループに分かれ、段落ごとに大まかな内容を確認する。 ●TF、Q&A 文章が理解できているか、内容を問う問題を解く	・当時起こっていた内戦や地雷の歴史や現状を補足する。 ・感情を表す表現が出てこない生徒には教科書 p.139 を見るよう指示。 ・本文の日本語訳を空所補充形式で確認する。 ・2年生で習った文法を復習する。 ・パワーポイントで問題を提示する。	△イ① △ア② △ア① △ア①
2	●音読の注意点確認、役割決め 段落ごとに重要な文、単語を考える。 グループで段落ごとに読む担当を決める。	・グループでの音読なので、スローラーナーに負担がかかりすぎないように調節する。	

	●音読練習 段落ごとの場面を意識してグループ読みをする。 ●発表 2 グループごとにペアになり、音読を発表し合う。	・場面や様子が伝わるように、強弱や、抑揚を意識する。 ・終了後、相手グループの音読を聞いて、工夫している点、良いと感じた点を伝え合う。	△イ②
3	●内容の振り返り 本文の内容を再確認する。 ●カンボジアの現状を知る。 カンボジア地雷撤去キャンペーンの動画を視聴し、現在も地雷が残っていること、それによって傷ついている人がいることを確認する。	・内容確認は Q&A で行う。	
本文の最後に書かれてある平和な世界をつくるためにあなたができることは？			
	●英作 上記のテーマで 30 語程度の英作をする。 ●発表 4 人グループを作り、1 人ずつ発表する。 ●感想 他の人の意見を聞いて感じたこと、考えたことを書く。	・15 分で書くように指示する。 ・早く書き終わった生徒は周りの生徒の補助を行う。 ・発表者は相手に伝わるように話すように意識する。聞き手は聞き取った内容をメモする。 ・英語で書く。 ・書ききれなかった場合は宿題にする。	△ウ① △ウ①

春日山をシカが喰う現状を知り今後について考える（総合）

奈良教育大学附属中学校 山本浩大

1、ESD を生かした授業づくり

(1) 単元名 「春日山をシカが喰う」 中学校 1, 2 年生

(2) 単元の概要

本学習は、奈良市の特筆すべき自然である春日山原始林を題材にして、世界遺産に影響を与えるシカの食害について考え、自然の大切さを体験を通して知った生徒が、持続的に自然を保全していくための方法を考えられるようになることを目的としている。

①春日山原始林について

春日山原始林は日本でも有数の照葉樹林が成立しているが、近年“奈良のシカ”によって森林生態系に負の影響が生じている。奈良のシカは歴史と文化のため保護されており、特別天然記念物にも指定されている。しかし、日本各地でシカによる植生の変化が報告されており（辻野他 2013, Tsujino et al.2013）、それにより土壌の改変や他の動物相への影響、外来種の侵入なども報告されている（前迫 2013）。

②生徒観

自然を保全することに対して疑念を持たず、漠然と保全について話をする人が多いと感じる。いざ、どういった点を大事にしなければならないかと聞くと詳細には語るができず、身近な自然については話題に上がることもない。身近に自然があることを理解していないのではないかと感じる。前迫（2013）は、奈良のシカと春日山原始林の保全について様々なシンポジウムを開いたが、原始林の意義や課題について市民の方にあまり理解されていないと感じている。大人が身近な自然について知らないのであれば、子どもにとってはなお知らないことである。身近にも素晴らしい自然が残されており、その貴重さに気付いてほしいと感じる。

(3)ESD の視点の明確化

【持続可能な社会づくりの構成概念】

- ・多様性・・・多くの生物が春日山に生息・生育している（生物多様性）ことやそれを脅かす外来種の問題（ナンキンハゼ、ナギなど）について学ぶことができる。
- ・相互性・・・食物連鎖が成り立っているが、シカの食害がそのつながりを破壊してしまうおそれがあることを学ぶことができる。
- ・有限性・・・シカの密度が高い状態が続くと、今ある森林資源は次世代には受けつがれないことについて学ぶことができる。

2、ESD の視点を生かした授業の実践

(1) 単元の目標（重視する能力・態度）

《多面的・総合的に考える力》

世界遺産、春日大社、シカの食害など様々な点を考慮して、春日山原始林で起こる問題を多面的・総合的に考えることができる

《批判的に考える力》

自然は大切・保護しなければと考えるが、様々な自然を見て、自然環境の保全や生物の多様性について考えることができる。

《つながりを尊重する態度》

様々な生物が関わり合って生態系が成り立っており、一部が崩れてしまうと他の生物に大きな

影響を与えてしまうことを知る。

《他者と協力する態度》

他者とともに自然環境を測定することを行い、自然環境の保全に対する大変さとそれを支える人への尊重の態度を養う。

(2) 評価規準

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
①調べ学習を通して、春日山について理解しようとする。 ②春日山に関わる問題についてマップを作り、多面的、総合的に考えている。	①春日山原始林に関わる問題に対して、多面的に考えている。 ②調べ学習、自然環境を知る活動を通して得た知識を他学年に向けて説明しようとし、共に考えようとする。	①春日山原始林に関わる問題に対して、積極的に学習に取り組んでいる。 ②身近な自然を見つめなおし、実際に見聞することを通して、今後の活用について考えることができる。 ③春日山に関わる問題を出し合い、問題の根源についてコミュニケーションを取り考えている。

(3) 単元展開の概要

主な学習活動	◇学習への支援 ◆評価
0、大台ケ原を歩く（希望者のみ、別紙1参照） ・大台ケ原を散策し、森林の現状・問題について学び、自然環境の保全に対する興味や関心を高める。 ・鹿害問題を有する森林を歩き、野生動物と人との関わりに関心を持つ。 ・奈良めぐりの学習の一環として、奈良県の森林のようすを知り、春日山との比較を行う材料（鹿害問題、生物多様性など）を得る。 ・中学生によるユネスコエコパークである大台ケ原の活用。	◇学習への支援 ◆評価 ◇自然ガイドによる、大台ケ原へのいざない。 ◇残したいと思えるような自然とめぐり合わせる。 ◇自然保護を行う方法やそれに携わる人と出会わせる。
1、春日山原始林についてのマップを作成する ・SDGsの視点で、春日山原始林で起こる問題を見つめ、負の連鎖構造を知る。 ・問題を部分（個）の問題としてとらえるのではなく、相互関係で考える。	◇模造紙と付箋を用いて知っている諸問題について書きだす。（別紙2参照） ◇身近な自然について、知識がないことを知る。 ◆ア②、ウ①
2、調べ学習を通して、春日山原始林の問題を知り、再度マップを作成する ・マップを作成し、様々な問題が絡み合っていることを知る。	◇模造紙と付箋を用いて知っている諸問題について書きだす。（別紙2参照） ◆ア①、イ①、ウ③
3、他学年の生徒に、奈良めぐりの際レクチャーをするための資料作成	◇諸問題について、根源となる原因を、意見を出し合いながら確認する。 ◆ア①
4、食物連鎖ゲーム（実験、別紙3・山本（2015）参照）	◇食物連鎖ゲームを通して、生物の数量の変

	化を捉えさせる。 ◆ア②
5、食物連鎖ゲーム（まとめ）	◇食物連鎖ゲームの結果から、生物の数量の変化を捉えさせ、数量に大きな変化が起きるとどのようなことが起こるかを考えさせる。
6、前鬼モニタリング調査の報告会 ・事前に2泊3日のモニタリング調査に参加し、自然の測定方法を学ぶ。 ・学んだことの整理とアウトプット。	◇モニタリング調査に参加した生徒から、自然を測定する方法や保全する方法を学ぶ。
7、春日山を歩く（奈良めぐり）	◇自然保護を行う方法やそれに携わる人と出会让せる。 ◇自然保護活動を見聞し、保全の苦労や必然性を感じる。 ◆イ②、ウ①・2
8、まとめ ・諸問題を解決していくために今の自分ができることやこれからの春日山の活用を考える。	◇自然を守る、文化を守る、伝統を守るなど様々な制約の中で、将来に向けて春日山をどのようにしていくと良いか、今の自分ができることを考え、記述（もしくは発表）する。 ◆ウ②

3、参考文献

- ・ 寛裕介（2019）「持続可能な地域のつくり方 未来を育む『人と経済の生態系』のデザイン」『英治出版』
- ・ 前迫ゆり（2013）「世界遺産 春日山原始林—照葉樹林とシカをめぐる生態と文化」『ナカニシヤ出版』
- ・ 辻野亮・松井淳他・山本美智子他4名（2013）「大峯山系弥山におけるシラビソ縞枯林とニホンジカの影響の変化」『奈良植物研究』第34巻，p.13-20
- ・ Tsujino, R. , Matsui, K. , Yamamoto, K. , Koda, R. , Yumoto, T. , Takada, K. (2013) Degradation of Abies veitchii wave-regeneration on Mt. Misen in Ohmine Mountains : effects of sika deer population. Journal of plant research, 126, 625-634.
- ・ 山本浩大（2015）「シカ個体群シミュレーションを用いた中学校理科『自然と人間』の学習教材の実践」『奈良教育大学附属中学校研究紀要』第44集，38-44.
- ・ 湯本貴和・松田裕之（2006）「世界遺産をシカが喰う シカと森の生態学」『文一総合出版』

4、資料

本実践後のまとめで行ったアンケートを下に記す。

①春日山が有する自然は大切だと思いますか。 【思う】 5 4 3 2 1 【思わない】
②春日山の自然の何が貴重だといえますか。分からない場合は、「分からない」と書いてください。
③春日山で起こっているシカの問題（鹿害問題）について、どのようなことが起こっているか、知っていることを書いてください。知らない場合は、「知らない」と書いてください。
④シカによって様々な問題が起こっていることを理解していますか。 【理解している】 5 4 3 2 1 【理解していない】
⑤シカによって起こっている様々な問題とはどのようなことですか。具体的に書いてください。
⑥奈良めぐりの学習を通して、春日山についての理解は深まりましたか。 【深まった】 5 4 3 2 1 【深まらなかった】
⑦⑥で理解が【深まった】と考える人は、具体的にどういったことを理解できましたか。【深まらなかった】と考え

森林生態系から考える ESD ワークショップ_大台ヶ原ガイドツアー

1、目的

- ・大台ヶ原を散策し、森林の現状・問題について学び、自然環境の保全に対する興味や関心を高める。
- ・鹿害問題を有する森林を歩き、野生動物と人との関わりに関心を持つ。
- ・奈良めぐりの学習の一環として、奈良県の森林のようすを知り、春日山との比較を行う材料（鹿害問題、生物多様性など）を得る。

2、内容

- ・東大台地区（散策道が整備されている）を散策し、ガイドとともに大台ヶ原の現状を知る（ガイド：松井淳（奈良教育大学）、山本浩大）。
- ・散策道を一部逸れて、防鹿柵内外の違いを見る。（一般人は立ち入ることができない）

3、日時・場所・予定

- ・2020年8月11日（火）8:00～
- ・大台ヶ原 〒639-3702 奈良県吉野郡上北山村小椋 660-1
- ・予定

時間	内容
8:00	近鉄奈良発（商工会議所付近集合）
9:30	休憩（道の駅 杉の湯川上）
11:00	大台ヶ原着 （11:10 散策開始→12:10 日出ヶ岳（昼食）→13:30 正木ヶ原→15:00 駐車場）
15:10	駐車場発
18:00	近鉄奈良着（解散）

4、参加者

- ・大学生（4名）、高校生（3名）、中学生（18名）

5、引率者・同行者

山本浩大（奈良教育大学附属中学校）、松井淳（奈良教育大学教授）
附中教員数名

6、持ち物（荷物はできるだけコンパクトに）

歩きやすい服装（長ズボン必、半そででも良いですが羽織れるものがあればよい）
登山靴（ない場合は、底の分厚いスニーカーであれば大丈夫です。汚れます）
ライト（もしもの時に…）、カップ、昼食、非常食（糖分摂取）
薬（酔い止め等）、軍手、水筒（散策中は補給できません）

○地図を描く

- ・ 目的：SDGs の視点で鹿害問題を見つめ、負の連鎖構造を知る。

地図の作成を行い、思考の整理を行う。

鹿害問題を部分（個）の問題としてとらえるのではなく、相互関係で考える

- ・ 地図を描く

— 準備物：付箋（2 色）、複数のペン、模造紙

— ステップ 1：鹿害問題について知っていることを付箋に書く。

その課題を引き起こしている障壁、考えられる原因、関連する出来事などを多くの事柄を付箋に書きだす。箇条書きで良い。付箋 1 枚につき 1 つのことを書く。

ステップ 2：付箋を模造紙に張り合わせ、グループ化を行う。

似ているものを近くにまとめる。完全に同一のものは重ねて良い。

ステップ 3：因果関係でつなぐ。

結果と原因を把握し矢印で結ぶ（原因→結果、双方向の場合は⇔）。

例：収入が減る → 若者が地域から移動する

多くの事象とつながりそうなものは、模造紙の真ん中に持ってくると良い。他の事象とつながらないものは、周りにおいておく。

ステップ 4：1、2、3 を行い精度を高める。

全体を眺めながら班で話し合い、十分に書き出せていない事象、少し遠いが関係しそうな事象をさらに書き出す。

ステップ 5：SDGs の視点で見直す。

書きだした事象の横に関連したゴールをかき入れる。17 ゴール。

ステップ 6：負のループ（循環）を探す

ある事象が起こると、それによりある事象が起こる、そしてさらにある事象が起こるということを地図の中から探し出し、どのような循環が起こるかを矢印を書いた以外の色のペンで書き表す。

ステップ 7：再配置を行い、問題の主原因を探し出す。

付箋を見やすいように再度配置を変える。その後、鹿害問題の主原因となることは何なのかを地図から探し出す。

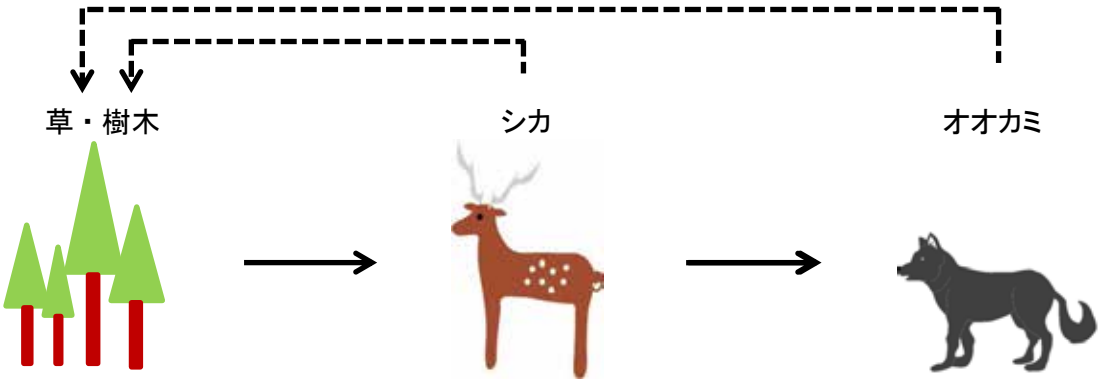
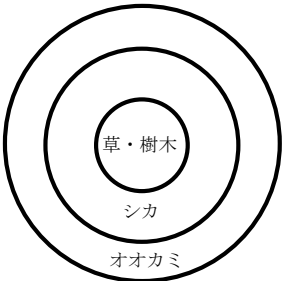
食物連鎖ゲーム (レポート)

<実験>

(目的)

(方法)

- 1、図のような 3 重の円を運動場を書く。
- 2、草、シカ、オオカミの役割に分かれる
(シカは白、オオカミは赤の帽子をかぶる)
- 3、役割ごとにそれぞれの場所に集まる。
- 4、笛の合図で自分の食べ物を追いかける (15 秒間)。
(タッチされた人は、その場ですわる。2 回タッチすることはできない。)
- 5、15 秒ごとに草・樹木、シカ、オオカミの数を記録する (計 10 回行う)。



シカにタッチされたら、次はシカ。
タッチされなかったら、次は草・樹木のまま。

(タッチされそうになっても、動くことはできない)

草・樹木をタッチできない時は、餓死して次は草・樹木。
草・樹木をタッチしたときは、次はシカのまま。
オオカミにタッチされたら、次はオオカミ。

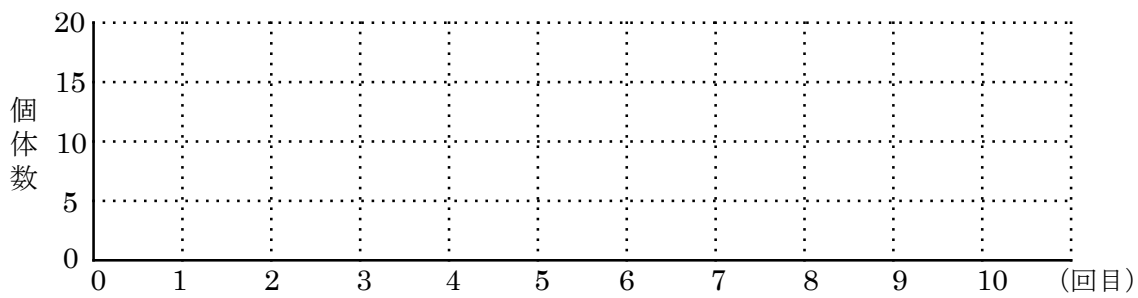
(草・樹木に 2 回タッチすることはできない)

シカをタッチしたときは、次はオオカミ。
タッチできない時は餓死して、次は草・樹木。

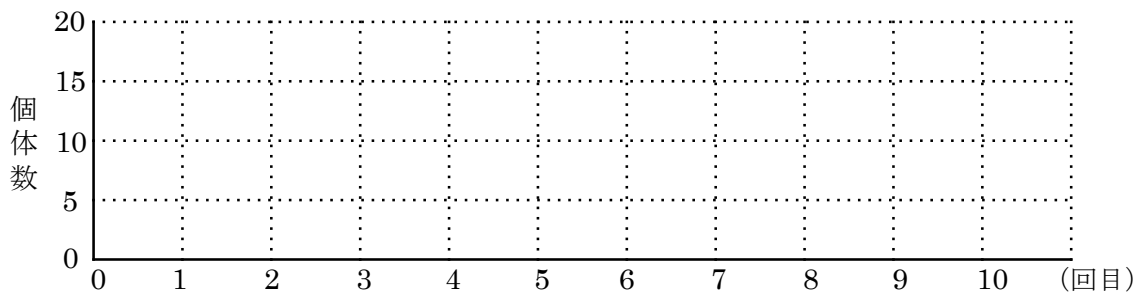
(シカに 2 回タッチすることはできない)

(結果) 結果を表とグラフに表わそう

2 年生	はじめ	1 回 目	2 回 目	3 回 目	4 回 目	5 回 目	6 回 目	7 回 目	8 回 目	9 回 目	10 回 目
草・樹木の数											
シカの数											
オオカミの数											



1年生	はじめ	1回目	2回目	3回目	4回目	5回目	6回目	7回目	8回目	9回目	10回目
草・樹木の数											
シカの数											
オオカミの数											



(結果のまとめ)

(1) グラフからどのようなことが分かるか。

(2) この実験を続けるとどのように個体数は変化すると考えられるか。

(3) かつての日本の生態系は、オオカミとシカがいて、個体数は均衡を保っていた。今はオオカミが絶滅しシカを食べる捕食者がいない。今の日本の生態系の状況から考えると、シカの個体数は今後どのように変わっていくと考えられるか。

第6学年 国語科学習指導案

兵庫教育大学附属小学校
阿賀 研介

1. 単元名「6年2組へのメッセージ～温暖化対策で自分たちにできること～」

（「大切にしたい言葉」光村図書6年）

2. 単元の目標

- ・話や文章の構成や展開について理解する。（知識・技能）
- ・目的や意図に応じて簡単に書いたり、詳しく書いたりして、自分の考えが伝わるように書く。（思・判・表）
- ・思いや考えを伝えようとする。（主体的に取り組む態度）

3. 単元について

（1）教材観

「大切にしたい言葉」は、自分が大事にしたい言葉を決め、その理由を経験と結び付けて構成を工夫して書く教材である。自分の伝えたいことを伝えるために、どの経験を選ぶかが大切となる。本単元では大事にしたい言葉ではなく、「温暖化を止めるために自分たちにもできること」という意見とする。また経験ではなく、集めた情報と結び付けることとなるが、意見を伝えるために、どの情報を選ぶかということを考えることができるだろう。また、意見を伝えるために、どの構成で書くかという構成を学ぶこともできる教材である。

（2）児童観

「書くこと」の前単元で、児童は「書くこと」において、給食の配膳表に今日のメニューの欄に一言を書くという学習を行い、情報を集めることができた。給食室の思いや、どのような工夫をしているのかをインタビューなどを行い、調べた。そうして集めた情報を関係づけたり、分類したりすることで、給食の魅力を伝えた。情報の収集・整理の力はつけてきている。

伝えたいことを明確にするために構成意識、そしてどの具体例を詳しく伝えようとより伝えたいことが伝わるかという区別する力をつけていくと、より自分たちの意見を伝えることができると考えている。

（3）指導観

「温暖化をとめるためにクラスにできること」をグループで1つの意見文として記述する。そしてそれをプレゼンテーションで発表するという表現を単元後半に設定する。第1次では、自分たちの生活を振り返り、たくさんの電気を使っていることや、ゴミを出していることに気付かせる。それらが温暖化とつながることを知り、自分が特に興味をもったことや調べてみたいことをそれぞれのテーマとする。同じような関心のテーマの児童で意図的にグループを構成することで、意見文を書く時に調べたことを共有しやすくする。ここでは、明確な意見をもつことではなく、「調べたい」と思う児童の意欲の喚起を大切にしたい。

第2次では、本やインターネットなどの資料をもとに、それぞれのテーマについて調べていく。ここで大切にしたいのは2つである。1つ目は、調べる中で生まれたここが気になるなどという児童の関心をつなげていくことだ。「なんでそうなったのかな？（原因）」「じゃあどうしたら防げるのかな？（対策）」など疑問を調べ学習につなげていくために、十分な取材の時間の確保と、教師はサポートするという立場をとりたい。関心のあることを聞き、「ではこういうキーワードで取材してみたら？」などと、児童の関心に寄り添いどういった情報を得るとよいかをアドバイスをしたい。そうする中で、「温暖化をとめるために自分たちにできることは何か」という意見を持たせていきたい。

2つ目は、情報の可視化である。集めた情報を1つずつ付箋に書き、情報を分類する。その中で自

分たちがクラスに伝えたいことを伝えるためにどの情報を選ぶとよいのかを考える。付箋に書くことで、操作しやすくなり、情報の取捨選択がしやすくなると考えている。選ぶ情報が決まれば、教科書のモデル文をもとに、意見文の構成を考えていく。

第3次では、自分たちが書いた意見文をプレゼンテーションという形で、クラス全体に自分たちが考えたことを発表する。ここでは、取材をしたり、意見文を書いたりする中で生まれた危機感や、伝えたいという児童の思いを大切にしたい。プレゼンテーションありきではなく、子どもの伝えたいという思いを授業中の発言などから見とりプレゼンテーションへとつなげていきたい。プレゼンテーションでは、話し方や資料の示し方のモデルをできるだけたくさん示したい。その中で、今の自分ががんばろうと思うものをグループで一人ずつ選ばせる。自分で目標を立てることで、主体性につながりやすくする。そして、聞き手にもその目標を発表時に伝えることで、自分の目標に対してどうだったかという意見をもらったり、自分たちで振り返ったりする中で、前單元からの学びの高まりを実感できるようにしたい。

子どもたちは世の中のことに関心をもっている。教科書教材を通して、社会に子どもたちの学びを広げることで子どもたちの主体性を引き出していきたいと考えている。

○本学習で働かせる ESD の視点

【有限性】

地球の資源には限りがあることを知ることができる。

【相互性】

人間の営みが自然環境に影響を与えていることを理解することができる。

【責任性】

温暖化をとめるために自分たちにできることを考えることができる。

○本学習で育てたい ESD の資質・能力

【クリティカルシンキング】

温暖化を止めるために自分たちにできることを見つけることができる。

【協働的問題解決力】

テーマごとのグループで協力して最後まで取り組むことができる。

○本学習で変容を促す ESD の価値観

世代間の公正…どの世代の人も温暖化の悪化により、生活が制限されることなく、幸せに暮らすことができる。

○達成が期待される SDGs

・目標 13 気候変動：普段の生活の中で温暖化につながるものがあることを知り、防ぐために自分にできることを考えることができる。

5. 単元の指導計画（全 11 時間）

単元の指導計画	主な学習活動	学習への支援	評価備考
1	1 ○普段の暮らしと地球温暖化をつなげやすいように自分の生活の中でゴ	テーマは探しながら決めて変更してもよいことを伝える。	自分の暮らしに関わる

	ミをだしているもの、電気を使っているものを書いていく。 ○主体的に調べることができるように「「ゴミ問題」「エコな発電」など自分の興味のあるテーマを選ぶ。 2 温暖化について具体的に行動をしている人のスピーチなどを聞き、感じたことを交流することで、温暖化への関心をもつ。 ○見通しをもって活動できるように単元のゴールと付ける力を理解する。 「温暖化をとめるために自分たちができることをクラスで伝え合おう」	関心のある内容でグループを編成することで、伝えたいことが明確にしたり、資料を分担して集めやすくしたりする。 自分も何かしようではなく、「このままでは大変なことになるかも」など、児童が思ったことを引き出し、温暖化について調べてみたいという意欲を醸成する。	ものを進んで見つけようとしている。(主) 進んで思いや考えを伝えている。(主)
2	3・4・5 ○自分の思いや考えをもてるように決めたテーマで取材をする。 6 ○伝えたいことを伝えるための情報が集まっているか確認するために、情報を付箋に整理し、意見文を書くための計画を立てる。 7・8 ○伝えたいことが伝わるように、教科書のモデル文の構成を知り、序論・本論・結論で分担を決めて、グループで1つの意見文を書くためのアウトラインを決めて、グループで1つの意見文を書く。	問題になっていること、問題に対処するためにどんな取り組みがあるかなど、調べる視点の例を伝える。 ○同じ情報を整理し、カテゴリーに分ける。 (対策のこと、日本に起きる変化、食糧の問題のこと、水に関することなど) ○付箋に整理することで偏っていないかなど、集めた情報を可視化できるようにする。 ○足りていない情報があれば再取材を促すなど、グループごとにそれぞれアドバイスをする。 ○構成は総括型・頭括型・尾括型から選ぶようにする。 ○意見文をもとにプレゼンテーションを行う。意見文やプレゼンテーションの際に、集めた情報の何を選ぶかを話し合う。 選ぶ基準は自分たちが伝えたい	必要な情報は何かを考えて、情報を集めている。(思・判・表) 集めた情報を分類している。(思・判・表) 分類した情報をもとに伝えたいことを考えている。(思・判・表) ・意見文の3つの構成について理解している。(知・技)

		ことが伝わるかどうかということを示す。	
3	9・10 ○書いた意見文をもとにクラスで発表するために、プレゼンテーションの準備をする。 11 ○クラスへのメッセージを伝えるためにプレゼンテーションを行い、目標としていることが達成できたかどうか確かめるために相互評価をする。	○話し方・資料の使い方・聞き手を引き付けるという観点で意識するとよいことを示し、各グループでそれぞれ何を意識するのか自分たちで決めるようにする。 ○他グループからの意見と自分たちの立てた目標を結びつけてふりけるようにする。	自分たちで見合うなどして、相手に伝えることを意識して練習している。(主) 他グループからの意見をもとに自分たちの発表を振り返り、次につなげようとしている。(主)

第3学年 国語科 学習指導案

滋賀大学教育学部附属中学校 教諭 永田 郁子

1. 単元名 「びわ湖を愛する」を豊かな・たしかな言葉で
～未来の「びわ湖の日」のための啓発リーフレットづくり～
2. 単元の見目標
・和語・漢語・外来語などを使い分けることを通して、語感を磨き語彙を豊かにすることができる。（知識・技能）（1）イ
・目的や意図に応じた表現になっているかなどを確かめて、文章全体を整えることができる。（思考・判断・表現）B（1）エ
・言葉がもつ価値に気付くとともに、進んで読書をし、我が国の言語文化を大切にして、思いや考えを伝え合おうとする。（主体的に学習に取り組む態度）

3. 単元について

（1）教材観

令和3（2021）年度より完全実施となる中学校学習指導要領（平成29年告示）では、第3学年の「思考力、判断力、表現力等」の「B書くこと」の言語活動例に「イ 情報を編集して文章にまとめるなど、伝えたいことを整理して書く活動。」が示されている。解説国語編には、その作成例に「新聞、リーフレットやパンフレット、発表ための資料」が挙げられており、令和3年版の検定教科書には修学旅行記やポスター、環境に関する新聞の作成などの学習活動が設定されている。また、「C読むこと」の言語活動例には「ウ 実用的な文章を読み、実生活への生かし方を考える活動。」が示されている。「実用的な文章」の例には「広告、商品などの説明資料、取扱説明書、行政機関からのお知らせ」などが挙げられている。

これらのことから、今回は、「実用的な文章」を読み、そこから情報を編集して、さらに自身で「実用的な文章」にまとめるという単元構成を目指し、滋賀県の条例をもとにした啓発リーフレットを作成するという学習活動を設定した。滋賀県には国内最大の湖である琵琶湖があり、琵琶湖の環境保全に関する条例が多く制定されている。第3学年に求められる国語力を育成しながら、義務教育修了後の環境保全への当事者意識を高めることができる教材であると考えたい。

（2）生徒観

生徒は令和元年度、「A話すこと・聞くこと」「B書くこと」の学習として、大津市立歴史博物館副館長（当時）・和田光生氏のインタビューを行い、その内容をもとに紹介記事を作成するという活動に取り組んだ。積極的に質問を考え、取材相手の回答に応じてさらに質問に磨きをかけるという学習活動の中で、地域の文化への素直な興味や、文化財保護への関心を示していた。

また、第3学年の1学期には社会科の地理的分野で近畿地方がとりあげられ、環境問題や環境保全を中核とした考察が課せられ、滋賀県の「石けん運動」に関する学習をした。総合的な学習の時間「BIWAKO TIME」（異学年合同でグループを組み、各自のテーマに沿って調査研究を行う探究的学

習)を終えたばかりであり、それぞれの成果・課題を意識している時期である。

一方で、県で制定されている「びわ湖の日」(7月1日)の認知度や、地域の清掃活動等への参加率などは低い。研究の場面はあっても、環境に対して実生活の中で行動に移すという実践の場面に乏しいのが現状である。

(3) 指導観

以上のことをふまえ、「石けん運動」が、県民間での呼びかけによって広まり、条例の制定・施行にまで発展し、さらに条例が広報されるという一連の流れを好例とし、現在ある滋賀県の環境保全に関する条例をもとにした啓発リーフレットの文章づくりをとおして、「他者に『行動をうながす』際に適切な言葉のはたらきはどのようなものか」を「単元を貫く問い」として設定した。生徒たちが23、24歳である2029年の「びわ湖の日」(7月1日)は日曜日である。この日を美しい琵琶湖のほとりで過ごすためにどのような行動を呼びかけるのかをテーマにし、「社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力・想像力を養う」という国語科の資質・能力の育成につなげたい。

(4) ESDとの関連

・本学習で主に養いたいESDの視点

【B 相互性】滋賀県の環境保全に関する条例と自分たちの生活との関連に目を向け、琵琶湖を中心とした県内の自然や、産業への関心を高める。

【E 連携性】リーフレットの下書きの文章について課題となる点を指摘しあい、それをもとに自分の文章を粘り強く推敲することで、協力をもって課題を解決し、最後までやり遂げる力を養う。

・本学習で育てたいESDの資質・能力

【コミュニケーションを行う力】単元の目標を達成するまで複数回の交流が設定されている。

【進んで参加する態度】条例にある「県民の責務」の記述にふれることで当事者性が高められる。

・本学習で変容を促すESDの価値観

【自然環境、生態系の保全を重視する】リーフレットに使用する「事例」を様々な資料から探索する過程で、琵琶湖及びその周辺の自然環境についての様々な情報にふれ、その有効性を吟味する。

【幸福感に敏感になる、幸福感を重視する】未来の郷土を想像し、啓発したい内容を決定する。

・達成が期待されるSDGs

目標4 すべての人々に包摂的かつ公平で質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を促進する。

(とくに「環境学習の推進に関する条例」を選択する生徒に関して)

目標12 持続可能な消費と生産のパターンを確保する。

(とくに「低炭素社会づくりの推進に関する条例」を選択する生徒に関して)

4. 単元の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
①和語、漢語、外来語などを使い分けることを通して、語感を磨き語彙を豊かにしている。	①「書くこと」において、目的や意図に応じた表現になっているかなどを確かめて、文章全体を整えている。	①自分の伝えたいことが伝わる文章になるように粘り強く工夫をし、学習課題に沿ってリーフレットの文章を書こうとしている。

5. 単元の指導計画（全6時間）

節	時程	主な学習活動	学習への支援（・）	評価（△） 備考（・）
1 次	第1時	○単元の目標を知り、「行動を呼びかける」際に意識したい言葉の使い方のポイントを挙げる。	・単元の目標を示すまでに、「石けん運動」から「琵琶湖の富栄養化の防止に関する条例」施行までの流れをスライドで示す。 ・「こんなリーフレットはいやだ」と思うポイントをグループで出させる。一斉交流の中で発表させ、リーフレットを作成するうえで適切な言葉の用い方を考えさせる。 ・『琵琶湖を愛する』で思い浮かぶ行動」を付箋に書かせ（5枚）、実生活と琵琶湖とのかかわりをイメージさせる。	△ウ① （観察） （ふり返り用紙）
	第2時	○条例文集の中から、自分がとり上げたい条例を決める。決めた条例を説明する際に有効な事例を資料から探す。	・琵琶湖の環境保全に関する主な条例のうち、以下の条例を抜粋した条例文集を配布し、取り上げたい条例にマーカーを引かせる。 ○環境基本条例 ○ごみの散乱防止に関する条例 ○環境学習の推進に関する条例 ○琵琶湖のレジャー利用の適正化に関する条例 ○ふるさと滋賀の風景を守り育てる条例 ○ふるさと滋賀の野生動植物との共生に関する条例 ○低炭素社会づくりの推進に関する条例  ・学校図書館からブックトラックに参考図書を五十冊ほど移し、教室に設置する。 	△ウ① （観察） （ふり返り用紙）

2 次	第3時	○「行動を呼びかける」にはどのような表現の仕方、事例の用い方が適切かを考えながら、リーフレットの文章を書く。	・第1時でとりあげたポイントを掲示する。 ・実際に配布されているリーフレットを紹介し、下書き用紙に文章を書かせる。	△イ① （下書き） △ウ① （観察） （ふり返り用紙）
	第4時	○グループでの交流で文章の内容を確かめ、文章全体を整える。 	・推敲のポイントをフラッシュカードにし、黒板に掲示する。 ・4人グループで下書き用紙をまわしながら、直したほうがよいと考える箇所を付箋で示させる。その際、付箋にどの観点のものなのかを明記させる。 ・推敲計画の用紙に、自分の文章の中での直したほうがよい点と、どのように直せばよいかの見通しを書かせる。	△イ① （下書き） △ウ① （観察） （ふり返り用紙）
3 次	第5時	○和語、漢語、外来語の語感を生かした見出しを考える。 ○「リーフレット企画提案書」・評価ルブリックを配布し、清書をする。	・秋休みの間に各自でスクラップをした新聞記事の見出しをもとに、和語・漢語・外来語の語感がどのような効果を持っているかを4人グループで確認し合う。 ・どのような効果を期待をしてどのように下書き用紙の文面を推敲したのかを記入する欄を設け、作成の過程を可視化し、評価に生かす。	△ア① △イ① （企画書） △ウ① （観察） （ふり返り用紙）
4 次	第6時	○クラス全体での交流をもとに、自分の見出し・文章のよい点や改善点を見出す。	・レポートを机上に並べ、立ち歩いて閲覧できるようにする。気づいたことをYチャートに記入させる。	△イ① （Yチャート） △ウ① （観察） （ふり返り用紙）

第5学年 総合的な学習の時間 指導案

大牟田市立みなと小学校

教諭 石橋 剛志

1 単元名 総合的な学習の時間 「命を守る 地域を守る」(減災教育)

2 単元の目標

- 令和2年7月豪雨の経験をもとに、これから生活する上で必要となることについて、連携性、責任性の視点から理解するとともに、課題解決の方途について探究する技能を身につけることができるようにする。
【知識・技能】
- 令和2年7月豪雨に対する体験・調査などを通して、気候変動と人や社会とのつながりについて、多面的・総合的に考えるとともに、持続可能な地域・社会の未来像を予測し、その構築へ向けた行動の在り方について実現可能性の視点から考え、判断し、他者によりよく伝わるように表現することができるようにする。
【思考力・判断力・人間力等】
- 令和2年7月豪雨についての学習を通して、気候変動と人や社会との相互のつながりに関心をもち、よりよい地域・社会へ主体的にかかわり、他者と協力しながらよりよく行動しようとする態度を身につけることができる。
【主体的に学びに向かう態度】

3 単元について

(1) 教材観

本教材は、令和2年7月豪雨を受けて作成した教材である。大牟田市では全壊11棟、半壊1218棟、一部損壊1122棟、床上浸水108棟(令和2年8月24日時点)の被害を受けている。その中でも、みなと小学校校区は特に被害が大きく、本校も1階が浸水した。そこで、豪雨の経験から本教材を考えた。まず、GTの方(消防団・公民館・市役所)を招き、当時の様子について話をいただき、状況を把握する。つぎに、大雨の原因について課題追究を行う。そして、大雨の原因には海洋温暖化があることに気付くとともに、これからも大雨が降る日があることから、被害を減らすためにどのようなことができるのかについて考え、そのことを友達や外部の方と協働して表現物に表す。それらを通して、公助を受けるための自助が必要であると気付くとともに、そのためには、地域の方との連携や自分の命を守ることに責任を理解させたい。

(2) 児童観

本学年の児童は、3年生から海洋教育に取り組み、海と人との共生について学習してきている。3年生では「海を知る」ために、干潟観察会や有明海で採れる魚の調査を通して、干潟の楽しさを感じたり、様々な生物が海で生活していることに気付いたりした。また、調べたことを基に有明海の生き物図鑑を作成したり、干潟の生き物の特徴を生かしたゲームを考え、「うみまつり」を開催したりした。4年生では「海を守る」ために、身近にある世界近代遺産である三池港の景観や環境に関心をもち、元三池海水浴場の清掃活動や、清掃で拾った廃材や流木・貝殻を使用した小物の制作・展示を通じた三池港保全への協力呼びかけを通し、環境保全の大切さを実感し、三池港に対する愛着を深めることができた。そこで、5年生では、自分たちの身近な経験から海とのつながりを考え、持続可能なまちづくりを行おうとする姿を目指したい。

(3) 指導観

本単元の指導に当たっては、これからも起こり続けることが考えられる豪雨の経験をもとに、自分たちにできることを考え、行動することをねらいとしている。

そのために、まず、学習課題Ⅰとして、7月6日の雲の様子から雨がたくさん降ったことに気付かせ、その結果、学校はどのようになったかを示す写真を提示する。また、500ml以上の降水量を経年変化で示す資料を提示し、昔に比べて、今は大雨が降る日が増えていることに気付かせ、課題を設定する。そのた

めに、大雨が降る原因について調べ学習を行ったり、GTの方からの話を聞いたりする。つぎに、学習課題Ⅱとして、大雨の被害を減らすために、自分たちにできることについて話し合い、「みなと版防災ハザードマップ」と「大雨時の行動マニュアル」を制作するにあたり、どのような情報が必要かなどについて課題を設定する。そして、完成したものをGTの方に見ていただき、指導してもらう。最後に学習課題Ⅲとして、制作したものを、誰にどのようにして配付するのかを話し合いで決定し、発信する。

4 単元の評価基準

知識・技能 (a)	思考力・判断力・表現力 (b)	主体的に学習に取り組む態度 (c)
① 海と自然災害（雨）とのつながりについて理解することができる。 ② 課題解決の方途について探究する技能を身に付けることができる。	① 「なぜ大雨が降るのか」について調べる活動を通して、海と自然災害（雨）とのつながりについて考えることができる。 ② 「今後も大雨が降ることが予測される」未来像から、自分たちにできることを判断し、他者によりよく伝わるように表現することができる。	① 自然災害（雨）に主体的にかかわり、他者と協力しながらよりよく行動しようとする態度を身に付けることができる。

5 ESD との関連

(1) 本学習で働かせる ESD の視点（見方・考え方）

- 連携性・・・これからの減災教育は、行政だけが努力するのではなく、自分たちが地域のことを考えて努力することが大切であること。
- 責任性・・・私たちが減災教育への行動意識を変えていくことが何よりも大切であること。

(2) 本学習を通して育てたい ESD の資質・能力

- 多面的・総合的に考える力（システムズ・シンキング）
「水害から身を守るために自分たちにできること」について考える。
- コミュニケーションを行う力
これからの減災教育について、市役所の方や地域の方との交流を通して考えを聞いたり、友達と意見交流を通して自分の考えをつくりあげたりする。
- 他者と協力する態度
自分だけが地域のことを考えるのではなく、地域の方と協力して、水害から身を守ろうとする態度をもつ。
- つながりを尊重する態度
予測できない自然災害は、地球規模の課題と密接に関わっているので、自分たちがそれに対する意識を持たなければならない。

(3) 本学習で変容を促す ESD の価値観

- 世代内の公正
自分たちも地域の方も、自然災害の被害をできる限り減らそうとすることが大切である。
- 世代間の公正
自分たちが住んでいる地域が、これからも安心して生活できるようなまちづくりを追求することが大切である。

(4) 達成が期待される SDG s

- 1 1 持続可能な都市
- 1 3 気候変動
- 1 4 海洋資源

6 展開の概要（全25時間）

段階	学習活動	●学習への支援 ・予想される児童の反応	○評価 ・備考
課題 設定Ⅰ	○ 豪雨の経験をもとに、学習課題を設定する。 ・ 資料をもとに、大雨が降るとどのようなようになるかを考え直したり、大雨が降る回数が増えていることに気付いたりする。	● 7月6日の雲の様子や当時の学校の様子を提示する。 ・ 「たくさん雨が降ったから、学校や学校の周りに多くの被害が出た」 ● 500ml以上の降水量を経年変化で示す資料を提示する。 ・ 「大雨が降る日が増えているな」	
	今まで大雨の被害を受けたことがなかったのに、突然、大雨が降ったのはなぜだろう		
情報 収集 ／ 整理 分析 Ⅰ	○ 大雨が降る原因について、資料やGTの方の話をもとに調べる。 ・ 調べる活動を行う。 ・ GTの方の話を聞く。	・ 「海水温が上昇し、水が蒸発しやすくなることで、大気中に雲が増えたから大雨が降るんだな」 ● GTの方（市役所・公民館長・消防団）から、当時の様子（どんな行動をして、何が課題だったのか。）についての話を聞く。 ・ 「自分たちの見えないところで、たくさんの方が被害を減らす努力をしていたんだな」 ・ 「色々な課題があるけれど、自分たちにできることはないかな」	(a) ① (a) ② (b) ①
まとめ 表現Ⅰ	○ 大雨が降る原因についてまとめるとともに、新たな学習課題を見通すことができる。	●これまでの生活と調べて分かった事実を関連付け、新たな学習課題をつくる。 ・ 「今後も大雨が降ることが予測されるからこそ、自分たちにできることはないか。」	
課題 設定Ⅱ	○ 新たな課題をもとに、これから自分たちにできそうなことを考え、計画を立てる。		
	これからも予測される大雨のために、自分たちにできることを考えよう。		
		・ 「浸水した場所を確認して、どこに避難したらいいかわかるものがあるといいね」 ・ 「大雨が降ったときや降る前にできることを考えて、紙にまとめておくといいね」	

情報 収集 ／ 整理 分析 Ⅱ	○ 考えをもとに、グループに分かれ、情報収集や整理を行う。 ・防災バッグ ・浸水状況 ・行動の仕方 ・水害時の危険箇所 ・避難経路 ・今の地域の様子 ・当時の様子（学校） ・当時の様子（学校外）	● 様々な情報を収集するために、グループに分かれ、調査活動を行う。 （調査方法） ・本、インターネット、取材、現地調査	(a) ② (b) ②
まとめ 表現 Ⅱ	○ グループごとに調べて分かったことについて、模造紙にまとめ、交流する。		
課題 設定Ⅲ	○ 交流したことをもとに、地域に発信するための必要な情報を整理・分析する必要性に気づき、学習課題を設定する。 今後、同じ被害に遭わないために自分たちがつくったものを地域に発信しよう。	・「自分たちが調べたことを地域の方に伝えることで、命を守ってもらえそうだな」	(b) ②
情報 収集 ／ 整理 分析 Ⅲ	○ 地域に向けて発信する事柄を精査するために、調べたことをもとにシミュレーションを行う。 ○ 地域に向けて、発信する方法や発信する相手などを話し合う。 ○ 発信先へ、自分たちでアポイントを取り、届けることができる。	● 調べたことを生かして、実際に行動できるかどうか、場面設定をしてシミュレーションする。	(c) ①
まとめ 表現 Ⅲ	○ 学習のまとめを行う。		(c) ①

第6学年 総合的な学習の時間 学習指導案

大牟田市立天領小学校

井川浩司郎

1. 単元名 「海と人との共生」

2. 単元の目標

有明海や三池港の魅力と人間の生活とのつながりを学習することを通して、有明海の自然や三池港の築港によって人間の生活を豊かにしてきた反面、沿岸部の開発によって海の自然に影響を与えていることを理解することができる。 (知識・技能)

有明海や三池港と町づくりとのつながりを探求したり、有明海や三池港の魅力を生かした沿岸部開発を考えたりしながら表現することができる。 (思考力・判断力・表現力等)

自分たちが考えた沿岸部開発を実行するために、今の自分にできることから行動し、広めようとする。 (主体的に学習に取り組む態度)

3. 単元について

(1) 教材観

私たちの住む大牟田市は、日本有数の干潟をもつ「有明海」や大牟田のまちの発展の礎となった世界文化遺産である「三池港」があり、海の自然からの恩恵や海を活用した他地域とのつながりについて、身近に感じることができる。しかし、私たちは海の自然を利用するなど、海とともに生きてきたにも関わらず、陸での開発によって海を弱らせたり、それがまた人間にとって悪影響として戻ってきたりしている現状もある。そこで本単元では、今の大牟田の海の現状を踏まえ、大牟田の海の自然を守りつつ、海を活用した湾岸都市としてのまちづくりについて考えることをねらいとしている。このことは、海を生かしたよりよい沿岸部開発について考えることを通して、主体的に今後の自分たちの生活をよりよくしていこうとする児童を育てる上で意義深いと考える。

(2) 児童観

本学級の児童は、3年生の頃から総合的な学習の時間において海洋の学習に取り組んできている。海洋の学習に対しては今まで学習をしてきていることもあり興味・関心が高く、学習に意欲的に取り組んでいる児童が多い。3年生の学習では、有明海の沿岸である干潟に住む生き物について調べたり、干潟に住む生き物をこれからも守っていくために自分たちにできることを考えたりしている。4年生の学習では、有明海につながる諏訪川を沿岸部、河口部、上流部の3つに分けて水質を調査した。その調査から、沿岸部に近づくほど水質が悪くなったり、川に流れるゴミの量が増えていたりすることに気づき、川や海の環境を守るために自分たちにできることは何かを考え、行動してきている。5年生の学習では、世界遺産である三池港の成り立ちや輸出入を通して他国との関わりについて調べ、三池港の魅力や三池港を築港した人の思いに触れることができる。そこで6年生の学習では、これまで3年生から学んできたことを基に、海と人とはこれからも共生するためにはどのようにすればよいかを考え、行動することができるようにしたい。

(3) 指導観

実際の指導に当たっては、干潟の生物や海の環境保全、三池港の歴史など今までに学習してきたことを生かして、私たちの生活も海の環境ももっと豊かになれるような有明海や三池港の魅力を生かした沿岸部開発について考え、自分たちにできることから行動することができるようにする。本単元においてまず導入では、沿岸部の開発によって私たちの生活が豊かになってきた反面、海の干潟が削られていることに気づかせるために、今から100年以上前の大牟田市の沿岸部の様子と今の沿岸部の様子を地図を使って比較する。その際、今までに干潟の生物や海の環境保全、三池港の魅力などについて学習してきたことも想起させ、私たちの生活も海の環境も豊かにできるような町づくりについて考えることへの課題意識を高める。次に、沿岸部の現状を知るために、大牟田市役所の方々に話を聞き、有明海や三池港の魅力を生かした沿岸部開発について自分たちに取り組みそうなことについて話し合う。次に、話し合ったことをもとに自分たちにできることから行動をしたり、沿岸部開発についてプレゼンをしたりする。また、他校の児童と自分たちの行動プランについて交流を行い、自分たちの考えを広げたり深めたりし、よりよい行動化へとつなげていく。そして、学習の振り返りを行い、自分たちの行動の価値を実感したり、これからの行動について考えたりする。

4. 単元の評価規準

(ア) 知識・技能	(イ) 思考力・判断力・表現力等	(ウ) 主体的に学習に取り組む態度
①以前の有明海の様子と今の様子を比較し、沿岸部の開発によって海の自然に影響を与えていることを理解できている。 ②沿岸部の現状について理解している。	① 有明海や三池港の魅力を生かした沿岸部開発について考え、表現することができる。 ② 学んだり、調べたりして学んだ知識をもとに、言葉や図、絵などを用いてまとめることができる。	①自分たちにできる沿岸部開発について意欲的に考えることができる。 ②自分たちが考えた沿岸部開発プランをもとに、今の自分にできることから行動することができる。

5. ESD との関連

(1) 学習を通して主に育てたい ESD の視点

【相互性】・・・私たちの生活が海の環境の変化に大きな影響を与えているということ。

【連携性】・・・これからは海に直接関わる人だけが努力するのではなく、私たち一人一人が海の環境について考えて努力していく必要があること。

【責任性】・・・私たちが海の環境に対する行動意識を変えていくことが何よりも大切であること。

(2) 学習を通して主に育てたい ESD の資質・能力

・批判的に考える力（クリティカル・シンキング）

海の環境に配慮した行動をしているか、自分の行動を見つめ直す。

- ・多面的・総合的に考える力（システムズ・シンキング）

「人々の生活も海の環境も豊かになるにはどうすればよいか？」について考える。

- ・コミュニケーションを行う力

私たちの生活と海の環境づくりについて、市役所の方や地域の方との交流を通して考えを聞いたり、友達と意見交流を通して考えを広げたり深めたりする。

- ・他者と協力する態度

自分たちだけで考えるのではなく、地域の人々と協力して、海の環境を利用したまちづくりについて考える。

（３）本学習で変容を促す ESD の価値観

- ・世代間の公正

これからの海の環境を守るために、海への負担をできる限り減らそうとすることが大切である。

- ・自然環境、生態系の保全を重視する

私たちの豊かさばかり求めるのではなく、海の環境に配慮した豊かさを求めることが大切である。

（４）達成が期待される SDG s

1 1 持続可能な都市

1 4 海洋資源

6. 展開の概要（全 2 1 時間）

時 間	学習活動	●学習への支援	○評価・備考
	1 本単元の学習課題をつかむ。 ○ 沿岸部の地図の比較や今までの学習を想起し、学習課題をつかむ。 1 0 0 年以上前の沿岸部の様子 ⇔ 今の沿岸部の様子 ・沿岸の所に工場や港ができているね。 沿岸の近くが発展しているのが分かるね。 ・海の干潟の割合が減っているよ。海の生き物たちは大丈夫なのかな。 ・このまま開発を続けていいのかな。 私たちの生活も海の環境も豊かにするために、自分たちにできることを考えよう。	○ 本単元の学習課題をつかませるために、1 0 0 年以上前の明治時代の沿岸部の様子と今の沿岸部の様子を表した地図を比較させ、開発によって干潟が減少していることに気づかせる。 ○ 環境の問題や生物の減少に目を向けさせるために、これまでに行った干潟の生き物調べや水質検査の学習を想起させる。	ア① (知・技)

2 今の沿岸部の現状を知る。 ○ 大牟田市役所の港振興室の方々をお招きし、三池港を含む沿岸部の現状について話を聞く。 ・干潟の生き物や漁でとれる魚の数が減ってきているんだね。海の環境を守っていく必要があるね。 ・三池港に訪れる人が減ってきているんだな。 三池港の魅力をもっとたくさんの人に知って欲しいな。 ・市役所の方々は様々な取り組みをしているんだね。私たちにもできることはないかな。	○ 有明海の今の沿岸部の現状を知るために、大牟田市役所の方々をお招きし、三池港周辺の沿岸部の課題や取り組みについて話して貰う。	ア② (知・技)
3 自分たちにできることを考え、話し合う ○ 有明海や三池港の魅力を生かした沿岸部開発について、自分たちにできることを考え、話し合う。 海を守り生活も豊かにするために 三池港の魅力 ・三池港を紹介するパンフレットを作る。 ・三池港の模型を作って、紹介する。など 環境を守る ・三池港周辺の清掃活動に取り組む。 ・ポイ捨てをやめるよう呼びかけるポスターを作って貼る。など 有明海の魅力 ・干潟の生き物や食べ物を紹介するリーフレット作り。 ・有明海の干潟を利用した栽培についてプレゼンする。 ・三池港の魅力を紹介するパンフレットづくりは自分たちで取り組みそうだな。 ・どの取り組みが自分たちで実際にできそうかな。	○ 自分たちにできることについて考えさせるために、3つの観点(①三池港の魅力を伝える。②海の環境を守る③有明海の魅力を伝える)に分けて、グループごとに自分にできることを話し合わせる。	ウ① (主体的) イ② (思判表) イ① (思判表) ウ② (主体的)

	4 自分たちにできることを行動化する。 ○ 自分たちにできることについて話し合ったことをもとに、グループに分けて行動化する。 ・私たちは三池港の魅力を紹介するパンフレットを作って、観光センターに置いて貰おうかな。 ・私たちは、三池港周辺の清掃活動に取り組もうかな。	○ 自分たちにできることについて話し合ったことを行動化するために、つながりを持ってそうな関係機関を考え、行動を起こしていく。	
	5 学習の振り返りを行う。 ○ 自分たちが行動化したことを、グループごとに発表し合い、その成果を確かめ合う。 ・たくさんの人に有明海の魅力を知って貰えてよかったな。これからももっと広めていこう。 ・これからも海の環境を守る取り組みを自分にできることから続けていこう。	○ 今後の生活へと連続発展させるために、自分たちが行った活動を紹介させ合い、そのよさを価値付けしていく。	イ② (思判表)

第5学年国語科学習指導案

大牟田市立玉川小学校

教諭 篠倉 健太

1. 単元名 調べたことを正確に報告しよう「みんなが過ごしやすい町へ」

2. 単元の目標

- ・文章構成や展開，文章の種類とその特徴について理解することができる。 (知識及び理解)
- ・引用したり，図表やグラフなどを用いたりして，自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができる。 (思考・判断・表現)
- ・粘り強く，自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫し，学習の見通しをもって，報告する文章を書くことができる。 (主体的に学習に取り組む態度)

3. 単元について

(教材観)

- 本教材は，調べたことを報告する文章を書く活動を行う。主に，適切に引用しながら書くことがねらいとなるが，調査の目的に合う方法を選ぶ取材のしかたにも着目して取り組ませる必要があると考える。そして，子供達が「報告したい。」「みんなに伝えたい。」と思える課題を設定するのが最も重要と考える。

教科書では，自分たちの住む地域の福祉・共生に関わる問題を扱っている。このように，子供達にとって身近であり，かつ調べてわかることを教材化しようと考え，ユニバーサルデザインを積極的に取り入れている場所である公共施設である図書館や駅等を見学させて自分たちの目で確認できるようにする。そうすることで，調べて報告する必然性が生まれるという点で価値があると考え

(児童観)

- 本学級の子供達は，正義感は強く，正しいことをしようとする態度や行動はみられる。友達が間違ったことやルールを守らない行動をすると，すぐにしてはいけないことを伝えたり教えたりする姿が見られる。しかし，相手の気持ちや立場を考えない発言や行動もみられる。

これまでの「目的に応じて引用するとき」の学習で，情報を収集・整理するための知識や技能を取り立てて扱ってきたことで，目的によって読み方や引用の箇所が変わってくることを理解できている。しかし，引用カードに自分の考えを書くことができているが，情報と情報の関係に注意して引用したかその理由まで書いたり説明したりすることができる子は少ない。

(指導観)

- 指導にあたっては，引用しながら調べたことを正確に伝えることをねらいとしている。引用は，書いてあることをただ書き抜く行為ではなく，難しい言葉を説明する，自分の考えを補強するなど明確な目的の中で行われるものでなければならない。テーマに合う方法を選んで調べていくと，自分が報告したいことが明確になり，それを正確に報告するためには目的を意識して引用することが求められる。そうしたプロセスで引用を考えていけば，単なる「技術」ではなく「思考」の一環として捉えられ，自他の考えの区別なども自然にできるようになると考える。

4. 単元の評価規準

知識及び技能	思考力・判断力・表現力	主体的に学習に取り組む態度
① 文章構成や展開、文章の種類とその特徴について友達と互いの文章を読み合い、助言し合うことを通して理解している。	①「書くこと」において、目的や意図に応じて、感じたことや考えたことなどから書くことを選び、集めた材料を分類したり関係づけてりして、伝えたいことを明確にしている。 ②「書くこと」において、道筋の通った文章となるように、文章全体の構成や展開を考えている。 ③「書くこと」において、引用したり、図表やグラフなどを用いたりして、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫している。	①粘り強く、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫し、校長先生のお話を基に学習の見通しをもって、校長先生のために報告したいと文章を書こうとしている。

5. ESD との関連

(1) 本学習で働かせる ESD の視点（見方・考え方）

【多様性】・・・「みんなが過ごしやすくなる工夫」について調べたことを友達と交流し、比較することで目的や場所に応じてそれぞれの工夫がいろいろあることをとらえること。

【相互性】・・・自然・エネルギー・経済などがユニバーサルデザインとして全ての人が快適にできるように工夫することが大切であること。

【責任性】・・・わたしたち自身で学校を変えていこうと思うことが何よりも大切であること。

(2) 本学習を通して育てたい ESD の資質・能力

・批判的に考える力（クリティカル・シンキング）

本当に学校は過ごしやすい工夫がなされているのか今の学校を見つめ直す。

・多面的・総合的に考える力（システムズ・シンキング）

公共施設と学校を比べ、共通する工夫を考える。

・コミュニケーションを行う力

調べたことを通して、工夫の良さを意見交流して自分の考えをつくりあげる。

・つながりを尊重する態度

報告を最後までしようとし、学校を自分たちがよりよくしていこうとすること。

(3) 本学習で変容を促す ESD の価値観

・人権・文化を尊重する

全ての人のことを考えたユニバーサルデザインの考えを追求していくことが人権の尊重につながる。

・幸福感を大切にする

校長先生や地域の方と一緒に取り組んでいるという喜びを感じさせる。

(4) 達成が期待される SDG s

3 健康・福祉

1 1 まちづくり

6. 学習活動の概要（全10時間）

学習活動	●学習への支援 ・予想される児童の反応	○評価 ・備考
1. 学校内にある、みんなが過ごしやすくなる工夫はないか考え、学習課題を設定し、学習計画を立てる① 2. 自分が調べようと思うテーマを決め、調べ方の特徴を整理し、自分に合った調べ方を決める②	● 校長先生から話を聞き、学校関係者評価委員会でみんなが過ごしやすい学校づくりをしていることを知らせ報告してみたいと切実感を持たせる。 ・校長先生に協力し、みんながもっと過ごしやすい学校にするためにもっと人が訪れるところの工夫を調べよう。 ● 調べるテーマや調べ方の工夫を出し合って交流することで調べたいことが明確でない児童も参考にできるようにする。また、これまでに調べる学習をしたときに使った方法や注意点を整理する。 ・調べ方はインタビューがいいな。実際に取り組んでいる人に聞いたほうがわかりやすいな。	ウ① (主体的) イ② (思判表)
3. 各自調査をすすめる公共施設見学を含む③④	● たくさんの人が訪れる身近な公共施設には過ごしやすくなる工夫があるか実際に見学し、発見したことの情報をカードにまとめる。 ・多目的トイレは手すりなどがあってどんな人でも使えて便利だね。 ・音声で案内していたね。 ● 見学の後に疑問点等をさらに追究し、調べた情報は、後で引用することを考えて目的を持って調査させる。 ・音声案内の装置のしくみについて詳しく調べたら、詳しく書いてあるサイトをみつけたよ。 ・多目的トイレについて詳しく書いてある本を見つけたよ。特別支援学級の友達も多目的トイレを使っているから担任の先生にインタビューしてみよう。 ※総合的な学習の時間、行事等の学習内容と関連させて調査活動を行い、国語の時間で報告文を書くと、学習効率が高くなる。また、相手意識や目的意識も高くなり、より生きた報告文になりやすい。	ア① (知・技) ウ① (主体的)
4. ユニバーサルデザインで過ごしやすい学校になる工夫を、報告書にまとめる⑤⑥⑦⑧⑨	● 引用のしかた、図表の使い方、筋道の通った文章になっているか注意してまとめる。下書きの段階で互いに読み合い助言し合う。	イ① (思判表)

	・どこが実際に見たことで、どこがインタビューしたことなのかわかりにくいよ。 ・文が長すぎていないかな。確かめよう。 ● 地域に報告する校長先生と自分が報告したい内容を改めて確かめる。 ・地域の人達にもわかりやすい報告書を書くぞ。 ● 「きっかけ」「調べ方」「分かったこと」「まとめ」などのパーツに分ける。パーツごとに「下書き→推敲→清書」を行う。パーツごとに清書し、作文を積み上げて全体を完成させる。 ・分けてかいたほうが書きやすかったぞ。 ・短い文でかけていたかな。	イ③ (思判表)
5. 校長先生に完成した報告書を渡しに行き、単元の学習をふり返る⑩	● 互いに読み合い、友達の文章の真似したいところなどを記録させ校長先生や地域の方に伝わるか話し合い、今後の学習にも生かせるようにする。 ・校長先生は参考にしてくれるかな。もう一度みんなで読み合おう。 ・これでみんなが過ごしやすい学校になったらいいな。	ウ① (主体的)

第6学年 総合的な学習の時間 学習指導案

大牟田市立中友小学校

教諭 堤 智紀

1. 単元名 「長崎から学ぶ」

2. 単元の目標

- ・平和への願いをつなぐという課題をもって、長崎で起きた出来事や戦争の歴史の調べ学習において、長崎での原爆の被害や私たちが暮らしている大牟田での空襲の被害などを知り、自分たちにできることを考えることができる。〔知識・技能に関わる目標〕
- ・戦争が日本だけではなく世界中で行われていたことや、現在も戦争をしている国があること、戦争の恐ろしさや悲惨さを自分ごととして捉え、戦争を二度と繰り返してはいけないという気持ちを理由をもとに分かりやすく伝えることができる。〔思考力・判断力・表現力に関わる目標〕
- ・戦争や平和ということに関心を持ち、意欲的にインターネットで戦争のことについてグループで協力して調べることや、修学旅行の長崎平和公園での平和集会を平和への祈りを込めて行うことができる。〔主体的に学びに向かう態度に関わる目標〕

3. 単元について

(1) 教材観

本単元に関しては、これまでに平和学習での読み聞かせや、普段の生活の中を通して、日本で戦争が起きていたことや長崎・広島に原爆が落とされたという事実があることを知ることができている。また、社会科「戦争と人々の暮らし」の学習を通して、広島・長崎に原爆が落とされるまでにあった出来事や、戦争中の子供たちの生活など、戦争でたくさんの人が犠牲になったということは学習する。そこで、本単元では、これらの上に立って長崎での原爆や大牟田での空襲、世界での戦争に目を向け、調べ学習を通して戦争の被害や悲惨さ、世界での子ども達の状況について知り、さらに平和の願いを届けるような取り組みについても知り、平和への願いと戦争を繰り返してはいけないということに気づかせる。そして、平和への願いと祈りを自分たちのまわりの人達にも伝え、恒久平和を受け継ぐことができるようにする。

(2) 児童・生徒観

本学級の児童達は、5年生の時に総合的な学習の時間「みんながつながるよりよい学校・地域づくりを目指して～子供民生委員活動～」を通して、よりよい社会を作っていくためには地域の方など様々な人と協力・協働していくことが大切であるということを学習してきている。また、これまで毎年行われている平和学習を通して、戦争が日本であったことや、長崎・広島に原爆が落とされていることは知っている。さらに、6年生の社会科の学習を通して、人々が争いや戦いをいつの時代もしてきていたということや、時代によって考え方や流行などの考え方や感じ方の違いがあることを学習してきている。そこで、自分たちで計画を立て、実行することができるようになるこの時期に本単元を取り上げる。そして、平和学習を通して、戦争が起きていたという事実を自分事として捉え、今の自分たちにできることを考える。戦争の悲惨さと平和への願いを知り、日本だけではなく世界中で今も苦しんでいる人がいるというグローバルに視野を持つことができるようにする。このことは、持続可能な社会づくりにおいて自分の考えをもち行動することができる児童を育成する上からも意義深い。

(3) 指導観

本単元の指導にあたってはこれまでの平和学習や社会科の「戦争と私たちの暮らし」から、日本が戦争をしていた事実や、戦争中や戦後の生活に苦しんでいたということに気づかせ、平和を受け継いでいくためには自分たちにはどのようなことができるのかを考え、進んで行動することができるようにする。

そこでまず、戦争が起きていたという事実や自分たちが住んでいる地域が、空襲によって焼けてしまったということを聞き、戦争が身近でも起きていたという事実を感じとることができるようにする。次に、自分たちでインターネットを使用して、長崎・大牟田・世界の戦争のことや、それぞれの平和への取り組みについて調べ、平和の願いを届ける人々がたくさんいることに気づかせる。ここで、社会科「戦争と人々の暮らし」と関連させ、日本で戦争が起きた原因や戦争中の子供たち

の生活についても学習するようにする。さらに、戦争が悲惨で恐ろしいものだということから戦争は二度と繰り返してはいけないということを学習し、平和に生活していくために自分たちにできることを考える。最後に、自分たちが調べた戦争の悲惨さや恐ろしさ、自分たちにできことをまとめる。

4. 単元の評価規準

知識・技能	思考力・判断力・表現力	主体的に学習に取り組む態度
平和への願いをつなぐという課題をもって、長崎での原爆の被害や大牟田での空襲を知り、自分達にできることを考える。	戦争の悲惨さを自分ごととして捉え、戦争を繰り返してはいけないという気持ちを理由をもとに伝えることができる。	戦争や平和のことに関心を持ち、意欲的にインターネットで調べたり、平和への願いを届けたりすることができる。

5. ESDとの関連

(1) 本学習で働かせるESDの視点（見方・考え方）

公平性・・・平和の実現のために努力している人の生き方を通して、平和とはお互いのことを理解し、助け合うことでみんなの幸せを実現することだと気づくことができる。

責任制・・・自分一人一人の行動が平和な社会の実現に繋がることを理解して私たちにできることに取り組むことができる。

(2) 本学習を通して育てたいESDの資質・能力

批判的に考える力（クリティカル・シンキング）

平和を実現している人たちの話を基に、自分でできることを見つけ出す。

コミュニケーションを行う力

現地において経験をした人から話を聞いたり、友達やまわりの人達に発信したりすることができる。

つながりを尊重する態度

社会の一員として自分たちに世界をつくる責任があることに気付き、活動に取り組もうとすることができる。

(3) 本学習で変容を促すESDの価値観

世代間の公正

戦争を経験した人から、経験をしていない人に語り継ぐことで、戦争の悲惨さ、恐ろしさを知り、戦争を二度と繰り返してはいけないということを受け継ぐ。

(4) 達成が期待されるSDGs

16 平和と公正を全ての人に

6. 展開の概要（全16時間）

配時	学習活動・内容	●学習への支援	○評価・備考
----	---------	---------	--------

3	戦争について知ろう (1) 戦争について知っていることや、自分が考える平和とは一体何かを出し合う。 ・長崎と広島に原爆が落とされたな。 ・みんなが幸せに暮らしていける世の中が平和といえるな。 ・日本は昔戦争をしていたな。 (2) 現在も戦争をしている国があることや、日本が第二次世界大戦後に戦争をしていない数少ない国であることを知る。	●戦争や平和についてのアンケートを取り、戦争や平和について共有する。 ●戦争をしている国があるという事や実際に日本は戦争を繰り返してないという中から課題を見出す。	○長崎の原爆や日本が戦争をしていたことを知ることができる〔知識・技能〕
長崎の原爆や大牟田の空襲、世界の戦争の状況を調べよう。			
4	長崎での原爆の被害や、大牟田での空襲の被害、現在の世界で起きている戦争について知ろう。 (1) 長崎の原爆のことについての情報をグループで集める。 ・長崎に落とされた原爆の被害は大きいものだった。 ・長崎の原爆の跡地に長崎平和公園が作られることになった。 (2) GT から大牟田の空襲についての話をきき、大牟田の町でも戦争の被害にあったことをしる。 ○大牟田でも、空襲があり被害を受けたことを知る。 ・自分たちが暮らしている中友校区は焼け野原になってしまった。 (3) 第二次世界大戦後に起きた戦争について調べる。 ・世界では、戦争を続けている国がまだたくさんあったことを知る。 ・自分たちと同じくらいの子どもも兵隊として戦争に参加している。 (4) 戦後の日本の取り組みや世界の平和に向けての取り組みについて調べる。 ・長崎では、平和祈念像が作られたり、慰霊碑が作られたりすることで世界の永久平和を願っている。 ・世界では、子ども達にユニセフでの取り組み	●インターネットを活用して調べる。 ●GT からの話を聞くことで大牟田でも空襲があったことを実感させる。 ●インターネットを通じて世界の現在の戦争や世界で苦しむ子ども達のことについて調べる。 ●戦争後の取り組みや苦しんでいる人達を助ける取り組みについて調べ、自分達にできることを考えさえる。	○インターネットを活用して、調べ、ゲストティーチャーの話を聞くことができる。〔主体的に学ぶ態度・人間性〕

	みや、国連平和維持活動(PKO)などが活動に取り組んでいる。		
	長崎・大牟田・世界の戦争のことについて調べたことをまとめよう。		
7	戦争のことについて、自分たちが知ったことや、自分たちができることについて考え、伝えよう。 (1) 調べたことや、聞いたことを基に、自分達がこれからできることについて、考えをまとめる。 ・世界で困っている人がいるから助けたい。 ・戦争の悲惨さ、恐ろしさを伝え、戦争を繰り返さない、しないことを伝えたい。 (2) 調べたことや、学級内で情報共有したときのことを基に、自分達が伝えたい内容について考える。 ○伝えたい情報の整理と内容について話し合う。 ○なぜ、その情報を伝えたいのか、理由を明確にさせる。 (3) クラスで伝える方法について考える。 ○伝える相手や目的、場所に応じて、これまで学習してきたポスターや新聞、リーフレットスライドなどの表現方法から適切な物は何かをクラスで話し合わせる。 (4) 伝える内容、伝える方法に基づき、個人で資料を作成する。	●調べた内容をもとに座標図に自分の考えをまとめる。 ●自分達が1番伝えたい内容を考え付箋に書かせる。 ●相手に自分達が伝えたいことを伝えるためには、どのようにすれば良いのか考えさせる。	○自分たちの生活を見直し、できることを考える〔思考力・判断力・表現力〕
	戦争・平和のことについてまとめことを他の学年に広げよう。		
5	戦争を繰り返さないための平和への思いや願いを発信していこう。 (1) 広げるために、スライドの作成を行う。 ○自分達の伝えたいことをまとめ学習を通して感じたことをまとめる。 (2) 完成したものを他の学年にも見てもらえるように掲示し発信する。 (3) 活動の振り返りを行い、学習した内容や行動のよさを実感する。 ・平和への願いをつないできた人々の思いに気づくことができた。 ・友達と一緒に、たくさん考えて自分達で取り組むことができたな。	●学習したことをまとめさせる。 ●自分の生活を見直させ、自分たちにできることを考えさせる。	○学習したことをまとめたり、発表したりすることができる〔思考力・判断力・表現力〕
	世界の平和への願いと復興を込めてできる活動を続けていこう。		

第6学年 総合的な学習の時間 学習指導案

大牟田市立白川小学校

教諭 竹崎 衣和那

1 単元名 「安心して暮らせる白川校区をつくろう ～ジュニア民生委員・児童委員活動～」

2 単元の目標

- 水害時の避難上での留意点，日常的な備えなど，防災上の知識について理解し，高齢者に伝わるように水害対策ブックにまとめることができる。（知識及び技能）
- 人口推移のグラフや，自分の経験，新聞記事をもとに課題を見いだし，地域の高齢者が安心して暮らすことができるようにするための方策を考えたり，考えたことについて水害対策ブックを通して伝えたりすることができる。（思考力・判断力・表現力等）
- 白川小学校校区で暮らす人たちが安心して暮らせるようにしたいという目的意識をもち，意欲的に高齢者と関わったり，水害について学んだことを水害対策ブックにまとめたりすることができる。（主体的に学習に取り組む態度）

3 単元について

（1）教材観

本単元では，「ジュニア民生委員・児童委員への任命」，地域の高齢者との出会い，「高齢者が水害に安心して備えるための資料づくり」を教材として取り上げる。

白川小学校校区の民生委員や社会福祉協議会の方を招き，活動の意義を学ぶことで，その活動への意欲を高めることができる。また，ジュニア民生委員・児童委員としての名刺を地域の高齢者の方に配る活動を通して，地域の実態を把握したり，これからの活動に具体性をもたせたりすることが期待できる。さらには，高齢者とのコミュニケーションを通して，人とのつながりの心地よさや，関係を深めるコミュニケーションのスキル向上も図ることができる。

また，大牟田市は7月に豪雨の災害に見舞われ，高齢者の死者が出ているということを取り上げる。このことを通して，水害に対する確かな知識を主体的に得ようとするとともに，得た知識を高齢者の身体的特徴や生活環境に適応させて提案したり，高齢者の心に届くような防災の表現物を作成したりするなど，より相手意識をもって活動することができるようになるよさがある。

（2）児童観

本学級の児童は，第5学年において，当時の6年生と行事の案内を地域の高齢者の方に配る活動をしてきている。この活動を通して，ジュニア民生委員としての振る舞いを学んできている。また，縦割り活動を通してジュニア児童委員として後輩に接する姿も見ている。さらには，引継ぎ式の際には，ジュニア民生委員・児童委員活動の意義，喜びなどを聞き，活動への意欲をもっている。

また，社会的な事象や身の回りの実態などから課題を見つけたり，友だちとの対話を通して考えを練り上げて具体的に実践することができたりすることができるようになったこの期に本課題を取り上げる意義は大きい。

(3) 指導観

本単元の指導に当たっては、まず、大牟田市の人口推移及び、年齢構成を示したグラフ（今後20年も予想されたもの）を提示する。このことを通して、大牟田市は人口減が進んでおり、高齢者の割合は増加傾向が続いていることに気付かせる。その資料をもとに、今後の大牟田の姿について具体的に話し合わせることを通して、まちづくりについての課題をつかませたい。また、昨年度までに先輩が取り組んでいたジュニア民生委員・児童委員活動の引継ぎ会を想起させ、意欲をもたせたい。

次に、地域の民生委員をゲストティーチャーとして招き、その仕事内容や意義を学ばせる。その上にたち、ジュニア民生委員・児童委員活動として任命することで、さらなる意欲や責任感をもたせる。また、ジュニア民生委員・児童委員に任命されたことに伴い、担当する地域の高齢者に名刺配りをすることを通して、地域の実態をつかませるとともに、担当する高齢者の力になりたいという思いをもたせたい。なお、名刺を作成する際には、相手にとって見やすいものであるという視覚的な配慮を促すようにする。また、名刺そのものがコミュニケーションのきっかけとなるように、名刺に自分の好きなもの、興味のあるものなど自分の嗜好を表現させるようにするなど、デザインの工夫についても考えさせるようにする。

そして、本年7月の水害を想起させるとともに、高齢者の被害を報じた新聞記事を提示し、自分たちにできることはないだろうかと考えさせる。その上で、現役の消防士をゲストティーチャーとして招き、水害への備えについて学ぶ機会を設ける。また、学んだことを実感するために、着衣水泳でその学びの効果を実感させるようにする。それらの活動を踏まえ、高齢者向けに、水害に安心して備えるための資料づくりをする。

さらには、これらの活動を通して、地域づくりに直接貢献できたということを振り返らせ、さらに自分たちにできることはないだろうかと話し合わせることを通して、これからの活動にもつなげていくようにする。

4 単元の評価規準

(ア)知識及び技能	(イ)思考力・判断力・表現力等	(ウ)主体的に学習に取り組む態度
①水害時の避難上での留意点、日常的な備えなど、防災上の知識について理解している。	①資料をもとに課題を見だし、安心できるまちづくりのための方策を考えることができる。	①校区の人たちが安心して暮らせるようにしたいという目的意識をもち、意欲的に高齢者と関わろうとしている。
②学んだり、調べたりして獲得した知識を、言葉や図、絵などを用いてそれらを関係づけながらまとめる技能を身に付けている。	②水害への対策について学んだことや考えたことを水害対策ブックに表現したりしている。	②名刺配りを通して、地域で担当する高齢者の実態を意欲的につかみ、自分にできることを模索しようとしている。 ③水害について学んだことを地域の人に納得してもらえようように発信しようとしている。

5 ESD との関連

(1) 本学習で働かせる ESD の視点（見方・考え方）

・相互性

現在の地域の様子は、そのまま未来の地域の姿であり、自分や身内の者が年老いた時に、安心が担保されていない地域となっている可能性があるということ。

・公平性

独居の高齢者は地域の中で孤立しがち。これを見過ごせば恵まれた環境にある人のみが安心して過ごせるまちとなってしまうということ。

・連携性

これからのまちは、地域の民生委員や身内だけで高齢者を支えるのではなく、地域全体で支えていくことが大切であること。

(2) 本学習を通して育てたい ESD の資質・能力

・未来像を予測して計画を立てる力

人口推移グラフをもとにこれからの大牟田市を予測し、ジュニア民生委員・児童委員として安心・安全なまちづくり一端をいかに担うかを計画する。

・コミュニケーションを行う力

地域の高齢者が安心して過ごせる、自分たちにできるまちづくりについて、意見交流を通して自分の考えをつくりあげる。

・つながりを尊重する態度

地域の高齢者や、地域の民生委員、消防士などとの関わりを通し、様々な人とのつながりが豊かな学びになっているということを自覚し、尊重しようとする。

・進んで参加する態度

地域の高齢者のために自分にできることはないかと考え、意欲的に関わりをもとうとしたり、考えをつくろうとしたりして、地域社会に貢献しようとする。

(3) 本学習で変容を促す ESD の価値観

・世代内の公正

自分たちだけでなく、高齢者や若い子どもなど、同じ時間を過ごす皆が安心して過ごせるまちづくりが大切である。

・人権・文化を尊重する。

災害弱者も皆、安心して過ごせるように努めなくてはならない。

・幸福感に敏感になる。幸福感を重視する。

自分たちの世代だけが幸せであることが、将来的にも幸せであるとは限らない。

(4) 達成が期待される SDG s

3 すべての人に健康・福祉を

1.1 住み続けられるまちづくりを

6 展開の概要（全 16 時間）

学習活動	○学習への支援	○評価 ・備考
1 大牟田市の人口推移のグラフをもとに、大牟田市の課題と今後の活動の見通しをつかむ。 ・若い人がどんどん少なくなっていく。 ・自分たちの親は誰か見てくれるのかな。 ・先輩たちのように民生委員活動が将来も続いていれば安心だ。	○大牟田市の人口推移のグラフ（今後 20 年先まで予測したもの）を提示し、特に高齢者と若者の割合に着目させ、課題を明確にさせるとともに、先輩たちが行ってきたジュニア民生委員・児童委員の活動の意義を改めて考えさせるようにする。	イ① （思判表）
2 民生委員の活動内容について知る。 ・高齢者にとっては欠かせない仕事だ。 3 高齢者に名刺配りをする。 ・会話がはずむように、自分の好きなものを名刺に載せよう。 ・見やすいように大きな字で書かないと。 4 活動の振り返りをする。 ・いつまでも見送ってくれて嬉しかった。 ・他にもできることはないだろうか。	○民生委員にその仕事について説明してもらい、活動の意義をつかませる。 ○地域の実態をつかませるとともに、高齢者との関係をつくらせるために、名刺渡しを行うことを提案する。 ○今後の活動へと連続発展させていかなるために、交流を通して得た思いを想起させる。	ウ① （主体的） ウ② （主体的）
5 高齢者と水害について考える。 ・高齢者が 2 人亡くなっている。 ・自分たちも怖かった。 ・水害について調べて伝えられないかな。 6 「水害対策ブック」を作成する。 校区に住む消防士さんの話 ▼ 国語科「私たちにできること」 ・若い人は膝くらいまで浸水していたら避難は難しいと言われていたから、高齢者は脛あたりまで水が来たら危ないかもしれないね。 ・自分たちは大丈夫と思われるかもしれないから、ここ数年で降水量が増えてきていてとても危険になっていることを初めに書いておこう。 7 活動の振り返りをする。 ・担当する後輩達のためにも対策ブックをつくって届けたいな。	○7 月の水害の新聞記事を提示し、地域の高齢者のために、自分たちでできることはないかと考えさせるようにする。 ○GT を招いたり、国語科単位と関連させたりして、内容の質や見やすい構成についても意識させ、相手意識をもたせるようにする。 ○今後の活動へと連続発展させていかなるために、下級生にも伝えていくという視点をもたせるようにする。	イ① （思判表） ウ② （主体的） ア①② （知・技） イ② （思判表）

第 6 学年 総合的な学習の時間指導案

大牟田市羽山台小学校

教諭 横尾 柚花

1 単元名

「大牟田を元気にしよう！羽山っ子スマイルプロジェクト」

2 単元の目標

- 自然災害によって起きる各地の豪雨災害の状況や復興への歩みについての理解を図り、自分達が知りたい情報について調べ、情報を収集する技能を身に付けることができる。 【知識・技能】
- 豪雨災害について調べたことをまとめ、被害にあった人々や自分達の市を励ますために、自分達に今できることを考え、表現することができる。 【思考・判断・表現】
- 豪雨災害の状況や復興への歩みについて意欲的に調べ、主体的に問題解決しようとすることができる。 【学びに向かう態度】

3 単元について

(1) 教材観

1 学期が始まり、ようやく通常通りの学校生活が戻ってきた 7 月、大牟田市を豪雨が襲った。これまで災害が少ないと言われていた大牟田市で、数多くの児童が避難する事態に至り、不安な思いのまま、学校で保護者の迎えを待つという経験をする事となった。本校は高台に位置しているため、大きな被害はなかったが、市内の他の地域では、道路や学校の校舎が冠水したり、児童の家が浸水したりする事態になったところもある。そこで、この単元の学習を通して、今回の豪雨災害が大牟田市に与えた被害についてもっと詳しく知り、自分達にできることを考え、大牟田市を励ますために何か行動を起こせないかということを考えさせるためにこの単元を設定した。そして、児童自身が防災を学び、また同じことが起こったときにはどのように行動したらよいかについて主体的に考え、今後の行動に繋げられるようにしたい。また、大牟田市の復興に向けて、これからの街づくりを担う責任感を育て、地域と協力の在り方も考えられるようにしたい。

(2) 児童観

本学級の児童は、何事にも一生懸命に取り組もうとする児童が多く、周りの友達のことを思いやることのできる優しい児童も多い。今回の大牟田市の豪雨災害では、多くの児童が不安な夜を過ごしたり、自宅の浸水の片付けを経験したりした児童もいる。しかし、羽山台小学校の地域周辺は、あまり大きな被害があったわけではなかったため、この豪雨災害の被害意識には、個人差があると考えられる。そこで、豪雨災害の被害を自分事として捉え、大牟田市の被害の実態を調べる活動を通して、「自分達に今できることはないか。」「被害にあった大牟田市を励ますためにできることはないか。」について考えるよい機会となると考える。

(3) 指導観

本単元の指導にあたっては、まず『課題の設定』の段階において、今回の豪雨での被害を「自分事」として捉えられるようにする。自分達が今豪雨災害について知っていることを出し合い、アンケートの結果やこれまでの経験とのずれから、豪雨災害について調べていくという課題をつ

かませる。次に、『情報の収集』の段階では、豪雨災害の状況や復興への歩みについて情報を集め、被害の実態を捉えられるようにする。その際、「どのような情報を収集するのか。」「どのような方法で収集するとよいか。」等を計画的に考え、情報を集められるようにする。また、実際に被災した大牟田市立みなと小学校の児童とリモートで話ができるように手配し、生の声を聴けるようにすることで、実感を持って豪雨の被害や被害にあった人々が必要としているものを調べられるようにする。情報収集の結果を『整理・分析』する段階では、『情報の収集』の段階で集めた情報を、種類ごとに整理し、比較・分析しながら豪雨災害について捉えられるようにする。最後に、『まとめ・表現』の段階では、調べた情報やそれらをもとに考えた、自分達ができることについて、他者に伝えたり、表現したりする活動を行う。この際、相手意識や目的意識を明確にさせることを意識させることで、伝えたい情報を再構成しながら伝えるための具体的な方法を身に付けることができ、自分自身の考えや新たな課題を自覚することに繋がると考える。そして単元終了後には、大牟田市の未来を担っていく立場として、自覚と責任のある行動をすることが大切であることに気付かせたい。

4 単元の評価基準

ア 知識・技能	イ 思考力・判断力・表現力	ウ 学びに向かう力・人間性
① 豪雨災害の状況や復興への歩みについて調べ、観点ごとに大事なことを理解している。	① 豪雨災害の状況や復興への歩みについて、情報を集め、整理・分析したことを工夫してまとめている。 ② 被害にあった人々や自分達の市を励ますために、自分達に今できることを考えている。	① 豪雨災害の状況や復興への歩みについて、進んで調べようとしている。 ② 自分達にできることや励ます方法を進んで考え、主体的に問題解決しようとしている。

5 本単元と ESD との関連

○ この題材で働かせる ESD の視点（見方・考え方）

- ・有限性…自然災害に対する人間の知識・能力には限界があること。
- ・連携性…防災について計画，実践するためには，自分と自分を取り巻く「人」，「自然」，「地域」のつながりが大切であること。
- ・相互性…豪雨災害で被災した人の身になって物事を考え，自分達にできることはないか考えることができる。また，自分が被害にあっていなくても，地域のつながりを大切にし，お互いに協力する態度を大切にする。

○ この学習を通して育てたい ESD の資質・能力

- ・多面的・総合的に考える力（システムズシンキング）
今回の豪雨災害の被害や被害を受けた人々の復興への歩み等について調べ，自分達ができることについて考えることができる。
- ・コミュニケーションを行う力

豪雨災害や私たちにできることについて、調べた内容やインタビュー、G.T.の話等を通して考えたことを、友達や他者に発信できる。

- ・他者と協力する態度（協働的問題解決能力）

被災した人たちに元気を与えられるような企画を、友達と協力しながら考え、作成できる。

- ・繋がりを尊重する態度

防災マップ作成や避難経路の確認は、防災について考えることにも繋がり、これからも大牟田市で安心して暮らしていくための「つなぎ手」として、児童自らが主体的に活動できる。

○ この学習を通して育てたい ESD の価値観

- ・世代内の公正…被災した人（「弱い」立場の人）も健康的な生活を送る権利があり、その人達を元気づけることで自分達が少しでも役に立とうとすることが大切である。

○ 達成が期待される SDGs 17 の目標

- ・ 3 全ての人の健康的な生活の確保
- ・ 11 安全かつ強靱で持続可能な人間居住の実現
- ・ 13 気候変動の影響を軽減するための緊急対策

6 単元の展開概要（全 12 時間）

学習活動	● 学習への教師の支援 ・ 予想される児童の反応	○ 評価
1 大牟田市の豪雨災害について振り返ろう。① 《課題の設定》 ・ 豪雨災害について知っていることを出し合う。 ・ 被災当時の大牟田の写真や動画を見る。 ・ 保護者の経験談を聞く。	● 児童の「豪雨災害への被害意識」についてのアンケートを取ったり、その時の写真や動画を見せたり、被害にあった児童の保護者に話をしてもらうよう手配することで、より児童が豪雨災害を自分事として捉えられるようにする。	ウー① （学びに向かう力）
2 大牟田市や近隣の熊本県が受けた豪雨災害の実態を調べ、まとめよう。②③④ ・ 調べる観点ごとにグループに分かれ、豪雨災害について詳しく調べる。 【調べる観点】 ・ 大牟田市の被害状況 ・ みなと小学校の被害状況 ・ 全国（熊本等）の被害状況 ・ 復興への歩み 等 《情報の収集》	● 調べる観点をいくつかに分けてすることで、豪雨災害についてより詳しく調べられるようにする。	アー① （知・技）

《整理・分析》		イー①
3 グループごとに調べた豪雨災害について発表し合おう。⑤⑥		(思・判・表)
《まとめ・表現》		
・それぞれのグループで調べたことを発表する。 ・全国や大牟田市の豪雨災害について聞き、豪雨災害の全容を大まかに捉える。	● それぞれのグループが調べたことを視覚的に分かるように黒板に整理していくことで、調べたことを比較・分析しながら豪雨災害について捉えられるようにする。また、G.T.の方に発表を聞いてもらい、児童の発表についてコメントをもらうことで、児童の意欲を継続させられるようにする。	
4 同じことが起きた時でも、安心して生活するために、今できることを考えよう。⑦⑧	● 「豪雨災害」とは、予測ができないものであることを確認し、そのような豪雨災害がまた起きた時に、安心して生活するためにできることがないかについて問うことで、自分達に今できることを考えられるようにする。	イー① (思・判・表)
《課題の設定》		
・被災したみなと小学校の6年生とリモートで繋がり、被害の実態や必要だと感じる物などをインタビューし、被災した人々の思いを知る。 《情報の収集》	● 実際に被災したみなと小学校の6年生と羽山台小学校の児童をリモートで繋げ、インタビューできるようにすることで、実際の豪雨の被害や今必要としているものについて、実感を持って調べられるようにする。	イー② (思・判・表)
《整理・分析》		
・自分達にできることを考え、出し合う。 ・活動ごとにグループに分かれ、実施計画を立てる。		イー② (思・判・表)
5 被災したみなと小学校や大牟田市を元気にするために、私たちができることを考えよう。⑨⑩⑪	● 被災した大牟田市の様子やみなと小の児童へのインタビューの内容をもう一度確認させ、何か自分達にできることはないかを問う。	ウー② (学びに向かう力)
《まとめ・表現》	・応援旗を作成する。	
・一番身近な大牟田市やみなと小学校を励ますために、できることを考える。	・運動場にメッセージを書き、写真を撮る。	
・それぞれの企画グループごとに、企画運営を行う。	・応援歌を作成し、録音する。	
6 これまでの学習を振り返り、学習をまとめよう。⑫	● 企画・運営について助言する。	
・これまで自分達が取り組んできた活動をもう一度振り返り、学んだことや感じたこと等を出し合う。	● 振り返りを書かせ、この学習を通して、自然災害に対する考え方の変化したことや地域や社会、人との繋がり大切さに気付けたことを称賛し、学習をまとめる。	ウー② (学びに向かう力)

第5学年1組 総合的な学習の時間学習指導案

大牟田市立上内小学校

教諭 廣松 忍

1 単元名 ふるさと再発見“米作りから学ぼう”

2 単元の目標

- 稲の種蒔植えや田植え体験、米作りについて調べることを通して、農地水環境保全委員会(GT)の方々の話を基に、生産者の努力や思いを知り、上内の米作りや自然を守るために自分たちにできることを考えたり、上内のよさを見つけたりすることができる。【知識・技能】
- 米作りの体験活動や調べ活動を通して、農業生産と消費行動や自然が密接な関わりがあることが分かり、上内米のよさを伝える内容や方法を考えたり、上内米や地域の自然を守っていききたいという思いをもったりすることができる。【思考力・判断力・表現力】
- 上内の米作りについてよさや課題を意欲的に調べたり、上内米のよさや自分達にできることを伝えるための内容や方法を友達と協働的に考えたりして、上内のよさを地域、他校の人々に発信することができる。【主体的に学習に取り組む態度】

3 単元について

(1)教材観

本単元に関しては、地域の方との米作り体験を通して、地域の「ひと・もの・こと」を活用し、上内米のよさや課題を調べていく中で、地域の方の思いや願いに気付くと共に、上内米のよさを他者へ発信したり、唐桑小学校の児童と交流したりすることで、地域のよさを実感し、地域への愛着深めたり、自然を守っていこうとする態度を高めたりしていくことが期待できる。これらの学習を通して、未来に上内米を残すために、生産者だけが努力するのではなく、私たちが生産者、消費者、環境のことを考えて努力することが大切であることを理解することができる。

本単元の学習は、SDGs 15 番目の目標である「陸の豊かさを守ろう」と11番目の目標「住みやすいまちづくり」を達成するための意識を高めることにもつながる。6年生では、さらに身近な自然環境や自然災害について考える学習へと発展していく。

(2)児童観

本学級の子どもたちは、これまで、4年生での総合の学習では、上内校区を流れる川の水質を調べ、川の水が米作りにも使われていることから、美しい水であることを理解している。また、社会科「米作りのさかんな地域」の学習では、米作りの作業や農家の方の努力について調べている。

そこで、地域の方との米作り体験を通して、上内米のよさや米作りを続ける上での課題を調べたり、GTの方にインタビューをしたりすることで、地域の方の思いや願いを知り、自分達にできることを考えることができるようにする。自然環境や農業生産に関心を持ち、自己の生き方とつなげて考えることができるこの時期に、本単元を取り上げることは、上内のよさを実感し、そのよさを伝えて守っていこうというふるさと愛を育てる上で意義深いと考える。

(3)指導観

本単元の学習にあたっては、社会科「米作りのさかんな地域」の学習と関連付け、地域の方と共に米作りの体験を通して、自分たちの地域に愛着を深めるとともに、自分たちが住む地域の農業や自然を保全していこうという思いをもつことができるようにする。

そのために、単元の導入『出合う・見通す』段階では、昨年度の活動を6年生から聞き、昨年度の成果や課題をもとに、上内の米作りについて調べてみたいことを出し合わせたり、地域の方（農地水環境保全委員会）と一緒に稲の種蒔植えや田植えの体験等を通して、「上内米のよさを調べ、もっと上内米のよさを広めよう」という本単元の課題を設定する。展開前段『ひろげる・ふかめる』段階では、上内米の特徴や生産者の努力や工夫など上内米の魅力を探る。また、定期的に稲の成長を観察したり、記録をとったりする中で、疑問に感じたことを農地水環境保全委員会の方やGTにインタビューをすることで、日常的な管理の大変さや生産者の努力や願いを理解できるようにする。展開後段では、上内米のよさを知ってもらうために、「上内米のよさを広めよう～上内米PR作戦！～」と課題を設定し、PRする内容や方法について話し合い、実践する。終末『いかす・まと

める』段階は、上内のよさと共に、上内の米作りや自然を守っていくために自分たちにできることを話し合い行動化することで、地域への愛着を深めると共に、お世話になった方々へ感謝の気持ちを伝えることができるようにする。地域内外にも発信できることを考え、上内の米作りのよさをまとめ、他校や海外の交流先であるメキシコの小学校にも発信していく。

4 単元の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考力・判断力・表現力	ウ 主体的に学習に取り組む態度
① 生産者、消費者、環境のつながりを理解している。 ② 情報収集や整理・分析の仕方を理解している。 ③ 生産者の思いや願い、上内米のよさや地域のよさに気付いている。	① 相手意識や目的意識をもって、話し合っている。 ② 自分の考えの理由や根拠を明確にしなが他者と交流し、自分の考えを付加・修正している。 ③ 上内米のよさを発信する内容や方法を考えている。	① 自分で課題を設定している。 ② 意欲的に他者と協力して活動している。 ③ 自分ごととして、自分達ができることを考えたり発信したりしている。

5 ESD との関連

(1) 本学習で働かせる ESD の視点（見方・考え方）

- 相互性・・・米作り（農業生産）は自然と密接な関係にあり、地球環境も考える必要があること。
- 公平性・・・上内米（日本の食文化）を未来に残すために、生産者だけが努力するのではなく、私たちが生産者、消費者、環境のことを考えて努力することが大切であること。
- 有限性・・・日本の主食である米の生産も豊かな自然も限りがあるので、私たちが守っていく必要があるということ。

(2) 本学習を通して育てたい ESD の資質・能力

- ・未来像を予測して計画を立てる力（長期的思考力）
未来に上内米を残すために、米の生産と消費について考えたり、自分の生活を見つめ直したりする。
- ・コミュニケーションを行う力
地域の GT や生産者にインタビューをしたり、他者との意見交流をしたりすることで、自分の考えをつくったり発信したりする。
- ・つながりを尊重する態度
地域の「ひと・もの・こと」とつながり、自分たちにできることを考える。

(3) 本学習で変容を促す ESD の価値観

- ・世代内の公正
生産者も、消費者も、地球環境も豊かになるような食生活や消費行動が大切であることが分かる。
- ・幸福感を重視する
地域に愛着を持ち、それらを支える人々の思いに触れ、素晴らしさや自分たちが恩恵を受けていることを再認識すると共に、地域の人への感謝の気持ちを持つ。

(4) 達成が期待される SDG s



1 1 持続可能な都市



1 5 陸域生態系

6 展開の概要（全20時間）

主な学習活動 ・ 児童の反応	○指導上の留意点	◇評価
1 GTの方との体験を通して、学習の課題と見通しをつかむ。 (1) 農地水環境保全委員会の方(GT)と一緒に、稲の種籾植え体験をする。 - 一粒の稲の種から芽が出て、たくさんの米が育つなんてすごいな。 - 今年はバケツ稲に挑戦して、大事に育てたいな。  体験活動 稲の種もみ植えをしました！ 農地水環境保全委員会の方に教えていただきました。 (2) 農地水環境保全委員会の方(GT)と一緒に、田植え体験をし、課題を設定する。 - 手作業での田植えは時間もかかるし大変だな。 - 今は機械化が進んでいる。 - おいしい米が育つといいな。 - おいしい米作りの条件を調べたいな。  6月29日田植え体験をしました！ 今は機械化が進んでいますが、手作業での田植えは大変でした。 人間代掻きが楽しかったです。 (3) 調べる内容や方法を話し合い、計画を立てる。 【調べる内容】(例) - 米作りの方法 - 米作りの課題や工夫 - 環境保全 【調べる方法】(例) - 本や資料 - インターネット - インタビュー 	○G Tの方から稲の種籾植えを教えていただき、稲を大事に育てていこうという意欲を高める。 ○G Tの方々と一緒に田植え体験をすることで、上内の地域や人、上内米へ親近感を持つことができるようにする。また、体験活動を振り返り、課題意識を持つことができるようにする。 ○最終的には、地域だけでなく他の地域や他校に発信するというゴールを意識して、単元全体の見通しをもつことができるようにする。	ウ② (主体的) ウ② (主体的) イ① (思判表) ウ① (主体的)
単元のめあて 上内の米作りについて調べよう。		
2 課題を追究する。 (1) 米ができるまでの作業、米作りに適した環境など調べる。 - 稲の観察（随時） - バケツ稲は、どうして枯れてしまったのか。 - 肥料や薬が必要だ。 - 稲穂が出ているね。  バケツ稲の成長や上内っ子の田んぼを観察しました。 稲穂が出ていました。稲の高さ約90cmくらいでした。 成長して、おいしい米がたくさん実るといいます。 (2) 上内の米作りのよさや課題、農家の方々の苦労や努力について調べ、まとめる。 (GTの活用) - おいしい米作りの条件 - 冷たくてきれいな水 - 米の生産と消費、環境について  GTの方に質問したり、話を聞いたりして、上内の米作りについて学びました。 たくさんの人に上内米を「おいしい」と言ってたくさん食べてほしいです。 地域の方の思いや願いを知りました。 	○社会科「米作りのさかんな地域」の学習と関連付けることで、上内の米作りはどうか課題意識を高めるようにする。 ○事前にGTの方と打ち合わせを行い、学習の意図や質問内容を伝えておくことで課題解決を図ることができるようにする。また、上内の米作りの特色や地域の方の思いや願いに触れたりすることができるようにする。	ア① (知技) ア②③ (知技)

(3) 調べて分かったことを、伝え合う。 ・米作り農家の後継問題が大きい。 ・おいしい米づくりには、自然環境や水の管理が重要である。 ・もっと上内米のよさを広めたい。 ・おいしい米をもっと食べてもらいたい。	○調べて分かったことを伝え合うことで、さらに新たな課題を見出すことができるようにする。	イ② (思判表)
上内米のよさをもっと広めよう ～上内っ子米PR作戦！～		
3 上内米のよさをより多くの人に伝えるためのPR活動について話し合い、実践する。 (1) 農地水環境保全委員会の方(GT)と一緒に、米の収穫をする。 ・稲の刈り方を教えていただいたので、上手にできた。 ・たくさん収穫できてうれしい。 ・これまでの稲のお世話や管理が大変だっただろう。 (2) 調べたことを基に、する内容や方法を考える。 ・PRをする場所は、どこがいいかな。 ・おいしい上内米のポイントを伝えよう。 ・農家の方の思いや生産者の顔が見えるようにするとどうかな。 (3) PR活動の準備をする。 ・上内米のよさをPRするためのリーフレット作り ・PR動画の作成 ・FMタントでの呼びかけ (4) 米の販売に向けて準備し、販売する。 ・米の袋詰めや宣伝(のぼり・ポスター)の工夫をして、上内米のよさを伝えたい。 ・たくさん買ってもらって、義援金を送りたい。 これから自分たちにできることを考えよう。	○GTの方々と一緒に稲刈りを体験することで、上内の地域や人、上内米への愛着や感謝の気持ちを持つことができるようにする。 ○他地域に紹介するという相手意識や目的意識を持たせ、内容を精査することができるようにする。 ○米販売やPR活動に向けて6年生と協力して役割分担を決めたり、実践したりできるように、活動の様子を見取り、助言する。	ウ② (主体的) ア③ (知技) イ①③ (思判表) ウ② (主体的)
4 学習を振り返り、まとめる。 (1) 学習を振り返り、これから自分たちができることについて考える。 ・お世話になった地域の方へ感謝の気持ちを伝えたい。 ・上内の米作りが続けられるように、自然や地球環境について考え、行動していきたい。 ・これから、米の生産量を増やすためにも、私たちが米をたくさん食べるようにしたい。 (2) 感謝祭を開く計画と準備をする。 ・プログラム内容の検討 ・必要な準備と役割分担 (3) 感謝祭を開き、調べたことを発表したり、感謝の気持ちを伝えたりする。 ・学習したことの発表 ・感謝の呼びかけ (4) 他校に上内の良さを発信し、交流する。 ※気仙沼市の唐桑小学校とTV会議(6年生) ※国際協働学習(アートマイル)に取り組む。	○一連の活動を振り返り、「地域愛、環境、生産と消費」の視点から自分の考えをもつことができるようにする。 ○感謝祭を開くために、6年生と協力して準備できるように、活動の様子を見取り助言する。 ○感謝祭では、お世話になった農地水環境保全委員会や地域の方を招待し、上内のよさや、感謝の気持ちを伝え、発信することができるようにする。 ○相手校の発表を聞く中で、「持続可能な」という視点から共通点に気づき、ふるさと愛を深める。	ウ③ (主体的) ウ② (主体的) ウ③ (主体的) ア③ (知技)

小学校第4学年 社会科学習指導案

大牟田市立手鎌小学校
教 諭 柴田祐道

1. 単元名 水はどこから

2. 単元の目標

- ・水道を供給する事業は、安全で安定的に供給できるよう進められていることや、地域の人々の健康な生活の維持と向上に役立っていることを理解し、見学・調査や地図などの資料で調べ、まとめることができる。 (知識・技能)
- ・水道の供給の仕組みや経路、県内外の人々の協力などに着目して、飲料水の供給のための事業の様子を捉え、それらの事業が果たす役割を考え、表現することができる。 (思考・判断・表現)
- ・学習したことをもとに、水を大切な資源として捉え、節水などに向けて、自分たちが協力できることなどを考えたり選択・判断したりするなど、資源の有効利用に関心を高めようとしている。 (主体的に学習に取り組む態度)

3. 単元について

(1) 教材観

本内容は、「現代社会の仕組みや働きと人々の生活」に区分されるものである。水道の供給の仕組みや経路、県内外の人々の協力などに着目して、見学・調査したり地図などの資料で調べたりして、まとめ、飲料水の供給のための事業の様子を捉え、それらの事業が果たす役割を考え、表現することを通して、水道を供給する事業は、安全で安定的に供給できるよう進められていることや、地域の人々の健康な生活の維持と向上に役立っていることが理解できることを目標としている。

本市では、平成28年度より「大牟田市新水道ビジョン」を策定し、10年計画で事業が進行している。平成27年度の市民へのアンケート調査によると、「水道水をそのまま飲んでいるか。」の問いに対し、「飲んでいる。」と回答した割合は、37%にとどまっている。本市のアンケート分析にも、水道水の安全性を周知し、飲用度の向上を図るよう課題が挙げられている。

本実践においては、普段何気なく蛇口をひねって水を使うことができるのは、安全で安定的に供給できるように進められている事業に支えられているからだということを理解し、さらに、無印良品の「水道水」供給サービスの取組を教材化することによって、自然環境の保全と回復に努めようとする価値観を育みたい。

(2) 児童観

本学級の児童は、水道を供給する事業は、安全で安定的に供給できるよう進められていることや、地域の人々の健康な生活の維持と向上に役立っていることについては、概ね理解している。しかし、手洗い・掃除等の普段の学校生活では、節水や水道水の安全性の認識、さらに自然環境への配慮が希薄である。また、本市同様のアンケート結果からも、水道水の飲用度は67%と決して高くはない。

(3) 指導観

実際の指導に当たっては、天然水を購入することがいけないことであるという認識にならないよう配慮する必要がある。

「わたしたちの生活も環境も豊かになるためには、今後どうすればよいか。」という学習課題に対し、無印良品の「水道水」供給サービスの取組の記事を提示した上で、「飲用するなら、水道水か天然水か」を選択させる。その際、「わたしたちが安心・安全に水を使うことができるようにたくさんの人々が努力をしていたから、水道水を飲めばいいよね。」といった理由も加えて選択できるようにしたい。

また、話し合う場面では、「安心・安全だから、水道水。」という考えにとどまらず、社会科で学習したプラスチックゴミの問題や輸送によるフードマイレージの観点からも考えることによって、「もし天然水を購入する頻度が減ったら、環境への影響が薄れ、天然水自体がさらにおいしくなるかもしれない。」「水の使用による消費と飲用による消費全体を抑えることが環境保全につながる。」などの多面的・総合的に考える力や批判的に考える力を育みたい。

このような活動を通して、いつでも安心・安全な水が出ることが、あたりまえではなく、幸せな環境であるということに気付き、自然環境を大切にすることを再認識させることで、これからの水との新たな向き合い方を作り上げ、行動化していくことができるようにしたい。

4. 単元の評価規準（単元の目標との整合性に注意しなければなりません）

ア 知識・技能	イ 思考力・判断力・表現力	ウ 主体的に学習に取り組む態度
① 水道を供給する事業は、安全で安定的に供給できるよう進められていることや、地域の人々の健康な生活の維持と向上に役立っていることを理解している。 ② 水道を供給する事業について、関連施設や事業所を見学したり、地図や関係機関が作成した資料などで調べたりして、県の白地図や図表などにまとめている。	① 水道の供給の仕組みや経路、県内外の人々の協力などに着目して、飲料水の供給のための事業の様子を捉え、それらの事業が果たす役割を考え、表現している。	① 学習したことをもとに、水を大切な資源として捉え、節水などに向けて、自分たちが協力できることなどを考えたり選択・判断したりするなど、資源の有効利用に関心を高めようとしている。 ② 水道を供給する仕組みについて、予想や学習計画を立てたり、見直したりして、主体的に学習問題を追究し、解決しようとしている。

5. ESDとの関連

（1）本学習で働かせるESDの視点（見方・考え方）

- ・相互性・・・水は循環しており、天然水だからといって環境を考えているかのようなふるまいをしていると、天然水を運ぶための輸送や容器が地球環境に大きな影響を及ぼし、天然水自体の品質が低下したり、わたしたちの生活用水にも影響が及んだりする恐れがある。
- ・有限性・・・わたしたちが水が無駄遣いすると、水不足に陥るなどの要因となり得るため、普段から節水を心掛けることが大切である。
- ・連携性・・・水の消費行動については、水を販売する側の努力があることについても理解した上で、消費者であるわたしたちが地球環境を考えながら、行動することが大切である。
- ・責任性・・・わたしたちが普段の日常生活を見直して、消費行動を変えていくことが大切である。

(2) 本学習を通して育てたいE S Dの資質・能力

- ・批判的に考える力（クリティカルシンキング）
水の使用や消費行動が環境に配慮したものか、自分の生活を見つめ直す。
- ・多面的・総合的に考える力（システムズ・シンキング）
「わたしたちの生活も環境も豊かになるためには？」について考える。
→販売されている水を購入頻度を抑えることができれば、環境への影響が減り、身の回りの水がもっとおいしくなるかもしれない。
- ・コミュニケーションを行う力
これからの水との向き合い方を意見交流することで、自分の新たな考えを作り上げる。
- ・つながりを尊重する態度
水の無駄遣いや水の購入は、地球規模の課題と密接に関わっているので、自分たちが変えていかなければならない。

(3) 本学習で変容を促すE S Dの価値観

- ・自然環境の保全と回復
わたしたちの水がどのようにして届いているかを知ることを通して、自然環境を大切にすることを再認識させる。
- ・環境と経済
経済活動において、環境を優先した生産と消費の関係性を構築していくことが大切である。
- ・幸福感を大切にすること
いつでも安心・安全な水が出ることが、あたりまえではなく、幸せな環境であるということに気付く。

(4) 達成が期待されるSDGs

- 3 すべての人々の健康的な生活の確保
- 6 すべての人々の水と衛生の利用可能性と持続可能な管理の確保
- 12 持続可能な生産消費形態の確保
- 13 気候変動及びその影響の軽減
- 14 持続可能な開発のための海洋資源の保全
- 15 持続可能な森林の経営

6. 展開の概要（全13時間）

	学習活動	●学習への支援 ・予想される児童の反応	○評価 ・備考
① ②	<u>自分たちの生活をふりかえろう</u> ○自分の家の水の用途や使用量、学校の水の使用量などを調べ、疑問に感じたことを話し合う。	●本市の1日に使われる水の量と水道を使う人口のグラフを提示し、学習の見通しをもたせる。 ・毎日こんなにたくさんの水を使っていたなんて知らなかったから、びっくりしました。	ウ② (主体的)
わたしたちがいつもたくさんの水を使うことができるように、だれがどのようなことをしているのだろう。			

③ ⑨	<u>水はどこから流れてくるの だろう？</u> ○水の経路 ○浄水場の役割 ○ダムと水源の森林のはたらきに共通する役割や機能 ○県や地域を越えた水を守るための取り組み ○水道の普及が公衆衛生の向上に果たした役割	●地図や資料をもとに、水道管をたどったり、水道に関わる施設を調べたりさせる。 ・3ヶ所の水源から水が送られているんだね。 ●浄水場見学に向けて、見学の視点を明確に持たせる。 ・わたしたちが安心して水を使ったり飲んだりできるために、どんなことをしているのかな。 ●共通点を調べさせる。 ●人々が県や地域を越えて協力して行っていることを理解させる。 ●水道管を守る人々の工夫や努力に着目させる。	ウ② (主体的) ア② (知・技) ア② (知・技) イ① (思判表) ア① (知・技)
⑩ ⑪	<u>水のゆくえは？</u> ○水源から下水処理されるまでを総合的にふり返り、水の循環を捉える。 ○節水の取り組みが進められていることを捉える。	●下水処理施設の仕組みを捉えさせることで、水が循環していることに気づかせる。 ・水は、できるだけ汚さないようにしよう。 ●「どうしたら水の節約ができるかな。」と問いかけることで、日常生活に視点を向ける。 ・手を洗うときに、水を出しっぱなしにしないように気を付けよう。	ア① (知・技)
⑫ ⑬	<u>学んだことをこれからの生活に生かそう！</u> わたしたちの生活も環境も豊かになるためには、今後どのようにすればよいだろうか。 ○無印良品の「水道水」供給サービスの取組の記事から、自分たちの行動について話し合う。 ○自分たちの今後の行動について考え、表現する。	●「安心・安全だから、水道水」という考えにとどまらず、社会科で学習したプラスチックゴミの問題や輸送によるフードマイレージの観点からも考えさせる。 ・水道水だって、安心安全だからこれからは水道水でもよさそうだね。 ・環境にも優しいし、ゴミも減らせるね。 ・二酸化炭素の排出も抑えられるね。 ●わたしたちの消費行動が、地球環境に大きく影響していくことに気づかせた上で、日常生活の行動の変化につなげる。 ・これからは、地球環境を意識した生活をする。	ウ① (主体的) ウ①② (主体的)

中学校第3学年 理科学習指導案

大牟田市立宅峰中学校

教諭 田 中 智 文

1. 単元名 単元3 自然界のつながり

終章 自然界のつり合いを考えよう

2. 単元の目標

- ・自然界では「食べる・食べられるという関係」と「生物の数量の関係」から、生物がつり合いを保って生活していることを認識し、私たち人間も含めた生態系の中で生物相互の数量への影響について理解することができる。【知識及び技能】

- ・生物の個体数変動のデータから生物相互の影響を読み取り、自らの考えを導いたり、食物連鎖における個体数の量的な関係性について考察し、まとめたりすることができる。

【思考力・判断力・表現力等】

- ・生産者・消費者の数量の関係や生物のつり合いについて関心を持ち、人間が生態系に影響を及ぼす資料や身近な例をもとにその問題点や解決策を探究しようとするとともに、持続可能な社会の実現に向けて自然環境のつり合いのしくみを大切にしようすることができる。

【自然現象への関心・意欲・態度】

3. 単元について

(1)教材観

本単元では、自然環境を調べ、自然界における生物相互の関係や自然界について理解させるとともに、自然と人間の関わり方について認識を深め、自然環境保全の技術の利用の在り方や、持続可能な社会をつくるためにどのような行動をとるべきかを科学的に考察し判断する態度を養うことを主なねらいとしている。特に生態系における生物相互の関係性のなかで、生物のつり合いが保たれていることを理解させる。さらに、人間の豊かな生活を追求しようとした結果、人為的原因で地球環境に様々な影響を及ぼしている事例があることに気づかせ、生徒一人一人が、かけがえのない地球という環境の中で生活する一員としての責任を自覚し、持続可能な社会の実現に向けて具体的な行動ができるようにしていきたい。

(2)生徒観

本学級の生徒は、明るく元気な生徒が多い。理科の学習においても意欲的に取り組むことができている。事前アンケート「自然界の生物のつながりについて知っていることを書いてください」の質問に対して解答は以下ようになった。

- ・生物は食べる食べられる関係がある ・食物連鎖や食物網 ・1つの生物だけでは生きていけない
- ・私たちが毎日他の生き物を食べて生きている ・生物の数は他の生物に影響を与えている など

アンケートの結果から、生物は食べる・食べられる関係にあることや、私たちが他の生物を食べて生きているという食物連鎖についての記述は多かったが、私たち人間の行動が他の生物に与えている影響等についての記述はなかった。このことから、食物連鎖という知的側面はある程度理解しているものの、私たち人間が、自然界の一員であることを認識している生徒は少ないと考えられる。

(3)指導観

本単元の指導に当たっては、まず、カンジキウサギ、ヤマネコ、トナカイの個体数変動のデータを読み取る活動を通して、自然界では食べる・食べられるという関係と生物の数量の関係から、生物がつり合いを保って生活していることを認識し、生態系の中で生物相互の数量への影響について理解させる。その後、私たちも地球という環境の中で生活する一員であることを自覚するとともに、持続可能な社会の担い手としてどのような行動が必要となってくるか主体的に学習をすすめていくため、インターネットを活用して「人間の生活と生態系への影響」をテーマに調べ学習を行う。

調べた内容をグループで発表する活動を通して、私たち人間も豊かな生活を追求しながら、自然や生物などの影響も考えて生活が出来る持続可能な社会を作るための具体的な行動を考えさせる。

4. 単元の評価規準

ア 知識及び技能	イ 思考力・判断力・表現力等	ウ 学びに向かう力人間性など
①それぞれの動物の食物と、数量の変動の関係を理解し、その後の増減を正しく理解できる。 ②私たち人間も他の生物を食べ生きてる消費者であり、人間の行動が他の生物の数量へ与える影響について理解している。	①生物の個体数変動データから数量について考察し、数量の増減について、自然環境保全などについてまとめたり考えを表現したりしている。	①身の回りの生物の数量の関係やつり合いについて関心を持ち、身近な例を進んで調べようとしている。 ②持続可能な社会の実現に向けて、具体的に自分に何ができるかを進んで考えようとしている。

5. ESDとの関連

(1)本学習で働かせるESDの視点(見方・考え方)

【相互性】…生物は食べる・食べられるという関係の中で互に関わり合いながら生活しており、生物の数量の変動は、他の生物にも影響をあたえる。

【有限性】…生物の数量には限りがあり、つり合いを保つことのできる限度を超えた数量の変化は、生物種の絶滅にもつながることがある。

【責任性】…人間だけが豊かになれば良いのではなく、かけがえのない地球という環境の中で生活する一員としての自覚と責任を持った行動を行う。

(2)本学習を通して育てたいESDの資質・能力

【クリティカルシンキング】…魚の乱獲や都市開発など、人間の豊かさのみを追求した人為的に引き起こされる問題があることを認識し、生態系の保全に向けたよりよい解決策を考察することができる。

【長期的思考力】……………ある生物種の増減が他の生物種に与える長期的な影響について、データに基づいて考察し、持続可能な社会をつくっていくために必要な行動について具体的に考えることができる。

(3)本学習で変容を促すE S Dの価値観

【自然環境・生態系の保全を重視する】……生物相互の関係についての理解を深め、自然環境と生態系の保全に努める。

【世代間の公正を意識する】……人為的な影響で生物の数量変化が、長期的に見て様々な生物にも影響が出ることを考察し、持続可能な社会づくりの具体的な行動について考える。

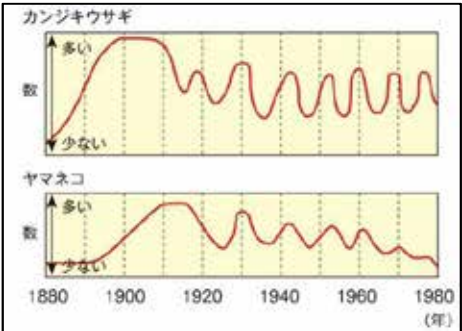
(4)達成が期待されるSDGs

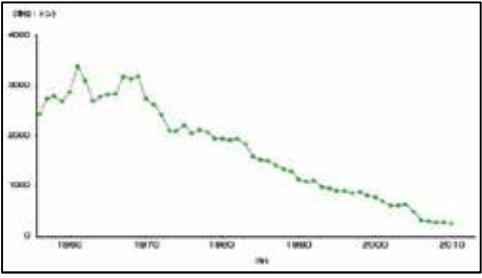
【目標15(陸上資源)】

【目標14(海洋資源)】

【目標12(持続可能な生産と消費)】

6. 展開の概要(全5時間)

	主な学習活動	●学習への支援 ・予想される生徒の反応	評価 ・備考
第一 次	ひとつの生態系における生物の数量変動のデータから、生物相互の数量への影響について考察する。	●カンジキウサギ、ヤマネコ、トナカイの過去100年間の数量変動データを提示する。	アー① ②
(1)	発問 食べるものが増えると、生物の数にはどのような変化があるだろうか  カンジキウサギの数量が急増した理由を考える。 人間の行動が他の生物に与える影響について考える。	・ウサギの数が増えるとヤマネコの数も増え、ウサギの数が減るとヤマネコの数も減っている。 ・ある生物の数量が変化すると、生態系における他の生物の数量にも影響を与える ・一度、生態系のつりあいが崩れると、もとにもどるまでに長い年月がかかる。 ●なぜカンジキウサギの数が増えたのか ・ウサギにとって過ごしやすい年が続いた。 ・エサが増えた ・ウサギを食べる生物が減った。 ・人間が持ち込んだ ●自然要因ではなく、食料として持ち込んだものが野生化した人為的な要因であることを説明する。	

第二次 (2)	私たちの行動が、他の生物の個体数に影響を与えている事例について考える。  その他に人間の行動が、他の生物の数量に与えている事例について調べる。 発問 人間行動が、他の生物の数に影響を与えているものはあるだろうか ・乱獲 ・外来種の野生化 ・気候変動 ・環境破壊 など ・乱獲により個体数が減っているもの ・食用目的で人間が持ち込んだ外来種が野生化したもの ・気候変動や環境破壊により個体数が減少したもの	●ウナギの個体数の減少のデータを見せ、個体数が減少している理由を考えさせる。 ・乱獲による個体数減少 ・ウナギの生息環境の変化 ・環境の変化 ●インターネットを利用して、私たちの行動で、生物の数量が変化している事例について調べさせる。	アー② イー① ウー①
第三次 (2)	人為的な原因により様々な生物の数量に変動が起きていることを認識する。 10年後や100年後など長期的にみて生物の数量にどのような影響が出るか考える。 持続可能な社会をつくっていく一員として、私たちはこれからどのような行動をすべきか考える。 発問 人間も他の生き物も共存できる持続可能な社会をつくるために、私たちはどのような行動ができるだろうか	●それぞれが調べた内容を発表させる。 ●他の人が調べた内容を聞かせる。 ●第一次の内容や、生物の絶滅についての学習を想起させる ・このままでは絶滅する種もいる。 ・他の生物の数にも影響が出る。 ・生物のつり合いがもとに戻るには長い年月がかかる ・近い将来絶滅する種が多数いる。 ●人間の豊かな生活と、持続可能な社会を作っていくために、私たちにはできることは何かあるか考えさせる。 ・フードロスをなくす ・外来種の持ち込みをしない ・環境の保全につとめる ・ペット飼育で無責任な行動をしない ・他の生物のことも考えた行動をとっていく必要がある	イー① ウー②

1 単元名 化学変化と電池

2 単元の目標

- ・観察や実験などを通して水溶液とイオン、酸・アルカリとイオンに関する事物・現象についての基本的な概念や原理・法則を理解し、知識を身に付けることができる
- ・水溶液とイオン、酸・アルカリとイオンに関する事物・現象の中に問題を見いだし、目的意識をもって観察、実験を行い、事象や結果を分析して解釈し、自分の考えを表現できる
- ・水溶液とイオン、酸・アルカリとイオンに関する事物・現象に進んで関わり、それらを科学的に探究するとともに、事象を日常生活との関わりでみることができる

3 単元について

(1) 教材観

人類が消費するエネルギーは、膨大であり、地球全体の環境に大きく影響を与えている。エネルギーとして消費しているものは、おもに化石燃料であり、これらを燃焼して出る二酸化炭素が地球温暖化の原因とされている。それを解決するために再生可能エネルギーが注目されている。現在では、再生可能エネルギーから、水素をつくることができ、水素で走る燃料電池車が注目されている。本単元に関しては、中学校第2学年の「化学変化と原子・分子」で物質が原子や分子でできていること、「電流とその利用」で電流が電子の流れに関係していることを学習している。本単元では、これらの上に立って、様々な水溶液に適切な電圧をかけ、水溶液の電気伝導性や電極に生成する物質を調べる観察、実験を行う。さらに、酸とアルカリの性質を調べる実験及び中和反応の観察、実験を行い、その結果を分析して解釈し、イオンの存在やその生成が原子の成り立ちに関係すること、中和反応をイオンのモデルと関連付けて理解できるようにする。燃料電池は、燃料を酸化させて電気エネルギーを得ることである。これらの学習は、燃料電池自動車（水素自動車）などの化学変化を利用した身近なものへの興味・関心を高め、物質の微視的な見方や考え方を養う上で意義深い。

(2) 生徒観

本学級は、男子17名、女子14名である。観察・実験が好きで、意欲的に取り組む生徒が多い。1年次より、観察・実験の際には、既習事項を振り返りながら根拠を基に予想や仮説を立てさせる場面をできるだけ多く設定してきたので、少しずつ予想や仮説を書くことができる生徒が増えてきた。しかし、先日行った学習状況実態調査の結果には「自分の考えを他の人に説明したり、文章に書いたりする事は難しい」に対して、あてはまるが33%、まああてはまるが41%であった。また、「友達の間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりしている」に対して、あまりあてはまらないが16%、あてはまらないが5%であった。そこで、興味、関心が高まるような課題を与え、自分の考えをつくらせたり、班で交流させたりして、自分の考えがさらに深まるようにさせたい。また、環境問題の種類について知っている生徒は少なく、地球温暖化という言葉を知っていても、その原因についてまで知っている生徒はほとんどいない。そこで、地球温暖化の原因にも触れながら、その解決になる取り組みまで考えさせたい。

(3) 指導観

本単元の指導にあたっては、物質の微視的な見方や考え方を、観察、実験を通して一層高め、イオンという粒子の存在に気付かせ、それを用いて化学現象を解釈し、論理付けて説明できるようにさせたい。そのために、まず、様々な水溶液に電流が流れるかどうかを調べる実験を行い、また、電解質の水溶液に電流を流したときの変化をじっくり観察させ、両極から発生する気体や析出する物質を確かめながら、イオンという粒子の存在を理解させる。次に、電池の実験から電解質の水溶液と2種類の金属から電流が取り出されることに気付かせる。また、酸・アルカリとイオンでは、酸性を示す物

質が水素イオン、アルカリ性を示す物質が水酸化物イオンであることを、中和反応の実験を通して理解させる。最後に酸とアルカリの水溶液を混ぜ合わせ中和させることを、イオンのモデルを用いて説明できるようにする。また、水の電気分解を行い、水素と酸素ができることを理解させ、その後に、逆の化学変化を起こすことで電気が生じるかどうかを、燃料電池を作る実験で確認させる。そして、燃料電池を利用した電気自動車が発売されていることを説明し、そのメリットとデメリットを調べさせる。最後に、水素自動車と環境問題を関連付けて考えさせ、環境問題についての考えが深まるようにしたい。

4 単元の評価基準

知識・理解	思考力・判断力・表現力	主体的に取り組む態度
原子がイオンに変化する現象についての基本的な概念や原理・法則を理解できる	水溶液とイオン、酸・アルカリとイオンに関する事物・現象の中に問題を見だし、結果を分析して解釈し、自分の考えを表現できる	水溶液とイオン、酸・アルカリとイオンに関する事物・現象を日常生活との関わりで捉えることができる

5 ESD との関連

(1) 本学習で働かせる ESD の視点

- ・有限性…エネルギー資源（化石燃料など）には限りがあるので、それらの代わりになるものが必要となっていること
- ・相互性…化石燃料を使用することで、環境への影響が懸念されている。二酸化炭素や窒素酸化物などの有害物質を排出しない、または排出量を少なくすることが求められる

(2) 本学習を通して育てたい ESD の資質・能力

- ・多面的、多角的に考える力（クリティカルシンキング）
理科の学習で頻繁に出てくる気体の 1 つである水素が、私たちの生活でどのように利用されているかを考える

(3) 本学習で変容を促す ESD の価値観

- ・自然環境、生態系の保全を重視する
自動車から排出される二酸化炭素が地球温暖化につながっていることから、二酸化炭素を排出しない水素自動車の価値について考える

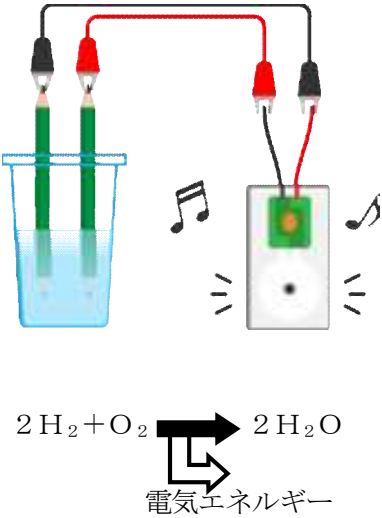
(4) 達成が期待される SDGs

目標 7（エネルギー）

目標 13（気候変動）

6 展開の概要（全 5 時間）

時	学習活動・内容	水素に関する ○問い・内容	支援の内容・手だて・ねらい	評価
1	1 水素について学習してきたことを振り返る。 2 身近にあるものを使って、電池を作らせる。 ＋極：十円玉 －極：一円玉 電解質水溶液：食塩水 ろ紙、電子オルゴール	○水素にはどのような性質があるのだろうか？ ・水素は軽い気体、水に溶けにくい、火を近づけると爆発して燃える	ねらい：化学電池ができる条件に気付かせる ●気体の性質で学習した水素の性質を思い出させるために、水素についてのイメージマップを書かせる	電池には、電解質水溶液と異なる 2 種類の金属が必要であることを理解できる

2	1 化学電池をつくり、プロペラが回ることを確認する +極：銅板 -極：亜鉛板 電解質水溶液：塩酸 2 電極付近を観察する +極：水素が発生する -極：亜鉛板がとける	○化学電池ができているときには、電極付近ではどのような化学変化が起きているのだろうか。 ・+極付近の水素イオンは、電子を受け取り、水素原子となり、水素原子どうしが結びついて水素分子となる。	ねらい：化学電池の電極付近のようすを観察させ、電流が流れる仕組みを理解させる ●電極付近の化学変化や電子の移動を視覚的に理解できるように、パワーポイントを使って説明する	亜鉛板が溶けて亜鉛イオンとなるときに電子を放出し、その電子の移動によって電流が流れていることを理解できる
3	1 一次電池と二次電池の違いを知る 一次電池：電圧がもとに戻らない電池 二次電池：充電によって電圧が、元に戻る電池 2 水の電気分解を行う +極：酸素が発生する -極：水素が発生する $2\text{H}_2\text{O} \longrightarrow 2\text{H}_2 + \text{O}_2$ (電気分解)	○水は電気分解されると、何という物質になるだろうか。 ・電気分解によって水は水素と酸素に分解することができる。 ・一極に水素が発生する。	ねらい：いろいろな電池の特徴と水の電気分解を理解する ●燃料電池の仕組みを理解させるために、2年生で学習した水の電気分解を振り返る ●水が水素と酸素に分解されることを理解させるために、化学反応式を使って説明する	水の電気分解と逆の化学変化が起こることで、電気を取り出すことができることを理解できる
4	1 燃料電池を身近なものを使って作る  $2\text{H}_2 + \text{O}_2 \longrightarrow 2\text{H}_2\text{O}$ 電気エネルギー	○水素と酸素が結びついて水ができるときに、電気を取り出すことができるだろうか。 ・水素と酸素が結びついて水ができる化学変化で電気が生じ、それによって電子オルゴールになる。	ねらい：水素と酸素が結びつき、水ができる化学変化で電気が生じることを確かめる。 ●電気分解によって水溶液中に発生する気体の水素や酸素であり、それらがなくなって水になるときに電気が生じていることで電子オルゴールがなっていることを説明する	水素と酸素が結びついて水ができる化学変化で電気が生じていることを理解できる

5	1 私たちの生活に、水素がどのように利用されているかを考える ・TOYOTAが発売している水素自動車（FCV）である「MIRAI」について学ぶ 2 水素自動車の普及についてのメリットとデメリットについて考える ・メリット ①二酸化炭素を排出しないため環境にやさしい ②騒音が少ない ③エネルギー変換効率がよい ・デメリット ①値段が高級 ②水素ステーションが全国に少ない ③水素の供給するために二酸化炭素が排出する	○水素が私たちの生活でどのように利用されているだろうか。 ・水素が私たちの生活に欠かせない自動車の燃料として使用されている。 ・水素自動車は、水素と酸素を結び付けて水ができるときに生じる電気を利用して動いている。 ・水素自動車から排出されるのは、水なので環境にやさしい。 ・水素の供給についてはいくつか課題がある。	ねらい:燃料電池の活用によって自動車が動いていることを知り、そのメリットとデメリットについて考えることができる ●私たちの生活に関わっている水素自動車を、視覚的に捉えさせるために、動画を見せる。 ●インターネットで、水素自動車のメリットやデメリットを調べさせる。	水素は、自動車の燃料として使用され、その時に排出される物質が、水であるため、環境にやさしいことを理解できる
---	--	---	---	--

第2学年道徳科 学習指導案

大牟田市立松原中学校
池崎 龍一

1、題材名 しあわせを乗せるタクシー会社（あさ出版）

2、題材の目標

働くことの意義について理解を深め、働く価値を見出し自分自身の職業観を育てる。【道徳的心情】
班で意見を交流させながら、仕事をする中で得られる重要な要素を見つけ、それぞれの仕事に対する価値を探ることができる。【道徳的実践意欲と態度】

3、指導観

○題材について

本内容は、指導区分C「主として集団や社会との関わりに関すること」の（13）『勤労の尊さや意義を理解し、将来の生き方について考えを深め、勤労を通じて社会に貢献すること。』にあてはまるものであり、生徒が働くことに対して、自分自身の価値観を大切にしたい上で学級のさまざまな意見を通して勤労の意義を考えさせる内容である。

本資料「しあわせを乗せるタクシー会社」は、『日本でいちばん大切にしたい会社3』に載っている話の1つである。

長野オリンピック特需に沸く県内にあって中央タクシーも数か月もの借り切りの予約が入ってきた。社長の宇都宮さんは、社員は喜んでいるだろうとある運転手に聞いたところ「いつもご利用されている方はどうされるのか。」と答えた。この答えに宇都宮さんはここまで「お客様第一主義」が浸透していたことに衝撃を受けた。

本資料を通して、勤労の意味・すばらしさを感じる心を育てたい。

○生徒について

本学級の生徒は、周りにごみが落ちていたり拾い、困っている人を見かけると声をかけることができ、周囲に気を配ることのできる生徒が多く、授業や学校生活全般を落ち着いた態度で臨めている。

今自分にできるものやことはないか考えて行動できているものの、自分の将来像というのがはっきりしていない者も多い。

AIの普及により10年後には、今ある職業の50%がなくなるかもしれないと言われる中、これから正しい職業観について学ぶことが大切であると考えられる。

○指導について

日本の中学、高校、大学の卒業3年後の離職率がそれぞれ62%、39%、32%となっており、ニートが71万人、フリーターが155万人というのが現状である。（2019年厚労省）

働くということはお金を稼ぐためだと思いがちであるが、生きがいや自己実現につながっている。また、社会への貢献でもあり仕事は必ず社会そして誰かの役にたっている。

そこで本題材を通して、働くことのすばらしさを感じ、地域・社会、相手を大切にする心情を育てたい。

4、題材の評価基準

一概に評価基準は設けないが、以下の表現を教師側の評価とする。

【道徳的心情】宇都宮さんが優先した地域への気持ちを考え班で意見を交流する。

- 地域の為に役立つことで得られる喜びが、お金を得ることよりも大切だから。
- 地域の人が困らないようにすることが、自分の役目だから。

【道徳的実践意欲と態度】おばあちゃんからの手紙を読んで地域の人の思いから仕事の価値を考える。

- 地域の人を大切にしてきたのは間違いではなかった。

5、ESD との関連

(1) この題材で働かせる ESD の視点（見方・考え方）

- ・ 公平性・・・高齢者にとって地域のタクシー会社は大切な交通手段であり、一時期でも特需によりタクシーが使えないと大きな負担となること
- ・ 連携性・・・タクシー会社にとって売り上げは給料やガソリン代になるのでとても大切であるが、お客様に選ばれるような会社が今後存続していくこと
- ・ 責任性・・・働くことは最終的に誰かの役に立つことであり、相手を思いやる気持ちを持つことがもっても大切であること

(2) この学習を通して育てたい ESD の資質・能力

- ・ つながりを尊重する態度
働くことで人との関係ができ、より豊かな生活が送れることを考える。
- ・ 未来像を予測して計画を立てる力
オリンピック特需を狙い一時期だけの経済効果をもたらすことが良いのか、地域のお客様を大切に長く利用してもらう方が良いのかを考える。

(3) この学習で変容を促したい ESD の価値観

- ・ 世代間の公正
高齢者にとって地域密着の会社や店は大切な存在である。
- ・ 幸福感を大切にする
目の前の大金を得ることが「本当の豊かさ」ではない。

(4) 達成が期待される SDG s

- 3 保健
- 8 経済成長と雇用

6、展開の概要

段階	教師の発問と予想される子どもの考え	教師の支援	形態	配時
気づく	1. 働くことに対する価値を紹介する。 お金、やりがい・いきがい、誰かのため、の割合を円グラフで表す。 働くことで大切な思いは何なのかを考えよう。		一斉	5

	2. 「しあわせを乗せるタクシー会社」を読んで、本時のねらいを追及する。 (1) タクシー会社にとって大切なものについて考える。	仕事で一番大切にするものについてタクシー会社を例に注目させる。	個人 ↓ 班	15
探る 深める	【中心発問】あなたは「オリンピック特需」と「地域のお客様」のどちらが大事ですか？			
	(2) (宇都宮さんが「オリンピック特需」より「地域のいつものお客様」を優先したのはどんな気持ちか考える。 ○宇都宮さんのすばらしいところはどこですか？ ・オリンピック特需より地域のお客さんを優先したことがすごい。 ・困っている人を助けるのが自分の役目。 3. 働く意義について考える。 (1) おばあちゃんの手紙から考える。 ○おばあちゃんの手紙から宇都宮さんはどんなことを学びましたか？ ・地域に信頼される会社、お客様第一主義を目指してきたことは間違いではなかった。	働く価値について考えさせる。 稼ぎどきに目をつむりいつものお客様を優先した社長の心情にせまる。	個人	15
	働くことで大切な思いは、仕事は社会を支え、世の中に貢献し人を幸せにすること。 (2) 働くことは人を幸せにすることができる。ことを知る。 (3) 教師の話を聞く。 (4) 振り返りを書く。	おばあちゃんの手紙を読んで地域の人からの信頼をあらためて確認させる。		15

○この授業を深め広げるために（教科、地域との関わり）

教科	内容
特活	アンケート【1時間】
総合	職場体験【6時間】
道徳	本時【1時間】
総合	キャリア教育「先輩に学ぶ」【1時間】

第2学年社会科学学習指導案

大牟田市立宮原中学校

教諭 中野 正貴

1. 単元名 「日本の諸地域 中国・四国地方」

2. 単元の目標

- (1) 中国・四国地方や馬路村における課題である「過疎化」と、その解決策である「村おこし」について、自らの地域と比較しながら、意欲的に学習することができる。(主体的に学びに向かう態度)
- (2) 馬路村の村おこしの秘訣について、多面的・多角的にまとめることができる。(思考力・判断力・表現力)
- (3) 本州四国連絡橋建設前後の中国・四国地方における人口変動のグラフから、ストロー現象について読み取ることができる。(知識・技能)

3. 単元について

(1) 教材観

今日、日本を含む世界では、様々な課題が山積している。先進国では、少子高齢化による労働人口の減少や働き方の問題、社会保障の問題などが起きている。一方、発展途上国では、発展と環境保全の両立や、人権保障、安全保障の問題が起きている。また、大牟田市や宮原校区においても、少子高齢化に伴う人口減少の問題や、雇用の確保の問題、観光資源の活用など、多種多様な課題がある。

現在中学校2年生である生徒が大人へと成長する時代は、今以上に多種多様な課題が出てくることも予想される。また、労働人口が減少し、使用可能な資源も減少していく中、生徒たちは新たな価値観を創造したり、合理的な思考を駆使したりしながら、社会を創造する構成員となっていく存在である。併せて、有権者の一人として、国レベルで起きている問題を自分の問題としてとらえ、自分の考えを基に選挙で一票を投じていくこととなる。人口減少によって一票の重みが増していく中、合理的に思考し意思決定を行う思考・判断力はもちろんのこと、基本的な知識や情報を収集するために必要な技能などの能力が求められる時代となっていると考える。

本単元では、上記した変化の最中にある時代の中でも、特に喫緊の課題となりつつある「過疎化」について取り上げる。「過疎化」とは、若年人口の流出と高齢化によって、地域コミュニティの維持が困難となる社会問題である。地域コミュニティの維持については、コンパクトシティ論など、都市中心部への人口の移動と集中により解決可能であるという考えも欧州を中心として存在しているが、日本ではまだ浸透していない。しかし、その地域で長年暮らし、思い入れもあり、どうにかして自らの故郷を存続させたいという人々の思いを考えれば、日本における「過疎化」の問題を、地域コミュニティの維持と両立させながら解決する必要がある。なお、ここにおける解決とは、十分な自主財源の確保である。

このように、全国各地で過疎化の解決に苦慮する中、過疎化の解決に成功した地域が存在する。それが本単元で取り上げる馬路村である。馬路村は、高知県にある村であり、人口は1000人に満たない小さな村である。高齢化率も本市と同じ40%前後となっている。かつて馬路村では、豊富な山林を生かした林業を基幹産業とした地域であった。しかし、時代とともに林業も限界を迎え、若年人口の流出と高齢化により地域コミュニティの維持という問題に直面することとなった。しかし、当時高知県内では一般的であった「ゆず」に着目し、かつ供給過多となりつつあった高知県内ではなく、県外を中心とした「田舎感」「日本の故郷感」を刺激する独自のマーケティングを、村全体が村への愛情で一致団結して展開し、数十年継続した結果、現在では年商31億円を超えるまでとなった。

上記のような馬路村の取り組みは「村おこし」として知られるが、各地で村おこしに苦慮する地域も多い中、他地域との差別化という村おこしの基本を行いながらも、マーケティングにおける馬路村を売り込む工

夫など特殊性が見られる。この「馬路村」の取り組みから、本市でも課題となっている「過疎化」や「村おこし」について学びを深めたい。

(2) 生徒観

生徒は、小学校4年生の段階で、県内の産業の特色や地域について、そこでの人々の営みや産業について学習している。また、小学校5年生では、日本の産業の特色についても学習している。しかし、日本の地理について、すべての都道府県を覚えている生徒は全体の2割ほどであり、基本的な地理的事象の定着については課題がある。

大牟田市については、それぞれの小学校における学習で、探求的な学習を行ってきており、本市の状況や文化遺産などについては、ほとんどの生徒が認識できている。しかし、大牟田市の高齢化率や人口減少などの課題については、正確に認識できておらず、それをどのように解決していけばよいのかも認識できていない。また、生徒の問題発見力について、以下のようなアンケート調査を行った。

	設 問	あてはまる	あてはまらない
1	問題に対して、よりよい解決策を考えることができる。	56%	43%
2	積極的・発展的に、よりよい解決策を考えることができる。	50%	50%
3	物事を良いほうに考え、粘り強く、解決に向かうことができる。	53%	46%

問題発見については、おおむね得意としている生徒が多いことが分かる。しかし、苦手としている生徒も半数程度いる。特に、問題発見については、比較的得意であると認識している生徒が多数を占める一方で、解決策を考えたり、解決したりする活動に対して苦手意識を持っている生徒が多いことが分かる。

(3) 指導観

本単元では、学習指導要領にも述べられている通り、人口や都市・村落を中核とした考察の仕方について学習する。特に、地域の広がりや地域内の結び付き、人々の対応などに着目して、他の事象やそこで生ずる課題と有機的に関連付けて多面的・多角的に考察し、表現することが目標である。

それらを踏まえ、本単元では、まず馬路村の「人口1000人」でありながら、村おこしに成功し、年商31億円を達成しているという思考のズレから生徒の問題意識を高める。その上で、中国・四国地方において学習する「過疎化」がどのようにして起きるのかを、本州四国連絡橋の建設とストロー減少から、人口の移動の特徴を捉えさせる。「過疎化」の原因について学習した後、その解決策である「村おこし」について馬路村の村おこしについて学習していく。馬路村の村おこしの手法については、村おこしの中心人物のインタビュー動画などから生徒に読み取らせたい。加えて、馬路村の村おこしにおいて最も重要な、「田舎感」「日本の故郷感」を県外の人々に抱かせた、村全体が村への愛情で一致団結して行ったマーケティング戦略について、実際に馬路村の商品である「ごっくん馬路村」の試飲と、ごっくん馬路村のパフレットから読み取らせる。

以上のような学習過程を通して、生徒に過疎化と解決策である村おこし成功の本質的な部分について捉える力を身に付けさせるとともに、問題解決的能力も身につけさせたい。

4. 単元の評価規準

知識・技能	思考力・判断力・表現力	主体的に学びに向かう態度
本州四国連絡橋建設前後の中国・四国地方における人口変動のグラフから、ストロー現象について読み取ることができている。	馬路村の村おこしの秘訣について、自分なりにまとめることができている。	中国・四国地方や馬路村における課題である「過疎化」と、その解決策である「村おこし」について、自らの地域と比較しながら、意欲的に学習することができている。

5. ESD との関連

(1) 本学習で働かせる ESD の視点

- ・有限性…自治体の持つ資源には限りがあったり、偏りがあったりする。一見価値のないようなものでも、新たな価値を付与することで自治体の村おこしに寄与することができる。馬路村は元来林業で栄えていたが、林業だけでは村の財源を確保することにつながらず、過疎化の進行を促してしまった。しかし、村で当たり前であったゆずを県外への PR に有効活用することで、財源確保に繋げることができている。また、価値の内容に見える「田舎感」や「素朴感」を売りにすることもしている。自治体ごとに存在する有限性の中で、価値を見直し、新たな価値を見出すことが大切であるということ。
- ・相互性と責任性…村の人々は村への愛情と誇りを持っている。村全体で協力し、数十年という長い時間もかけながら、村おこしを成功させた。村として人々が一致団結し、必ずやり遂げるという強い熱意を村への愛情で支えることが重要であるということ。

(2) 本学習を通して育てたい ESD の資質・能力

- ・批判的に考える力（クリティカルシンキング）…馬路村の村おこしの成功の秘訣は何か、その本質は何かを捉える。
- ・多面的・多角的に考える力…馬路村は一面的には過疎の進行した村だが、田舎という面やゆずという特産品から見ると価値のある資源がある村である。
- ・進んで参加する態度…馬路村の人々のように、大牟田市の町おこしに関わろうという態度。

(3) 本学習で変容を促す ESD の価値観

- ・世代間の公正

自治体が持続可能になることは、そこに住み続ける後世の世代に故郷を残すことにつながる。また、目下の過疎化対策ではなく、持続可能な過疎化対策を行うよう考えることも重要である。

(4) 達成が期待される SDGs

- 1 1 持続可能な都市の形成

6. 展開の概要（全 4 時間）

時	学 習 活 動 ・ 内 容	生徒の問いと思考	支 援 の 内 容 ・ 手 立 て ・ ね	評価の観点
1	中国・四国地方の特色① めあて：馬路村のある中国・四国地方は、 ろう。 1 馬路村の特徴と村おこしが成功していることを理解する。 ・馬路村の人口 ・馬路村の面積 ・馬路村の高齢化率 ・年商 31 億円 2 中国・四国地方の気候・経済・文化的な概要について学習する。	馬路村のある中国・四国地方には、どのような特色があるのだろう。 中国・四国地方の概要を理解することができた。	馬路村のある中国・四国地方の基本的な地理について理解できるようにする。 ●馬路村という村が高知県にあることを伝え、人口千人ほどの村が村おこしに成功していることから、問題意識を持たせる。 ・どうして馬路村は村おこしを成功させることができたのだろう？ ●ワークシートを用いて、中国・四国地方の気候・経済・文化的な概要について理解させる。	○中国・四国地方の基本的な地理について理解することができる。 (知識・理解)

2	中国・四国地方の特色②	馬路村を含む中国・四国地方には、どのような課題があるのだろうか。	中国・四国地方における過疎化について理解できるようにする。	○グラフから、本州四国連絡橋の設置により、四国地方から若者を中心に人口が流出していることを読み取ることができる(技能)
	めあて：中国・四国地方には、どのような課題があるのだろうか。 1 グラフから、本州四国連絡橋の設置により夜間人口が減少していることを読み取る。 ・本州四国連絡橋 2 グラフから、四国地方から若年人口の流出が起きていることを読み取る。 ・ストロー現象 ・若年人口の流出 3 四国地方の地図から、四国地方の全土で過疎化が発生していることを読み取る。 4 まとめ、振り返りを記入する。	中国・四国地方は、過疎化という課題があることが分かった。	●本州四国連絡橋の設置により、中国・四国地方においてストロー現象が発生したことを読み取らせる。 ・人々は都市部へ移っていくということが分かった。 ●グラフから、中国・四国地方において少子高齢化や若者の人口流出が発生していることを読み取らせる。	
3	中国・四国地方の特色③	過疎化は、どのようにして解決するのだろうか。	馬路村では過疎化をどのように解決したのか理解できるようにする。	○高知県馬路村の村おこしについて読み取ることができる。(技能)
	めあて：中国・四国地方は課題をどのように解決しているのだろうか。 1 グラフから、大牟田市の高齢化率が高いことや、宮原校区の高齢化率が高いことを読み取り、馬路村と状況が似ていることを理解する。 ・大牟田市の高齢化率(40%) 2 高知県馬路村のゆずを用いた村おこしについて知る。 3 まとめ、振り返りを記入する。	地域の特徴を生かした村おこしで、過疎化を解決できることが分かった。	●宮原校区の現状について、大牟田市の統計から高齢化率が高いことを読み取らせる。 ●高知県馬路村の村おこしから、地域の特徴である、ゆずを用いた村おこしがあることを理解させる。 ●馬路村の村おこしの中心人物のインタビューから、どのように村の魅力をPRしていったのかを読み取らせる。	
4 (本時)	中国・四国地方の特色④	馬路村の村おこしは、どうして成功したのだろうか。	馬路村における村おこしの本質を捉えることができるようにする。	○馬路村の村おこしの秘訣について、自分なりにまとめることができる。(思考・判断・表現)
	めあて：馬路村はどうして村おこしを成功させたのだろうか。 1 馬路村の村おこしの中心人物のインタビューを、全体で共有する。 ・県外中心の販路拡大 2 「ごっくん馬路村」を試飲する。 ・ごっくん馬路村の素朴な味 3 馬路村のPRビデオやインタビューの動画を視聴する。 ・村の人々の愛情 ・村の人々の熱意 4 馬路村が村おこしを成功させた秘訣を自分なりにまとめる。 ・村おこしの本質	村への愛情や田舎をPRすることで、成功したということが分かった。	●村おこしが最初はいまより、県外への販路の確保に何10年も努力を続けたことを読み取らせる。 ●「ごっくん馬路村」を試飲するとともに、馬路村のパンフレットを読み、馬路村のPR動画を視聴することで、あえて素朴な味で表現し、馬路村の田舎という一見不利な要素を強みとして売り出したことを理解させる。(本質をとらえる段階)	

中学校第2学年英語科 ESD 学習指導案

大牟田市立甘木中学校

坂田 亜澄

1 単元名 Program 7 If You Wish to See a Change (SUNSHINE ENGLISH COURSE2)

2 単元目標

(1) 動名詞、「look 形容詞」「become 形容詞」、「主語＋動詞＋人＋もの」が用いられた英文の構造を理解することができる。(知識・技能)

(2) 動名詞、「look 形容詞」「become 形容詞」、「主語＋動詞＋人＋もの」を用いて、気候変動問題への具体的な行動指針とその理由を書いたり話したりして、相手に伝えることができる。(思考・判断・表現)

(3) 動名詞、「look 形容詞」「become 形容詞」、「主語＋動詞＋人＋もの」を用いて、気候変動問題への具体的な行動指針とその理由を書いたりジェスチャーなどとともに話したりして、積極的に相手に伝えようとすることができる。(主体的に学習に取り組む態度)

3 単元について

○教材観

本単元では、1992 年リオで行われた地球環境サミットで、子どもの環境団体の代表としてスピーチを行い、現在も環境活動家として環境保護運動に取り組んでいるセヴァン・カリス＝スズキさんのメッセージを扱う。環境保護を始めとする様々な国際問題の課題解決に向けて行動を起こす必要性を説く彼女の思いを、スピーチや本文から読み取ることで、生徒が自分の将来の生き方について深く考えるきっかけとなる内容である。また、スピーチをした時の彼女の年齢が 12 歳であったこと、大牟田市で相当な被害をもたらした豪雨や、大型台風の増加で、気候変動問題がメディア等でクローズアップされていることから、生徒にとって身近で刺激となる題材である。言語材料としては、動名詞、「look 形容詞」「become 形容詞」、「主語＋動詞＋人＋もの」を取り扱う。これらを習得することで、英文の幅が広がり、英語で自分の考えを表現する際に活用することができる。

○生徒観

本学年（2 年生）の生徒は、全体的に真面目で、前向きに英語学習に取り組んでいる。また、自分の考えを作る場面においては、質問をしたり、辞書を活用したりするなどして、英語で表現することに積極的な生徒が多い。しかし、学力の二極化が見られ、何と書いてよいのか分からず、手がとまっている生徒もいる。英語の 4 技能である「話す・聞く・読む・書く」の 4 つの活動の中で、「書く活動」が苦手である生徒が多くを占めている状況にある。また、気候変動問題については、生徒に事前に行ったアンケートによると、「気候変動問題は今後解決されるべき問題だと思うか」という問いに対して「はい」と答えた生徒が 76 名中 73 名であり、世界の重要な課題であることは認識できている。しかし、「実際に気候変動を止めるために何か行動しているか」という問いに対しては、「していない」と答えた生徒が 65 名と多く、解決されるべき問題と思っているのにも関わらず、実際に行動している人は少ないという現状にあることが分かった。

○指導観

本単元の指導にあたっては、セヴァン・スズキさんが環境活動家であることから、気候変動問題に焦点をあて、気候変動を止めるためには、今後どのように自分が行動していくべきか英語で表現できるようになることをねらいとする。また、一人ひとりの意識や行動が大切であり、実際に行動にうつしていくことが必要であることに気づかせ、今後の具体的実践に繋げてほしいと考える。指導にあたっては、

次のような手立てをとる。

- ・気候変動の原因や問題を訴えている Youtube の映像や、セヴァン・スズキさんやグレタ・トゥーンベリさんのスピーチから、気候変動問題に対して課題意識を持たせる。
- ・ワークシートやペア・班活動などを活用し、新出言語材料を取り入れた言語活動を組み込んだり、教科書の本文の内容確認を行ったりする。
- ・気候変動問題によって起こる問題や原因を探るために、自分の持っている知識や、他教科やメディアから得た情報を共有する時間を設定する。
- ・気候変動を止めるために今後どのように行動していくべきか英語で書かせた後で、ペアで読む練習を行い、相互評価する時間を設定する。
- ・班→全体で意見交流を行い、自分の考えを広げたり深めたりすることができるようにする。
- ・決めた行動指針を深く意識化し、自身の行動に繋げさせるために、ポスターを作成する場を設定する。

4 単元の評価基準

ア. 知識・技能	イ. 思考・判断・表現	ウ. 主体的に学習に取り組む態度
①動名詞（動詞の ing 形）の文型を理解している。	①気候変動を止めるために、今後どのように自分が行動していくべきかそしてそう思う理由を、既習の文法事項を用いて、3 文以上の英語で書くことができる。	①気候変動の問題を自分事として捉え、課題解決に向けて、どのように意識や行動を変えていけばよいのかを考えようとしている。
②「look 形容詞」「become 形容詞」の文型を理解している。		②辞書を活用したり、質問したりしながら、一生懸命英文や自分の考えを書こうとしている。
③「主語＋動詞＋人＋もの」の文型を理解している。	②気候変動問題への具体的な行動指針とその理由を、英語で相手に話して伝えることができる。	③ジェスチャーなどを用いて、一生懸命自分の考えを話そうとしている。

5 ESD の関連

(1) 本学習で働かせる ESD の視点（見方・考え方）

- 【相互性】…地球に住む全世界の人々と環境との関わりに気づくことができる。
- 【有限性】…将来の世代のために、有限な自然環境がどんどん破壊されていることに歯止めをかけないといけないことに気づくことができる。
- 【責任性】…気候変動を防ぐために、私たち一人ひとりが日々の生活様式や消費行動を変えていくことが大切であることに気づくことができる。

(2) 本学習を通して育てたい ESD の資質・能力

- ・批判的に考える力（クリティカル・シンキング）
気候変動問題について課題意識をもち、これまでの自分たちの生活を振り返ることができる。
- ・多面的・総合的に考える力（システムズ・シンキング）
気候変動について、様々な視点から、原因や自分たちがすべきことを考えることができる。
- ・コミュニケーションを行う力
これから大切にしていけるべき意識や行動について、意見交流を通して、自分の考えを広げたり深めたりすることができる。

(3) 本学習で変容を促す ESD の価値観

- ・自然環境、生態系の保全を重視する
気候変動を止めることが、自然環境や生態系の保護につながることに気づくことができる。

(4) 達成が期待される SDGs

- | | | | |
|-----|-----------------|-----|------|
| 1 2 | 持続可能な生産・消費形態の確保 | 1 3 | 気候変動 |
| 1 4 | 海洋資源 | 1 5 | 陸上資源 |

6. 展開の概要 (全 12 時間)

学習活動	●学習への支援 ・予想される生徒の反応	○評価 ・備考
1. 本単元の学習の見通しを持ち、課題意識を持つ。(1 時間) (1)セヴァン・スズキさん、グレタ・トゥーンベリさんの写真を見て、環境活動家であることを知る。 (2) Youtube の映像を見て、気候変動問題について問題提起していることに気づく。 (3) 2 人の環境活動家のスピーチを視聴し、感じたことや印象に残ったことを書く。	●本単元の見通しをつかませるために、Ipad や Youtube の映像などの ICT を活用する。 ・グレタ・トゥーンベリさんは、気候変動問題の原因や現状を訴えている。 ・気候変動の問題が、環境破壊や生態系の破滅につながっている。 ・自分と同じ世代の人たちが危機感を持っていて、安心して暮らせていない現状にある。 ・気候変動を止めなければ、不安で住みづらい社会になってしまう。	ウ. ①
気候変動を止め、わたしたちが安心して暮らすためにはどうすればよいのだろう		
2. 新出言語材料を学習し、教科書の内容を理解する。(6 時間) (1) 動名詞(動詞の ing 形)の文型を理解し、使うことができるようになる。 (2) 教科書の内容を理解する。 (3) 「look 形容詞」「become 形容詞」の文型を理解し、使うことができるようになる。 (4) 教科書の内容を理解する。 (5) 「主語+動詞+人+もの」の文型を理解し、使うことができるようになる。 (6) 教科書の内容を理解する。	●動名詞の文型を理解し使うことができるようにするために、自分の趣味や好きなことを書き、伝えあう活動を設定する。 ●内容を理解させるために、TF や QA をする。 ●「look 形容詞」の文型を理解し、使うことができるようにするために、人物の表情や様子とその理由を伝えあう活動を設定する。 ●「主語+動詞+人+もの」の文型を理解し、使うことができるようにするために、ペアで物のやり取りをする活動を設定する。	ウ. ② ア. ① ア. ② ア. ③
3. 気候変動問題の問題や原因について考え、今後どのように行動すべきか、英語で書いたり話したりして表現する。(4 時間)	●具体的にどう行動するべきかを書かせるために、まず、気候変動によって起こる問題や原因について考えさせる。	ウ. ①
気候変動によって起こる問題や、気候変動の原因は何だろう？		
(1) 気候変動によって起こる問題を考える。 ・海水面積や海面水位の減少 ・生態系の影響 ・災害リスクや感染症の増大 ・作物収穫量の減少	・気温が上昇するだけでこんなにたくさん問題が発生するのか。 ・このままにしておくと、将来日本や世界はどうなるのだろう。	

(2) 気候変動の原因について考える。 ・二酸化炭素やメタン、一酸化炭素などの温室効果ガスの増加 ・森林破壊 ・食品ロスや食料廃棄の増加	・二酸化炭素をださないようにすればいいけど、具体的にはどうしたらいいのかな。 ・1人1人の意識した行動が、安心して暮らせる社会につながっていくのかな。	ウ.①
気候変動を止めるために、わたしたちはどのように行動していけばよいだろう？		
(3) 気候変動を止めるために、今度どのよう に行動していくのか、そう思う理由を、3文以上 の英語で書く。 ・既習の文法事項(動名詞、「look/become 形容 詞」、「主語+動詞+人+もの」)のいずれかを用 いて書く。	●書かせるための手立てとして、辞書を活用させたり、机間巡視をしたりする。 ●学力が低い生徒への支援として、モデル文を 掲示して使える表現を紹介する。 ・ <u><i>I will not use a car as much as possible. Using a car is not good for environment. I think people have to use public transportation.</i></u>	イ.① ウ.②
(4) 書いた文を発表し、班や全体で意見交流 する。 ①ペアで相互評価をして、練り直したり、話す 練習をしたりする。	・ <u><i>Clerks gave people plastic bags for free before. However, plastic bags produce CO2. I think we should use an ecobag.</i></u>	イ.② ウ.③
◇表現面 ・原稿を見ないで話しているか ・ジェスチャーや抑揚、間の取り方などの工夫 をして話しているか ◇内容面 ・3文以上の英文で書けているか ・具体的な行動指針とその理由を書いているか ・新出文法事項が一つ以上入っているか	●英文の幅を広げたり、深めたりすることがで きるようにするために、書いたものを発表し、 意見交流する場を設定する。 ●書いた文を練り直したり、工夫して読んだり することができるようにするために、ペアで相 互評価をする時間を設定する。 ●相互評価できるようにするために、評価する ポイントを、表現面と内容面に分けて与え、評 価させる。	
②班ごとに1人ずつ発表して、質問したり、意 見交流をしたりする。 ③班の中で、一番上手に伝えることができた生 徒を選び、全体で発表する。	●意見を共有するために、内容・伝え方ともに、 一番上手に伝えることができた生徒を班の中 から選ばせ、全体で発表する場を設定する。	
4. 気候変動について考えたことを、外国人向 けのポスターにまとめる。(1時間) (1) ポスターを作成する。 ・決めた行動指針をもとに、オリジナルのポス ターを作成する。 (2) 作成したポスターを地域に貼る。	●自分で行うと決意した内容を、深く意識化す るとともに、相手にも意識してもらうようにす るために、ポスターを作成する場を設定する。 ●外国人との繋がりを意識させ、地域のネット ワークを広げるために、作成したポスターを地 域に貼らせる。	

第4学年 総合的な学習の時間 学習指導案

山形市立千歳小学校 教諭 阿部 大輔

1、単元名 千歳の伝統とわたし 一千歳地区の伝統文化の継承で私たちができることを考えようー

2、単元の目標

- ・田植え踊りについて調べる活動を通して、地域の伝統文化について学び、それを伝承する人の思いや歴史について理解することができる。【知識・技能】
- ・千歳地区の伝統文化を続けるために、「沖の原田植え踊り」の伝承問題や伝承者の思いを知り、地域に対する思いや行動を考えたり、学んだことを表現したりすることができる。【思考・判断・表現】
- ・進んで地域の文化について調べ、地域の伝統のために自分には何ができるのかを考えることができる。【主体的に学習に取り組む態度】

3、単元について

(1) 教材観

本学習では、児童が千歳地区に伝えられてきた「沖の原田植え踊り」に出会い、戦時中に一度は途絶えたものの地域の先人の力で復興し踊り続けてきた地域先人の思いや営みを学び、憧れ、自分たちも千歳地域の一員として、このままでは途絶える可能性がある地域の伝統文化を未来に繋いでいこうとする児童の行動の変容を促すことをねらいとする。地域の伝統文化を残していくことの難しさや伝統を受け継ぐ人が減少しているという実態を知ること、伝統を残していくために自分ができることをきれい事ではなく持続可能な視点を持って話し合い、地域の一員として子供のできる参画を目指したい。

「田植え踊り」とは、稲作の仕事がよどみなく運ぶさまを踊りや所作で表したものである。起源や由来は明確なものはなく、諸説あるが、もとは、豊作をもたらそうとするマジナイの踊りで“田遊び”簡略にし、一段と舞踊化したものであると言われている。予祝をすると同時に、田の鎮魂を行うのが本来の目的であったが、風流化し、見て楽しみ、踊って喜ぶものになっていった。山形県では、獅子踊りと並んで二大民俗芸能の一つにあたり、集落づくりと関係が深かったことが考えられている。演目は「お正月」「綾」

「するす引き」「^み箕吹き」「米つき」「ほまち田」からなっており、踊りの合間に、見物人の中から「ほめことば」が掛けられると、踊り手の代表が「返し言葉」でこたえた。このように県内で田植え踊りが行われてきたが、本校のある千歳地域では「沖の原田植え踊り」が踊られ続けている。「沖の原田植え踊り」とは千歳地域の一つの地区である沖ノ原地区に伝わる伝統舞踊である。東村山系に属し、農民から生まれた民俗芸能で歴史は明らかではないが、徳川末期から踊られていたと伝えられている。農作業を演じて鎮守の祭典に奉納、冷害・災害等で飢饉が続いた時でも豊作を祈り神に捧げ稲作の一生を農民の心とし希望を踊として伝承されてきた。

沖の原田植え踊りを現在に至るまで、様々な地域の先人の営みにより引き継がれてきた。まず、明治末期の頃より沖ノ原には、「永楽團」と称した芸能集団がその役割を担った。団員は青年団で、主に秋から冬にかけての農閑期において各地で興業の演目の一つとして行っていた。

しかし、明治から沖の原田植え踊りを担ってきた永楽團は昭和16年に一度解散した。理由は、戦争の影響主な構成員である農家子弟が戦場に行ったり、食料不足、物不足なったりと戦時中の時代背景によるなどがある。その後、昭和18年に沖の原刈田神社に狛犬が奉納された際に、祝い芸能披露された際に再結成に至ったが、それが最後の永楽團としての活動と言われている。

このように戦時中に一度は途絶えた沖の原田植え踊りであったが、戦後踊りを習った何世代もの人達が保存会を組織し、昭和53年4月25日の刈田神社例大祭に、田植え踊りが数十年ぶりに復活した。昭和

52年から誕生した保存会が、当時から現在に至るまで毎年伝承会を催して後継者を育成しているからである。代表的な活動として山形市民族芸能連合保存会主催の「民族芸能講演会」にも出演している。このように田植え踊りを再興した保存会だが、近年は後継者問題が明るみになり、伝承が難しいことが問題になっている。平成28年に沖の原田植え踊り経験者に向けた伝承継承の協力を募る便りも出され、地域住民の協力により活動が続いてきた。沖の原田植え踊りの伝承に尽力している沖の原田植踊保存会青年部会長伊藤栄一氏、山形県議会議員遠藤和典氏らの地域の無形文化遺産を絶やしてはいけないという強い思いがある。

このように沖の原田植え踊りは、地域の文化を継承しようとする思いと、踊りに込められた願いにより、地域の先人に再興され引き継がれてきた。このような田植え踊りの価値と、それを残してきた地域の大人の姿から学ぶことで、千歳地区にある伝統文化のために自分には何ができるのかを考え行動できる児童が育つと考える。

(2) 児童観

児童に千歳地区の伝統を知っているか問うと、ほとんどの児童が知らなかった。本学級には、沖ノ原地区の児童が4人いるが、実際に夜の「沖の原田植え踊り」の練習に参加している児童は1人で、他の児童は習い事がある等の理由から参加していない。意欲的に地域の伝統を引き継いでいこうという思いは低く、自分事としての認識はあまりない。沖ノ原地区以外の児童も「沖の原田植え踊り」について知っている児童はほとんどおらず、コミュニティーセンターが催している千歳地区のイベントで見た児童が数人いる程度であった。地域の伝統に対する意識や思い入れは弱く、地域の繋がりが薄れかかっていると考えられる。合わせて、

今回の学習は、社会科「わたしたちの県」2. 特色ある地いきと人々のくらしの学習から、自分達が住んでいる千歳地区の伝統に目を向けることをきっかけに学習を展開して行きたいと考える。地域の方の伝統文化を必死に残そうとする熱い思いを知り、自分たちにも何かできることがあるのではないかと考えながら探求する力の育成を図る。

(3) 指導観

本学習では、児童が地域の伝統文化や地域に対する愛着、伝承者の思い等を学び、地域の一員として行動を起こすことができるように、以下の4つのことを取り入れる。

①「社会科」による導入の工夫

県内の先人の偉業を学んだ後に、総合で更に地域の偉業として田植え踊りを取り上げることで、伝統への出会いを入りやすくする。

②「沖の原田植え踊り」の継承に努めている方との交流

映像や写真では伝えることができない人の思いや願いを実際に会って、話を聞き触れ合うことで地域に伝わる文化の価値を感じることができるようになりたいと考える。今回の学習では、千歳地区の「沖の原田植え踊り」伝承者である遠藤和典さん（沖ノ原田植え踊り保存会、山形県議会議員）、公益財団法人山形県生涯学習文化財団山形県郷土館「文翔館」文化振興部主査盛永未来さん、東北文教大学短期大学部総合文化学科特任教授菊地和博さんと交流をすることで学びを深めていく。

③地域の伝統文化を体験すること

今回扱う教材である「沖の原田植え踊り」の歌の意味を考えたり、踊りを踊ってみたりする体験を通して、無形文化財の魅力に触れさせたいと考える。体育科の「フォークダンス」の学習で、実際に踊りを踊ってみることで、伝承され続けてきた踊りの良さや価値に気付けるようにしたい。

④自分が感じたり思ったり気づいたりしたことを他に発信する場を設ける

単元の終末に沖の原田植え踊り保存会の方と今後の伝統文化伝承について話す場を設ける。地域の伝統文化の継承のために具体的な解決策を述べるなど、地域の一員としての自覚を持ち、真剣に地域の伝統文化について考えることができるようにする。

(4) ESDとの関連

○この題材で働かせる ESD の視点（見方・考え方）

- ・多様性 … 沖ノ原地区に伝わる「沖の原田植え踊り」を伝承しようとする人の思い、「田植え踊り」の起源・歴史、踊りに込められた人々の願い、世の中には様々な伝統があり、それを伝承しようとしている人たちによって支えられていること。
- ・相互性 … 地域の人達の繋がりによって伝統が受け継がれてきたこと。
- ・有限性 … 伝統を受け継ぐ人がいないと伝統は途絶えるということ。

○この学習を通して育てたい ESD の資質・能力

- ・批判的に考える力（クリティカル・シンキング）
…千歳地区の伝統文化である「沖の原田植え踊り」について知り、誰かが受け継ぎ、伝承している実態を理解し、伝統文化を伝承することの難しさや自分事として後継者にはなれないことを踏まえ、地域に文化を残すことの意義を考える。
- ・システムシンキング
…沖ノ原地区の大人が「田植え踊り」の文化を子供たちに伝え文化を継承していくことを、沖の原田植え踊り保存会の人や学芸員、大学の教授の話等から知る。
- ・長期的思考力
…沖ノ原地区の「田植え踊り」の文化を継承していくためには、伝承者の考えや子供達の考えなどを考慮してどうすればいいのかを考える。

○この学習を通して育てたい ESD の価値観

- ・沖の原田植え踊り保存会に所属する大人、伝承者である子供、伝承に携わっていない子供の世代間の公正を意識できるようにする。
- ・沖の原田植え踊り保存会として、子供たちに田植え踊りを教える大人、それを受け継ぐ子供がいて成り立っている伝統文化継承について知り、田植え踊りの良さを理解し、自分も地域の一員としてそれを広めたり大切にしていこうとしたりする意識を育てる。

○達成が期待される SDG s

- 目標 1 1 地域の田植え踊りを守り、踊りにある願いや思いを地域の未来のために引き継いでいく。
- 4 民族芸能について知り、それに携わる人々の思いに触れ、自分にできることや伝統文化との関わり方について自分なりの考えを持ち、それを表現する。

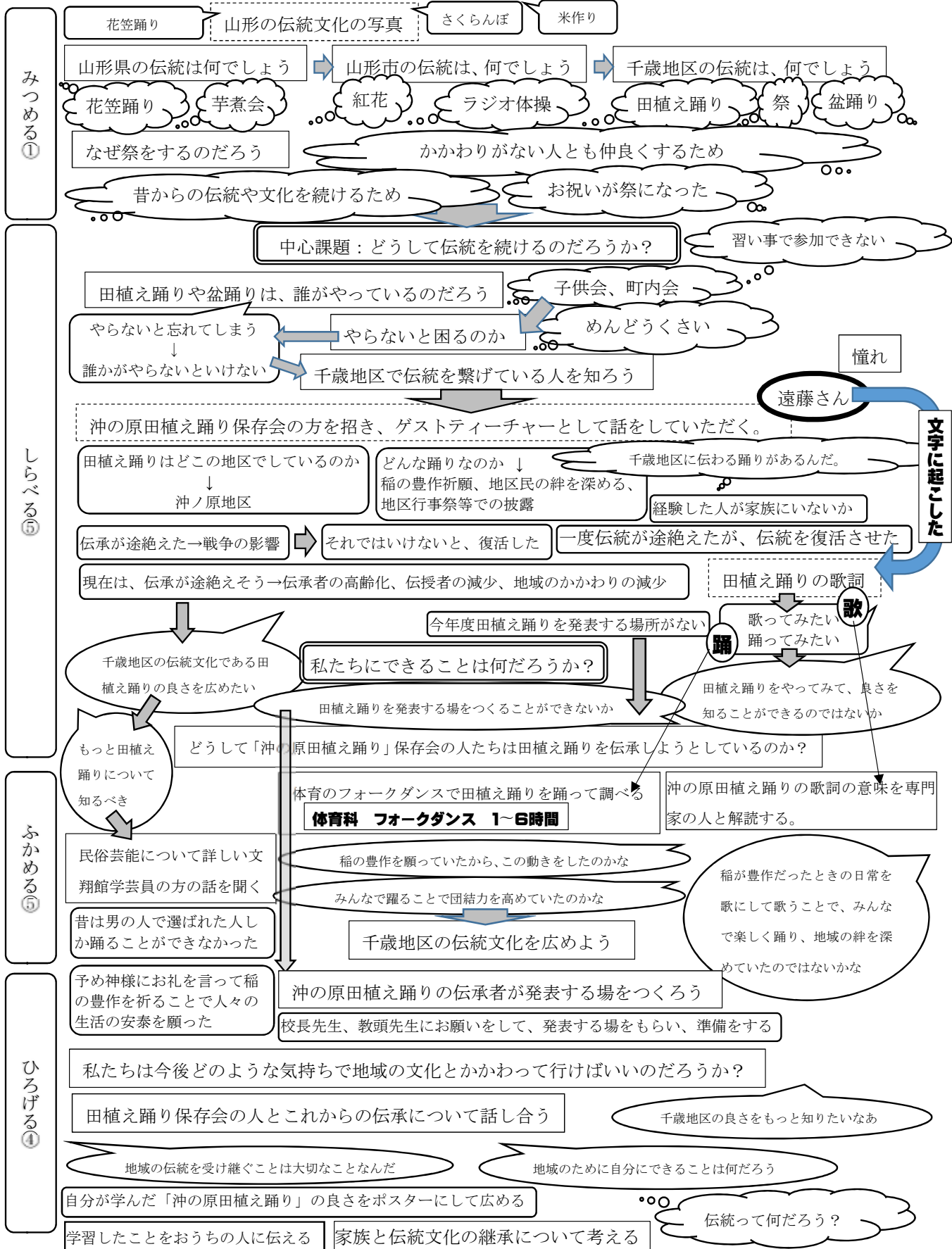
4、評価規準

ア 知識及び技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
①千歳地区の人々の思いや願い、地域文化の継承についてわかっている。	①地域の伝統を受け継いでいる人の思いに触れ、伝統文化の良さについて考えている。	①地域の伝統文化について進んで調べ、自分にできることを考えている。
②資料から地域の歴史について学び、学んだことを自分の言葉などで伝えている。	②自分の損得だけではない、地域のことを思う気持ちを考えている。	②地域に対する思いを抱き、千歳地区に対する愛着を持っている。

5、単元の指導計画（全 15 時間）

		○主な学習活動	・学習への支援	評価（△） 備考（・）
み つ め る	1	○山形県の伝統文化についてふりかえり、千歳地区の伝統文化について知っていることを話し合う。 ○数百年も続いた沖の原田植え踊りが地域にあることを知る。 写真「沖の原田植え踊り」	・社会科「きょうどのはってんにつくす」の学習から、自分たちが住んでいる千歳地区の伝統に目を向けさせる。	△ア① △ウ② [ワークシート]
し ら べ る	2	千歳地区の伝統文化を知ろう		△イ② [ワークシート]
	3	千歳地区に伝わる、沖の原田植え踊りはどのような踊りなのか		
	4			
	5	○沖の原田植え踊りについて以地域に聞き取りして調べる。 ・田植え踊りはどこの地区でしているのか ・田植え踊りを経験した人が家族にいないか ・田植え踊りはどんな踊りか ・田植え踊りの伝承が途絶えたのはどうしてか ○沖ノ原の田植え踊りをしている人をゲストティーチャーを呼び、話を聞く。	・戦時中の徴兵や物資の不足などにより、伝統が途絶えた事実気づく。 ・娯楽として人々を楽しませたり、五穀豊穡を祈り、地域住民の生活の安泰を願ったりすることから再興されたことに気づく。 ・現代の課題に気づかせる。	
	6			
		中心課題：どうして千歳地区の大人は田植え踊りを復活させたのだろうか？ ○田植え踊りを踊り伝統文化を体験し、伝統継承者の思いにせまる。 ・どうして地域の人を守らなければならないと言うのか ・なぜ地域の人真剣に踊るのか ○沖の原田植え踊りの歌詞の意味を大学の先生と解説し、覚える。 特別活動 田植え踊りの歌詞を読み取ろう 1～6時間 体育科 フォークダンス 1～6時間 沖の原田植え踊りに取り組む	・田植え踊りを踊ることへの真剣な思いに出会わせる。 ・型を学び、踊り手の域に近づけるように練習することを通して、踊りを覚えたり、正しく踊ることの苦労や思いに気づかせる。 ・昔の言葉や田植え踊りに込めた人々の願いや思いに気付かせる。	△イ① △ウ② [ワークシート]

ふかめる	7	○千歳地区の田植え踊りの未来について考える	・持続可能であるかを、これまでの出来事を参考に沖の原田植え踊りの未来を予測させる。	△ア② [ワークシート]
	8 9 10 11	千歳地域の一員として、田植え踊りとどうかかわっていけばよいか		
		○千歳地区の伝統文化を広めようである田植え踊りを広める方法を考え実行する。 ○学校の友達に沖の原田植え踊りについて伝える。 ○休み時間に田植え踊りを紹介する。 ○沖の原田植え踊りの魅力をポスターにし、地域に張って、魅力を広める。 ○田植え踊りを習ったが、今は踊っていない人の話を聞く。	・田植え踊りは、人々の生活の安泰を願ったり、人々を楽しませる等の良さがあることを広めることができるようにする。	
ひろげる	12	私たちは今後どのように地域の文化とかかわって行けばいいのだろうか？		△ウ①
	13 14 15	○沖の原田植え踊りを体験し、伝統を広める学習を通して自分が感じたこと考えたことを模造紙にまとめ、発表する。 ○沖の原田植え踊り保存会の人と伝統文化の継承について話し合う。 千歳地区の伝統は、これからも残っていくのだろうか。 ○田植え踊りのような、地域にあふれる伝統を見つけ、地域に伝える。	・対話から田植え踊りだけでなく地域にはたくさんの伝統文化があることに気付かせる ・田植え踊りと同じように、市民がまず地域の伝統を知らなければ残らない。自分が考えたことを地域の大人に伝えることが子供のすることであるということに気づく。	



高等部木工グループ 作業学習 学習指導案

山形大学附属特別支援学校 教諭 阿部 友幸

1. 単元名 みんなが喜ぶ製品を作って販売しようⅡ 一県産材を使おう

2. 単元の目標

- ・ 木材や使用する道具の扱い方が分かり、正確に木材を加工する。木材が森林で作られ、伐採、加工、輸送されて手元に届くことを理解する。【知識・技能】
- ・ どのような製品を作ることが生産者や消費者（買い手）、地球環境にとって良いか考え、よりよい製品にするための工夫について判断しながら製品を作る。【思考・判断・表現】
- ・ 買い手だけでなく、森林保全にかかわる方々や地球環境のために良いことをしたいという思いを持ち、意欲的に製品作りや販売などに取り組む。【主体的に学習に取り組む態度】

3. 単元について

(1) 教材観

本単元は、森林保全に関わる材木店の方や村山総合支庁森林整備課の方との出会いから、県産材を使うことで「消費者・生産者・地球環境のみんなが喜ぶ」ということの実感と、行動の変革を促す学習である。持続可能な社会づくりの視点から、作業学習で使用する木材の選択による影響について考え、県産材を扱うことによる効果について学びながら製品作りを行う。

山形県では、林業に従事する労働者が減り、手入れが進まない人工林が増加することで、森林の荒廃が静かに進んでいる。そこで県では、森林の多面的機能の維持と調和を大事にして、地域の豊かな森林資源を活用して雇用創出を図り、地域全体の活性化につなげていく「やまがた森林ノミクス」という取組みを行っている。県産材を利用することもその一環であり、森林の多面的な役割を守ってくれる林業家にお金が入り、林業家は森林の手入れができ、山形の森を持続可能にするサイクルを回すことができる。山形の森を持続可能にする県産材について、生徒が材木店の方や森林整備課の方の営みを通じて学び、その生き方に憧れることで、自分も森林を守りたいという気持ちになり、「やまがた森林ノミクス」への参加につなげることができるだろう。また、本校では附属幼稚園との「交流及び共同学習」においてバザーで園児に製品を販売している。これにより、下の世代にも「やまがた森林ノミクス」について広めることができると考える。

(2) 生徒観

本校は知的障がいのある児童生徒が学ぶ学校であり、高等部作業学習の木工グループには1年生2名、2年生2名、3年生3名の計7名が所属している。どの生徒も、教師の手本を見て自分のすることが分かると、自分から作業を進めることができる。その一方で、経験がなかったり見通しが持ちにくかったりすることには抵抗を示す傾向がある。そこで、ESDを行うにあたり、スモールステップで学習を進めたり、実際に体験できる活動を設けたりするなどの工夫が必要である。

生徒の既存の知識として、使用する木材についてはホームセンターで購入していることは知っているが、産地や木の種類などについては分かっておらず、安価な木材を買うことが当たり前になっている。また、自分たちの住む山形県にも森林があり、そこで生産される県産材を購入することが地域の

林業家の仕事を成り立たせたり地球環境に良い影響があったりするという概念を持つまでには至っていない状態である。

(3) 指導観

生徒は抽象的なことを理解したり意識したりすることが難しいため、ただ県産材について話を聴いたり製品作りを繰り返したりするだけでは、県産材を使うことで消費者・生産者・地球環境のみんなが喜ぶということが理解しづらい。そこで、この実践では、実際に森林保全に関わっている材木店の方や森林整備課の方と出会ってかかわることで、県産材を買って使用することが周りに与える影響について理解できるようにしたい。導入では、10月末のバザー時に行ったアンケートに「県産材を使って製品を作ってはどうか。」という意見があることをきっかけにして、「なぜ県産材を使うことが良いのか。」という学習問題を設定する。ここでは、「県産材とは何か。」「今使っている木材と県産材は違うのか。」という疑問が生まれ、生徒が自ら興味を持って探究できると考えている。また、バザーで製品を販売する際に、この学習問題に対する生徒たちなりの答えを買い手に伝えるようにする。そうすることで、生徒たちが県の「やまがた森林ノミクス」を推進することで地域に貢献し、幼稚園児やその保護者なども製品を購入することで持続可能な社会づくりに貢献できるということを伝えられるようにしたい。

・本学習で働かせる ESD の視点（見方・考え方）

【相互性】木材の地産地消をすることが環境保全に影響すること。

【有限性】森林は有限な資源であり、適切に使用しなければ地球環境に大きな負荷を掛けること。

【責任性】私たちが地球環境のことを考えて行動を変えていくことが何よりも大切であること。

・本学習で育てたい ESD の資質・能力

【クリティカルシンキング】生産者や地球環境に配慮しているかについて、自分たちにとって身近な材料から見つめ直す。

【システムズシンキング】木材が森林で育てられ、伐採、加工、輸送されて自分たちの手元に届くことを理解する。県産材を使うことで、森林の多面的な役割を守ってくれる林業家にお金が入り、林業家が山形の森を元気にする取組ができ、山形県や山形市の森林が持続可能になる。

【協働的問題解決力】森林保全にかかわっている方々や身近な仲間、教師と協力して、県産材を使用した製品の製作や販売に取り組む。

・本学習で変容を促す ESD の価値観

【自然環境、生態系の保全を重視する】県産材を使用することで、森林が手入れされて持続可能になったり、資源の無駄遣いを防止したりすることができるため、積極的に使用するとよい。

【世代間の公正】現在だけでなく、将来にわたって地球環境を豊かにするために、使用する木材の選択が大切である。

・達成が期待される SDG s

【目標 15】 持続可能な森林経営

【目標 12】 持続可能な生産・消費形態の確保

4. 単元の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
①道具を使って県産材を正確に加工している。 ②木材の生産から輸送までの流れを自分なりの言葉で説明できる。	①県産材を使うことが生産者や環境に与える影響について、自分なりの言葉で相手に伝えている。 ②買い手である幼稚園児がどう感じるか考えながら、丁寧に製品を作っている。	①意欲を持って森林保全にかかわる方々の話を聞いたり、材木店の見学をしたりしている。 ②木材と向き合って集中して作業に取り組んだり、意欲的に販売したりしている。

5. 単元の指導計画（全49時間）

次	主な学習活動	学習への支援（・）	評価（△） 備考（・）
1～3	○バザーのアンケートを見て、これからの製品作りについて考えよう。 ・「県産材を使って製品を作ってはどうか。」というアンケートの意見を見る。 学習問題：「なぜ県産材を使うことが良いのか。」 ・県産材について詳しい人について調べたり人に聞いたりして、森林整備課に電話する。	・県産材について書かれたアンケートを用意する。 ・SPF材との違いを実感できるように、実際の県産材を用意する。	
4～6	○詳しい人から県産材について教えてもらおう。 ・森林整備課の方をゲストティーチャーとして招聘し、山形市の市有林の存在や森林の役割、木材が私たちの手元に来るまでの流れ、県産材を使うことによる社会や環境への影響などについて話を聴く。 ・地域の材木店について紹介してもらう。 ・紹介先の材木店に、見学と木材購入について電話する。	・ゲストティーチャーの話が理解しやすいように、視覚的教材を活用する。 ・生き方に憧れが持てるように、森林整備課の方の営みについて説明してもらう。	△ウー①
7・8	○材木店で杉の製材を見学し、県産材を購入しよう。	・学習への意欲が高まるように、生徒がその場でお金を支払い、杉材を購入する。また、材木店の方に、生徒も	△アー② △ウー①

		「やまがた森林ノミクス」の一員になることを伝えてもらう。	
9～15	○購入した県産材でどんな製品を作るか考えて試作してみよう。 ・幼稚園児を対象としたバザーに向けて、作る製品について意見を出し合う。 ・村山森林整備課森づくり推進室の方に連絡し、直接箸の作り方について教わったり、治具を借りたりする。	・森林整備課の方や材木店の方から、杉の製品化について意見をもらえるようにする。	△ウー① △イー②
16～18	○試作品について意見をもらって、作る製品について決めよう。 ・いただいた意見を基に製品の規格や仕上げ方を決定する。	・試作した物について様々な人から意見をもらえるようにする。	
19～33	○決めた製品を作ろう。 ・幼稚園児を対象としたバザーに向けて、県産材を使った製品（箸）を作る。	・県産材を使うことの意義について理解が深まるように、キーワードを絞ったり視覚的教材を使ったりして繰り返し確認する。	△アー① △イー② △ウー②
34～36	○バザーで幼稚園児に販売しよう。 ・自分たちの取組みや製品を買うことによる影響(学習問題に対する自分たちなりの答え)についてプリントにまとめ、幼稚園児やその保護者に伝える。 ・幼稚園児の保護者向けにアンケートを配付する。	・園児にとって分かりやすい伝え方を考えられるように、園児に渡すプリントの書式等を工夫する。	△イー① △ウー②
37～49	○持続可能な社会づくりのために、次のバザーに向けてできることを考えて製品を作ろう。 ・幼稚園の保護者向けのアンケートを回収し、自分たちの活動について振り返る。 ・森林整備課の方から、山形の森林の現状について話を聴き、これから自分たちができることについて意見を出し合う。	・生徒たちが持続可能な社会づくりの一員としての自覚がもてるように、森林整備課の方から生徒の取組みを評価してもらう。	△ウー①

第5学年 社会科 学習指導案

山形市立第三小学校 教諭 岡崎 亮

1. 単元名 わたしたちの生活と食料生産

2. 単元の目標

生きて働く知識・技能

- 食料生産に関する人々は、生産性や品質を高めるよう努力したり輸送方法や販売方法を工夫したりして、良質な食料を消費地に届けるなど、食料生産を支えていることを理解する。
- 地図帳や地球儀、各種の資料で調べ、まとめる。

未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力

- 生産の工程、人々の協力関係、技術の向上、輸送、価格や費用などに着目して、食料生産に関わる人々の工夫や努力を捉え、その働きを考え、表現する。

学びに向かう力・人間性

- 食料生産について、主体的に学習の問題を解決しようとする態度や、よりよい社会を考え学習したことを社会生活に生かそうとする態度を養う。
- 多角的な思考や理解を通して、日本の農業の発展を願い、日本の将来を担う国民としての自覚を養う。

3. 単元について

(1)教材観

本単元は、学習指導要領解説 5 年内容 (2)「我が国の農業や水産業における食料生産について、学習の問題を追及・解決する活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。」にあたる。ここでは、我が国の食料生産の概要に関する内容と食料生産に関する人々の工夫や努力に関する内容から構成されている。

本単元では、山形市飯塚町で農業を営んでいる佐藤琢磨さんの営みを基に学習を進めていく。飯塚町はきゅうり栽培が盛んで、飯塚町にはきゅうりの選果場まである。その飯塚町で、琢磨さんはきゅうり、トマト、ブロッコリーなどの野菜、そして米を育てている。

きゅうり栽培がとても盛んな地区にも関わらず、なぜ琢磨さんがきゅうりだけでなく、他の野菜や米を育てているのかということ、そこには理由がある。それは、経営のリスクマネジメントである。もし、きゅうりだけに絞って栽培を行った時に、きゅうりが不作の年になってしまえば、1 年間の収入が激減してしまう。時期をずらし、様々な食物を年間通して栽培することで、収入の安定化を図るという、生産者の工夫なのである。

また、20 代の琢磨さんは、同世代の仲間を募り、農業関係のイベントを企画したり、「セイサイボーイズ」というグループを作り山形の伝統野菜「山形青菜」の情報発信をしたりなど、様々な取り組みを行っている。なぜ、このような取り組みをしているのかということ、飯塚町では生産者の高齢化が問題となっていて、その状況を変えるためである。様々な人に農業のことを知ってもらうために、様々な取り組みを行っているのである。

このような琢磨さんの営みを基に学習を進めていくことで、子どもは自分の身近に農業を感じる

だけでなく、生産者の工夫や努力、そして今後の農業の課題について、自分事として捉えることができる考える。

(2)児童観

33 人在籍の本学級の中には、父母が農業を行っている子は一人もいなかった。しかし、祖父母が農業をしている子は 5 人いて、その子達は何度か祖父母の農業を手伝ったことがあると話していた。また、自分の家族や知り合いの中で、農業に携わっている人はいるかを尋ねると、クラスの半数はいると答えていた。しかし、その全てが高齢者で、子どもの親世代では農業をしている人はいないということがわかった。また、子どもに将来、農家になりたい人はいるかを聞くと、本学級では誰もいなかった。

このように、子どもの周りに農業に携わっている人はいるが、子どもにとって農業は他人事で、自分達の生活とどのようにつながっているのかを意識している子どもはいなかった。もちろん、生産者の高齢化についての危機感を感じていることもなかった。

(3)指導観

まず、「みつめる」段階で、米作りの写真から、米がどのように作られているかを予想させる。その時に、「水田の水はどこから来ているか。」「米作りはいつから始まり、いつ収穫できるのか?」などの米作りに関することだけを予想させるのではなく、「どんな人が、どれぐらいの人数で働いているのか。」といった「米作りをしている人」にも予想させていく。そのことを通して、子どもは、米の生産だけでなく、生産者に対する関心を高めていくこととなる。

「しらべる」段階では、子どもに琢磨さんを米農家として紹介する。そして、米の生産工程について、教科書の資料を使って自分達で調べ、調べたことを琢磨さんに発表し評価をもらう。そして、自分で調べたことと琢磨さんから教えてもらったことを参考に、米の生産工程について米カレンダーにまとめていく。子どもが調べたことを琢磨さんに発表し評価をもらうことによって、子どもにとって米の生産工程を調べる活動が自分事となり、琢磨さんの生産工程の工夫をより感じるようになる。

次に、琢磨さんが実は、米だけでなく米以外にもたくさんの野菜を生産していることを紹介する。そして、なぜ琢磨さんが米以外にもたくさんの野菜を生産しているかを子どもに予想させる。子どもの予想を琢磨さんに発表し、琢磨さんからその理由を教えもらい、「琢磨さんの農業経営の工夫」「飯塚町がきゅうりの生産が盛んなこと」を知るだけでなく、米作りだけでも 1 年をかけた大変な仕事なのにさらに様々な野菜を生産しているという事実が、琢磨さんの生産者としての努力を子どもに感じさせることとなる。

野菜の生産については、きゅうりを中心に取り扱う。きゅうりは種からでも苗からでも育てることができる。当然、苗は苗を育てる業者から購入するので、種から育てた方が費用は少ない。しかし、琢磨さんは苗から育てている。なぜなら、琢磨さんは一人でビニールハウス 2 つ分のきゅうりを育てているため、種から育てるには人手が足りないからである。一方、琢磨さんの知り合いの他のきゅうり農家ではきゅうりを種から育てている。その農家は 5 人で経営しているので、種から育てることが可能なのである。このように、きゅうりの生産工程の学習では、琢磨さんと他の農家の生産方法を比べ、生産性を高める工夫に違いがあることに気付かせていく。

また、きゅうりのビニールハウス設営の写真を見せ、農家同士が協力してビニールハウスを設営

していることに気付かせていく。しかし、その写真には琢磨さん以外に若い生産者が写っていないことにも子どもは気付くことだろう。ここで、子どもは、生産者の減少や高齢化などの日本の農業の課題にも触れることとなる。

「ふかめる」段階では、琢磨さんの新しい取り組み、山形の伝統野菜「山形青菜」を生産する「セイサイボーイズ」を紹介し、その取り組みを始めた理由を子どもに予想させる。子どもの予想を琢磨さんに発表し、琢磨さんからその理由を教えてもらうことで、子どもは琢磨さんの地域に対する愛情や農業に対しての熱意を感じる事となる。

そして、「あなたなら農家になるか?」という問いを設定し、子どもに話し合わせる。この活動によって、これまで子どもが学んできた、琢磨さんの食料生産に対する工夫や努力と、農業の仕事の大変さや収入の安定の難しさの間で、子どもは揺さぶられ一人一人がさらに自分事として食料生産についての学びを深める事となる。

最後に「ひろげる」段階では、「琢磨さんのような農家の人達のために、今私たちができることは?」というテーマで、食料生産と自分達の生活をつなげていく。これまで学んできた生産者の想いに対して、消費者としてどんな行動ができるかという問いである。このことを通して、ESDの視点「連携性…ヒトとヒトのつながり」「責任性…やりとげている」を働かせ、子どもは自分に今できることを真剣に考える事となる。そして、子ども達が話し合って考えたことを、琢磨さんに発表し評価をもらうことで、日本の食料生産の輪の中に自分も入り貢献することができるのだという、日本人の一員としての役割の自覚をすることができると考える。

- 本学習で働かせる ESD の視点（見方・考え方）
 - ・ 相互性 全てのモノはつながっている
 - ・ 連携性 ヒトとヒトのつながり 仲間はずれをつくらない
 - ・ 責任性 やりとげている
- 本学習で育てたい ESD の資質・能力
クリティカル・シンキング システムズ・シンキング
- 本学習で変容を促す ESD の価値観
世代内の公正 自然環境・生態系の保全 幸福感
- 達成が期待される SDG s
2 持続可能な農業の促進 1 2 持続可能な生産・消費形態の確保

4. 単元の評価基準

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
生産者の工夫や努力を知り、その工夫や努力が自分達の食料生産を支えていることを理解することができる。	生産の工程や人々の協力関係などに着目して、食料生産に関わる人々の働きを考え、表現することができる。	食料生産について、主体的に学習の問題を解決しようとしたり、よりよい社会を考え学習したことを社会生活に生かそうとしたりする。

5. 単元の指導計画（全 17 時間 ）

次	主な学習活動（ ○ ）	学習への支援（・）
見 つ め る ③	○ 米作りの写真から、米がどのように作られているか予想する。 ○ 学習問題を作る。	・ 子どもの興味を「米作り」から「米作りをしている人」に変えるために、どんな人がどれぐらいの人数で働いているのかを予想させる。
	米はどこから来ているのか？	
し ら べ る ⑧	○ 米を作っている琢磨さんを紹介する。	
	琢磨さんは米をどうやって作っているのか？	
	○ 琢磨さんから米の生産工程を聞き、米カレンダーにまとめる。 ○ なぜ米以外にも野菜を作っているのかを考える。	・ 米作りが1年間を通した仕事であること、JAや農家同士で協力して米作りをしていることを気付かせる。
	琢磨さんは野菜をどうやって作っているのか？	
	○ なぜ琢磨さんはきゅうりを種からではなく苗から育てているのかを考える。	・ 琢磨さんの生産方法と他の農家の生産方法を比べて、生産性を高める工夫に違いがあることに気付かせる。 ・ 琢磨さんが作ったきゅうりを食べて、琢磨さんの品質を高める努力に気付かせる。 ・ ブランド化、6次産業化して、販売方法を工夫していることに気付かせる。
ふ か め る ④	○ 琢磨さんが「セイサイボーイズ」を作った理由を考える。	・ セイサイボーイズの取り組みが、琢磨さんの地域に対する愛情につながっていることに気付かせる。
	あなたなら農家になるか？	
	○ 自分だったら農家になるかどうか話し合う。	・ 琢磨さんの工夫や努力の価値と、農業の課題を対比させる。
ひろ げ る ②	琢磨さんのような農家の人達のために、今私たちができることは？	
	○ 話し合っ考えたことを、琢磨さんに発表して評価をもらう。	・ 子ども一人一人の考えを取り上げ、教室で意見交換をする。

米はどこから来ているのか？

見
つ
め
る
③

水田の水はどこか
ら来ているのか？

いつから始まり、いつ
収穫できるのか？

どんな人が、どれぐらいの
人数で働いているのか？

どのようにお店に
運ばれるのか？

困ることは
ないのか？

水道から水を引いて
いるのかな？

田んぼは広いから、10 人
ぐらいで働いている？

どうやって保存
しているんだろ

病気で枯れてしまう
こともあるのかな？

琢磨さんは米や野菜をどうやって作っているのか？

し
ら
べ
る
⑧

米の生産工程

- ・ 米カレンダー

きゅうりの生産工程

- ・ 種から？苗から？

農家同士の協力

- ・ ビニールハウス設置

販売の工夫

- ・ ブランド化、6 次産業化

米を作るために、琢磨
さんは稲の仕事以外
にも土や水の管理も
しているんだ。

種を買うより苗を買う方がお金は
かかるけど、琢磨さんは自分一人で
農家をしているから手間を省くため
に苗を買う方を選んでいるんだね。

他の農家との違いを出すた
めに、直売所で琢磨さん本人
が直接売っているんだ。

あなたなら、農家になるか？

ふ
か
め
る
④

琢磨さん

- ・ 品質を高める努力
- ・ 地域に対する愛情
- ・ 食料生産の思いへの共感

農家

- ・ 仕事の大変さ
- ・ 不安定な収益
- ・ 人手不足

あんなにおいしいきゅうりを食
べたのは初めて！おいしく作る
ために様々な努力をしている琢
磨さんの生き方に憧れるな。

地元の農業を盛り上げるた
めに、新しいチャレンジをし
ている琢磨さんはかっこい
い！自分もやってみたい。

1 年中朝早くから仕事をす
るのは、体力がもたないな。
天気などに左右される収入
は、かなり不安定だよな。

琢磨さんのような農家の人達のために、今わたしたちができることは？

ひろ
げ
る
②

なるべく地元の米や野
菜を買っていきたい。

農家の人の工夫や努力
を周りの人に伝えたい。

作ってくれた食材を大
切に食べていきたい。

第5学年 社会科学習指導案

山形県上山市立南小学校 太田 馨

1 単元名 水産業の盛んな地域

2 単元の目標

- (1)我が国の水産業は、自然条件を生かして営まれており、国民の食糧を確保する重要な働きを果たしていることを理解することができる。【知識・理解】
- (2)水産物の種類分布、生産量の変化や外国とのかかわりに着目して水産業が国民生活に果たす役割を考えたり、生産の工程や人々の協力関係などに着目して水産業にかかわる人々の工夫や努力を捉え、その働きを考えたりし、それらを表現することができる。【思考力・判断力・表現力】
- (3)自らの食生活とかかわらせながら、自分たちの暮らしと水産業をかかわらせて学ぼうとすることができる。【学びに向かう人間性】

3 本単元の指導にあたって

(1)児童について

給食で「赤魚の煮つけ」が提供された時、クラスの子ども数名がおかわりのじゃんけんに参加した。話を聞くと、魚が好きで、煮つけも刺身もよく食べるという。

このような児童の普段の姿をとらえた上で児童にアンケートを取った。「普段よく魚を食べるか」という問いに対しては、全員が「よく食べる」と答えた。また、好きな魚料理を聞くと、「焼き魚」「刺身」「寿司」など、多種多様な魚料理が挙げられた。一方で、「魚の切り身しか見たことがない」「漁師さんという人がいるのはわかるけど、どのように働いているのかわからない」という素朴な感想を抱いた児童もいる。山形県上山市は、周りを、奥羽山脈をはじめとした山々に囲まれた盆地である。そのような環境下で暮らす子どもたちは、「海」「魚」「漁業」に直接的にかかわる機会もなく、前述のような感想を抱いたのだと考える。「魚」というものにかかわっていながら、「いつのまにか食卓に出てくるもの」というイメージを抱く子どもが多いのが現状である。

(2)題材について

本単元は、学習指導要領における活動内容(2)-ア-(ア)及び、(4)-イ-(ア),(イ)を受けて設定された単元である。

日本は周辺を海で囲まれている。それゆえ、古来より魚を多く食べて生活してきた。昨今、日本人の食生活の洋食化・多様化がより進んでいる傾向にあるが、「寿司」に代表されるように、まだまだ日本人の食生活に魚は欠かせない存在であることが言えよう。そのような食生活を支えているのが、漁業関係者である。漁師が魚を捕り、また、それを流通させたり、売買させたりする人がいて、食卓に魚が届くのである。だが、現在の日本では、その漁業関係者、特に漁師の高齢化や後継者不足といった課題がある。また、自然環境面に目を移すと、マグロなどの大型の魚の漁獲量は1970年代以降、次第に減ってきている現状がある。これは、各国が排他的経済水域を設定し、日本がこれまで漁をしていた区域に立ち入れなくなってきたこと、それでも需要は減らないために、日本近海を中心に漁を行ってきた結果、魚が減ってきてしまったことが原因とされている。これらの他にも様々な要素に起因して、日本の漁業はこれから長い将来にわ

たって安定的に魚を供給することができるのか、問題視されている面がある。

そのために、漁業関係者の間では、後継者を募集したり、漁の仕方を工夫することで環境に配慮し、生態系を守ることを持続可能な食料生産を目指すしたりする動きがある。特に、後者においては、「近大マグロ」に代表されるような養殖漁業など、課題は残っているものの、海から水産物を獲りすぎずに、消費者に質の良い水産物を提供しようとする動きがある。また、禁漁期間を設け、魚を人間の手で獲らずに、親が子を産む時間、子が育つ時間を確保し、海で魚が繁殖する時間を確保し、そのことで生態系を維持するという取り組みもされている。

生態系を守るための取り組みには、消費者側からの動きも見られる。「サステナブル寿司」に代表されるように、海の生態系を崩さない範囲で、水産物を口にする取り組みである。具体的には、マグロなどではなく、ぶりやイカなど、消費しても今現在消費しても生態系に大きく影響しない生物を食べるなどすることである。今後、消費者側も、「ただ食べる」のではなく、持続可能な社会のためにすべきことに取り組む姿勢が求められていると言える。

(3)指導について

本単元では、子どもたちに、「自分のことだけでなく、漁業関係者や環境、将来世代のことを考えたうえで、今現在の水産物の消費活動を考える」ことができるようになることを目指す。そのために、①今現在、自分たちの食卓にどのようにして魚が届いているのか ②現在、水産業において、漁業関係者や自然環境が抱えている課題は何なのか について学び、その上で、③課題を解決していくために、自分たちはどのように生活していくとよいのかを考える学習を行っていく。その際、統計資料等を読み、現在の水産業の状況を把握する活動を多く仕組みたい。このように学ぶことを通して、これからの時代を生きる子どもたちが、自分のことだけでなく、漁業関係者、自然環境、将来世代の人々を考えたうえで自分の行動を決めることができるよう、指導していく。

そして、最終的には、子ども一人一人が、「ただ、魚を食べる」のではなく、漁業関係者や環境等にも配慮したうえで、「漁業を持続可能なものにしていくために、私たちはどのようにして生活をしていくのいくべきか」を考えられるようにしたい。

(4)ESD との関連について

1.この題材で主に働かせる ESD の視点

③有限性：水産資源は有限である。

④公平性：将来の世代にも、水産資源を活用できるように行動する。

2.主に育てたい ESD の資質・能力

○クリティカルシンキング

今現在の水産物の食生活を見直し、持続可能な食生活を送れるよう行動を変容させようとする力

○長期的思考力

データに基づき、漁師の高齢化・後継者問題や水産資源の枯渇問題を把握し、それを食い止めるための行動を考える力

3.変容を促したい ESD の価値観

○世代間の公正

次世代も水産資源を食べることができるように行動決定する。

○自然環境・生態系の保存を重視する。

1人1人の行動の変容により、水産資源や自然環境を守る。

4.達成が期待される SDGs

目標 14：持続可能な開発のために海洋・海洋資源を保全し、持続可能な形で利用する。

目標 12：持続可能な水産物の生産消費形態を確保する。

目標 8：包摂的かつ持続可能な経済成長及びすべての人々の完全かつ生産的な雇用と働きがいのある人間らしい雇用を促進する。

4 単元の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
①水産業は、自然環境を生かして営まれていることや、水産資源の確保する重要な役割を果たしていることを理解すること。 ②水産業にかかわる人々は、生産性や品質を高めるように努力したり、輸送方法や販売方法を工夫したりして、良質な食料を消費地に届けるなど、食生活を支えていることを理解すること	①水産物の種類や分布、生産量の変化、輸入などの外国とのかかわりに着目して食糧生産の概要を捉え、食糧生産が生活に果たす役割を考え、表現すること ②生産の工程、人々の協力関係、技術の向上、輸送、価格や費用などに着目して、水産業にかかわる人々の工夫や努力を捉え、その働きを考え、表現すること。 ③今後の安定した食糧生産に向けて、今現在の課題を把握し、その課題を解決するために自らが取り組めることを考え、表現すること。	①水産業について、そこにかかわる人の働き、工夫や努力、環境とのかかわりについて、自らの生活と照らし合わせながら理解したり、考えたりしようとしている。 ②水産業の課題を解決し、持続可能な食料生産を実現するために自らが取り組めることを考えようとしている。

5 単元指導計画(全8時間扱い)

時	○学習活動 ・ 児童の発言	学習の支援 指導上の留意点	評価
み つ め る ①	○「寿司」などを中心に、魚について知っていることを挙げる。 ・いつもたくさん食べているよ ・マグロが好きで、いつも食べているなあ。 ・家では、刺身のほかに焼き魚を食べているよ！ ・でも、そもそも魚はどこからやってくるのだろうか・・・？	写真「マグロの寿司」 写真「焼き魚定食」 ・自らの食生活を思い起こさせ、課題の設定の支援をする。	ウ - ① 【発言】
問い① 魚は、どのようにして私たちのもとにやってくるのだろうか？			
【子どもの捉え】 ・普段、よく魚は食べているが、どのようにして食卓までやってくるのかを知らない。 ・魚とは、お店で切り身の状態で売っているものだと考えている。			

しらべる③	○漁師や市場の人の働き方を調べ、食卓に魚が並ぶまでの過程を調べる。 ・どうやって調べていこうか・・・。 ・自分の家から、どんどんと遡って考えていくといいのではないだろうか。 ・まず、スーパーで買い物するでしょ・・・。 ・あれ、スーパーより前は、どこから魚が来るの？ ・しかも、スーパーでは既に切り身になっている・・・。 ・スーパーの人に話を聞いてみよう！ ○スーパーの店員さんに、魚はどこからやってくるのかを取材する。 ・どうやら、市場というところから来るらしい。 ・でも、市場って、山形市にあるって言うんだけど、海がないよね・・・。海から山形市には、どうやって来るの・・・？ ○海から山形市へ、どのようにして魚がやってくるのかを調べる。 ・どうやら、海沿いの地域の市場から、山形市にやってくるようだよ！ ・魚を運ぶ人も、新鮮さを保ちながら運べるように工夫しているんだね。 ・海沿いの地域の市場で、漁師さんが獲ってきた魚を水揚げして、そこで売っているんだね！ ・漁師さんたちは、どのようにして魚を取っているんだろう？ ○漁師さんにリモートで取材を行う。 ・漁師さんたちは、いろいろな方法で漁をしているんだ。 ・船も大きいのを持っているんだね！ ・何日も海に出ていることがあるようだよ！なかなか魚を獲れないこともあるみたい・・・。 ・とった魚は、そのまま食べられるだけじゃなくて、かまぼことかにもなるとのことだったね。どのようにして作られるのかな？ ○かまぼこなど、水産加工品の作られ方を調べる。	・自分たちの身近なところから遡って取材をさせる。 ・教科書や資料集なども活用しながら、それぞれの過程で、様々な人が携わっていることに注目させる。 人材「スーパーの店員さん」 資料「山形市公設地方卸売市場水産物市場のセリの図」 ・魚を売る人がいることに注目させる。 ・魚を運ぶ人がいることに注目させる。 人材「庄内地方の漁師さん」 ・魚を獲る人と出会让せる。 動画「様々な漁の行い方」	ア - ① ア - ② イ - ② 【ノ・ト・発言】
【子どもの捉え】 ・普段食卓に出てくる魚には、多くの人の働きがかかわっていることに気づく。 ・その人たちのおかげで、普段、おいしい魚を食べることができていることに気づく。			

ふかめる③	○普段よく食べている回転ずしのマグロの寿司が、100円で売られているが、それは果たして高いのだろうか、安いのだろうか。 ・これまで、たくさんの人がかかわっていることを考えると、安い！ ・いや、もっと安い値段で、たくさん食べられたほうがいいから、高いと100円でも高いと思うなあ。 ・実際に、漁にはどのくらいのお金がかかるのか、知りたいなあ・・・。	・2カンで100円の寿司の写真を見せ、「この値段は高いか安いかに」について問う。 ・この話題をきっかけに、マグロ漁師の経費の視点や環境の視点、消費の仕方の視点で、漁業の課題につなげられるようにする。	ア - ① ア - ② イ - ① 【ノ・ト・雑言】
問い② 普段、100円でマグロの寿司を食べているが、本当にこの値段で食べてよいのだろうか。			
○漁師さんに取材をしたり、資料を読んだりして、漁師を取り巻く経済的な厳しさを知る。 ・そうか、船1隻でも、こんなに値段がかかるのか。 ・お魚の値段によってお給料も変わるのなら、安い値段をつけられたら、お給料も安くなるよね。 ・だから、漁師になる人も減っているのかな。これから魚を食べられなくなってしまうかもしれないね・・・。 ・1回の漁でかなりのお金がかかるんだ。 ・市場の人や、魚を運ぶ人にも人件費がかかるよね。 ・やっぱり、一皿100円は安いんじゃないかな・・・。 ○親マグロの生息する数が減っていることを知り、生態系について考える。 ・以前は、排他的経済水域の影響で、日本近海のマグロがたくさん獲られたんだね。結局、僕たちがたくさん食べることが、このことにつながっているんだろうな。 ・マグロの値段が安いからと言ってたくさん食べちゃうと、どんどん親マグロが減ってくるんだね。 ・親マグロが減ると、子どもが生まれなくなるから、マグロの数は減っていくんだね。 ・マグロが減ると、ほかの海の動物の生き方にも影響してくるんだ・・・。 ・マグロのことや環境全体のことを考えると、100円という値段は安すぎるのかもしれないなあ。この状況が続くと、マグロを食べられなくなるかもしれないし、僕たちよりも後の人たちが食べる魚がなくなってしまう・・・。 ・でも、おいしいんだよね。 ・どうにか、この状況をよくできないかな・・・。		人材「庄内地方の漁師さん」 資料「漁師の働き方のインタビュー記事」 資料「漁師の人口の変化」 ・これまでの学習を通して、漁業にかかわる人の視点をもたせる。 資料「漁獲量の変化」 資料「マグロの生態系の変化」 動画「排他的経済水域の設定と漁業の変化」 ・排他的経済水域が設定されたことで、遠洋漁業が衰退し、日本近海でマグロを獲りすぎたことが、親マグロの減少につながってきたことをきっかけに、環境の視点をもたせる。	
問い③ 働く人や環境を大切にしながらマグロを食べ続けるには、どうしたらよいのだろうか。			
○漁師さんに取材をしたり、資料を読んだりして、漁業関係者の人々が行っている対策を知る。 ・養殖漁業や栽培漁業など、育てる漁業を行うことで、海の魚を守りながら魚を食べられるようにして		資料「養殖漁業や栽培漁業の行い方」 資料「後継者募集のポスター」 ・漁業関係者の視点での取り組みを	

	いるんだね。 ・禁漁期間を設けているそうだよ。親マグロが子どもを産んだり、生まれた子供が育ったりする時間を作っているんだなあ。 ・後継者を育てるために、ポスターを作っているそうだよ。働き手の人がいってくれるから、僕たちもおいしい魚を食べることができるもんね。 ・食べる側の私たちにも、何かできることはないのかな・・・？	紹介し、自分たちにもできることを考えるきっかけをつくる。	
	【子どもの捉え】 ・漁業にかかわる人の視点や環境への配慮の視点から、今現在の魚の消費の仕方に課題を持ち始める。 ・課題解決に向けた漁業にかかわる人々の工夫や努力があることを知ると同時に、消費者として、自分たちにできることはないかを考え始める。		
	問い④ 漁業の課題を乗り越え、これからもおいしい魚を食べ続けられるようにするために、私たちにできることはないのだろうか。		
ひろげる①	○漁業の課題を乗り越え、持続可能な魚の消費を行うために、これから自分が取り組みそうなことを考え、「宣言」をする。 ・お寿司の中でも、環境などの面から、「食べてもよい寿司」というものもあるんだ！逆に、マグロはあまり食べないほうがいいんだね。 ・僕は、これまで回転ずしでマグロを食べてきたけど、これからはイカとかぶりとかを食べてみようかな。 ・私も、いつも3皿くらいマグロを食べていたけど、1皿減らしてみようかな。 ・もっと、いろんな種類の魚のことを調べて、食べ過ぎたり、環境に良いものを選んでいきたいな。 ・安さだけを見るのではなく、働いている人のことも考えて、魚を買っていくようにしよう！	資料「サステイナブル寿司」 ・視点を「自分たち」に移し、自分たちで取り組めることを考えさせる。 ・「サステイナブル寿司」を紹介し、自分たちの身近なところに取り組みのきっかけがあることに気づかせる。	イ - ③ ウ - ② 【ノ・ト・発言】
	【子どもの捉え】 ・自分が食べている魚が漁業関係者のくらしや環境に影響していることに気づき始めている。 ・漁業関係者のくらしや環境を改善し、水産業を持続可能なものにするために、消費者の一人として自分に何をすべきかを考え始めている。日々の食事で、少しでも意識して行動していくことが大切である。		

理科学習指導案「持続可能なプラスチックの利用を考える」

日時：令和2年

場所：九里学園高校 理科実験室

授業者：川合 真澄

1. 単元名

「高分子化合物」

2. 単元の目標

- ・高分子化合物の性質と分類について学ぶ。
- ・重合反応として、付加重合と縮合重合があり、具体的な反応のさせ方を知る。

3. 単元について

（1）教材観

高分子化合物の構造や性質を学ぶ過程で、プラスチックを学ぶ。私たちの身の回りにはプラスチックで溢れていることに気づかせ、その大部分が化学的に分解されにくく、処理もしづらいことを学習させたい。

その上で、分解されなかったプラスチックの行方はどうなるのかを考えさせ、分解されず微細になったマイクロプラスチックによる自然環境や生態系への影響、そして自分たちへの影響を考えさせたい。他人事ではなく、自分事として捉えさせ、分解されやすいプラスチックである生分解性プラスチックを作成する体験(実験)を経て、これからの私たちはプラスチックをどのように利用していかなければならないかを考えさせたい。

（2）生徒観

高校三年生、男子7名、女子6名で、大学・短期大学、医療系専門学校への進学を目指している生徒が化学を選択している。授業の中でグループワークを取り入れることで話し合う活動に慣れている生徒が多く、相乗効果も高く感じている。感受性の高い生徒が多いため、映像やグループワークを取り入れながら進めていきたい。また、学校全体としてESD、SDGsへの取り組みは少なく、生徒の多くはSDGsの存在は知ってはいるものの、17のゴールを知らない生徒は多い。社会を良くしたいという意欲の高い生徒が多いため、今回関わるSDGsの観点も踏まえながら、進めていきたい。

（3）指導観

化学の授業の一環として、あくまでも化学的な性質や構造を学ぶ、という観点を踏まえ、その上で、プラスチックの有用性とそのリスクを理解し、身近に溢れているプラスチックをどのように利用していくかを考えさせたい。人間によるプラスチックの使用が、自然や生態系に大きな影響を与えていることを、単純な環境問題

として捉えるだけでなく、なぜそのような影響を与えてしまっているのか、を科学的根拠に基づいて学習させ、自分たちにできることや解決策を考えさせたい。

4. ESD との関連

SDGs への貢献	9 産業と技術革新の基盤をつくろう 12 つくる責任 つかう責任 14 海の豊かさを守ろう
-----------	---

学習活動	視点	資質・能力	価値観
プラスチックの構造、性質を学び、分解されにくいことを理解し、正常に処理されなかったプラスチックがもたらす環境への影響を学習する。	相互性	つながりを尊重する態度	自然環境、生態系の保全を重視する
自分たちが日常でどれくらいプラスチック製品を使用しているか、どれくらいゴミとしてプラスチックを出しているかを考えさせる。	有限性	多面的・総合的に考える力	
生分解性プラスチックをつくる実験を行ったり、バイオマスプラスチックなどの例を参考に、自分たちにできることを考え、行動する。	責任性	未来像を予測して計画を立てる力 他者と協力する力	世代間の公正

5. 評価規準

伝達・参加 関心・意欲・態度	批判 思考・判断・表現	関連・多面 技能	多面 知識・理解
①自分たちのプラスチック利用について、積極的に意見を出そうとしている。 ②協力して実験に取り組もうとしている。	①プラスチックの有用性と環境への影響を考える。 ②プラスチックについて学んだことを踏まえ、プラスチックの利用について自分なりの意見を持つ	①実験を通して、プラスチックの性質を学ぶ ②実験を通し、生分解性プラスチックをつくることができる。	①高分子化合物（ポリ○○）の構造や性質を学ぶ。

6. 単元の計画（総時間数 10 時間）

時	主な学習活動と内容	◇教師の支援 ◆主な評価
1	【様々なプラスチックの構造、性質を学ぶ】 ○高分子化合物の性質、構造を学ぶ	◆高分子化合物の構造を理解する 【多面（知識・理解）①】
2	○様々なプラスチックの性質を調べる（実験） 水に浮かべる、熱湯をかける、燃やす、伸ばすなど。 有毒なガスが発生する。	◇プラスチックは分解されにくいことを学ぶ ◆協力して実験に取り組もうとする。 【関連・多面（技能）①】
3	【プラスチック利用の現状を考える】 ○自分たちのプラスチック利用を考える。 ワークショップ形式で自分の生活や身の回りのプラスチック利用を考え、伝え合う。	◇日常で使用するプラスチックゴミがどれくらい排出されているか学習する ◆グループ活動に積極的に参加する。 【伝達・参加（関心・意欲・態度）①】
4	○学校や家の周りのゴミの状況を調べる（課外活動）	◇上杉神社や最上川を散策させ、ゴミの状況を観察する。（写真に収める）
5	学校外、自分たちの住む町を調査し、可能な限りゴミも拾う	
6	【持続可能なプラスチックの利用を考える】 ○プラスチックの行方を考える。 河川や公園に落ちていたゴミはどこに行くか考える ○プラスチックの環境や生態系への影響を学習する	◇（マイクロ）プラスチックを食べたクジラやウミガメの例を写真や映像で示す。 ◆プラスチックの有用性とリスクを考える。 【批判（思考・判断・表現）①】
7	○プラスチック使用における環境配慮の事例を調べる。	◇プラスチック削減やリサイクルの例を調べ、まとめる（山形、日本、世界）
8	本やネットなどで調べ、プリントにまとめ、KP 法などを用いて発表する。	◆まとめたものを発表する。
9	○生分解性（牛乳）プラスチックをつくる（実験） 他の生分解性プラスチックの例も示す。生分解性プラスチックは環境には優しいが、コストがかかり、耐久性も弱くなる。通常のプラスチックと生分解性プラスチックを土に埋め、分解の比較をする。	◇生分解性プラスチック、バイオマスプラスチックがどのようなものかを理解する。 ◆協力して実験に取り組もうとする。 【関連・多面（技能）②】
10	【自分たちにできることは何だろうか】 ○自分たちにできることは何であるか、考え、実行する。 プラスチックの有用性とリスクを考えながら、プラスチックとどのように付き合ふべきか考える。まとめた意見を発表する。	◇KJ 法などを用いて、様々な考えを出させる ◇科学的な視点も交えて考えさせたい。 ◆プラスチック利用について自分の意見をもつ 【批判（思考・判断・表現）②】

第4学年 社会科 学習指導案

天童市立寺津小学校 教諭 近野 巧

1. 単元名 「水はどこから」(全12時間)

2. 単元の目標

- ・飲料水を確保するための対策や事業は、安全で安定的に供給できるよう進められていることや地域の人々の健康な生活の維持と向上に役立っていることを見学・調査したり地図などの資料で調べたりして理解する。
(知識・技能)
- ・飲料水を確保するための対策や事業の役割を供給の仕組みや経路、県内外の人々の協力などに着目して考え、適切に表現する。
(思考・判断・表現)
- ・地域社会の一員として、飲料水を確保するための対策や事業に関わる人々の活動に関心をもち、水を大切に使うために自分にもできることがないか考え実践することができる。(主体的に学習に取り組む態度)

3. 単元について

(1) 教材観

本校は山形県天童市の寺津地域にある。学区内には、水田や果樹園などが多くあり、農業が盛んな地域である。また、須川と最上川の合流点がすぐ側にあり、江戸時代には舟運で栄えた地区でもある。本単元は、飲料水を供給する事業について学習することを通して、寺津地区の歴史や産業にとって身近なものであり必要不可欠なものでもある「水」について学ぶことができる単元である。

飲料水を確保するための対策や事業には、多くの人が関わっている。また、水は生活や産業のいろいろな場面で使われる大切な資源であり、川の上流から下流まで様々な地域で使うものでもある。本単元では、浄水場で働く方の「安全な水を供給することができるよう体調管理に気をつけている。」「水を送り続けるということを大切にしている。」という思いや下流に住む人の思いに触れることができるようにする。

(2) 児童観

本学級の児童は、総合的な学習の時間「寺津の農業について考えよう」の学習との関連で「田んぼの水探検隊」という学習を行なっている。「田んぼの水探検隊」の学習では、「学校の側を流れている須川の水は、田んぼには使えないため、最上川から水を引いてくれている人たちがいること」「水は循環していること」「きれいな水を守っていくために環境保全活動が大事であること」などを学ぶことができた。児童は水が循環しているということを知り、水を引くための施設を見学したり、そこで働く人の思いに触れたりすることもできた。本単元を通して、飲料水を供給する事業も同じように多くの人たちが支えてくれているということや自然環境に配慮した行動の大切さなどについて学んでいくことで、児童の理解がさらに深まり、水を大切な資源として捉え、自分たちができることを考えたり選択・判断したりすることができるようになっていくと考える。

(3) 指導観

本単元では、「田んぼの水探検隊」の学習を振り返ることから始める。話し合いの中で、「蛇口から出ている水は、どこから来ているの。」と問いかけることによって飲料水に目を向けさせていき、「生活に欠かせない水は、どこでどのようにしてつくられ、送られてくるのか。」という学習課題をつくる。この学習課題を解決していく中で、水資源を保全していくためにできることについても考えさせていく。

児童は「田んぼの水探検隊」の学習において、働く人の思いについて考えているため、調べ学習に取り組む中で「働いている人の思いは直接聞いてみないと分からない。」という思いをもつと考える。寒河江ダムや西川浄水場の見学については、児童の思いが高まってから伝える。

単元後半には、以前から交流している本校よりも下流にある学校や湧き水が豊富な地域にある学校と交流する機会をつくり、そこに住む人たちの思いに触れることができるようにする。自分たちの地域との共通点や相違点について考えていく中で、「水資源を守るために行動していく必要がある。」という思いは同じであることに気づかせる。

単元の最後には、学びをさらに深めるために、「自分なら『水道水』『月山自然水』『外国産のミネラルウォーター』のうちどれを選ぶか。」という学習を取り入れる。それぞれの水を飲み比べた後に、どの水を選択するか考えさせるが、その際、美味しいと感じた水を選択する子が多いと考えられる。浄水場の方が一生懸命作ってくれた水であることや湧き水を大切にしている地域の人たちがいたことなど、これまでの学習を振り返りながら考えるよう促すことで、味だけではない判断基準も持たせる。「飲料水」は、水道管を取って蛇口から出るものだけではないということにあらためて気づかせるとともに、飲料水の製造に関わる人や自然の存在を感じさせたい。自分なりの判断基準をもち選択するという行為を経験させることで、地域社会の一員として、水を大切に使うために自分にもできないことがないか考え実践することができる子供を育てていきたい。

・本学習で働かせるE S Dの視点（見方・考え方）

【相互性】

飲料水を確保するための対策や事業は水の循環と密接な関係にあり、自然環境に配慮した行動を取らないと、安全な水の確保は難しくなること。

【連携性】

水は生活や産業のいろいろな場面で使われる大切な資源であり、川の上流から下流まで様々な地域で使うものだから、大切に使う必要があること。

【責任性】

私たちが節水をしたり、自然を大切にしたりすることが何よりも大切であること。

・本学習で育てたいE S Dの資質・能力

【批判的に考える力（クリティカルシンキング）】

水の循環を意識し、節水をしたり自然を大切にしたりしているか、自分の生活を見つめ直す。

【多面的・総合的に考える力（システムズ・シンキング）】

「わたしたちの生活に欠かせない水は、どこでどのようにしてつくられ、送られてくるのか？」について考える。

【コミュニケーション力】

水を大切にするために自分たちができることについて、意見交流を通して、自分の考えをつくりあげる。

・本学習で変容を促すE S Dの価値観

【世代内の公正を意識する】

川の上流から下流までの人々をはじめとする様々な地域の人のことを考えて水を使うことが大切である。

【自然環境・生態系の保全を重視する】

自然環境に配慮した行動を取らないと、安全な水の確保は難しくなる。

【幸福感を大切にする】

安全な水を飲むことができるということは当たり前ではない。

・達成が期待されるSDGs

目標6（水・衛生） 水利用の効率の改善

目標14（海洋資源） 陸上活動における汚染など、あらゆる種類の海洋汚染の防止

4. 単元の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
①飲料水を供給する事業は、地域の人々の健康な生活や良好な生活環境の維持と向上に役立っていることを理解している。 ②地域社会の一員として、自らも自然環境に配慮した行動を取らないと、安全な水の確保は難しくなることを理解している。	①供給の仕組みや経路、県内外の人々の協力などに着目して、飲料水を供給する事業の様子を捉え、それらの役割を考えている。 ②水は生活や産業のいろいろな場面で使われる大切な資源であり、川の上流から下流まで様々な地域で使うものがあることに気づき、自分の生活を見つめ直している。	①飲料水を供給する事業に関わる人々の活動に関心をもって調べようとしている。 ②地域社会の一員として、節水をしたり、自然を大切にしたりするなど、自分にできることを考え実践しようとしている。

5. 単元の指導計画（全11時間）

次	主な学習活動	学習への支援（・）	評価（△） 備考（・）
1	○「田んぼの水探検隊」の学習を振り返る。 ○学習課題をつくる。	・「蛇口から出ている水は、どこから来ているの。」と問いかけることによって、飲料水に目を向けさせる。	
	生活に欠かせない水は、どこでどのようにしてつくられ、送られてくるのか。		
2 3 4 5 6	○飲料水はどこでどのようにしてつくられているのか調べる。 ・どこでどのようにしてつくられているのか、これまでの学習や経験をもとにしながら話し合う。 ・教科書や資料集、インターネットを活用して調べる。 ○寒河江ダムや西川浄水場で見学したいことを考え、見学する。 ○見学を通して学んだことを整理する。 ・学んだことを共有、整理する。 ・さらに解決したい課題を考える。	・調べたことはXチャートで整理する。 ・Xチャートの視点は、子供たちと設定する。田んぼの水探検隊の振り返りかた始めているため、以前と同じ「自分」「働いている人」「地域の人」「自然」という視点になると考えられる。 ・田んぼの水探検隊の学習を想起させながら、働く人の思いは見学先でしか学べないことを確認する。 ・「地域の人」という視点で調べることができていないことに気づかせ、次の課題につなげる。	△ウ① △ア① ・ノート ・観察
	他の地域でも同じようにつくられているのか。		
7 8 9	○寺津小よりも下流にある地域や湧き水が豊富な地域の学校と交流する。 ・それぞれの学校で学んだことを交流し、共通点や相違点を見つける。 ○外部講師の方から「水資源保全」について話を聞く。 ・日本と世界の水事情について知る。 ・水の循環や自然の大切さについて知る。	・湧き水が豊富にあるなど地域によって違いもあるが、「水資源を守るために行動していく必要がある。」という思いは同じであることに気づかせる。 ・自分たちの身の回りの環境が当たり前ではないことに気づかせる。水を大切に使うために自分にもできないことがないか考えている子の考えを取り上げ、共有する。	△ア② △イ① △イ② ・ノート ・観察

1 0	○自分なら『水道水』『月山自然水』『外国産のミネラルウォーター』のうちどれを選ぶのか考える。 ・それぞれの水の飲み比べをする。 ・どの水を選択するのか伝え合う。 ・これまでの学習を振り返る。 ・もう一度どの水を選択するのか考え、伝え合う。	・浄水場の方が一生懸命作ってくれた水であることや湧き水を大切にしている地域の人たちがいたことなど、これまでの学習を振り返りながら考えるよう促すことで、味だけではない判断基準も持たせる。	
1 1	○単元全体を振り返る。 ・学んだことを整理し、これからどのように生活をしていくのか考える。 ・特に興味をもったことやみんなに伝えたいことはないか考える。	・具体的に考えている子の意見を共有する。一人一人が考えたことを実践できるよう、自分にもできることを考えるよう声がけをする。 ・国語「新聞をつくろう」の学習でまとめる内容を考えることで、学びがつながるようにする。	△ウ② ・ノート ・観察
1 2	○振り返ったことをみんなに伝える。 ・前時の振り返りをもとにしながら一人一人発表する。 ○一人一人が考えた「自分にもできること」をみんなで整理する。 ○「4年1組のみんなで今日からがんばっていくこと」を話し合う。	・一人一人の意見を整理する時には、Yチャートやベン図などを活用する。使用する思考ツールは、子供たちの意見をもとに選択する。 ・「4年1組のみんなで今日からがんばっていくこと」については、朝学習の時間などを活用して、月に1回程度振り返っていく。	

第6学年 社会科学学習指導案

上山市立南小学校 教諭 佐藤 亨樹

1 単元名 歴史探偵になろう！ ～結髪土偶の謎に迫る～

2 単元の目標

- ・縄文時代の世の中の様子について、遺跡や地図、年表などの資料で調べ、狩猟・採集の生活が営まれていたことを理解する。(知識・技能)
- ・土偶の存在意義について、当時の生活の様子や資料から読み取れることを関連づけたり、総合したりして推論し、表現できる。(思考・判断・表現)
- ・縄文の人々の思いと、現代社会や自分たちとのつながりを考えたり、これから文化財とどう関わっていけばよいかを考えたりする。(主体的に学習に取り組む態度)

3 単元について

(1) 教材観

本単元は、学習指導要領解説6年の内容(2)「我が国の歴史上の主な事象について、学習の問題を追及・解決する活動を通して、次の事項を身につけることができるよう指導する。」にあたる。

ア 次のような知識及び技能を身に付けること。その際、我が国の歴史上の主な事象を手掛かり、大まかな歴史を理解するとともに、関連する先人の業績、優れた文化遺産を理解すること。

(ア) 狩猟・採集や農耕の生活、古墳、大和朝廷(大和政権)による統一の様子を手掛かりに、むらからくにへと変化したことを理解すること。その際、神話・伝承を手掛かりに、国の形成に関する考え方などに関心をもつこと。

イ 次のような思考力・判断力・表現力等を身に付けること。

(ア) 世の中の様子、人物の働きや代表的な文化遺産などに着目して、我が国の歴史上の主な事象を捉え、我が国の歴史の展開を考えるとともに、歴史を学ぶ意味を考え表現すること。

このうち、狩猟・採集の生活をしていた縄文時代の人々の様子や思いを、地域から出土した土偶を通して迫っていくのが本単元である。当時の様子と、自分たちの生活や現代社会との関連・つながりを意識したり、今日まで保存・保護されてきた文化財との関わり方を考えたりしていく。

本単元で扱う教材は、山形県寒河江市の石田遺跡で発掘された結髪土偶である。結髪土偶とは、3000年前～2400年前の縄文時代晩期に出現した、頭部に髪を結ったような特徴をもつ土偶である。現在、県内では石田(寒河江市)、添川(鶴岡市)、釜淵(真室川町)の3カ所から出土しており、東北地方で見ると、青森県から山形県中部ぐらいまでの分布を示している。結髪土偶の文様や主なデザインは、地域により細かな違いはあるものの、酷似していることから、一定の文化圏が築かれていたと考えられている。土偶の意義については、未解明な部分が多く、祭祀・信仰の道具というのが有力な説である。今回取り扱う結髪土偶は、大正10年にJR左沢線の線路敷工事の際に、大量に出土した遺物の中から発見された。発掘当初は、上半身と左脚が離れた状態で見つかり、同一のものだと気づかれずに寒河江市の大地主、安達又三郎が所有していた。後に上半身は安達家を離れ、居場所を転々とする事になり、最終的に師範学校(現在の山形大学)に流れ着いた。一方の左脚は、近年、安達家から寒河江市に寄贈されたことがきっかけで、山形大学の上半身と同一ということが判明、約90年ぶりに再開を果たした。その後、山形大学博物館が中心となり、上半身と左脚を接合するためのクラウドファンディングを立ち上げた。その結果、

目標額を大きく上回る260万円もの支援が集まり、接合に成功した。

これらの事実から、本單元では3つの視点を考える展開にしていきたい。1つ目の視点は、「文化の交流と意義」である。結髪土偶も縄文土器や黒曜石同様、似ている文様や型式などから、当時の人々は、互いの集落を往来し、物や情報の交換・交流を行っていたことが考えられている。文化交流は、現在も自分たちの生活や社会を豊かにするためになくてはならない要素であり、遥か昔から人の間に根付いていた考え方だったことに気づかせていきたい。2つ目は、「土偶の必要性」である。土偶が何のために作られたのかは、先述した通り不明な点が多い。そこで当時の生活の様子を基に子どもなりの意義を自由に推論させることで、幸せを願う縄文人の思いに寄り添い、現代との共通性を見いだせるようにしていきたい。3つ目の視点は、「文化財保護・継承の大切さ」である。学習指導要領解説には、(2)ア「次のような知識技能を身につけること。その際、我が国の歴史上の主な事象を手掛かりに、大まかな歴史を理解するとともに、関連する先人の業績、優れた文化遺産を理解すること。」とある。この中で、「優れた文化遺産を理解すること」とは、「各時代の人々によって生み出され、今日まで保存・保護されてきた文化遺産の大切さを理解すること」である。本單元においての結髪土偶は、縄文の様子を現代に伝える貴重な物証であるとともに、子ども達に「自分たちの祖先や関わってきた大人によって、現在まで大切に受け継がれてきたこと」を伝える教材である。発掘されてから90年間もの間、紛失や破損もなく大切に守り続けられ、多くの人達からの膨大な寄付により接合を果たした事実から、子ども達の中に文化財をより理解しようと努力したり、保護・継承しようとしたりする態度を育てていくとともに、自分たちが住む寒河江の街を捉え直す機会につなげていきたい。

縄文時代は、歴史学習全体の導入部分にあたる。科学が発達した現代においても未だ解明されていない土偶について考えることを通して、残された文化財や資料を見つめることで、探究していく考古学的な面白さも味合わせていきたい。

(2) 指導観

単元の導入「みつめる」で、寒河江市内の橋（高瀬大橋）に飾られている土偶の写真を提示し、子ども達に「土偶とは何か?」「寒河江市と土偶はどんなつながりがあるの?」など様々な問いを持たせていく。問いに迫るために、縄文人の生活の様子を知ることや縄文時代の寒河江を調べる必要感を生み出すことで、「縄文時代の様子はどのようなものだったのだろうか?」という学習課題を設定する。

その課題を受け、「しらべる」では一般的な縄文時代の暮らしについて、教科書等を用いて「衣」「食」「住」の項目に分けて調べていく。その後、「寒河江に縄文の人達は住んでいたのか?」という問いから、寒河江市郷土資料館を見学し、寒河江市で出土した土器や石器を観察する。また寒河江市教育委員会生涯学習課歴史文化専門員 大宮富善氏の話から、寒河江には県内最大級の広さをもつ「高瀬山遺跡」及びその付近に石田遺跡を含む大小様々な遺跡があること、寒河江市の遺跡分布図などから、縄文人達は山沿いや川沿いに住み、食料を確保しやすくしていたこと、黒曜石、翡翠、塩、土器の出土分布から、交易が存在していたこと、土偶が発見されていることなどを知らせる。これらの活動を通して、子ども達に縄文時代の生活や寒河江市とのつながりについて、具体的にイメージさせ、土偶を作った目的を考えるための根拠となる知識をつかませたい。

「ふかめるⅠ」では、「どうして縄文時代の人たちは、土偶を作ったのか?」という問いに迫っていく。資料は、国宝となっている5体の土偶を取り扱う。子ども達は前時までに学習した知識から、「縄文時代は、他のむらと交流しながら、みんなで協力して平和に暮らしている」という印象を持つと考えられる。まずは、そのイメージを基に土偶の意義を考えさせる。子どもは縄文時代の平和的な部分や、土偶のフォルムから「子どものおもちゃとして作ったのではないか」などの意見を持つことが予想される。そこ

で、追加資料として「縄文時代の遺跡数の変化」、「平均寿命」、「人口の推移」、「気温の変化」などのデータに提示し、「長く生きることが難しかった」という事実気づかせることで、子どもたちが持つ縄文時代の認識に揺さぶりをかける。「縄文時代は本当に穏やかで安定した時代だったのか」「土偶は単なるおもちゃだったのか」など、「ねり合い」が発生するような新たな問いを生み出すことで、それまでとは違う縄文時代や土偶の認識を形成させたい。「穏やかで平和な狩猟採集生活の中に、厳しい自然との戦いが存在していた」という子ども達が新たに認識した時代背景と、土偶の文様や形から見える縄文人の豊かな美的感覚から土偶の意義についてねり合う。お互いの推論を共有していく中で、縄文人の願いが現代にも続いていることに気づかせていきたい。次に、「ふかめるⅡ」として、寒河江市で出土した結髪土偶の意義を考えていく。結髪土偶のレプリカやCT画像の観察を通して、結髪土偶の形に込められた思いを想像し、前時に自分たちが考えた土偶認識を基に、結髪土偶の必要性を推論する。また結髪土偶の出土分布図を提示し、結髪土偶がある一定の範囲から出土されている事実から、縄文土器と同じような文化圏があったことに気づかせていく。最後に結髪土偶を所蔵している山形大学博物館学芸員に、自分たちの立てた仮説を発表し評価してもらうことで、物証を根拠として思い思いの推論を行い、過去に思いを馳せることの面白さを感じさせたい。

最後に、「ひろげる」では、山形大学博物館学芸員から、結髪土偶がこれまで保護・継承されてきた経緯を聞くことで、文化財保護・継承の大切さを考えさせたい。また、寒河江市のキャッチコピーである「歴史と文化が織りなす 気品ただよう美しい都市 寒河江」を紹介し、歴史を伝える文化財が寒河江市の街づくりの一端を担っていることを知らせ、「寒河江市民として今後どう文化財と関わっていけばいいのか」をテーマに、自分なりにできることを考えさせていきたい。

・本学習で働かせるESDの視点（見方・考え方）

- 【公平性】：土偶を通して縄文時代の人たちの生活を考えることで、幸せを願うという行為が現在も続いていることを理解し、未来へ繋いでいこうと考えること
- 【連携性】：文化財は、一部の大人達が努力して保護していくのではなく、文化財の意義を理解して、市民ひとり一人ができることを考えて保護・継承していこうと努力すること
- 【責任性】：自分たちが、地域の記憶である文化財をつなげていく一員であることに気づき、行動すること

・本学習で育てたいESDの資質・能力

- システムズシンキング：土偶があるという事実から、縄文時代の暮らしでは、幸せを願う思いのつながりや交流が行われる豊かな暮らしがあったことを理解する
- 長期的思考力：結髪土偶が長い間地域で守られてきた事実から、自分たちも文化を継承していくことの大切さを考える

・本学習で変容を促すESDの価値観

- 世代間の公正：幸せを願う文化を大切にすると共に、それを現在の私たちに伝える文化財を未来へ伝えていきたい

・達成が期待されるSDGs

- 11:文化財と共に歩む街づくりを考える
- 16:縄文時代の人々の生活を通して、幸せを願う行為が現代も同じように続いていることを考える

4 単元の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
①縄文時代の人々は、豊かな自然を生かして、狩猟や採集の生活をしていただることを理解できる。	①結髪土偶の存在意義について、当時の生活の様子や資料から読み取れることを関連づけたり、総合したりして推論し、表現できる。	①土偶に込めた縄文の人々の願いと、現代社会や自分たちとのつながりを考えようとしている。 ②寒河江市民として、これから文化財とどう関わっていけばよいかを考えようとしている。

5 単元の指導計画（全6時間）

次	○主な学習活動 ・児童の発言	学習への支援（・）	評価（△） 備考（・）
みつめる ①	問い どうして橋の上に土偶があるのか？ ○寒河江の橋（高瀬大橋）にある土偶の写真を見て、寒河江と土偶の関係性や縄文時代の様子について疑問を持つ。 ・縄文時代ってどんな時代かな？ ・土偶って何？ ・なんで寒河江にあるのかな？ 縄文時代の様子はどのようなものだったのだろうか？	・高瀬大橋の土偶の写真を提示することで、日常の風景の中から、未知の土偶に焦点化することで、探究したい問いを生み出せるようにしていく。	
しらべる ②	問い 縄文時代の様子はどのようなものだったのだろうか？ ○教科書で縄文時代の生活の様子を調べる。 ・堅穴住居という家に住んでいたのか。 ・動物の肉や魚、貝、木の実、山菜を食べていたんだね。 ・土器を使って、料理したり、食べ物を保存したりしていたんだね。 ・服は麻や毛皮でできていた。 ・貝塚には、ゴミの他に、人の骨も捨てていたんだね。 問い 寒河江にも縄文時代の人々は住んでいたのだろうか？ ○資料館を見学し、寒河江の遺跡から発掘された遺物の見学をしたり、専門員の方から話を聞いたりする。 ・山沿いや川沿いに住んでいた。 ・他の地域と交流することで、物を交換したり、技術の教え合いをしたりしていたんだね。今と似ているね。 ・寒河江では山形県で一番大きい縄文時代の遺跡が発見されていたんだね。 ・土偶も発掘されていたんだ。 ・土偶は何のために作られたのかな？ ○縄文時代はどんな様子だったのかをまとめる。 ・必要なものを交換したり、技術を教え合ったりしていて、みんなで協力していたんだね。 ・山菜や木の実を採りにいったり、動物や魚を捕まえたりして、楽しそうだな。 ・争いごとがなくて、平和な時代なんだね。 【ここまでで子ども達が持つ縄文時代像】 縄文時代は、他のむらと交流しながら、みんなで協力して平和に暮らしていた時代	・教科書だけではなく、寒河江市の資料館見学や学芸員の方から話を聞くことによって、教科書の内容を補足したり、寒河江との関連を意識させたりしながら学習を進めていく。 ・ゲストティーチャーから、土偶の意義について一緒に考えてほしいという願いを伝えてもらうことで、次時の活動に対する必要感を高める。	△ア① (ノート)

ふかめるⅠ①	問い どうして縄文時代の人たちは、土偶をつくったのか？ ○前時までに調べた縄文時代の様子や、及び縄文時代の平均寿命・遺跡数の増減・縄文時代の気温・人口の推移などの資料を基に、結髪土偶が作り出された理由を考える。 ・土偶は、子どものおもちゃとしてつくったのかな。 新たな問い 縄文時代は本当に平和で穏やかな時代だったのか？ ・31歳までしか生きられないって、今と比べると長生きできなかったんだね。 ・縄文時代中期にはこんなにあった遺跡数が晩期にはすごく減っている。何があったのかな？ ・たくさんいた人口もどんどん減っていった。 ・昔はお医者さんもないし、病気が流行ったのかな。 ・災害が起きたのかな。 ・食べ物がなくなってきたのかな。 【ねり合い後の子ども達が持つ縄文時代像】 縄文時代は、自然や病気などを恐れながらも、他のむらと交流しながら、みんなで協力して生き抜こうとした時代 ・自然災害とかが起きたときに大変だから、お祈りするためにつくった。 ・病気から守ったり、長生きできるように祈ったりするための神様にした。 ・女の人を形をした土偶が多いから、子孫繁栄できるように、人形にして女の人を大事にした。 ・大きい土偶もあるから、ムラの守り神にした。	・表「縄文時代と現代との平均寿命比較」、グラフ「縄文時代の遺跡数の変化」などを提示することで、前時までの学習で子ども達が持つ縄文時代の生活像に揺さぶりをかけることで、新たな問いを生み出し、学習をより深めていけるようにする。 ・根拠を明確にした推論及び発表を意識させ、様々な意見を認めることで、未知のものを明らかにしていく楽しさを味合わせる	△イ① (ノート) △ウ① (ノート・発言)
ふかめるⅡ①	問い 縄文時代の寒河江の人たちは、どうして結髪土偶を作ったのか？ ○結髪土偶レプリカやCT写真の観察、前時までの子ども達などの土偶像を基に、結髪土偶の意義を推論する。 ・厳しくつらい時代だったから、いろいろな模様を入れてみんなを楽しませるために作った。 ・厳しい生活だったから自分の子どもを喜ばせようとおもちゃをつくってプレゼントしたのかな。 ・寿命が短いから、子どもが長生きするようにつくった。 ・人が早く死んでしまう時代だから、子どもがたくさん生まれてくるように作った。 ・子孫繁栄のために、女の人や女の子を大切にするために作った。 ・結髪土偶はいろいろな場所から見つかっているから、物々交換するときの品物として作ったのかな。 ○自分たちが考えた予想を学芸員に発表し、結髪土偶の必要性について確かめ、現代とのつながりを意識する。 ・神様に願う習慣は、縄文時代からもあったんだね。 ・目に見えない病気を恐れるのは、今も一緒だよな。 ・今と一緒に家族や女性を大事にしたんだね。	・結髪土偶レプリカやCT写真を観察させることで、土偶の文様や形にも注目させていく。	

ひろげる ①	問い私たちは今後どのような気持ちで文化財と関わっていけばいいのだろうか？ ○結髪土偶が、約90年もの間に多くの人から保存・保護されてきた事実を知る。 ・90年間も、壊されたり、無くしたりしないで、大切に保護されてきたんだね。 ・260万円も寄付が集まるなんて、結髪土偶はとても大切なものなんだね。 ○寒河江市のキャッチコピーを紹介し、寒河江市民として、結髪土偶などの文化財とどう関わっていくかを考える。 ・文化財は、大切にしないと未来の人達も歴史がわからなくなってしまうから、みんなで協力して守っていかなければいけない。 ・寒河江はさくらんぼと同じくらい歴史を大事にしている町だから、寒河江の文化財をもっと多くの人に知ってもらいたい。	・寒河江市のキャッチコピーを紹介することで、「歴史」が街づくりのポイントになっていることを知らせ、歴史を伝えるための文化財とどう関わっていくかを考えさせていく。	△ウ② (ノート・発言)
-----------	---	--	-------------------------

第1学年 生活科学習指導案

長浜市立永原小学校

教諭 今田 佑美

1. 単元名 たのしい あきいっぱい

2. 単元の目標

・秋の自然と関わる活動を通して、遊びや遊びに使う物を工夫してつくる。

(知識及び技能の基礎)

・身近な自然の違いや特徴を見付けたりすることができ、自然の様子や四季の変化に気付く。

(思考・判断・表現の基礎)

・遊びの面白さや自然の不自然さに気付いたりするとともに、身近な自然を取り入れ自分の生活を楽しくしようとすることができるようにする。

(主体的に学習に取り組む態度)

3. 単元について

(1) 教材観

本単元は、小学校指導要領解説生活編の内容(5)「身近な自然を観察したり、季節や地域の行事に関わったりするなどの活動を通して、それらの違いや特徴を見付けることができ、自然の様子や四季の変化、季節によって生活の様子が変わること」に気付くとともに、それらを取り入れ自分の生活を楽しくしようとする。」及び(6)「身近な自然を利用したり、身近にある物を使ったりするなどして遊ぶ活動を通して、遊びや遊びに使う物を工夫してつくることができ、その面白さや自然の不思議さに気付くとともに、みんなと楽しみながら遊びを作り出そうとする。」を受けて設定したものである。

ここでは、秋見つけを通して、身近な公園や校庭の自然の中で、春や夏の様子と比べながら、変化を感じ取らせ、自然の美しさ、面白さなどの自然の素晴らしさに気づくことができることをねらいとしている。

また、自然を利用した遊びは、児童が素直に関わっていくことができる活動である。その中で、様々な体験をして自然を大切にする心を育て、児童が身近な自然と関わり合い、児童の発想や工夫が生かされ、遊びや生活を豊かにしたい。

(2) 児童観

本学級の子供たちは、身近な自然に触れる機会も多く、登校途中や校庭で見つけた草花や木の実などを教室に持ってきたり、家の近くで見つけた生き物の話をしたりと自然と積極的に関わることができる。「いきものとなかよし」の単元では、捕まえた昆虫などの観察を興味深く行った。

これまで、春には家の周辺を散策し、身近な草花や生き物を見つけたり、遠足では豊公園に行き、自然に触れたり、公園で遊んだりしてきた。また、虫を捕まえたり、水遊びをしたりして四季の変化を感じる活動をしてきた。活動を通して自然の不思議さや面白さ、四季の変化によって自分たちの生活が変化していることに気づく児童は限られている。気づいたことを言葉や絵などで表現することは、あさがおを育てた際に少しずつできるようになってきている。

(3) 指導観

わたしたちの身近には、遊具だけでなく、いろいろな植物や生き物が生息している山門水源の森がある。そのことを身近に感じ、秋見つけを通して自然の中で遊びながら、季節の変化を感じ取らせたい。秋の山門水源の森の自然を感じ、友達と関わりながら、落ち葉や木の実などの秋の自然を生かして遊びを考えたり、発想を生かしたりして活動させたい。

学校周辺や山門水源の森で秋見つけをし、春や夏との違いを見つけ、四季の変化を感じさせるようにしたい。また、見つけた秋の自然物を調べ観察カードに記し、友達と紹介し合うことで気づきを深めたい。あさがおの観察カードでできるようになってきた観察する力を生かしたり、発想豊かに自然物を使った遊びを考えさせたりしたい。

そして、テレビゲームをしたり、動画を見たりして過ごすことが多い昨今の子供たちにも、自然の中で遊んだり、自然のもので遊んだりする楽しさを知って欲しい。自然のもので、楽しい遊びができることを体験し、次世代につなぐ基盤を築きたい。

(4) ESD との関連

・本学習で働かせる ESD の視点（見方・考え方）

多様性…木の実や葉をよく見るといろいろあること。

連携性…友達と協力して活動ができること。

遊びを通して、いろいろな人と関わるができること。

責任性…おもちゃを最後まで仕上げ、遊びの会や園児との交流会で、自分の役割を果たすこと。

・本学習で育てたい ESD の資質・能力

他者と協力する態度・・・友達と協力し合いながら作り上げていく。

コミュニケーションを行う力・・・友達に尋ねたりアドバイスしたりする。

遊びの場で、説明したり質問に答えたりできる。

・本学習で変容を促す ESD の価値観

〈自然環境・生態系の保全を重視する〉

秋見つけを通して、身近な自然環境と自分との関わりを感じ、これからも大切にしていこうという思いを持ち、他者に伝えていく。

〈幸福感に敏感になる。幸福感を大切にする。〉

身近にある豊かな自然を知り喜びを感じる。

園児との交流を通して、自分たちの役割を感じ、喜びを感じる。

・達成が期待される SDG s

1 5 陸の豊かさ

4. 単元の評価規準

ア 知識・技能の基礎	イ 思考・判断・表現の基礎	ウ 主体的に学習に取り組む態度
①秋の自然と関わる活動を通して、自然の様子や四季の変化、季節によって生活の様子が変わることに気づいている。	①秋の自然と関わる活動を通して、身近な自然の違いや特徴を見付けている。	①秋の自然と関わる活動を通して、身近な自然を取り入れている。
②遊びや遊びに使う物を工夫してつくることの面白さ、自然の不思議さに気付いている。	②身近な自然を使って、遊びや遊びに使う物を工夫してつくっている。	②みんなと楽しみながら遊びを創り出し、自分の生活を楽しくしようとしている。

5. 単元の指導計画（全19時間）

	主な学習活動	学習への支援（・）	評価
2	○学校周辺で 秋を さがそう ぼく・わたしのかんじる あきはなんだろう？ ・校庭や下グラウンド、希望公園へ秋を見つけに行く。	・春や夏の様子と比べながら、校庭や下グラウンド、希望公園の様子の変化に気づかせる。	イ①
2	○校外で 秋を さがそう 大うら川は どこから ながれてくるのだろうか？ ・校歌の歌詞にある「大浦川」はどこにあり、どこから流れてくるのか考え、川を見に行く。 ・道端にある草花の春や夏との違いを見つける。	・三択問題を入れるなどして、興味をひく発問をする。 ・山門水源から流れてくることを知り、次時の活動に期待を持たせる。	イ① ウ①

4	○山門水源の森で秋探しをしよう		ア① イ①
	山かど水げんの森、はるやなつとのちがいはなんだろう？ - 山門水源の森で秋探しをする。 - 秋見つけビンゴをする。	- 春の様子と比べながら、山門水源の森の様子の変化に気づかせる。 - 発見した秋を絵や文で表現し、わかりやすく発表させる。 - 友達の発表を聞いて、感じたことや、思ったことを伝えさせる。	
3	○おもちゃ作りを楽しもう		イ② ウ②
	はっぱや木のみで、どんなおもちゃがつかれるだろう？ - 木の実や落ち葉などで、どんなものが作れるか考える。 - 木の実や落ち葉などを使い、簡単なおもちゃを作る。 - 作ったものや発見したことものを紹介する。	- 木の実や落ち葉など、秋の自然物を使って、遊ぶものや飾るもの、生活に役立つものなどを工夫させる。 - 発表する準備をさせる。	
3	○葉っぱや木の実であそぼう		ア② イ①
	しぜんのものをつくったおもちゃの おもしろさは なんだろう？ 秋の自然の中で遊んだり、葉や木の実などの自然物を使った遊びを工夫したりする。	作ったもので遊んだり、発見したことを紹介したり、生活に役立つものの作り方を紹介させる。	
3	○園児との交流会を計画しよう		イ①②
	こどもえんのみんなに たのしんでもらうには どうしたらいいだろう？ - 園児との交流会の計画を立て、準備をする。 - こども園の子供たちも簡単に作れるおもちゃを考える。	- 園児でも簡単に短時間でつくれるおもちゃは何か考えさせる。 - 司会を決めたり、グループ分けをしたりする。	
2	○園児と交流会をしよう	手順のわかる写真等を準備し、視覚支援をする。	イ② ウ②
	こどもえんの子たちと あそんでみてよかったところ、もっとくふうできたところは なんだろう？		

第2学年 生活科学習指導案

長浜市立永原小学校

教諭 八田 万鈴

- 1 単元名 「どきどき わくわく まちたんけん」
「つたわる 広がる わたしの 生活」

2 単元の目標

○探検を通して、友だちや地域の人と関わることの楽しさを感じ、地域の良さに気づくとともに、自分たちの生活が地域の人や場所などと関わっていることが分かる。

(知識及び技能の基礎)

○地域を探検し、地域で自慢できることを見つけ、気づき、自分なりの方法で工夫して表現し、伝えている。

(思考力・判断力・表現力の基礎)

○地域の人や場所などにこだわりをもって調べ、積極的に関わりを広げたり深めたりするとともに、地域への愛着をもつ。

(主体的に学習に取り組む態度)

3. 単元について

(1) 教材観

本単元は、小学校学習指導要領解説生活編の内容(3)「地域に関わる活動を通して、地域の場所やそこで生活したり働いたりしている人々について考えることができ、自分たちの生活は様々な人や場所と関わっていることが分かり、それらに親しみや愛着をもち、適切に接したり安全に生活したりしようとする。」及び(8)「自分たちの生活や地域の出来事を身近な人々と伝え合う活動を通して、相手のことを想像したり伝えたいことや伝え方を選んだりすることができ、身近な人々と関わることのよさや楽しさが分かるとともに、進んで触れ合い、交流しようとする。」を受けて設定したものである。

ここでは、児童にとって身近な生活圏である校区に出かけて様々な場所を調べたり、人と接したりする中で、それらに対する親しみの気持ちや愛着を深めるとともに、人々との適切なかわりや安全な生活ができるようにすることをねらいとしている。

また、町探検で紹介したことを振り返り、自分なりに整理したり、そこでの気づきをグループ内や他のグループの友達に伝え合ったりする学習活動を充実させることで、地域の人と自分たちの生活との関わりや地域の良さに気づくことができるようにする。

(2) 児童観

本学級の児童は、第1学年において、山門水源へ行き自然を感じたり、保育園児や異学年と交流したりなど、地域の自然や人と関わる経験をしてきた。また、休日や放課後の児童の過ごし方に目を向けると、日常的に地域で遊び、地域の行事に進んで参加する児童が多い。一方で、家に引きこもりゲームをしたり、自分の家の周辺でしか遊べなかったり、友達の家を知らなかったりする児童もいる。1年生の

ときよりも行動範囲が広がっているからこそ、地域を学習の場としながら、地域に住む人やものについて関わり合うことを通して、地域に対する視野を広げ、愛着をもてるようにしたい。

（３）指導観

この単元では、地域の自慢を見つけ、友達に町探検で紹介し、町探検マップにまとめるということが主な活動である。その過程で、地域に愛情をもち、地域の場所や人との関わりを広げるとともに、友だちと協力して町探検を行うことがねらいである。

本単元の指導に当たっては、まず「自分たちの住む町の自慢ってなんだろう。」と問いかけ、地域の自慢を考え、興味を持たせる。次に、「町探検に行きたい場所やルートはどうやって決めると良いだろう。」と問いかけ、町の自慢が紹介できる場所やルートをグループで考え計画させたい。また、町探検へは、菅浦、大浦、庄・山門、八田部、堂前・駅前の５つへ行き、それぞれの地域に住む児童が自分たちの町の自慢を紹介する。それぞれの町探検後にその地域の自慢についてみんなでまとめ、地域の良さに気付けるよう指導したい。さらに、全ての町探検を行った後は「町探検マップ」に地域の自慢をまとめ、地図を発表したり廊下に掲示したりする。そこでは町探検で紹介しきれなかったことや、もっと詳しく説明したい場所や人なども書き込み、地域の良いところをたくさん伝えることで、愛着をもたせたい。

（４）ESD との関連

・本単元で働かせる ESD の視点（見方・考え方）

相互性…現在の地域の様子は、菅浦のヤンマー家庭内工場や、漁業など昔から伝わっているものが多いということ。

連携性…友だちと分け隔てなく関わり、役割分担をしながら町探検の計画を立てること。

・本単元を通して育てたい ESD の資質・能力

<他者と協力する態度>

自分たちの地域の自慢は何か、どういうところを友だちに紹介したいかなど、意見交流を通して友だちと協力し、地域について学びを深める。

<つながりを尊重する態度>

地域の案内をしてくださるボランティアの方や、店員さん、住職さんなどとの関わりを通し、様々な人とのつながりが豊かな学びになっていることに気付く。

・本単元で変容を促す ESD の価値観

<世代間の公正>

町探検を通して、これからも地域を大切にしたいという思いをもち、他者に伝えていく。

<人権・文化を尊重する（文化多様性の尊重）>

地域を支える人々や文化を知り、その思いや伝統を大切にする。

・達成が期待される SDG s

1 1 住み続けられるまちづくりを

4 単元の評価規準

(ア) 知識・技能の基礎	(イ) 思考力・判断力・表現力の基礎	(ウ) 主体的に学習に取り組む態度
①地域にはさまざまな場所があり、多様な人が生活したり働いたりしていることに気付いている。 ②地域の人々が自分たちの生活を支えていることや、楽しく、豊かにしていることに気付いている。	①行きたい場所や会ってみたい人を決め、相手や場に応じた適切な行動や、安全な行動について考えている。 ②活動の計画を立てて、まち探検をするとともに、それを振り返って、すなおに表現している。	①身近な地域の人々やさまざまな場所に関心をもっている。 ②ルールやマナーを守り、安全に気を付けて、見たり、調べたりしようとしている。

5 単元の指導計画（全30時間）

次	○学習活動 ・予想される児童の反応	○指導 ◆評価
第一次	自分たちの住む町の自慢って何だろう。（3時間） ○家の周りの場所や物、人など、友達に教えたいたいものを探し、文や絵で表す。 ・きれいなお花が咲いているよ。いつも手入れをしてくれる人がいるよ。 ・地域のことなら何でも知っているおじさんがいるよ。 ・近所の公園に、丸小船の形をした大きな滑り台があるよ。 町の自慢を友だちに詳しく伝えるには、どうすればいいだろう。（4時間） ・友だちに説明をするために、地域のことをもっと詳しく知りたい。 ○地域ごとに分かれ、町探検の下調べ計画を立てる。 ・大きな畑をもっているおじさんがいるよ。インタビューをしに行きたい。 ・丸小舟について友達に紹介したいから、詳しく話を聞きに行きたいよ。 ○それぞれの地域へ、町探検の下調べに行く。 ・おじさんから、大きな畑はジャガイモをたくさん育てていると聞いたよ。堂前に大きな畑があるのを見せてもらった。	○事前に「家の周りの、自慢できる素敵なものをみんなに教えてあげよう。」と呼びかけ、自分の住んでいる地域を紹介する活動への関心を高める。 ○具体的な例を挙げ、紹介する内容が理解できるように説明する。 ◆自分の住んでいる地域に関心をもって地域の自慢を考え、素直に表現している。【(イ) ②、(ア) ①】 ○同じ地域の友だちの「町自慢」を聞いた後、さらに質問して交流するよう声かけをする。 ○それぞれ5つの地域で「町自慢」で紹介をするものの下調べに行く。 ◆行きたい場所や会ってみたい人を決める。【(イ) ①】 ◆地域にはさまざまな場所があり、多様な人が生活したり働いたりしていることが分かる。【(ウ) ①】 ◆安全に気を付けて見たり、調べたりしようとしている。【(ア) ②】

	・昔、丸小舟は色々な荷物を運んでいたんだって。	
第二次	町探検へ行きたい場所やルートはどうやって決めると良いだろう。(2時間) ○町探検へ行く場所やルートを決め、「案内計画書」を作る。 ・町の自慢が紹介できる場所を案内したいな。 ・自分の地域は、自分で紹介したいな。 ・地域に詳しい人をよびたいな。	○自分の住む地域を詳しく紹介するために、町探検へ行くことを伝える。 ○自分の住む地域の町探検へ行く時は、案内役となり、友だちに紹介することを伝える。 ◆友だちの話を基に、探検したい場所や会ってみたい人、やってみたいことを決めている。【(イ) ①】
第三次	町探検へ行く。(9時間) ○5つの地域(菅浦、大浦、庄・山門、八田部、堂前・駅前)へ行く。 ・自分の地域は、自分たちで案内するよ。 町探検へ行き、見つけた「町自慢」は何だろう。(5時間) ○「町自慢」だと思ったところを絵や文で表す。 ・地域の人が町を案内してくれた。説明がとても分かりやすかったよ。 ・初めて腹帯観音様を見たよ。腹帯を巻いた観音様はここにしかないって知ったよ。 ★町探検に行った後、それぞれの地域で見つけた「町自慢」をまとめる。	○町探検で案内役のモデルを示す。 ○校外で活動する時の安全やマナーについての約束を確認する。 ◆地域の一員として、マナーを守り、安全に気をつけて活動しようとしている。 【(ア) ②】 ◆地域には様々な場所があり、そこには様々な人々が生活していることや、様々な仕事があることに気付いている。 【(ウ) ①、②】
第四次	・町探検で知ったこと友だちや家族に知らせたいな。 町探検で見つけた「町自慢」を何にまとめるといいだろう。(1時間) ○「町自慢」を他者に伝える方法を話し合う。 ・地図に新しく見つけた場所や町探検で紹介しきれなかった場所を書きたいよ。 町探検のマップには何を書けば良いだろう。(6時間) ○町探検マップに「町自慢」をまとめる。 ○自分が住む地域の「町自慢」をする。 ・町探検マップで初めて知ったことがあったよ。 ・地図に書いてあるところに行ってみたいな。	○発表方法のモデルを示す。 ○形式や大きさなどは児童の発想を十分取り入れる。 ○役割を決めてグループで協力して作ったり、発表の練習をしたりするよう指導する。 ◆好きになった場所や、親しくなった人々のことなどを振り返り、自分なりの方法で表し、友だちに伝えている。【(イ) ②】

第3学年 社会科学学習指導案

長浜市立永原小学校
教頭 山田 茂

1. 単元名 うつりかわる市とくらし

2. 単元の見目標

- ・市の様子の移り変わりについて、時間の経過に伴い変わってきたことを理解できるようにする。
- ・聞き取り調査や地図などの資料で調べ、年表などにまとめる技能を身につけるようにする。
(知識及び技能)
- ・交通や公共施設、土地利用や人口、生活の道具などの時期による違いに着目して、市や人々の生活の様子をとらえ、それらの変化を考え、表現する力を育てるようにする。
(思考力・判断力・表現力等)
- ・市の様子の移り変わりについて、学習問題などの解決に向けて意欲的に追究するとともに、これまでの学習を振り返り、学習したことを確かめることができるようにする。また、これからの市の発展について考えようとする態度を育てるようにする。
(主体的に学習に取り組む態度)

3. 単元について

(1) 教材観

1, 2年生の生活科では、永原学区内の各地域を見学して回り、なんとなく学区内の地域については理解している3年生。1, 2学期には、「地域探検」として、生活科とは異なる観点を持って、地域を見学して回った。その中で、自分の地域の自慢できることを探し、友達に紹介するという活動を行い、地域のよさに焦点を当てた学習を行ってきている。

本単元は、永原学区を地域という横の広がりで見えてきたこれまでの学習から、昔と今を比べるという縦の広がりへと変わっていく内容である。初めて歴史的な見方や考え方が必要となる学習であり、なかなか実感としてとらえにくい。そこで学習の前半では、浅井歴史民俗資料館を見学し、昔の生活体験を行うことにする。

昔のくらしについては、資料をもとに学習することがほとんどとなるが、資料館での体験が実際の昔の生活をイメージしやすくなり、資料や教科書の写真について理解を深めることにもつながるだろうと考えている。

また資料館の見学から昔のくらしについての興味・関心を高め、昔のくらしを調べてみたいという意欲を引き出していきたい。

(2) 児童観

3年生からは社会科の学習が始まった。生活科は、どちらかといえば、体験を通して学ぶことや経験することが重視されているが、社会科は「社会的な見方や考え方」を育てることが中心となる。しかし、これまでの生活科から一足とびに社会科へ移行していくことは難しい。そこで、1学期の地域探検などは生活科とよく似た学習活動を行い、まとめ方や友達への紹介などで少しずつ社会的な見方や考え方を取り入れていくように学習が進められている。

2学期の後半になり、本単元では初めて歴史的な視点に立った学習が展開することになる。3年生段階の児童にとって、「昔のくらし」は全く未知の領域であり、10年前でも100年前でも、自分が生まれる前のことであり、実感としては変わらないのではないかと考えられる。

浅井歴史民俗資料館での体験は、今の生活と比較しながら体験することができ、楽しく学習できるだろうと思われる。そこで十分な体験を積み、感じた思いを大切にしながら学習を進めていくようにしたい。

どちらかといえば自己中心的な3年生。昔のくらしは不便であり、今の時代に生まれてよかったという思いを持つ子が出て不思議ではない。しかし、それは一面的な見方であり、学習を進める中で、3年生なりに、昔のくらしが今の自分たちの生活につながっているのだというこ

と感じさせたい。その中で、昔の人々の苦労や努力にも目を向け、自分たちの永原学区への見方や考え方を広げられるようになってほしいと願っている。

(3) 指導観

本単元の目標の第一は、「市の移り変わりについて、時間の経過に伴い変わってきたことを理解できる」ことである。長浜市の場合、市内と市外では様子が大きく違い、長浜でも最も北に位置する永原学区で、長浜市内の移り変わりを学習しても児童にはピンとこないだろうし、ほとんどの学習が資料をもとにするため、全くの他人事のようになってしまう心配がある。

自分たちの生活と関わって調べたり考えさせたりするためには、やはり身近なところの移り変わりを考えていくことが大切である。そこで、導入では永原小学校の今と昔の写真を見比べるところからスタートしたい。



上は、80年前の永原小学校と現在の永原小学校の写真である。

2枚の写真を見比べてみると、いろいろな発見がある。校舎が木造か鉄筋かということはすぐにわかるが、よく見ると校舎の並び方が今と違ったり、グラウンドの広さが違ったりしている。さらに山の様子では木の成長の差が見られ、時代が大きく変わったことが見つけられる。

この写真は自分たちの学校なので、児童にとって身近なところでの変化を見つけやすく興味もわくだろうと思われる。また、3世代同居の家族も多い本校では、おじいちゃんやおばあちゃんが当時の様子を知っておられるので、インタビューをしたり、話を聞いたりする中で、昔のくらしについて詳しく知ることができる。



ここ100年前後の移り変わりは激しく、一気に生活も町の様子も変わってきている。上の写真は菅浦の50年前と現在の同じ場所だが、昔は船着き場だったところが埋め立てられ道路や駐車場になっている。時代のニーズに合わせた変化だが、生活そのものが変わってきたことが見て取れる。このように、昔の道具や写真などの資料をもとにしながら、今と比べることで推測することが学習の中心になる。それぞれの時代のトピック的なことを取り上げることになるが、それを補強するのが当時の生活を知る人々へのインタビューとなる。

実物の道具、当時の写真、インタビューと、初めて本格的に調べる学習をする児童たち。本単元の学習を終えて、「調べる」とはどういう活動なのかを実感することができるだろう。

それでも、3年生の児童にとっては、10年前でも50年前でも100年前でも、自分の生まれる前のことであり、それぞれの違いをとらえることは難しい。いかに自分たちの生活と関連付けて考えていくかが指導の大きなポイントとなるだろう。

(4) ESDとの関連

・本学習で働かせるESDの視点（見方・考え方）

多様性……昔と今を比べると、色々な点で違いが見つけられる。生活はどんどん便利になってきているということ。中には、変わらない（不変）のものもあり、そういうものは逆に残していきたいということ。

相互性……昔と今はずっとつながっていて、少しずつ良くなってきている（便利になってきている）ということ。

公平性……永原学区内には3世代同居という家庭が多く残っている。昔の生活を祖父母や父母に尋ねることは、世代間のつながりを考えることになるということ。

・本学習で育てたいESDの資質・能力

未来像を予測して計画を立てる力

資料や調査、インタビューを通して、永原学区の昔の様子を理解し、今の生活との関連を考える中で、今後の永原学区のあり方についても思いを巡らせることができる。

コミュニケーションを行う力

見学地や祖父母、父母へのインタビューを通して、自分の知りたい情報の集め方を知るとともに、相手に応じた話し方の体験を積むことができる。

つながりを尊重する態度

祖父母や地域の高齢者、見学地で働く人々など、様々な人との関わりやつながりの中で自分たちの生活があるのだと自覚し、地域を大切にしようとする態度。

・本学習で変容を促すESDの価値観

世代間の公正

昔の人たちは、協力し、工夫しながら生活をしてきた。そして、より良い暮らしを求めて多くの人たちが努力してきた結果が今の生活につながっている。

人権・文化を尊重する

今の自分たちの生活があるのは家族や地域の人たちのおかげなので、そのことを大事にして、みんなが幸せに生きられるように考えていかなければならない。

・達成が期待されるSDGs

9 インフラ

11 まちづくり

4. 単元の評価規準

ア. 知識・技能	イ. 思考・判断・表現	ウ. 主体的に学習に取り組む態度
①市、鉄道、道路、土地利用、人口、生活道具や暮らし等の移り変わりについて調べ、年表にまとめている。	①市の移り変わりについて、駅や鉄道、道路、公共施設、人口、土地利用の移り変わりに関連付けて考えている。	①市の様子と人々の暮らしの移り変わりについて、聞き取りや資料などを使い、工夫して意欲的に調べようとしている。
②自分たちの学校などが建設されたところと現在の様子の違いについて、資料をもとに調べている。	②市や人々の生活の様子移り変わりについて、年表に表現したことを話し合い、特長を考えている。	②年表にまとめたことを、わかりやすく説明しようとしている。
③市や人々の生活の様子は、時間の経過とともに移り変わっていることを理解している。		③学習をもとに、私たちの市のこれからについて考えようとしている。

5. 単元の指導計画（全16時間）

	学習活動	○学習への支援	○評価・備考
2	昔の生活にタイムスリップして今の生活と比べてみよう 昭和16年 現在  ・今と全然違う ・不便そう ・おばあちゃんに聞こう	○永原小の今と昔の写真 ○昔の道具の実物を提示 ○教科書で昔の道具を確認	ウ-① （主体的） イ-① （思判表）
4	浅井歴史民俗資料館で昔の生活を体験しよう 石うす・・・石うすをまわして、大豆を粉にする体験 あかりと暖房・・・火鉢やこたつのぬくもり、行灯、ランプの明るさを体験 はかり・・・さおばかりやますを使っていろいろなものをはかる 着物・・・昔の着物を体験 台所・・・セリんや風呂の水運びを体験 せんたく板・・・せんたく板とたらいを使って、手ぬぐいを洗う 昔のおやつ・・・火鉢でかきもちを焼いて食べる せた・ぞうり・・・ぞうりをはいて、まきを背負う体験 農具体験・・・足踏み脱穀や唐箕、縄ないなどの体験	資料館の講師の先生に指導をお願いする。	イ-② （思判表） ウ-① （主体的）
6	昔の様子について調べてみよう およそ150年前 丸子舟を使っていた 大浦川を船で渡る 漁業もさかんだ  およそ100年前 炭焼きをしていた 機械がほとんどない およそ50年前 奥びわこパークウェイ 湖西線の開通  ・2年生の時に丸子舟の館に見学に行ったよ ・大浦漁港も行ったね ・みつとし煎餅も行った ・菅浦の漁港も見たよ ・菅浦は広がったね ・庄ではおびひろ工場も見学したよ ・和蔵堂では馬頭観音様を見たよ ・永原には名物がいっぱいあるね ・山門学習でもいろいろ教えてもらったよ ・パークウェイは通ったことがあるよ、きれいだよ ・湖西線ができて電車に乗りやすくなった		ア-②③ （知技） イ-①② （思判表）
4	体験したこと、調べたことを紹介しよう ・年表にまとめてみよう ・紙芝居にしよう ・新聞に書こう おじいちゃんやおばあちゃんに聞いてみよう ○まとめた作品を交換する		ア-① （知技） ウ-②③ （主体的）

第3学年 総合的な学習の時間 学習指導案

長浜市立永原小学校 教諭 曾根 花蓮

1. 単元名 山門水源の森～どうして大切なのだろうか？生物の多様性から～

2. 単元目標

- ・山門水源の森には多くの種類の生物がいることやササユリの花の特徴を知るとともに、山門水源の森を保全している人々の活動について知る。 (知識・技能)
- ・なぜ山門水源の森が大切にされているのか考える。 (思考・判断・表現)
- ・山門水源の森の生物を観察したり、話を聞いたりすることを通して、山門水源の森の大切さに気づき、その大切さを他の人に伝えようとしている。 (主体的に学習に取り組む態度)

3. 単元について

(1) 教材観

本単元では、山門水源の森がなぜ大切にされているのか、児童が実感できるよう山門水源の森について知る学習を進めていく。山門水源の森には希少種をはじめとする多様な生き物があり、トンボだけでも50種類が生息している。また、山門水源の森は県の条例により、ミツガシワ等生育地保護区に指定されている。そして、ミツガシワやヒツジグサをはじめとする希少植物や、どんどん数が少なくなっているササユリの保全活動に取り組む人々がいる。しかし、山門水源の森は数十年前までは保全されておらず、荒れた状態の時があった。それらについて学習していく中で、山門水源の森の大切さを感じ、自分たちの住む地域に素晴らしい場所があることに気づけるのではないかと考えた。

(2) 児童観

本学級の児童は、1年生の時から毎年2回山門水源の森を訪れている。その時には、山門水源の森の水が大浦川につながっていることを学習したり、湿原に生息している生物の観察をしたりしてきた。また、山門水源の森が大切にされていることは知っているが、なぜ大切にされているのかを深く知っている児童は少ない。理科「こん虫を調べよう」では、昆虫の体のつくりや生息する場所や何を食べているかに興味をもち、前向きに学習することができたので、山門水源の森の生物多様性にも興味を示す児童は多いのではないかと思う。

(3) 指導観

本単元では、まず前学年までの学習の経験から、山門水源の森について考える。次に、春と秋にネイチャービンゴに取り組み、その活動を通して、山門水源の森の生物多様性について知る。また、昆虫は植物を食糧とするものが多く、様々な種類の昆虫が生息しているということは、様々な植物も生息しているということにも気づかせたい。さらに、道徳の教材である

「ササユリの森～山門水源の森を守る～」やゲストティーチャーの話から、植物の保全活動について知る。現在は保全されていることが当たり前になっているが、数十年前は保全活動がはじまっておらず、荒れた状態だったことも学び、自然と関わりをもたなければ今の状態を保てないことも感じさせたい。そして、学習したことを新聞にまとめ、お家の人に伝える。深めた知識を自分だけのものにしておくのではなく、他の人に伝えることで、様々な人に山門水源の森を知ってもらう機会になるのではないかと思う。

(4) ESD との関連

・ 本学習で働かせる ESD の視点（見方・考え方）

【多様性】希少な生物や植物と触れ合う体験を通して、山門水源の森の生物や植物の多様性に気づくことができる。

【有限性】山門水源の森の保全活動についての学習を通して、保全をしていかなければこのままの状態を長く維持することはできないことに気づくことができる。

・ 本学習で育てたい ESD の資質・能力

【システムズ・シンキング】

山門水源の森に様々な生物が生息しているのは、山門水源の森の希少な環境や保全活動のおかげだということを理解する。

【コミュニケーション力】

山門水源の森について学習したことを新聞にまとめ、様々な人に伝える。

【世代間の公正】

保全されている姿が当たり前ではなく、自分たちが自然と関わっていかなければ現在の状態を保つことはできないということを理解する。

・ 本学習で変容を促す ESD の価値観

【自然環境や生態保全を重視する】

山門水源の森の生物や環境、保全活動について学習する中で、自分の住む地域に、素晴らしい場所があることに気づくことができる。

・ 達成が期待される SDG s

1 5 陸域生態系の保護

4. 単元の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
①山門水源の森の生物多様性について理解している。 ②山門水源の森の植物の保全活動について理解している。	①山門水源の森がなぜ大切にされているのかを考え、それを新聞にまとめている。	①山門水源の森の生物や植物、保全活動に興味をもち、観察したり話を聞こうとしたりしている。

5. 単元の指導計画（全 11 時間）

時	○主な学習活動 ・児童の反応	・学習への支援	評価
1	○これまでの経験から、山門水源の森について考える。 ・いろいろな植物があるね。 ・アカハライモリを見たよ。 ・水源の森の水は大浦川につながっている。 ・地域の宝とよばれている。 山門水源の森は、なぜ大切にされているのだろう。	・前年度までの山門水源の森で学習している様子が分かる写真を提示する。	ウ①
2 3	○ネイチャービンゴを通して、春の生物について知る。 ・きれいな花がたくさんさいているね。 ・ササユリもさいているよ。 ・ホオノキの葉っぱって大きいね。 ・アカハライモリがいるよ。	・ビンゴカードを用意し、多くの生物を見つけられるよう意欲付けをする。	ウ①
4 5	○ネイチャービンゴを通して、秋の生物について知る。 ・ササユリの花はさいてないね。 ・他の花もさいていないよ。 ・キノコがたくさん生えているね。 ・トンボがたくさんいるよ。	・ビンゴカードを用意し、多くの生物を見つけられるよう意欲付けをする。	ウ①

6	○春と秋の山門学習で体験したことから、春と秋の山門水源の森の生物の違いや生物多様性について考える。 ・春と秋で、葉っぱの色が違うね。 ・同じ生き物もいる。 ・山門水源の森にはいろんな生物や植物がいるね。	・山門学習での様子が分かる写真を提示し、体験した時のことを想起させる。 ・友達とビンゴカードに記録したものを教え合い、自分が記録したものの以外にも興味をもてるようにする。	ア①
7	○ササユリや山門水源の森での保全活動について知る。 教材：道徳「ササユリの森～山門水源の森～」 ・ササユリは花が咲くまでに7年もかかるんだね。 ・鹿に食べられるのを防ぐためにネットを設置しているんだね。 ・山門水源の森の保全活動って大変だなあ。 ・保全していないと、たくさんの生物が生息できないんだね。	・ゲストティーチャーを招き、山門水源の森が保全される前のことや、現在の保全活動について教えてもらう。 ・春の山門学習のことを想起させ、ササユリの花に興味をもてるようにする。	ア②
8 9 10	○山門水源の森についての新聞を作ろう。 ・山門水源の森には、たくさんの生物がいることについてまとめたい。 ・希少種の保全活動について新聞を書きたいな。 ・山門水源の森はとてもめずらしい場所だから大切にされているんだね。	・ビンゴカードやワークシートなど、前時までの学習をふり返れるものを見られるようにしておく。 ・相手意識をもち、構成や内容の質についても考えさせるようにする。	イ①
11	○作った新聞をお家の人に紹介しよう。 ・初めて知ることばかりでびっくりしたって言われたよ。 ・お家の人をびっくりさせることができてとても嬉しかったな。	・今後の山門学習にも興味をもって取り組めるよう、肯定的な声かけをする。	イ①

第4学年 総合的な学習の時間学習指導案

長浜市立永原小学校 教諭 親谷 有香子

1. 単元名 秋の全校山門学習「水質と生き物 春とのちがい」

2. 単元の目標

- ・永原を中心とした児童の興味・関心等に基づく学習を通じて、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、問題を解決する力などの「生きる力」を育てる。 (知識・技能)
- ・情報の集め方、調べ方、まとめ方、発表の仕方などの学び方やものの考え方を身に付け、問題解決に向けて主体的・創造的な態度を育てる。 (思考力・判断力・表現力)
- ・自分の考えや意見をもって、自分の生き方について考えることができるようにする。 (主体的に学習に取り組む態度)

3. 単元について

(1) 教材観

本単元は、毎年全学年で実施している「全校山門学習」の秋の単元である。山門水源の森に見学に行き、自然学習を行うもので、ねらいは各学年によってちがう。第4学年でのねらいは、山門水源の森を見学しに行き、自然に触れることで、春とのちがいを感じ取ることと、大切な永原の環境を守ろうという気持ちをもつことである。

社会科「命とくらしをささえる水」の学習では、川の水が浄水場で飲み水に作りかえられ、私たちのもとまで送られてくることを学んだ。本単元では、その川の水の、さらにもとをたどり、水のいちばんのもとになっている山門水源を見に行ってみようという導入から学習を進めていく。いちばんのもとになる場所であるからこそ、きれいな水が守られるよう、水源の森を大切にしなければならないという意識が持たせられるような学習にしていきたい。

(2) 児童観

本学級の児童は、「全校山門学習」の見学を毎回とても楽しみにしている。昨年度の見学で見つけてきたものや、聞いてきたことも、嬉しそうに話す姿が見られ、意欲的な様子である。また、さまざまなことに対して「知っていきたい」「おもしろそう」と興味・関心を持てる子が多く、初めて学ぶことに対しても抵抗感なく取り組める児童が多い。児童から出てくる発言・つぶやきを大切にしながら、興味をさらに広げて学習を進めていけるよう工夫をしたい。

(3) 指導観

第3学年までの学習では、いろいろな植物、生き物を見つける体験が主な学習であった。しかし、第4学年では、社会科での学習などから視野を広げて、学んだことを生かし、深めるような学習を仕組んでいきたい。

児童のほとんどは、「山門水源の森はいいところだ」「自然は大切だ。」と感じているが、どうしていいところなのかを考えたことのある児童は少ないように感じる。自然が大切な理由も、深くは考えたことがないだろう。本単元では、山門水源の森が、わたしたちの生活とどのようにつながっているのかを知り、大切さについて詳しく学んでいきたいと考える。そのため、1つ1つの発問を工夫し、子供たちの思考を深めさせるような授業づくりをしていきたい。

また、山門水源の森を守っている人にも注目をさせたい。山門水源の森が今でもずっときれいなまま、守られているのは、それを支え、努力し続けている方がいるからである。本単元では、人にも焦点をあて、山門を守り続ける必要性、それを引き継いでいくという責任についても、考えさせるような時間を設定したい。

(4) ESDとの関連

・本学習で働かせるESDの視点（見方・考え方）

相互性・・・山門の水が、琵琶湖へ流れ、そこから私たちのもとへ届いてくる。山門の水は、わたしたちの生活と強く結びついているということ。

責任性・・・水源というのは、水の1番のもとである。水源をきれいに守っていかなければ、きれいな水は届かなくなってしまう。また、自分たちの水の使い方についても、「使いすぎない」「汚れたものを流さない」などと、責任をもたなければいけないということ。

・本学習を通して育てたいESDの資質・能力

進んで参加する態度

地域のために自分にできることはないかと考え、意欲的にかかわりをもとうとしたり、考えをつくろうとしたりして、地域社会に貢献しようとする。

多面的・総合的に考える力（システムズ・シンキング）

水源を守ることと、自分たちが使う水をきれいに守ることの両面を考えることができる。

・本学習で変容を促すESDの価値観

自然環境、生態系の保全を重視する

・達成が期待されるSDGs

- 6 すべての人々の水と衛生の利用可能性を
- 15 持続可能な森林の経営を

4. 単元の評価規準

知識・技能	思考力・判断力・表現力	主体的に学習に取り組む態度
様々な調査をして、山門の水質や生き物についてわかったことを書いている。	山門の水を守るために、自分たちができていることを考えている。	自分にできることを考えて、仲間と協力しながら調査・行動を進めている。

5. 単元の指導計画（全5時間）

学習活動	○学習への支援	○評価
1. これまでの社会科での学習をもとに、総合的な学習の時間での見通しをもつ。 ・浄水場で、水がつくられていた。 ・わたしたちは、水をすごくたくさん使っている。 ・安全に水を使えるように管理してくれている人がいる。	○浄水場見学に行った時の写真を提示することで、学習したことを思い出せるようにする。 ○児童の発言を自由に出させる。	学習に対する見通しをもてる。(主体的に学習に取り組む態度)
2. 水の一番のもとになっている場所を考える。 ・水の源だから、水源だ。 ・山門水源の森が、1番の水のもとなんだ。 学習課題をつくる。	○山門の水質環境について興味を持たせる。	山門水源に興味をもち、意欲的に調べようとしている。(主体的に学習に取り組む態度)
山門水源の森は、わたしたちの生活と、どのようにつながっているのだろう。		
3. 山門水源の森へ見学に行く。 ・山門の水はとてもきれい。 ・きれいな水だから、そこにしかない生き物や植物がいるのかな。 ・水の源だから、きれいに守っていないと。	○山門水源の森を理解させるために、ガイドの方と一緒に観察をさせる。 ○山門水源の役割について、話してもらう。	山門水源に興味をもち、意欲的に調べたり、質問したりしている。(主体的に学習に取り組む態度) 様々な調査をして、山門の水質や生き物について理解している。(知識・技能)

4. どのようにして、山門は守られているのか考える。 ・森林を守っている人がいる。 ・自然を守るためには、手入れをしなければならない。 ・これから、どのようにして守っていけばいいのかな。 新しい学習課題をつくる。	○ガイドの方の話を思い出させる。 ○ガイドブックを確認させる。	山門水源が様々な人の手によって守られていることを理解している。(知識・技能)
山門の水を守っていくために、私たちにできることを考えよう。		
5. 山門の水を守っていく行動を考える。 ・自分たちの力で、山門を守っていききたいな。 自分たちの行動をまとめて地域の方に発表する。 ・これで、よりたくさんの人が山門水源の大切さを知ってくれるといいな。 ・自分たちも、水を大切に使わないといけな。	○山門水源と、私たちの生活との関わりをもとに、自分たちの生活を見直し行動指針をつくらせる。 ○自分たちの水の使い方についても、ふり返れるようにする。	山門水源を守っていくために、多くの人に発信していきたいと考え、取り組んでいる。(主体的に学習に取り組む態度) 山門水源を守るためにできることを、多くの人に伝えるために、文章を考え、表現している。(思考力・判断力・表現力)

第4学年 総合的な学習の時間学習指導案

長浜市立永原小学校 教諭 長谷川 要治

1. 単元名 災害から身を守ろう ～わたしたちにできること～

2. 単元の目標

○永原地区の自然災害の現状、減災・防災について理解を深め、これから自分たちでできる減災・防災について、自ら課題を見付け、多面的・総合的に考えることができるようにする。

(知識・技能)

○現在および将来に直面する災害に対して、自らの安全を確保するための行動ができるようにするとともに、日常的な備えができるようにする。

(思考・判断・表現)

○友達と協力して課題の解決を図ろうとしたり、伝え合ったりできるようにする。

(主体的に学習に取り組む態度)

3. 単元について

(1) 教材観

本単元では、「永原地域にどのような災害が起きる可能性があるか」、「行政や自治会はどのような災害対策をしているか」、「災害時に自分たちはどのように行動すればよいか」について取り上げる。「永原地域にどのような災害が起きる可能性があるか」を調べることで、災害が身近なものであることを実感することができる。また、行政の災害対策、消防団をはじめとする自治会の活動に触れさせることで、防災対策を、行政にしてもらえばかりのものではなく、自分たち自身の問題であることがより理解できると考える。さらに、防災に関連して、自分たちにどのようなことができるかを考えさせることによって、防災意識を高めたい。また、総合的な学習として、社会科で調べたこと、考えたことを地域や校内に発信し、防災に対する意識を広める学習にも取り組みたい。

(2) 児童観

本校では、避難訓練が年4回ある。本学級の児童も、1年生の時から避難訓練を経験しており、身近に災害が起こる可能性があることは理解している。だが、実際に避難をしたり、被害に見舞われたりすることは経験していないので、自分自身がどのように行動すればよいか、状況によっては分からないことも考えられる。また、地震や大雨などの災害があっても、「大丈夫だろう。」「たいしたことないだろう。」と、影響を過小評価してしまうことによって避難が遅れたり、避難しなかったりする可能性もある。

本単元を学習することにより、防災について身近なこととして考えるとともに、自分自身がどのように行動するとよいのか、地域全体のことを視野に入れて行動できる力を養いたい。

(3) 指導観

本単元の指導に当たっては、まず避難訓練や、大雨が降った時の経験、今まで学習から、自分の身近にどのような災害が起こる可能性があるかを考えさせる。今までの経験から、児童が災害

についてどの程度自分自身の問題としてとらえているかをとらえる。その上で、ハザードマップや永原地区と原子力発電所との距離がわかる地図等の資料に触れさせ、災害が起こる可能性は現実にあるのだという認識をもたせる。

次に、実際に災害が起こった時に備えて、どのような対策がされているかを調べさせる。まず学校の敷地内を回る。4年生児童は、消防についての学習をしており、校内に防火設備があることは理解している。今回の学習ではさらに、防災倉庫の存在や、避難所としての学校の役割についても気づかせたい。

そして、自分たちの住む地区を回り、消防団の設備や消火栓、避難所の案内看板など、防災に関する施設や設備を見るとともに、自治会の方から地域の防災の仕組みについて話を聞く。そうすることで地域の防災に関し、住人が担う役割についてとらえさせる。

身近な場所の防災の仕組みについて学んだあとは、長浜市全体の防災に関して調べる。長浜市では、防災のために普段どのような活動をしているのかを、市のホームページや広報を調べさせる。そして、長浜市役所西浅井支所の方からも、災害時の体制、防災に関する普段の市役所の仕事等について話を聞く。また、警察や消防、自治会の消防団との連携についても聞く。防災活動に関して、行政や自治会等、さまざまな人たちが関わっていることを調べさせる。防災の仕組みや設備が円滑に運用できるよう、訓練が行われていることも理解させたい。

最後に、調べたことを自分たちの行動につなげるため、児童に「わたしたちには何ができるか」を考えさせる。自分たちが地域の一員としてできることや、自分の命を自分で守るのだという意識をもたせるようにする。また、調べたことを他の学年や地域に発信し、地域全体の防災・減災意識を高めることができれば、学習の意義も高まるであろうと考える。

(4) ESD との関連

・本学習で働かせる ESD の視点（見方・考え方）

相互性・・・地域の人々の中には、さまざまな人々がいるにもかかわらず、年齢や健康状態によって、身を守る方法が限られてしまうということ。

公平性・・・自分や自分の家族のみの安全を考えるだけでは、恵まれた環境や健康状態にある人のみが安心して暮らせる地域となってしまうということ。

責任性・・・これからの地域は、自分自身や家族のことだけを考えるのではなく、地域全体のことを考え、お互いが支え合う仕組みをつくっていく必要があること。

・本学習で育てたい ESD の資質・能力

クリティカルシンキング：物事を問い直し、新たな方法を見出す力、代替案の思考力
--

現在の永原地域や長浜市全体の防災体制を調べ、そのよさや課題を把握し、自分は何ができるのかを考える。

長期的思考力：データに基づき、先のことを考える力

ハザードマップを見て、永原地域にはどのような災害が起こる可能性があるかをとらえ、対策を調べたり考えたりする。

共働的問題解決力：他の人と協力して最後まで取り組む力

自分で考えるだけでなく、他の人の意見を聞き、うまく取り入れながら課題を解決していくとする。

・本学習で変容を促す ESD の価値観

相互性 自分や自分の家族が困っているとき、近所の人や地域全体で助け合えるようにすることで、安心して暮らせるまちをつくっていくことができる。

公平性 どの人も、災害が起こった時には等しく適切な支援を受けることができるようにする。

責任性 行政や地域が、自分の役割を果たすことで地域住民の安全を確保することができる。

・達成が期待される SDGs

【目標 1 1】 住み続けられるまちづくりを

4. 単元の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
①長浜市が取り組んでいる減災・防災対策を知る。 ②自然災害が起きたとき、自らの安全を守るための行動が分かる。 ③自然災害に対し、どのような備えをしたらよいか分かる。 ④調べたことを発表し合い、減災・防災に対する理解を深める。	①自分たちでできる減災・防災について、自ら課題を見付け、課題解決に向けて学習計画を立てている。 ②資料を用い、課題に関係する情報を収集している。 ③資料から得た情報を整理・分析して、まとめている。 ④減災・防災についてまとめたことを、校内に発信している。	①課題解決に向け、仲間と協力しながら、進んで学習に取り組んでいる。 ②住んでいる地域を調べ、減災・防災に対する関心を高め、様々な機関を活用しながら調べようとしている。 ③仲間と協力して、効果的な表現方法や発信の仕方を考えようとしている。

5. 単元の指導計画（全 1 5 時間）

次	主な学習活動	学習への支援（・）	評価（△）備考
1	1. これまでの避難訓練や社会科、理科の学習から、永原地域ではどのような災害が起こる可	・これまでの避難訓練で、どのような災害を想定して避難したかを考えさせる。	△イ① （思判表） △ウ①

	能性があるか、知っていることを話し合う。 ・大雨の時に、川から水があふれる。 ・大雨が降ると、山が崩れる。 ・地震が起こると山が崩れる。 ・火事が起こる。 ・原子力災害が起こるかもしれない。	・大雨や台風の時の大浦川や八田部川の様子、近くの道路が土砂崩れて通行止めになったことを思い出させる。 ・地図を見せ、福井県の原子力発電所との位置関係を実感させる。	(主体的)
2	2. 学校の中で災害対策のための設備を探す。 3. 長浜市の資料から行政の防災対策を調べる。 4. 永原地域の災害対策を調べる。	・校内を実際に回り、防災倉庫や避難所の看板を見せる。 ・ハザードマップや市のパンフレット、ホームページを見せる。 ・学校近辺をまわり、避難所の看板や消防団の施設、消火栓などを見学する。	△ア① (知・技) △イ② (思判表) △ウ② (主体的)
3	5. 西浅井支所の職員の方から、災害対策の設備を生かすために、どのような活動が行われているのかを聞く。 6. 地域の方から、自治会の消防団の話や防災対策の話を聞く。 7. 災害時の行政や自治会（消防団）の動きと課題をまとめる。 8. 災害から身を守るため、自分たちにできることは何かを防災新聞にまとめ、学校全体に広めていく。	・西浅井支所に行き、職員の方に、災害時に行政はどのような対応をするのかを聞く。 ・近隣の自治会の方、民生委員から、災害時に自治体としてどのような対応をするか、消防団の動きはどうかを聞く。 ・災害時の行政や自治会の動きについて聞いたことをノートにまとめる。 ・災害時に、自分たちはどのような行動をすればよいか、さまざまな場面を想定して具体的に考える。 ・新聞等にまとめ、全校に発信する。	△ア② (知・技) △ア③ (知・技) △ア④ (知・技) △イ① (思判表) △イ③ (思判表) △イ④ (思判表) △ウ① (主体的) △ウ② (主体的) △ウ③ (主体的)

第5学年 総合的な学習の時間学習指導案

長浜市立永原小学校
教諭 小椋 菜那

1. 単元名 「琵琶湖とわたしたちの暮らし」

2. 単元の目標

- ・フローティングスクールでの調査を通して、琵琶湖の水質状態や琵琶湖の恵みについて考えることができる。また、琵琶湖は昔から人々の生活と大きく関わっていることが理解でき、琵琶湖を守るための取組や自分にできることについて新聞づくりなどを通して発信することができる。

(知識及び技能)

- ・フローティングスクールでの活動や調べ学習を通して、琵琶湖と人々の生活との関わりについて気づいたり、琵琶湖の恵みを未来につなげていくために地域の課題を踏まえて自分たちができることを考えたりすることができる。

(思考力・判断力・表現力)

- ・琵琶湖がある滋賀県に住む一人として、琵琶湖の恵みについて調べ、これからも大切にしたいという考えをもち、未来につなげていくために自分たちができることを実践する。

(主体的に学習に取り組む態度)

3. 単元について

(1) 教材観

本単元では、滋賀県に住む一人として、琵琶湖や地域を大切に思う心を養うために、地域社会の担い手意識や当事者意識を育てることを目的に、琵琶湖のよさを見つけ、琵琶湖を守っていくためにできることを考え、実践する学習を目指している。琵琶湖は、以前まではきれいな水であったが、1977年に淡水赤潮が発生した。水の変化の原因は、人口が増えたことや、人々の生活様式が変化し、多くの水を使うようになったことや産業の発達などが挙げられる。

その中で、滋賀県では対策として「富栄養化防止条例」を定め、「せっけん運動」に取り組んだ。他にも限りある湖を大切にする取組が行われ、水質が改善されている。しかし、現在でも、水の汚れや湖岸に散らばるゴミなどいろいろな問題を抱えている。

県内の5年生は「フローティングスクール」に参加し、琵琶湖について学んでいく。フローティングスクールは、学習船「うみのこ」に乗り、琵琶湖をめぐりながら、いろいろな体験を積むことができる。フローティングスクールでの体験を通して、今までの琵琶湖に対する思いを変え、琵琶湖がいつまでもきれいな姿であってほしいという思いを育てていきたい。

(2) 児童観

本学級の児童は、1年時から地域学習として、地域で守られている「山門水源の森」を教材に学んでいる。1～3年時までの「山門水源の森」での学習を通して、山門水源の森の水が地元の大浦川を通り琵琶湖に繋がっていくことを学習している。4年時には、森林環境学習「やまのこ」で、森林に入り木や草花に触れたり、間伐体験や里山整備体験などの森林での体験をしたりしてきた。そこで、森林は空気や雨水をきれいにしてくれる力があり、森林がたくわえた水が琵琶湖を豊かにするということを学んできた。さらに、「水生生物」の学習では、地元の大浦川にすむ水生生物を観察し、きれいな水でしか生きていけない生き物について学習した。地元の大浦川が貴重な環境にあることを知ることができた。しかし、これらの自然や環境を自分たちの力で守っていこうという意識がない。「琵琶湖の美しさを守ることは、自分たちでもできる」ということに気づかせ、「わたしたちにできることは何か」を考えたり、考えたことを実践したりすることができるようさせたい。

(3) 指導観

本単元の指導に当たっては、まず琵琶湖の水がわたしたちの生活の中でどのように使われているかを想起させる。このことを通して、琵琶湖の水は、昔から人々の生活と深く関わっていることに気づかせたい。その後、フローティングスクールに行き、水の透視度調査や琵琶湖に住む魚について調べる活動を展開する。その中で、琵琶湖の水の汚れや美しさを知り、これからどうしていけばよいのか考える契機としたい。次に、琵琶湖の美しさを守るために、県や地域でどんな取組が行われてきたか調べる活動を設定する。調べていく中で、琵琶湖を守るために様々な取組があることを理解させる。また、家の人や地域の人にインタビューをし、琵琶湖の水を守るための工夫や努力を理解させたい。最後に、琵琶湖の美しさを守るために自分たちにできることは何かを考えさせる。山門水源の水を美しいままつなげるためにや山門水源とつながる限りある琵琶湖の水を守り続けるために、生活の中でできる工夫を考え、児童自身が実践していこうとする態度を育てていきたい。

(4) ESDとの関連

・本学習で働かせるESDの視点（見方・考え方）

【有限性】わたしたちは、水の恵みによって生活が支えられているが、琵琶湖の環境は、家庭排水やごみのポイ捨てなどの人の営みによって悪化すること。またその豊かさは失われてしまうということ。

【連携性】県や地域、市民が連携・協力しながら、琵琶湖の環境を美しくし、その美しさを保って海までつなげているということ。

【責任性】わたしたちの生活や取組が琵琶湖や川などの環境を悪化させたり、改善させたりする、そのため、自分たちの生活を見つめ直すことが重要であること。

・本学習を通して育てたいESDの資質・能力

【クリティカルシンキング】

昔の人々のくらしと今の人々のくらしを考えることを通して、自分たちのライフスタイルを変革していこうとする行動（琵琶湖に優しい生活の仕方）ができているか問い直す。

【協働的問題解決力】

グループや学級での話し合いを通して、自分たちにできることを考えたり、学びを地域と連携してや学年に発信し続けたりして、琵琶湖を守る活動についての意見をまとめる。

・本学習で変容を促すESDの価値観

【自然環境・生態系の保全を重視する】

琵琶湖に住む生き物について調べることを通して、たくさんの生き物たちが関わっていることに気づき、環境保全を尊重することの意義を考えることができる。また、自分たちの生活が環境に与える影響を理解するとともに、自分たちも環境の中で生活をしており、自然を守ることは自分たちの生活を守ることにつながっていると理解する。

・達成が期待されるSDGs

目標14 海の豊かさを守ろう

目標15 陸の豊かさを守ろう

4. 単元の評価規準

(ア) 知識及び技能	(イ) 思考力・判断力・表現力	(ウ) 主体的に学習に取り組む態度
様々な調査を通して、琵琶湖の水質や役割について分かったことを書いている。	琵琶湖の恵みを未来につなぐために自分たちができることを考えている。	自分にできることを考えて、仲間と協力しながら調査・行動を進めている。

5. 単元の指導計画

過程	○学習活動 ・児童の反応	○学習への支援	○評価
見つめる	○今までの総合の学習を想起する。 ○琵琶湖がわたしたちの生活の中でどのように使われているか、知っていることを出し合う。 ・地域の人や、京都・大阪の人の飲み水になっている。 ・魚がいっぱいできて、釣りもできるし、釣ったものを食べられるよ。 ・昔は、丸子船で行き来していたらしい。	○全校山門学習において、学習してきたことを振り返り、地元の川が琵琶湖とつながっていることを確認させ、興味を持たせる。 ○琵琶湖の水と生活を関連させ、自分たちの生活と深く関わっていることに気づかせる。 ○琵琶湖と人々の関わりは、いろいろな面があるが、「水」について注目させるようにする。	(ウ) 主体的
調べる	○フローティングスクールへ行く。 ○琵琶湖に住む魚やプランクトンについて調べたり、実際に見たりする。 ○水の透視度調査を行い、地元の山門水源の森の水と琵琶湖の北湖・南湖の水のきれいさを比べる。 ・山門水源の水ってとてもきれい。 ・琵琶湖の水は、北と南、昔と今できれいさが全然違うんだ。 ・山門の水のきれいさがそのまま琵琶湖行けばいいのにな。	○琵琶湖の源流の水と琵琶湖の水を調べることで、汚れやきれいさの違いに気づかせる。 ○どこで水が汚れてしまったのか、なんで汚れてしまったのかを考えるきっかけとする。	(ウ) 主体的
深める	○琵琶湖の水の美しさを守るために、滋賀県が取り組んだことについて調べる。 ○琵琶湖を守るために地域や身近なところで取り組んだことについて、地域の人や家の人にインタビューする。 ○環境を守るくらしについて調べる。 ・琵琶湖では、淡水赤潮が発生したんだね。 ・今のきれいな琵琶湖は決して当たり前なことではないんだね。	○琵琶湖でおきた問題とそれについての取組についてまとめさせる。 ○活動している写真を用意し、理解を深められるようにする。 ○「あおいびわ湖」の冊子を活用させる。 ○県の取組以外にも、環境を守るためにくらしの工夫ができることを知る。	(ア) 知識 (ウ) 主体的
広げる	○琵琶湖の美しさを保つために自分たちでできることは何かを考える。 ○学びを新聞にまとめたり、「学習発表会」で発表したりする。 ○学習を通しての自分の学びをふり返る。 ○自分たちでできること（クリーン活動など）に積極的に取り組む。	○これからもきれいな琵琶湖を保つための取組として、社会全体で取り組むことと自分たちでできることについて考えさせる。 ○今までの学びを整理し、発表することで知識の定着や深まりを目指す。	(ア) 知識 (イ) 思考 判断 表現

第6学年 総合的な学習の時間学習指導案

長浜市立 永原小学校
教諭 今井 伸哉

1. 単元名 『山門水源の森』とわたしたちの暮らし

2. 単元の目標

- 地域の里山は、昔から人々の暮らしと大きく関わっており「共存」の関係であったことが理解できる。また、豊かな自然を守るために取り組まれていることや自分にできることを、パンフレットなどを用いて発信することができる。(知識及び技能)
- 既習の学びや山門水源の森でのフィールドワークを通して、里山と人々の生活との関わりについて気づいたり、里山を守るための活動について考えたり、他教科の学習と関連させながら自然を守ることへの自分の考えを发表或ししたりすることができる。(思考力・判断力・表現力等)
- 受け継がれてきた地域の自然について、これからも大切にしたいと考えをもち、未来へと引き継いでいくために何ができるか目的意識をもって学習を進めることができる。
(主体的に学習に取り組む態度)

3. 単元について

(1) 教材観

本単元では、3年時から積み上げてきた総合的な学習の時間の総括として、学習を展開しまとめる活動を仕組んでいく。3年では「山門水源の森の動植物(総合)」「動植物(理科)」「昔の暮らし(社会科)」について学ぶ。昔の暮らしでは、里山で炭焼きが行われており、冬の大きな収入源であったことを知る。4年では「やまのこ学習(総合)」「水生生物(総合)」を学び、森林の保全について体験する。また、里山では昔から「炭焼き」が行われており、生活に必要なこととして、木々の間伐が行われてきており、里山と人々が共存の関係であったことを学ぶ。5年では「田んぼの子(社会科)」「フローティングスクール(総合)」「流れる水のはたらき(理科)」の学習において、「水」をテーマに学習を深める。そして、6年では「歴史」的な視点も入れ、地域の環境がどのように受け継がれ、守られているのかを考えていく。地域で守られている「山門水源の森」を教材に、「山門水源の森を次の世代に引き継ぐ会」や森林マッチングセンターから講師を招き、保全活動やボランティア活動について学ぶ。また、ゴルフ場が作られる計画があったことを取り上げ、開発と環境保全についても考え、地域の未来についての考える契機としたい。

(2) 児童観

本学級の児童は、地域学習として、歴史的景観地区に指定された「菅浦」や「山門水源の森」のよさを観光客に伝えるための「リーフレットづくり」に取り組んできた。活動の中で、資料から情報を読み取ったり、インタビューをしたりと情報収集の方法を身につけてきた。また、リーフレットにまとめる中で、読み手を意識した構成や写真選択の力、またグループで話し合いながらよりよいものに仕上げていく経験を重ねることができた。このような学びを生かし、単元の終末では、地域に学びを発信する活動を仕組みたい。また、自分たちが故郷の自然を守るために何ができるのか、行動の変容を促す学習展開を仕組みたい。

(3) 指導観

本単元の指導に当たっては、まず今までの学年の学習を想起させる。このことを通して、「山門水源の森」について学んできたことを、「動植物」「炭焼き(生活)」「保全活動」などと整理する。その後、社会科や菅浦学習と関連させるなど「歴史的な視点」を与え、地域の人々は自然とどのように関わって生活してきたのかを調べる課題を設定する。そして、家族へのインタビューや資

料収集、実際に「山門水源の森」を見学しフィールドワークや守る会の人々から話を聞く活動を展開する。その中で、昔から地域の人々は山と関わり合って生活を営んできたことを学び、これから地域の自然とどのように関わっていききたいかを考える契機としたい。

次に、フィールドワークで出会った「山門水源の森を次の世代に引き継ぐ会」の方々がどんな思いで、どんな活動をしているのかを学ぶ。学びを進める中で、身近な自然を守るための活動が思っていた以上に多いこと、人が入らなくなったことで森が弱っていくことを知る。「間伐」など、教師が意図的に今までの学年での学びを引き出せるように導き、個々の学びを有機的に結びつけていくことで、「環境」や「自然循環」についての理解を深める契機としたい。

最後に1990年に西浅井町山門水源の森付近に「滋賀県最大のゴルフ場(当時)」として「開発」の計画があったことを子供に伝える。当時は、山門水源の森の調査が始まったばかりで、その貴重さが認識されてはいなかった。そんな折、東京や福井の会社が開発に乗り出し、滋賀県や地元西浅井に開発の申し出がきたのである。当時の人々の思いを聞くこともよい学びとなるだろうが、まずは「開発計画」についてどう考えるか子供に問いたい。「地域の発展」か「環境の保全」か、故郷西浅井町にとってどちらがよい道なのか、本当の豊かさとは何なのかを、両者を比べて考える中で「環境を守ること」の難しさと環境保全の大切さを実感できる時間を作りたい。さらに、学習の終末では、近江商人の「三方よし(売り手よし、買い手よし、世間よし)」の考え方を取り上げ、「世間よし」とはどのようなことを指すのかを考えることで、環境に目を向けさせたい。

これらの学びを通し、過去の人々の努力や営みがあるからこそ、今の自分たちの生活があることを理解し、今後自分に何ができるかを考え、学びを発信していく活動を展開していきたい。

(4) ESD との関連

・本学習で働かせる ESD の視点(見方・考え方)

多様性…自然の中には多くの生き物が関わり合いながら生活を送っており、それらがうまく循環するからこそ、豊かな環境が維持されていること。

有限性…森林の木々や美しい水などは当たり前にあるものではなく、人々の手によって簡単に変わってしまうものであるということ。開発によって簡単に壊されるものであること。

責任性…自分も自然の一部であることを自覚し、自信の行動が環境に与える影響があることを理解すること。このくらいいいではなく、小さな一歩が環境を変える一歩となること。

・本学習を通して育てたい ESD の資質・能力

○システムシンキング

理科、社会科など、今までの学習を「環境」をテーマに整理し一貫性のある理解を行うこと。

○クリティカルシンキング

「開発」をテーマに、生活の豊かさと環境の保全という相反する内容について考え、未来について考える力を伸ばすこと。

○協働的問題解決力

グループや学級での話し合いを通して、自分たちにできることを考えたり、学びを地域や他学年に発信したりし、環境保全についての意見をまとめる。

・本学習で変容を促す ESD の価値観

○自然環境・生態系の保全を重視する

自分たちの生活が環境に与える影響を理解するとともに、自分たちも環境の中で生活しており、自然を守ることは自分たちの生を守ることにつながっていることを理解する。また、多様な生物がそれぞれの役割を果たすことで、自然が循環していることを理解し、自然を守る大切さや保全活動に参加する態度を醸成する。

○幸福感に敏感になる。幸福感を大切にする。

「山門水源の森」でのフィールドワークにおいて、自然の中で活動した時の気持ちを大切に

し、自然と関わり合いながら生活することが本来の姿であることを体験を通して理解する。

・達成が期待される SDG s

- 1 1 まちづくり
1 5 陸の豊かさ

4 単元の評価規準

(ア) 知識および技能	(イ) 思考力・判断力・表現力等	(ウ) 主体的に学習に取り組む態度
①地域の里山は、昔から人々の暮らしと大きく関わっており「共存」の関係であったことを理解している。 ②豊かな自然を守るために取り組まれていることや自分にできることを、パンフレットなどを用いて発信している。	①既習の学びや山門水源の森でのフィールドワークを通して、里山と人々の生活との関わりについて考えている。 ②里山を守るための活動や他教科の学習を関連させながら、自然を守ることにについて自分の考えを發表している。 ③「開発」についての話を聞き、自然を守るために必要なことは何かを考えている。	①地域の自然についてもっと知りたいとの思いをもち、フィールドワークやインタビュー活動に取り組んでいる。 ②保全についての自身の考えをもち、進んで活動に参加しようとしている。 ③学びをまとめたり、自分にできることは何かを考えたりしたことを、地域の人に進んで発信しようとしている。

5 資料（単元構想図と開発に関する新聞記事）



6 単元の指導計画(全50時間)

次	学習活動	○学習への支援	○評価
	○「山門水源の森」のフィールドワ	○全校山門学習において、山門水源の森を散策	(ウ)①主体的

1	ークを行う。 ○今までの学習を思い出し、「山門水源の森」について知っていることを出し合う。	する。自然の美しさなどを体感する。 ○山門水源の森を歩いての気づきをメモできるようにワークシートを用意する。	
2	○地域に残る伝統や昔の生活について学ぶ。 ○里山と生活をテーマに「山門水源の森」へ出向き、地域の方から話を聞く。(炭づくり含む)	○「1」で出されて「炭づくり」をテーマに、祖父母の時代の生活についてインタビュー調査や学校の資料から考える。 ○昔の生活と里山の関わりについて学び、今の生活は里山と関わっているか問う。	(ア)①知識 (イ)①思考力
3	○今の里山の現状を「森林マッチングセンター」の方を講師に招き、話を聞く。 ・炭づくりが結果として山を守る活動につながっていたんだ。 ○動植物の多様性と環境がどのように関係しあってサイクルを形成しているかを考える。 ○自分たちの生活を支える森の役割を確認し、山を守るために何が必要なのかを考える。	○人々の生活が変化し、里山との関わりが薄れたことで、山に起こっている変化(鹿の増加による獣害や間伐不足による日照不足、下草が生えず保水機能が下がり、土砂災害の危険が増えるなど)を知る。 ○5年「プランクトン学習」や4年「水生生物」の学習を引き合いに出し、微生物の役割について考えるように促す。 ○山の保全と水災害の関係の学習をふり返る。	(ウ)①主体的 (ア)①知識 (イ)③判断力
4	○里山を守る仕事は何があるのか。「山門水源の森を次の世代に引き継ぐ会」から話を聞く。 ○山門水源の森へ出向き、保全活動を体験する。	○実際に仕事をされている写真や、なんのための仕事か、そして今どんな課題があるのかを現地の人から話を聞くことで理解を深められるようにする。 ○体験をとして、里山を守る活動を身近に感じるとともに、仕事の苦労やボランティアについて知れるようにする。	(ウ)②主体的 (ウ)①主体的 (ア)①知識
5	○ゴルフ場開発を話題に出し、「環境保全」と「生活の向上」について考える。 ○学習を通しての学びをまとめる。	○当たり前前に存在している地域の自然がなくなる未来(ゴルフ場開発)があったことを知り、地域の未来について考えられるようにする。	(イ)③判断力 (イ)②表現力
6	○学びをまとめて「学習発表会」で発表しよう。	○本単元での学びを整理し、保護者や下学年に「環境」をテーマに発表する中で、知識の定着や深まりを目指す。 ○自分たちの思いを行動に移すために、取り組み(生活の中で始めた)記録を行う。	(ア)②技能 (イ)①思考力 (イ)②表現力 (ウ)③主体的
7	○学びを終えて、自分が未来の環境のためにできることを考え、地域に発信するとともに、行動に移すように学習をまとめる。 ・ボランティアに参加しよう。 ・ゴミを減らしたり、水を汚さないようにしたりすることも大切だ。 ・自然や環境をもっと学びたい。	○学習のふり返りとして、パンフレットやリーフレットに、学習で学んだこと、環境を守るための取組、自分たちが始めている取組をまとめ、支所や駅に掲示し、地域に啓発する活動を設定する。 ○できることを考え小さな一歩を始め、続けられるように定期的にふり返りを行う。	(ア)②技能 (ウ)③主体的 (イ)①②③ 判断・思考・表現

ESD学習指導案 第6学年 総合的な学習の時間

奈良市立平城小学校 教諭 新宮 済

1. 単元名 私たちの寒河江市に文化財を愛する心を立ち上げよう

—「90 年ぶりに再会した左脚を接合し結髪土偶を立ち上がらせたい！」プロジェクトから学ぶ—

2. 単元の目標

- ・結髪土偶を立ち上げるプロジェクトの達成は、地域の文化財を守ろうとする人々の思いが込められたものであり、たくさんの市民の参画により達成したことを理解する。(知識・技能)
- ・結髪土偶を立ち上げるプロジェクトの達成が、地域の文化財を守ろうとする人々の思いが込められていることや、鉄道の開発で受けた社会恩恵を、開発の際に損傷した結髪土偶に返したいという市民の願いに支えられていることを考える。(思考・判断・表現)
- ・結髪土偶を立ち上げるプロジェクトの達成に関心を持ち、結髪土偶に関わった人、プロジェクトを手がけた人、参画した人、の三者の営みに触れ、それぞれの思いにあこがれるとともに、自分たちも文化財を大切に守り続けていこうとする態度をもつ。(主体的に学習に取り組む態度)

3. 単元について

(1)教材観

本学習は、ESDティーチャープログラム山形会場で共催した山形大学附属博物館の令和元年度のクラウドファンディング「90年ぶりに再会した左脚を接合し結髪土偶を立ち上がらせたい！」のプロジェクトを教材化した。教材化するにあたり、持続可能な社会づくり(ESD)の視点からこの活動に関わった人々の努力や願いに着目した。児童に理解しやすくするために、このクラウドファンディングを「新しい形の市民の寄付」として学習していく。児童は「市民の寄付で町の文化財を未来につなげた」というこのプロジェクトの達成までのストーリーに興味を持ち、プロジェクトを手掛けた人の思いを探究していく。これにより地域の文化財のために行動した市民の営みに共感し、あこがれる。最終的にこのプロジェクト達成のストーリーも地域の宝物として捉え、自分も地域の大人と同じように町の文化財保護に参画していく、という児童の変容を促すものである。この單元ではプロジェクトに関係する3つの営みを教材化した。

1つ目は、結髪土偶に関わった人の営みである。縄文時代晩期に生まれた結髪土偶は、約 3000 年のあいだ山形県寒河江市石田の地に眠っていた。大正 10 年に鉄道の施設工事の際、大量に出土した遺物の中から発見された。しかし、発掘の際に誤って上半身と両脚が分離した状態となり、不運にも同一のものだと気づかれないままに寒河江市の大地主に所有された。後に上半身はその家を離れ、居場所を変えて、最終的に附属博物館に辿りつくこととなった。一方左脚は、近年の所有者の遺族から寒河江市に寄贈されたことがきっかけで、博物館の所有する結髪土偶の上半身と同一ということを考古学者が見つけたことにより、約 90 年ぶりに再開を果たした。鉄道の開発がなければ掘り起こされることもなく文化財の損傷も起きない。しかし、結髪土偶が発見された鉄道の開発は、寒河江市の物流や市民の交通手段として今日まで地域の発展に貢献してきた。この事実を常日頃感じている市民や地元企業が、「鉄道の開発から恩恵を受けた分を、結髪土偶に返すべきだ」と寄付に賛同し、結髪土偶は立ち上がるができた。

2つ目は、プロジェクトを手がけた人の営みである。プロジェクトを主導した附属博物館は、これまで県内

でなされてこなかった「市民から寄付を集めて修復する」という市民参加型の文化財修復に挑戦した。必要な金額を集め脚を接合し土偶を立ち上げるだけではなく文化財の調査研究とともに、プロジェクトを達成する過程を通して市民の文化財を愛する心を立ち上げようとした。また寒河江市の職員大宮氏と連携し、市民と土偶の距離を近づける特別展を開催した。そして出土遺跡の近隣に立つ企業をまわり「結髪土偶の文化財としての価値」と「結髪土偶への恩返し」という思いを伝え、多くの協力者を集めた。

3つ目は、プロジェクトに共感し市民に寄付を募って回った地域の団体ソロプチミスト会長の鈴木氏(当時)の営みである。学生時代、発掘調査を経験したことがある鈴木氏は、寒河江市の特別展で結髪土偶に出会い、このプロジェクトを知った。その後、プロジェクトを進めていく附属博物館館長(当時)の熱意に心が動き、プロジェクト実現のために進んで市民に協力をお願いした。

これらの3つの営みに出会った児童は、「あの人たちがみたいに私も結髪土偶のために行動できる人になりたい!」とプロジェクトに参画した大人へあこがれる。さらに「土偶が立ちあがった話は寒河江の宝物だね」と市民の行動に誇りを持つこととなる。このような経験をすることで地域から未来に伝えたい宝物が探せたり、文化財を後世に伝えるために活動している大人に協力できるようになる。

本プロジェクトを教材化し児童の行動化を促すことは、山形県寒河江市の将来都市像に掲げる「さくらんぼと歴史が育むスマイルシティ 寒河江」の実現に貢献することと考える。

(3)指導観

まず、「結髪土偶への寄付」について知っていることを出し合う。おそらく、児童は結髪土偶が寄付により修復された事実をほとんど知らないだろう。市民により高額な寄付が集まり、土偶を接合した事実には驚くだろう。児童にとって寄付は学校生活で行われる数百円程度の募金のイメージである。しかし、このプロジェクトの寄付は「地域に古くからあるものに対して一口 5 千円以上の寄付する」というもので児童にとって当たり前ではない。この児童の思考のズレに着目することで、「どうして地域の大人たちは結髪土偶に寄付したのだろうか?」という学習問題を設定することができる。

次に「プロジェクトがどのようなものであったのか」をプロジェクトのポスターから調べていく。実際にレプリカを所蔵する寒河江市役所や実物がある附属博物館などへ見学に行ったり、寄付の様子を新聞やテレビ報道で確かめる。さらに、祖父母や近所の方々にプロジェクトについて取材し、寄付した大人の思いを聞き取る。寒河江市の人たちにとって結髪土偶は地域の歴史を語る大切な文化財なので、特別な思いを持って寄付していたことを知る。しかし、それでも児童にとって高額な寄付をする大人の思いは理解できないだろう。そこで「結髪土偶に関わった人」、「プロジェクトを手がけた人」、「参画した人」の三者の立場の営みに触れ、思いを知りにあこがれることで、文化財保護活動へ参画していこうとする児童の行動の変容を促す。

(4)この題材で働かせる ESD の視点(見方・考え方)

【連携性】:地域の文化財は、市や専門機関だけが努力して守るのではなく、私たち市民も未来に語り継ぐべき遺産として、その活動に参画していただくことが大切であること。

【協働的問題解決力】:地域の文化財を守る活動に参画することや、大人を巻き込んで文化財を守る活動することで、寒河江市の掲げる将来都市像の実現を目指す。

・変容を促したい ESD の価値観

【世代間の公正】:文化財を自分たちの世代だけでなく未来へつないでいこうと考え行動する。

・SDGsとの関連

目標12 つかる責任 つかう責任 目標14 住みよいまちづくり

4. 評価の規準

知識・技能	思考力・判断力・表現力	主体的に学習に取り組む態度
結髪土偶を立ち上げるプロジェクトの達成は、地域の文化財を守ろうとする人々の思いが込められたものであり、たくさんの市民の参画により達成したことを聞き取り理解している。	結髪土偶を立ち上げるプロジェクトの達成について問いをもち、地域の文化財を守ろうとする人々の思いを調べ表現している。	結髪土偶に関わったそれぞれの思いにあこがれるとともに、自分たちも文化財を大切に守り続ける活動を考え実行し、地域社会に参画する。

5. 単元計画(20 時間)

学習内容	●留意点	【評価】
○結髪土偶を立ち上げるプロジェクトについて知っていることを確認する。 ○学習問題を作る。 どうして地域の大人たちは結髪土偶に寄付をしたのだろう	●文化財に寄付する行動について興味を持たせるために寄付一口分の金額について考えさせ	
○プロジェクトがどのようなものであったのかを調べる。 ○結髪土偶の見学から寄付した理由を考える。 ○調べた成果を市の職員に発表し評価をもらう。 結髪土偶に寄付した人から、寄付した思いを聞いてみよう	●ポスターや、家庭での聞き取りをもとにプロジェクトの概要をつかませる。 【思・判・表】 ●附属博物館などへ見学に行ったり、寄付の様子をテレビ報道などの映像で見たりさせる。	
○三者の立場の営みを知りその思いについて考える。 本授業に関わるゲストティーチャー 結髪土偶に関わった人 博物館・市職員・考古学者 プロジェクトを手掛けた人 …附属博物館・市職員 参画した人 …ソロプチミスト※他の参画者でも可	●可能な限りゲストティーチャーとして授業に参加してもらいそれぞれの営みを紹介してもらう。 ●それぞれの立場からプロジェクトに関わる思いや努力を話してもらう。 【知識・技能】 ●次の学習問題につなげるためにそれぞれの立場から、「鉄道の開発と市民の寄付の思いが関係していること」に触れてもらう。	
○新しい学習問題をつくる どうして鉄道の開発と結髪土偶への寄付はつながっているのだろうか	●「鉄道の開発により市民への恩恵が生まれたからこそ、結髪土偶を直す責任があった」とことと「結髪土偶の立ち上げによって市民の文化財を愛する心の立ち上がり」に気づかせる。	
○再び地域や家庭への聞き取りをし、問題にについて考えを深める。 ○調べたことを附属博物館元館長に発表し評価をもらう。		
私たちの街に眠っている寒河江遺産をみつけよう		
○地域から未来に伝えたい宝物を探す。 ○既に文化財を後世に伝えるために活動している大人に協力し活動する。 ○自分たちの行動が山形県寒河江市の将来像として掲げている「さくらんぼと歴史が育む スマイルシティ 寒河江」につながっていることに気づく。	【主体的に学習に取り組む態度】 ●一人ひとりの活動を授業で取り上げ意見交換をさせる。 ●実践したことを地域に紹介し、市の将来像の達成に貢献していることを地域の方より評価してもらう。	

6. 単元構想図



※本指導案は、ESDティーチャープログラム山形会場で開催した山形大学附属博物館の依頼を受けて教材化した。山形大学附属博物館の令和元年度のクラウドファンディング「90年ぶりに再会した左脚を接合し結髪土偶を立ち上がらせたい!」報告書(2021)に掲載されている。

第5学年 ESD社会科学学習指導案

指導者 大牟田市立吉野小学校

教諭 島 俊彦

1. 単元名 「くらしと産業を変える情報通信技術」 教育出版社 pp. 186-201

2. 単元の目標

- ・聞き取り調査をしたり映像や新聞などの各種資料で調べたりして、まとめることを通して、大量の情報や情報通信技術の活用は、販売業を発展させ、国民生活を向上させていることを理解することができる。 (知識・技能)
- ・情報の種類、情報の活用の仕方などに着目して、販売業における情報活用の現状を捉え、情報を生かして発展する産業が国民生活に果たす役割を考え、表現することができる。 (思考・判断・表現)
- ・我が国の販売業と情報との関わりについて、主体的に問題解決をしたり、よりよい社会を考え学習したことを社会生活に生かしたりすることができる。 (主体的に学習に取り組む態度)

3. 単元について

(1) 教材観

本学習の内容は、学習指導要領において主として「現代社会の仕組みや働きと人々の生活」に区分されるものであり、我が国の産業と情報との関わりについての学習で身に付ける事項が示されている。内容(4)・(イ)では、販売、運輸、観光、医療、福祉などに関わる産業が、販売情報や交通情報等の大量の情報やインターネットなどで情報を瞬時に伝える情報通信技術などを活用している事例を、具体的に取扱うことが位置付けられている。そこで本学習では、情報を活用して発展するコンビニエンスストア（以下、コンビニ）を、販売業の事例として取り扱う。

例えばコンビニ最大手のセブンイレブンは、1971年に日本第1号店が東京都江東区の豊洲に誕生して以来急激に店舗数を増やし続け、2020年9月末現在において、その数は20,987店舗にまで拡張している。24時間365日店舗を開け、最低限の日用品や食料品をいつでも購入することのできるコンビニは、所謂「便利で豊かな暮らし」の象徴として、現代人の生活に無くてはならない存在となっている。

コンビニが発展を続ける上で、欠かすことができないのが情報システムである。セブンイレブンでは、世界最大規模の情報ネットワークを活用して、販売情報を収集するPOSレジスターやストアコンピューターなどの導入により、単品管理を支える店舗システムを構築している。2007年3月には最新技術を取り入れた「第6次総合情報システム」を全店に導入しており、店舗と本部の間をネットワークで結び大量の情報を迅速にやりとりすることによって、サービスの充実に努めている。

近年では、nanacoカードやセブンアプリの開発推進によって、大量の顧客及び販売情報の収集によるサービスの拡充に努めている。これにより、アプリに登録した人がいつでもどこでも様々なサービスを享受できるようになるなどのメリットが挙げられ、国民生活の向上にも繋がっていることを理解することができる。

コンビニは児童が日常的に触れる販売業である。本学習でコンビニを教材化することは、販売業が大量の情報を活用して成長したりサービスの向上に努めたりしているということを児童がより具体的に捉えられると共に、そのことが国民生活の向上に繋がっているという事実を、実感的に理解できるという点で価値高いと考える。

コンビニの教材化によって、本学習の深まりが期待できる一方で、授業者としての懸念もある。それは、各種産業が情報を活用して発展することについて、児童が無批判に肯定的評価を下すかもしれないということである。

例えば、セブンイレブンが推進したキャッシュレス決済サービス「7pay」における不正アクセス問題などは、情報化社会のリスクを示す代表的事例であろう。この事件は、情報化社会の功罪について考える重要な糸口を我々に与えてくれる。内閣府や経団連が Society5.0 の推進を謳い、情報化社会の高度化や複雑化が凄まじいスピードで進展する現代だからこそ、一度立ち止まって情報との向き合い方について考える場面を授業に位置付けることが重要であろう。

批判的思考力を働かせて、情報との向き合い方について日常生活の問い直しを行うことによって、価値観や自己の生き方を変容させ次なる行動をとろうとする児童が現れることを期待する。このことは、持続可能な社会の創り手となる児童の情報リテラシーを育成することにも繋がるため、E S D 実践としても価値があると考ええる。

(2) 児童観

本学級の児童は、批判的思考力が十分に育っていると言えない現状がある。

例えば授業において、物事を一面的に捉え代替案が思い浮かばなかったり、根拠もなく自分の想像やその時の感情だけで発言してしまったりする児童の姿が見受けられる。

また、授業以外の学校生活場面においても、友達から聞いた噂話を疑わず人間関係にトラブルを抱えたり、根拠の不確かな情報を信じ込み友達に広げたりする児童の姿が見受けられる。

ゲーム機やスマートフォンなど、インターネットに繋がる情報機器を日常的に使用している児童の割合が高いことで、以上のような問題が起こっている現実がある。このことから、情報との関わり方を児童に考えさせ、情報リテラシーを身に付けさせる必要があると考える。

さらに、物事を一面的に捉えてしまう児童が多いという実態からも、批判的思考を働かせるうえで必要となる、多面的、総合的に考える力も併せて育成する必要があると考える。

(3) 指導観

本学習においては、E S D の視点から単元を構成することにより、高度化・複雑化した情報社会を生きる児童が、持続可能な社会の創り手となることができるよう実践する。

上述の点を充実させられるよう、3点を意識した指導を行う。1点目は共通経験の保証、2点目は児童がもつ一貫性を揺さぶること、3点目は自己の生き方の問い直しである。

1点目の、共通経験の保障についてである。コンビニは児童全員が利用した経験を有することが考えられる。学級全員が共通経験を有することで、対話による思考の共有と増大が期待できる。また、コンビニは身近な存在ながらも、そこでの情報活用の実際を把握している児童は少ないことが予想される。つまり、見ているようで見えていない社会的事象を追究の対象とすることができるため、高い意欲を維持しながらの問題解決に取り組む児童の姿が期待できる。

2点目の、児童がもつ一貫性を揺さぶることについてである。学習が展開するにつれ、情報

活用による産業の発展及び国民生活の向上について、無批判に肯定的評価を下す児童が学級の大多数を占めることが予想されることは上述の通りである。そこで、7pay事件のように情報化の進展によって引き起こされる問題があるという事実を児童に提示したい。情報活用は是であるという児童の一貫性を揺さぶり崩すことで、情報化社会の到来はデメリットをももたらすことに気付かせたい。批判的思考を働かせて社会的事象をより多面的に捉えられるようになった児童は、新たな一貫性の構築や他者との分かち合いを求めるようになるだろう。その上で、社会の在り方や自己の生き方を志向する児童が現れることを期待したい。

3点目の、自己の生き方の問い直しについてである。情報化社会のメリット・デメリットという両側面を理解した上で、情報とどのように向き合っていくのかという問いについて、選択判断を児童に迫りたい。批判的思考を働かせて省察する過程を通じて、次なる行動をとろうとする児童が現れることを期待したい。

以上3点を意識し、児童がコンビニの情報活用について問いを設けて追究・解決する過程を通じて、価値観と行動を変容させられるような、ESD社会科としての実践を創出したい。

(4) ESD との関連

・学習を通して主に養いたい ESD の視点

【相互性】：情報を活用することによって発展する産業の様子を具体的に捉え、それらが利便性など国民生活の向上に繋がっていることを理解している。

【責任性】：高度化・複雑化する情報化社会を生きる我々は、情報との向き合い方を考えて行動する必要があるという責任性に気づいている。

・学習を通して主に育てたい ESD の資質・能力

【システムズシンキング】：情報を活用して発展する産業の仕組みを理解すると共に、それらと国民生活の向上を関連付けて捉えることができる。

【クリティカルシンキング】：情報化社会の到来はデメリットももたらすことを捉え、情報とどのように向き合うかについて自己の生き方を問い直すことができる。

・学習を通して特に養いたい価値観

【世代内の公正を意識する】：情報化社会において自分や他者が安全・安心な暮らしができるよう、情報との関わり方を考え行動する。

・学習を通して特に達成が期待される SDGs

【目標 9 インフラ、産業化、イノベーション】

情報通信技術の進歩によって、産業が情報を活用して発展するようになったことで、人々の生活の利便性が高まっている。

【目標 12 持続可能な生産と消費】

各種産業から発せられる情報のメリットとデメリットを把握して、受け手として正しい情報を取捨選択して行動する。

4. 評価規準

ア 知識・技能	イ 思考力・判断力・表現力	ウ 主体的に学習に取り組む態度
①大量の情報や情報通信技術の活用は、販売業を発展させ国民生活を向上させていることを理解している。	①情報の種類、情報の活用の仕方などに着目して、販売業における情報活用の現状を捉え、情報を生かして発展する産業が国民生活に果たす役割を考え、表現している。	①我が国の産業と情報との関わりについて、主体的に問題解決しようとしている。
②聞き取り調査をしたり各種資料で調べたりして、まとめている。		②よりよい社会を考え学習したことを社会生活に生かそうとしている。

5. 単元展開の概要（全6時間）

主な学習活動	学習への支援	◇評価・備考
1. 資料から学習問題を作り、学習計画を立てる。 ・POSレジスターやレシートの記載情報から、コンビニが販売や顧客情報を集めていることに気付く。 ・コンビニがなぜ情報収集しているのかについて話し合い学習問題をつくる。 ・学習問題について予想し、それを整理することを通して学習計画を立てる。	●セブンイレブン日本1号店と校区にある今の店舗の写真や店内図の比較を通して機械化が進んでいることを捉えさせる。 ●コンビニが情報収集することのメリットを考えさせると共に、児童の問いを学習問題づくりにつなげる。 ●学習問題に対する予想を書かせたカードをグルーピングを通して、学習計画を立てさせる	ウ ①
セブンイレブンでは情報をどのように集め、販売に活用しているのだろうか？		
2. コンビニはどのようにして販売・顧客情報を集めているのかを調べる。 ・各種資料を活用して調べる。	●各種機械や、nanaco カード等を使って情報を収集し本部へ送っていることに着目させる。	ア ②
3. 集められた大量で多様な情報をどのように活用されているかを調べる。 ・本部の方へ聞き取り調査を行う。	●本部では店舗から送られてきた情報をどのように活用しているかを考えさせた上で、オンラインインタビューをさせる。	ア ②
4. コンビニが情報を活用することで、国民生活にどのような影響があるのかを調べる。 ・国民生活との関連について調べ今まで調べてきたことを関係図にまとめる。	●消費者にとってのメリット、コンビニ・消費者にとってアプリはどのような価値があるかを考えさせる。 ●店舗・本部・消費者という3つの立場から情報を活用して発展するコンビニの様子をまとめさせる。	ア ①
情報を活用することで、コンビニや私たちの暮らしにとって、どのような良さがあるのだろうか？		
5. 産業が情報を活用して発展することのメリット・デメリットを考える。 ・情報化社会のデメリットについても調べる。	●縦軸にコンビニと消費者、横軸にメリット・デメリットのマトリクス表を使って自分の考えを、より多角的・多面的に考えを整理させる。	イ ①
6. 高度化・複雑化する情報社会に生きる自分たちは、情報とどのように向き合って生きていくか考える。	●自分の考えをノートに記述させ、持続可能な社づくりや自己の生き方について価値判断・意思決定したことを話し合わせる。	ウ ②
情報化社会を生きる私たちは、どのように情報と関わっていけば良いのだろうか？		

第6学年 ESD 家庭科学習指導案

指導者 東尾 彩夏

1. 単元名 みそしるを作ろう

2. 単元の目標

- ・煮干しからだしを取ってみそ汁を作る方法を理解し、適切に行うことができる。 (知識及び技能)
- ・普段の食材の食べ方や使い方を見直す意識を養うとともに、自分の食生活に興味を持ち、意図をもって食材を選択・購入する力を育てる。 (思考力・判断力・表現力)
- ・味噌汁におけるだしの役割を体感し、日本の歴史や文化に関わろうとする態度を育成する。 (主体的に学習に取り組む態度)

3. 単元について

(1) 教材観

近年では以前に比べ、社会の様々な場面で効率化が重視されるようになった。食事においても、より手軽にスピーディーに食事をする傾向にあり、一人一人が自分の食生活にこだわりを持って調理したり、味わったりする機会が減ってきているのではないかと考える。本教材では、日本の食事には欠かせない「だし」に焦点を当て、3種類のみそ汁を作る活動を行う。便利で手軽な商品があふれる現代だからこそ、もう一度日本の昔ながらの手間のかかる方法でだしを取り、その風味の良さを実際に体感させることを目的としている。

さらにそこから、購買行動の多くなる第6学年の児童に対して、自分はこれからどのような食生活を目指していきたいのかを児童自身で決定・選択できる力を養うことに繋げていきたい。単に、価格の安さや手軽さだけを意識して食事をするのではなく、その消費活動が社会に与える影響を考えたり、食材のどこまでが可食部でどこからがゴミか、という自分の当たり前の価値観をもう一度問い直したりする力を養いたい。本教材では、だしをとる時に出る煮干しのだしがらを使って、ご飯に合うふりかけを作って試食する。この活動を通して、今まで「捨てるもの」として見ていた食材は、工夫次第で美味しくいただくことのできる可能性にあふれていることを感じさせたい。

SDGs との関連としては、主に3つを挙げる。「だし」という日本の文化に着目して目標11の「住み続けられるまちづくりを」、消費者行動に着目して目標12の「つくる責任 使う責任」、食材の使い方や食品ロスの改善に着目して目標14の「海の豊かさを守ろう」と目標15の「陸の豊かさを守ろう」に該当すると考える。

(2) 児童観

第6学年の児童は、小学校での生活にも慣れ、スムーズに学校生活を送ることができるようになっていく。一方で、自分の中の当たり前の価値観や決めつけにこだわりすぎてしまう場面も見かける。慣れているからこそ自分のルールにとらわれすぎてしまうようだ。

また、児童は毎日の給食で日常的に和食に触れており、和食とは馴染みが深い傾向にある。

(3) 指導観

児童にとって馴染みの深い「みそ汁」に焦点を当てて、児童自身の価値観をもう一度見直す機会を作りたい。また、児童は、食材を三つの食品群に分けて考えるなど、栄養に関する簡単な知識は既についていると考える。その知識を生かしつつ、食事の選択の方法には価格や栄養以外にも考えるべき問題があることを気づかせたい。さらに、本授業では、他の人の意見を積極的に聞き、自分と違う価値観に触れることを重要視したい。したがって、意見交流の時間にはできるだけ自由な発言・発想ができるように、机を円形に設置したり、教師が話し合いの潤滑油として声掛けを適度に入れたり見守ったりするなどの配慮を心掛けたい。

(4) ESD との関連

・学習を通して主に養いたい ESD の視点

【多様性】：だしに関する多くの商品があることを知り、調理方法の多様性に気づくことができる。

【有限性】：食材を余すことなく使う活動を通して、食べ物の有限性を実感することができる。

【責任性】：自分の食生活の選択・決定が社会にどう影響するのかを仲間と交流することで、一人の消費者としての責任性を感じることができる。

・学習を通して主に育てたい ESD の資質・能力

クリティカルシンキング：食材のゴミや可食部に関する自分の価値観を、クラスの仲間の意見と交流することによって、今一度問い直すことができる。

コミュニケーション力：仲間と、調理実習などで感じたことを積極的に交流し合うことで、幅広い考えや価値観と出会うとともに、コミュニケーション力を養うことができる。

システムズシンキング：煮干しのだしがらを余すことなくいただく経験から、食品ロス問題、ゴミ問題、食費の節約、栄養素、感謝の気持ちなどについて多面的に考えることができる。

4. 評価規準

知識及び技能	思考力・判断力・表現力	主体的に学習に取り組む態度
・煮干しのはらわたと頭を取り、だし煮出してみそ汁を作ることができる。	・自分の食生活をどのように選択していきたいかを、自分なりに考えようとしている。	・仲間の意見や価値観に積極的に触れ、関わろうとしている。 ・班のメンバーと協力して実習を行おうとしている。

5. 単元展開の概要

(全7時間)

主な学習活動	学習への支援	◇評価・備考
1. 普段の味噌汁の作り方について話し合う。 ・ だしの知識を深める。 ・ みその知識を深める。	○現代には、様々なだしの取り方があることを確認する。(顆粒だしやだし入り味噌など手軽で便利なものもある) ○だしを入れることで、味にどう変化があるのかを考えさせる。 ・ 味に奥行きが出る？深みが増す？ ・ うま味成分について ○だしはいつの時代から使われるようになったのか。(言葉としては、日本最古の料理書といわれる鎌倉時代の書物『厨事類記』に「タシ汁」と記載されていたのが最初とされている) ○みその原料や作り方の工程について、DVDなどを見ながら学習させる。 ・ 大豆、塩、米麹 ○みその歴史や種類、地域性について考えさせる。 ・ ひしお(醬)は万葉集にも詠われている伝統食品で、現在の味噌・醤油の原点と言われている。 ・ 色や原料による分類	多様性 ◇仲間の意見や価値観に積極的に触れ、関わろうとしている。(学)
2. なぜ、だしの取り入れ方は様々あるのかを考える。	○「だし入り味噌」を使う方法と、素材を煮出してだしを取る方法とではどのように違うかを比べさせる。 手間(だし入り味噌<<煮出す) 味(調理実習で確認) 価格(だし入り味噌≒煮出す) 安全性(無添加のだし入り味噌も売られている) など	クリティカル・シンキング
3. だしがらの利用方法を知る。	○「だしがら＝ゴミ」という価値観を問い直す。 ○家庭でだしがらを使う児童がいれば、どの	

	ように利用しているのかを尋ね、共有する。 ○レシピをいくつか紹介する。また、だしがら以外にも、野菜の皮や芯を使ったレシピも紹介する。 →佃煮、ふりかけ、甘辛炒め ・キャベツの芯とごぼうのきんぴら ・椎茸の軸のバター炒め ・ブロッコリーの芯のごま油炒め など	
4. 調理実習を通して、だしの役割やだしの取り方による味の違いを体感する。また、だしがらを使った料理を味わう。	○3種類のみそ汁を作り、飲み比べる。 ①だし無しのみそ汁 ②だし入り味噌を使ったみそ汁 ③煮干しを煮出しただしと味噌を使ったみそ汁 ○煮干しのだしがらでふりかけを作る。 ○米飯を炊いておき、ふりかけをかけて試食する。 ○感じたことをワークシートに書き込む。 ・味はそれぞれどのように感じたか。 ・手間はどうかだったか。	◇煮干しのはらわたと頭を取り、だしを煮出してみそ汁を作ることができる。(知・技) ◇班のメンバーと協力して実習を行おうとしている。(学)
5. 感じたことを整理し、これからの自分の食生活のあり方を考える。	○学んだことをまとめる。 ・だしを入れることで、味に深みが出ること。 ・だしの取り方や調理のポイント ○児童の意見を交流させる。 ・今後みそ汁を作るなら、自分はどのような方法で作りたいか。 - 理由も考える。 ・だしがらでふりかけを作って食べることのメリットは何だろう。 (食品ロス問題、ゴミ問題、食費節約、カルシウム等の栄養が取れる、感謝の気持ちを持てるなど)	コミュニケーション力 有限性・責任性 システムズ・シンキング ◇仲間の意見や価値観に積極的に触れ、関わろうとしている。(学) ◇自分の食生活をどのように選択していきたいかを、自分なりに考えようとしている。(思・表・判)

中学校第3年 数学科学習指導案

数学教育専修

亀井 望太

1. 単元名 「黄金比・白銀比」(『数学の世界3年』大日本図書 H26 検定,p167,p247)

2. 単元の目標

- ・ 黄金比や白銀比について、身近なところに潜んでいることを既習の統計に関する知識を用いて理解する。(知識・技能)
- ・ 黄金比や白銀比がどこに潜んでいるか、図などを用いて説明したり、統計調査の方法や結果をグラフや式、図などを用いて表現したりする。(思考・判断・表現)
- ・ 黄金比は本当に美しいのか、既習の知識を用いて主体的に調査したり、黄金比や白銀比を日常生活や学習に活かそうとしたりする。(主体的に学習に取り組む態度)

3. 単元について

(1) 教材観

2003年のPISA調査より、数学に対する興味や関心は海外と国際的にみて低く、OECD平均をはるかに下回っているということが明らかになった。これを受けて新学習指導要領では数学科の目標に、「数学的活動の楽しさや数学のよさを実感し、それらを活用して考えたり判断したりする」と提示されることになる。数学のよさを実感させ、数学に対する生徒の興味関心を高めることが数学の授業に求められている。

本単元は、黄金比と白銀比をテーマとした授業であり、黄金比を題材にすることによって、子どもたちの数学への興味関心が高まるということが実際に研究結果として示されている。教科書に「最もバランスがよく、美しい」と述べられている黄金比を、本当にそうなのだろうかという見方(クリティカルシンキング)をして、既習の統計的数学知識を用いて調査する。調査結果、黄金比を用いた図形を確かに美しいと感じる生徒は多く、黄金比以外にも1:1.4という白銀比(大和比)に美しさを見出している生徒が多いことがわかるであろう。身の回りの建物や美術作品、自然界に黄金比や白銀比が潜んでいることに気づき、数学の不思議・美しさを数学のよさとして実感し、実際に生活や学習で用いることができるようにする。また、西洋の芸術作品には主に黄金比、日本では白銀比が親しまれてきたということも多様な視点で理解できる。

(2) 生徒観 省略

(3) 指導観

美しいと感じる感覚は、主観的なものであり、「最もバランスがよく美しい」とはどういうことなのか、一体だれが決めたのだろうか、と批判的に考えさせる。そして、既習の統計調査をすることにより、黄金比や白銀比を美しいと感じる人が実際に多いのだということを知る。さらに、これらの比が身近に使われているということを調べることで、日本人も海外の人も、昔の人も現代の人も、普遍的に美しいと感じていたということを知る。また、西洋の芸術作品には主に黄金比、日本では白銀比が親しまれてきたということも調査の中でわかる。さらに、黄金比が自然界や人体などにも潜んでい

ることを知り、生徒は黄金比に不思議を感じ、数学的な興味・関心が高まると思う。

(4) ESDとの関連

・本学習で働かせるESDの視点（見方・考え方）

多様性…どの長方形を美しいと感じるかは多様である。また、黄金比や白銀比が絶対的な美ではない。

・本学習で育てたいESDの資質・能力

批判的に考える力（クリティカル・シンキング）

世間一般の考えを鵜呑みにしないで批判的に考え、「黄金比は本当に美しい比なのだろうか」と疑問を持ち、実際に調査してみる。

つながりを尊重する態度

外国人も日本人も、また、昔の人々も現代の人々も、黄金比を美しいと感じる感覚は同じであり、暮らしの中に今も黄金比は用いられている。

・本学習で変容を促すESDの価値観

世代間の公正

昔の人も現代の人も黄金比や白銀比を美しく感じていて、今も暮らしの中に黄金比が用いられている。

幸福感に敏感になる。幸福感を重視する。

美しいなあ、不思議だなあ、と思えることは幸せなことであり、美しさを感じる機会が増えると、幸せを感じる機会も増える。

・達成が期待されるSDGs

目標 9 「産業と技術革新の基盤をつくろう」

黄金比や白銀比を工業製品のデザインなどの開発に活かす。

目標 16 「平和と公正」

黄金比や白銀比は世代を超えて美しいと捉えられてきた。また、日本人も外国人も黄金比を美しいと感じていることを知る。

4. 単元の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
①黄金比・白銀比について、図形や身近なものに潜んでいることを理解している。 ②黄金比を導出できている。 ③ヒストグラム等を用いて統計調査を行うことができる。	①既習の統計学習の知識を用いて調査を行い、調査結果等を表現しようとしている。 ②黄金比や白銀比がどこに潜んでいるか、図などを用いて分かりやすく説明している。	①黄金比は本当に美しいのかという問いに対して、既習の学習内容からいよつと調査をしようとしている。 ②黄金比・白銀比の不思議、美しさを数学のよさとして実感し、生活に用いようとしている。

5. 単元の指導計画（全4時間）

次	ねらい(○)と学習内容(・)、 予想される生徒の発言 (C)	学習への支援	評価の観点
1	○黄金比に関する数学的知識を理解する。 黄金比は最もバランスのとれた美しい比なのか、考えさせる。 ・長方形の分割から黄金比を求める。 ・世界で黄金比が用いられていることを知り、黄金比に関心を持つ。 ・本当に黄金比は最もバランスのとれた美しい比なのか、批判的に捉える。 C：最も美しいなんて、誰が決めたんだろう？ C：黄金比は本当に美しいのかな？ C：美しいってどういうこと？ C：多数決で決めるもの。 ・班ごとに調査方法の仕方を検討する。 C：アンケートを取ってみる。 C：みんなで美しい長方形を描いてみる。	(主発問) 黄金比は本当に最も美しい比なのだろうか？ どうやって調べたらいいのだろうか？ ・学習者にクリティカルシンキングを促す。 ・美しいとはどういうことかという問いかけをする。	・ア① 既習の数学的知識を用いて黄金比を導出できる。 【ノート】【観察】 ・ウ① 黄金比は本当に美しいのか、主体的に調査しようとする。 【観察】
2	○黄金比を美しいと感じる生徒が多いことに気づく。 ・黄金比に関する統計調査を分析する。 ・友達の調査の方法や分析を理解する。 ・美しいと感じる図形にはどのような特徴があるか話し合う。その中でも、黄金長方形に美しさやバランスの良さを感じる生徒が多いことを理解する。 C：黄金比を持つ形を最も美しいと感じる人が意外に多くて驚いた。なぜだろう？ ・正方形や1:1.4に対しても、美しいと感じている生徒が多いとわかる。 ・白銀比（大和比）という言葉を知る。	発問： 美しいと感じる図形にはどんな特徴があるのだろうか？ 白銀比について指導する。	・ア② 統計的知識を用いて調査結果を説明することができる。 【ノート】【発表】 ・イ① 調査結果を、グラフ等を用いて表現することができる。【発表】 ・ウ② 美しいと感じる図形にはどのような特徴があるか、考えようとしている。 【観察】

3	○西洋には黄金比、日本には白銀比が多く用いられていることを知る。身の回りのものや自然界にも、黄金比や白銀比が潜んでいることを知る。 ・なぜ黄金比や白銀比が美しいと感じる人が多いのか考える。 C:身近にあるから。 C:普段からたくさん見慣れているから。 C:先生も黒板に長方形を描く時、黄金比になっているのかな？ ・情報機器を用いて黄金比、白銀比がどこにあるかを調査する。 C:昔の人も黄金比や白銀比を美しいと感じていたんだ！昔から黄金比はあったんだ！ C:海外の人も私たちと同じように、黄金比を美しいと感じるんだ！ C:白銀比は日本文化にたくさん使われている。 それに比べて海外では黄金比が多いようだ。 C:人体や自然界にも黄金比がたくさんあるのが不思議。なぜだろう？ C:数学の知識を用いて作品をつくったのか、美しいと思う作品をつくったら、たまたま黄金比になったのだろうか？	発問： なぜ美しいと感じる人が多いのだろうか？ 発問： どのようなところに黄金比や白銀比があるでしょう？	・ア③ 黄金比や白銀比が身近なものに潜んでいることが理解できる。【ノート】 【観察】 ・イ② 黄金比や白銀比がどこに潜んでいるか、図などを用いて説明することができる。【発表】
4	○黄金比や白銀比のよさを感じ、身の回りに活かそうとすることができる。 ・黄金比や白銀比をデザインや学習へ生かすアイデアを考える。 C:人の絵を、黄金比を使って描くとうまく描けそう。 C:コピー用紙を活用できそう。 C:文化祭で使うマスコットキャラクターを白銀比で描いてみよう。	発問： 黄金比や白銀比をどんなところに活用できるだろうか？ ・公園のオブジェなどのまちづくりに関することを例示する。	・ウ③ 黄金比や白銀比を日常生活や学習へ活かそうとしている。 【ノート】【机間指導】

気候変動を自分事に

～グレタさんの英語演説を聞いてみよう～

奈良教育大学 英語教育専修 4 回生 下原舞

1 単元名 『気候変動を自分事に』

～グレタさんの英語演説を聞いてみよう～

(高校第 2 学年英語科)

2 目標

(1) 英語科としての目標

- ・グレタさんの気候変動についての演説を聞いて、英語のリスニングにおいて段階的に、①全体の概要をつかむ力②特定の情報を見つけられる力③詳細まで理解できる力を鍛える。
- ・気候変動・地球温暖化に関する重要表現を聞いたり読んだりして、単元終盤のコミュニケーション活動で使えるよう理解を深める。
- ・グレタさんの演説内で使用されている重要表現”How dare you～”の構造と意味を理解することができる。
- ・気候変動について英語で意見を交換したり、グレタさんのスピーチを参考に自分自身の想いを乗せたスピーチを行うことができる。

(2) ESD の目標

- ・気候変動に対して当事者意識と危機感を持ち、気候変動を抑制するために自分たちに出来ることを具体的に考え、行動することができる。
- ・グレタさんの行動力に刺激を受け、自分も気候変動に対して積極的に参加し、貢献したいという思いと責任感を持つことができる。

3 単元について

高校 2 年生英語科 「気候変動を自分事に」 全 5 時間

昨年シドニーで留学中、学生による気候変動のストライキ行進を何度か見かけ、私の友達も何人か参加していた。日本ではとても見たことのない光景だったので、とっさにその時の様子を写真に撮ったとき、ふと「そういえばスウェーデンの若い女の子が強く訴えかけているスピーチがあったな」と思い出し、そのスピーチを改めて聞いた。15 歳でより強い気候変動対策をスウェーデン議会の外で呼びかける学校ストライキを始めた、自分より若い一人の女の子が見せた行動力に胸打たれ、教材に出来ないかと考えた。

今回教材にしているスピーチを行ったのはスウェーデン出身の環境活動家、グレタ・トゥーンベリさん（現在 17 歳）。主に地球温暖化によってもたらされるリスクを訴えている。2018 年に 15 歳でスウェーデン議会の外で抗議を始め、2019 年 9 月にはニューヨークで開かれた国連気候行動サミットに出席

し、温暖化解決のための具体的な行動を取らないのであれば、「結果とともに生きなければいけない若い世代」はあなたたちを許さない、と世界のリーダーたちを叱責した。本単位ではこの国連でのスピーチを扱い、スピーチのため聞き取りやすく話している英語を聞いてリスニング力の向上に努めながら、本単位を通してグレタさんと同じ年の高校2年生の生徒に気候変動や地球温暖化に対して当事者意識・責任性を持たせて、自分たちに出来ることを考えさせたい。

また、高校2年生になり、ある程度英語で自分の意見を述べたりコミュニケーションを取ることが出来るようになってきた生徒たちに、更なる英語でのコミュニケーションの場や、最終的には自分自身で短い英語でのスピーチに挑戦させる場を提供することも目標の一つとする。

4 単元の ESD 的視点

(1) その題材で働かせる ESD の見方・考え方

- ・ **相互性**…人間の起こす行動が環境に影響を及ぼす。
- ・ **有限性**…化石燃料は無限ではない。新しいエネルギーについて考えなければならない。
- ・ **公平性**…世代間・世代内の公正（後述）
- ・ **連携性**…個人単位だけでなく、地域で、自治体で、国で協力して考えなければいけない問題。
- ・ **責任性**…気候変動を自分事と捉え、自身の行動に責任を持つ。グレタさんは 15 歳の時に学校ストライキを始めた。同じ世代の学生が見せた行動力に「自分にもできることがあるのではないか」と感じてほしい。

(2) その学習を通して育てられる ESD の資質・能力

- ・ **批判的に考える力（クリティカル・シンキング）**
…自分の暮らしや国の対策等を批判的に見つめ直し、改善すべき点を見つける。
- ・ **未来像を予測して計画を立てる力**
…グレタさんの話などから、今のままの生活を続けると 10 年後、20 年後どうなるか批判的に予測して危機感を持ち、自分にできる行動を計画的に考えられるようになってほしい。
- ・ **コミュニケーションを行う力**
…授業内のグループワークにおいて養いたい能力。可能であれば、日本語だけでなく、簡単な英語でのディスカッション能力の向上もはかる。
- ・ **進んで参加する態度**
…この授業において大切にしたいのは「当事者意識」や「責任性」。グレタさんの行動力に刺激を受け、自分も積極的に参加し、貢献したいという思いを持ってほしい。

(3) その学習を通して育てられる ESD の価値観

- ・ **世代間の公正**
…グレタさんの「私たちや私たちの子供の世代に任せっきりだ」という言葉から、環境のこれからを考え、責任を担っていくのは自分たちの世代なのだと自覚し、さらに次の世代の人達のことも考えられるようになってほしい。
- ・ **世代内の公正**
…パリ協定には 192 ヶ国と EU が署名したが、2017 年 6 月にアメリカが「中・露・印等温室効果ガ

スの排出量が米国と同じく多い国は何もパリ協定に貢献していないのにアメリカは何十億ドルも負担するのは不公平」として離脱を表明。このことや、市場メカニズムと呼ばれる排出量取引について世代内の公正の観点から考えてほしい。

・自然環境、生態系の保全を重視する

…地球温暖化が海や陸の生態系へも変化を及ぼすこと、サンゴの白化や森林減少につながってしまうことを理解する。

(4) その学習で達成される SDGs

⑦エネルギー

⑫生産と消費

⑬気候変動

5 単元展開の概要

時	主な学習活動と内容	◇教師の支援 ◆主な評価
1	(1) 導入 私がシドニー留学中に起こった学生のストライキ運動の写真を見せ、気候変動のためのストライキであることに気付かせる。 (2) リスニング	◇掲げているボードに書かれている“The climate is changing” “Climate action” “SOS our trees” “Green spaces” などから気候変動のために声を挙げているのだと気付かせる。 ◇世界には気候変動・地球温暖化のために活動する学生が多くいることを伝え、その代表例としてグレタ・トゥーンベリさんを紹介する。 【全体の概要をつかむ力】
	現在 17 歳の環境活動家グレタ・トゥーンベリさんの国連気候行動サミットでの気候変動についてのスピーチを聞いてみよう。彼女はどんな気持ちで話しているだろう？	
	1. スピーチ動画を流す（1 回目） 2. なぜグレタさんは怒っているのか、聞き取れた印象から推測させ、もう一度聞	◇彼女のスピーチを聞いて何となく概要を理解した生徒たちに、スピーチ全体から読み取れる彼女の感情を”angry”, ”sad”, ”worried”, ”impatient”など英語で + その根拠を引き出す。 (angry→語気が強かった。”How dare you!”と何度も言っていた。など) ◆音声に注目して聞いているか。 ◇世界のリーダーたちが地球温暖化に本気で取り組んでいないから怒りを示していると気付かせる。 ◇重要表現”How dare you~”の構造と意味の確認 ◆全体の概要を掴めているか。

	いて確認する（２回目）	◆”How dare you~”の表現を拾えているか。
2	(3) リスニング 2	【特定の情報を見つけられる力】 グretaさんの演説をもう一度聞いて、気候変動について具体的に問題点を整理してみよう。
	1. 音声をもう一度流し、気候変動に関するキーワードが抜けている穴埋め問題を解かせる（３回目）	◇間違いが多い部分をもう一度聞いて確認し、答え合わせをする。 ◆音声を集中して聞きながら穴埋め問題に取り組んでいるか。 Ecosystem（生態系）、emissions（排出）、air pollution（大気汚染）、global warming（地球温暖化）など
	2. 地球温暖化や気候変動による主な悪影響について、パートナーと思いつく分だけ考えてもらい、クラス全体で共有	◇以下のようなアイデアが出来ることを期待し、出なかった分は教師から補足して伝える。 ・農業の作物が不良 ・サンゴの白化や森林減少 ・気温上昇による熱中症患者の増加 ・生態系への影響 ・海面上昇、海水酸性化 ・洪水、干ばつ、豪雨、高潮 ◆積極的にアイデアを出しているか。 ◆地球温暖化が海や陸の生態系へも変化を及ぼすこと、サンゴの白化や森林減少につながってしまうことを理解できているか《自然環境、生態系の保全を重視する》。
	3. これらの英単語を確認	◇まず生徒たちに英単語を知っているか投げかけ、出なかった分は教師が示す。発音の練習もさせる。 ◆積極的に答えようとしているか。 ◆発音練習で積極的に声を出しているか。
	4. 生徒たちが身近に感じている問題はどれか、生徒たち自身の経験から引き出す（豪雨や熱中症などが身近に感じやすいと考えられる）。	◇これらを踏まえ、生徒たちが日常生活の中で身近に感じている問題はどれか、生徒たち自身の経験から引き出す（豪雨や熱中症などが身近に感じやすいと考えられる）。
	5. 次回への足場かけ（世界の取り組みを知る）	◇世界平均気温の上昇を 2℃未満に抑えること、21 世紀後半までに温室効果ガスの排出を実質ゼロにすること（脱化石燃料の達成）を目指して採択されたパリ協定について、教師から話をする。 ◇アメリカが脱退したこと、排出量取引が行われていることも伝え、公平

		性の観点からどう思うか率直な意見を数人に求める (この段階では日本語でOK) ◆教師の話を注目して聞いているか。 ◆公平性の観点から批判的に考えられているか。《公平性・クリティカルシンキング》
3	(4) リスニング 3	【詳細まで理解できる力】 グretaさんの演説をもう一度聞いて、気候変動に対する取り組みは順調か見直してみよう。 1. グレタさんのスピーチで気候変動に対する対策・取り組みの不足を訴えかけている部分を中心に作成した正誤問題を解かせる（4回目） 2. スピーチのスク립トと日本語訳のプリントを配布 3. もう一度聞かせる（5回目） ◇間違いが多い部分をもう一度聞いて確認し、答え合わせをする。 ◇正誤問題の間違った部分に気付かせる。 ◆音声を集中して聞きながら詳細まで理解しようと取り組んでいるか。 ◇スピーチの内容を詳細までしっかりと理解させる。 ◇「気候変動に対する取り組みは順調か」という視点からもう一度聞いてもらう。配布したスク립トを目で追いながら聞いて理解を深める。 ◇「パリ協定の目標が達成できなかったらリスクを負うのは私たちの世代なんだ」「国はもっと具体的な対策を国民に示すべきだ」など国や世界の取り組みについて批判的に考えさせ、数人に意見を述べてもらう。 ◇同時に「私たちと同年のたった一人の女の子の声が各国のトップに届いたのってすごい。自分にもできることがありそう」「国に任せきりじゃなくて個人で出来ることもあるんじゃないかな」など視点を自分たちに落とさせ、第4時に向けて当事者意識を高める。 ※教師が英語でフォローはするが、この段階では英語での意見発表は強要しない。 ◆内容を詳細まで理解できているか。 ◆気候変動に対する取り組みについて批判的に考えられているか《クリティカルシンキング》 ◆自分ごとに落として考えられているか《責任性》

4	(5) グループワーク	【コミュニケーション活動】
気候変動を抑制するために自分たちに出来ることを具体的に考えてみよう。		
1. 各個人に自分に出来そうなことをノートになるべく多く書き出させる	◇このあとのグループワークで英語で共有してもらうので、電子辞書等を活用しながら出来るだけ英語で書くよう促し、教師は机間巡視しながらサポートする。 ◇教師はグループワークで使用するプリントを各グループに配布する。 ◆当事者意識を持って考えられているか。 ◆なるべく英語で取り組めているか。	
2. 便利な表現の紹介	◇グループワーク開始前に、教師が意見を述べる際や会話を進める上で使える便利な例文を示す。”I think 3R is important.” “That’s a good idea!”など ◆教師の話を注目して聞いているか。	
3. グループでアイデアを共有（英語）	◇グループで一人ずつアイデアを英語で共有する。 ◇教師は巡回してサポートする。 ◆ある程度英語で自分の意見を述べたりコミュニケーションを取ることができているか。 ◆グループ内でお互いを尊重しながらコミュニケーションを取れているか《コミュニケーションを行う力》	
4. グループでエコビンゴの作成（英語）	◇共有したアイデアの中から8つのアイデアを選び、各グループオリジナルの「エコビンゴ」を作成させる。 ◇教師は机間巡視しながらサポートする。 ◆積極的に活動に参加できているか。 ◇各グループが作成したエコビンゴの中からどれか一つを教師がコピー印刷して配布 →生徒は1週間でなるべく多くビンゴできるようエコな生活を心がける →次の1週間は別のグループが作成したビンゴを配布する (継続して普段から環境に優しい生活を心がけられるようになる) ◆積極的にエコビンゴの達成のために取り組んでいるか。 ◇これからのアクションを可視化することで「自分たちに出来ることってこんなにあるんだ」という気付きを得させる。	
5. 宿題を伝える	◇次回のスピーチに向けて、自分がこれからどのような形、どのような方法で気候変動の抑制に貢献したいか、などの「アクションプラン」を伝え	

		る 1 分間スピーチを考えてくるよう伝える。
5	(6) スピーチ	【1 分間スピーチ】 自分のアクションプランを英語スピーチで皆に宣言しよう。
	1. 準備してきた英語のスピーチを各自で練習する	◇なるべく原稿は見ずにスピーチできるようしっかりと練習させる。 ◇練習時間中は机間巡視しながら、内容や発音に関する質問があれば応じて適宜指導・助言するようにする。 ◆スピーチの準備（宿題）をしてきているか。 ◆積極的に練習のために時間を活用しているか。
	2. 教室の前に来て 1 分間スピーチを行う（英語）	◇教師は隅で見守る。時間を管理し、全員が発表できるようにする。 ◇スピーチが終わる毎に拍手を促し、良かった点を一言でフィードバックする。 ◆前を向いて適度な声量で話し、聴衆に対して伝えようとしているか。 ◆課題に沿った内容になっているか。
	3. まとめ	◇エコビンゴやスピーチを踏まえて自分たちにも出来ることが沢山あることを振り返り、これまでの活動に対するフィードバックを与えて授業を終わる。

6 使用する資料など

○シドニーで撮影した写真



○グレタ・トゥーンベリの演説（以下日本語訳）

私から皆さんへのメッセージ、それは「私たちはあなたたちを見ている」、ということです。

私は今、この壇上にいるべきではありません。私は海の向こうで学校に行っているべきです。それなのに、あなたたちは私に希望を求めてここにきたのですか？よくそんなことができますね！

あなたたちは空っぽの言葉で、私の夢そして子供時代を奪いました。それでも私はまだ恵まれている方です。多くの人たちが苦しんでいます。多くの人たちが死んでいます。全ての生態系が破壊されています。私たちは大量絶滅の始まりにいます。それなのにあなたたちが話しているのは、お金のことと、経済発展がいつまでも続くというおとぎ話ばかり。恥ずかしいんじゃないでしょうか！

30 年以上にわたって、科学ははっきりと示してきました。それに目をそむけて、ここにやって来て、自分たちはやるべきことをやっている、どうして言えるのでしょうか。必要とされている政治や解決策はどこにも見当たりません。

あなたたちは私たちに“耳を傾けている”、そして緊急性を理解していると言います。しかしどれだけ私が怒り悲しんでいようとも、私はそれを信じたくありません。なぜなら、もしあなたたちが状況を理解していながら行動を起こしていないのであれば、それはあなたたちが邪悪な人間ということになるからです。私はそれを信じたくありません。

二酸化炭素排出量を10年で半分に減らしたとしても、地球の平均気温を1.5℃以下に抑えるという目標を達成する可能性は50%しかありません。そしてそれによる取り戻しのつかない連鎖反応を埋め合わせることは、制御不能になります。

あなた方は50%でいいと思っているのかも知れません。しかしその数字には、ティッピング・ポイント（小さな変化が集まって、大きな変化を起こす分岐点）やフィードバックループ（フィードバックを繰り返して改善していくこと）、空気汚染に隠されたさらなる温暖化、そして環境正義や平等性などの要素は含まれていません。そして、私たちや私たちの子供の世代に任せっきりで、何千億トンもの二酸化炭素を吸っている。私たちは50%のリスクを受け入れられません。私たちは、結果とともに生きなければいけないのです。

「気候変動に関する政府間パネル」が発表した、地球の温度上昇を1.5℃以下に抑える可能性を67%にするために残っている二酸化炭素の量は、2018年1月の時点で420ギガトンでした。今日、その数字はすでに350ギガトンにまで減っている。

なぜこれまでと同じやり方で、そしていくつかの技術的な解決策があれば、この問題が解決できるかのように振舞っていられるのでしょうか。現在の排出量レベルを続ければ、残っているカーボンバジェット（温室効果ガス累積排出量の上限）は、8年半以内に使い切ってしまう。

しかしこの現状に沿った解決策や計画は作られないでしょう。なぜならこの数字は、とても居心地が悪いから。そしてあなたたちは、それを私たちにはっきりと言えるほど十分に成熟していない。

あなたたちは、私たちを失望させている。しかし、若い世代はあなたたちの裏切りに気づき始めています。未来の世代の目は、あなたたちに向けられている。もしあなたたちが裏切ることを選ぶのであれば、私たちは決して許しません。私たちはこのまま、あなたたちを見逃すわけにはいかない。

今この場所、この時点で一線を引きます。世界は目覚め始めています。変化が訪れようとしています。あなたたちが望もうが望ままいが。

7 参考文献

「グレタ・トゥーンベリ」、Wikipedia（閲覧日 2020 年 8 月 29 日）

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B0%E3%83%AC%E3%82%BF%E3%83%BB%E3%83%88%E3%82%A5%E3%83%BC%E3%83%B3%E3%83%99%E3%83%AA>

安田 聡子、『グレタ・トゥーンベリさん、国連で怒りのスピーチ。「あなたたちの裏切りに気づき始めています」（スピーチ全文）』（閲覧日 2020 年 8 月 29 日）

https://www.huffingtonpost.jp/entry/greta-thunberg-un-speech_jp_5d8959e6e4b0938b5932fcb6

英語科 学習指導案

令和3年2月12日

中学3年生

作成者 檜 乃里花

1 単元名 New Crown Lesson3 Rakugo Goes Overseas 2

はじめに

日本の伝統文化について理解を深めることは、生徒が日本人としてのアイデンティティを獲得する上で重要な役割を果たす。いくら生まれ育った国の文化とはいえ、意識的に学ぼうとしなければ触れる機会すらなかなかないのが現状である。海外留学をした日本人が、他国の人々から日本のことを質問され、うまく答えられなかったというような体験談は頻繁に目にする。自国の伝統文化として落語を学び、またそれを世界にも誇れるものであることを、英語落語家として活動する方のインタビュー（教科書本文に記載）を通して実感させたい。また、他国の笑いの文化にまで興味関心を広げ、それらが日本のものとどのように違うのかという点にも着目させたい。

3 ねらい

落語について知り、英語落語を行う活動を通して、現在完了形の文の構造と意味を理解するとともに、伝統文化を広めていこうとする態度や、国際社会における平和に関心を持ち、異なる文化を尊重しようとする態度を育てる。

4 指導について

- (1) 生徒の実態
省略

- (2) 教材について

落語の起源は、1500年代の室町時代末期から安土桃山時代にまでさかのぼる。当時、「御伽衆」と呼ばれる人たちが、戦国大名の話し相手をしたり、世情を伝えたりしていた。そのうちの一人である安楽庵策伝は、現在にも伝わる古典落語のもととなった「醒睡笑」を著したことから、「落語の祖」と呼ばれる。策伝は、オチのある「落とし噺」の名手として知られており、のちの江戸時代、その落とし噺を京都の大通りなどで行う「噺家」が誕生した。この噺家が「落語家」の始まりであるといわれている。こうした長い歴史を持ち、未だなお受け継がれている落語だが、落語を今までに一度も聞いたことがないという人は、特に若い世代では少なくない。落語は、日本における伝統的な大衆演芸である。老若男女問わず、誰もが気軽に楽しむことが落語の魅力といえるだろう。しかし、引き継ぐものがいなければ、後世には受け継がれない。生徒たちには、次の世代に伝承する役目が、少なからず自分たちにもあることを自覚させたい。この指導案においては、落語そのものの面白さを実感させることで、生徒たちと落語との距離が少しでも縮まることを第一の目標とする。その上で、落語を伝承することの意義、伝承しようと励む人の想いを想像させることで、伝統文化を身の回りに広めていこうとする態度を育てたい。

- (3) 学習指導について

生徒に落語の面白さを実感させるため、総合的な学習の時間と連携して生の落語を鑑賞させる。本指導案の第4時を行う前に、この鑑賞を行えることが望ましい。鑑賞を行う前に、本指導案の第1時等を通して、生徒自身と落語文化との関わりについて整理させる。生徒自身と落語文化との距離感を認識させることで、伝統文化の継承に関する問題意識を持たせたい。

英語科としては、各授業において4技能（話す、聞く、読む、書く）に関する活動をバランスよく取り入れたい。それらの知識及び技能を正しく定着させ、実際のコミュニケーションに即した反復練習を通して、自らの意見を伝えるための手段を生徒に身に付けさせたい。また、英語落語を体験させる活動を通して、楽しく英語を使用し身に付ける機会を設けたい。一方でESDの観点からは、決まった答えのない問いに関する話し合いを通して、伝統文化としての落語や国際社会における平和への関心を持ち、それらを尊重しようとする態度を育てたい。自国の伝統文化である落語への理解を深めさせながら、様々な国のお笑いに関心を持たせ、文化の多様性を尊重しようとする態度を育てたい。

※ESDの視点（資質・能力）

- ・ 有限性

後継者がいなければ文化存続の危機となる。ただ英語落語をするのではなく、伝承することの意義、伝承しようと励む人の想いを想像する活動を行う。

※ESDで育てたい能力

・コミュニケーションを行う力

グループで共同して、意見交流しながら落語を英語落語にしていく。

※ESDで育てたい価値観

・人権、文化を尊重する（文化多様性の尊重）

英語落語を体験する活動を通して、日本の伝統文化を尊重する態度を育む。また、海外のエンターテインメントや生活文化に興味関心が広げられるようにする。

※SDGsとの関連

目標16 平和と公正をすべての人に

英語落語家として活動する大島希巳江さんの想いに触れる活動を通して、国際社会における多様性の尊重や平和の実現に興味関心が広げられるようにする。

5 指導と評価の計画

(1) 評価規準（英語）

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
現在完了形（経験用法）の知識を活用して正しく、書いたり話したりすることができる。	読み取った内容から、自分の考えを用い意見を伝えている。	英語落語に積極的に取り組もうとしている。
あらすじや大切な部分などを読み取る（聞き取る）ことができる。	現在完了形（経験用法）の知識を活用し、自身に関することや自分の意見を伝えることができる。	グループ活動において、積極的に自分の意見を発信し、相手の意見を聞こうとしている。
現在完了形（完了用法）を用いた文の構造を理解している。	会話を広げるために、相手の発現に対して、質問したりあいづちをうったりできる。	学習する中で疑問に感じることを、積極的に解決しようとしている。

(2) 指導計画（全10時間）

本時のめあて	学習活動
(第1時) What is the woman doing?	
・自分たちと落語文化とのかかわりを考えてみよう。	◎教科書23ページの女性落語家の写真を見て、どのような動作を表しているかを考える。 ◎自分たちが落語について知っていることをまとめる。 ◎どうして自分たちは落語になじみがないのか、どうすれば落語がより身近な文化になるかを考える。
(第2時) 教科書本文の内容に取り組もう。(Lesson3 Part1)	
・現在完了形(経験用法)について理解しよう。	◎これまでに学習した現在完了形との違いに気づく。 ◎新出単語を確認し、本文の内容を理解する。
(第3時) 教科書本文の内容に取り組もう。(Lesson3 Part2)	
・現在完了形(経験用法)を使いこなそう。	◎現在完了形(完了用法)の理解を深め、演習する。 ◎新出単語を確認し、本文の内容を理解する。
(第4時) 英語落語を鑑賞しよう。	
・英語落語を鑑賞し、日本語の落語との違いを考えよう。	◎鑑賞した英語落語の、どういったところが面白かったか話し合う。 ◎英語落語と日本語落語の共通点、相違点を見つける。
(第5時) 大島希巳江さんのインタビューを読もう。(USE-Read) (本時)	
・大島希巳江さんがなぜ英語落語をするのかを読み取ろう。	◎現在完了形(経験用法)を復習し、会話練習やワークシートに取り組む。

	◎本文の内容を理解し、英語落語への興味関心を高める。
(第6時) 英語落語を練習しよう①	
・日本語落語を英語落語にしてみよう。	◎日本語落語の一部を英訳することを通して、その難しさを実感する。 ◎教科書付属のDVDを視聴し、英語落語を演じる上でのポイントを理解する。
(第7時) 英語落語を練習しよう②	
・発表に向けて、英語落語を繰り返し練習しよう。	◎グループごとに、英語落語の練習を繰り返し行う。 ◎より面白さが聞く人に伝わるようにできる工夫を考える。
(第8時) 英語落語を発表しよう①	
・英語落語を発表し合い、感想を伝え合おう。	◎グループごとに発表を行い、感想やアドバイスを伝え合う。
(第9時) 英語落語を発表しよう②	
・同上	◎同上
(第10時) 様々な国のお笑い文化を見てみよう	
・「お笑いの多様性」に気付こう。	◎様々な国のお笑い文化に触れ、共通点や相違点に気づく活動を通して多様性を実感する。

6 本時案 (第5時)

(1) 目標

- ・本文の内容を読み取り、英語落語家として活動する大島希巳江さんの想いを理解することができる。
- ・大島希巳江さんの想いに触れることを通して、英語落語への興味・関心を高めることができる。

(2) 展開

学習活動	指導上の留意点	評価規準・ESDとの関連など
◎現在完了形の確認をする。 スライドを見ながら現在完了形を用いた文を復唱する。 ①正しい文を見て記憶する活動 ②空欄を埋めて文をつくる活動	スライドを提示する。	コミュニケーションを行う力 現在完了形（経験用法）の知識を活用して正しく、書いたり話したりすることができる。（知識・技能）
◎ペアになり、スライドに表示される題に沿って30秒間会話を行う。	ペアが組めていない生徒がいないか確認する。	
◎ワークシートに取り組み、答え合わせをする。	ワークシートを配布する。	現在完了形（経験用法）の知識を活用して正しく、書いたり話したりすることができる。（知識・技能）
◎教科書本文（Use Read）の内容を理解するとともに、文法事項を確認する。		
◎本文を音声で聞き、聞き取れた単語や内容について小グループで	CDを再生する。	あらすじや大切な部分などを読み取る（聞き取る）こ

シェアする。 ◎再度音声を聞き、内容を理解する。 ◎個人で黙読し、疑問のある個所をクラス全体でシェアし解決する。 ◎スライドに表示される問いに対する答えを考え、内容の理解を深める。	とができる。（知識・技能） グループ活動において、積極的に自分の意見を発信し、相手の意見を聞こうとしている。（主体的に学習に取り組む態度） 早く読み終わった生徒には、本文中で疑問のある個所を探すよう伝える。	とができる。（知識・技能） グループ活動において、積極的に自分の意見を発信し、相手の意見を聞こうとしている。（主体的に学習に取り組む態度） 学習する中で疑問に感じることを、積極的に解決しようとしている。（主体的に学習に取り組む態度）
問い①: Why does she act English Rakugo out?		
◎大島さんが英語落語に挑戦し続けているのはなぜかを考える。 ・（教科書本文より） She wants to share Japanese humor with people all over the world. ・（教科書本文より） She believes that to continue spreading laughter all over the world will make a more peaceful world. ◎「笑いを広めることが世界を平和にする」とはどういうことかをグループで話し合う。 ・平和だからこそお笑いを楽しめる？ ・笑っていれば争いが起きない ◎次時の内容を確認し、英語落語に取り組むグループの確認をする。	問い② “What does it mean, “spreading laughter will make a more peaceful world” ?” 次時の内容を伝え、英語落語に取り組むグループを確認させる。	文化多様性の尊重 コミュニケーションを行う力

参考資料：大島希巳江（2013）「やってみよう！教室で英語落語」三省堂

国語科学習指導案

授業者 西條 秀哉

1. 単元名 『奈良公園のナンキンハゼは全て伐採すべきか』

2. 単元の目標

- ・物事を判断する際の情報を収集し、その情報を相手に的確に伝えるための工夫ができて
いる。
- ・ディベートを行う際は相手チームの意見を受け入れつつ自分達の意見を分かりやすく
伝えることができる。
- ・仲間と協力してディベートを行い、自分の考えの変容について理解するとともに、その
考えについて行動化できる。

3. 指導について

(1) 児童観

このクラスの児童は、提示された問題について自分の意見を明確にして文章に表現することができる。しかし、自分以外の友達の考えや視点を聞き入れ、自分の考えを深めることを苦手とする児童が多い。そこで、今回の授業を経て、児童たちがディベートという形で、扱う問題に対する否定派と肯定派両面の視点から物事を多面的に考えること、話し合う上で相手の主張を受け入れた上で自分の考えを深めることの2点を育みたい。

(2) 教材観

今回行うディベートは、議論をする練習になる。児童が主体となってディベートを行うことでコミュニケーション能力を高めることができる。また物事を一面からではなく多面的に捉える経験になる。加えて、ディベート当日までにチームで協力して準備をする必要があることから、仲間と協力することの難しさ、そして面白さを体験できると共に、物事の良し悪しを考える際に自分の手でしっかりと調べ、その上で自分の意見を判断することができるようになることを考える。一種の競技的な要素も含まれているため、児童にとって意欲的に取り組む動機付けになると考える。

また、ディベートの題材を「奈良のナンキンハゼ」にすることで、身近なところにある、ナンキンハゼが抱える観光的、景観的によい面と、自然環境、世界遺産に関わる悪い面の両側面を持っている問題について知り、考えるきっかけになる。

今回導入部分で利用する「ネイチャーゲーム」とは、「直接的な自然体験を通して自分を自然の一部ととらえ、生きることのよろこびと自然から得た感動を共有することによって、自らの行動を内側から変化させ、心豊かな生活を送る」というシェアリングネイチャーの精神に基づいた活動である。事前に自然に関する知識を持っていなくても、自然の中の様々な特徴を生かしたゲームを行うことで、楽しく遊びながら自然について学んだり想像力を高めたりすることのできる活動である。

(3) 指導観

まず身近にあるナンキンハゼに、より一層愛着を抱くことができるようにするため、実際に奈良公園に向かってネイチャーゲームを行う。第一次では、そのネイチャーゲームの中から「落ち葉川柳」と「フィールドビンゴ」を行う。「落ち葉川柳」は、大きさや形、色、虫食いなど1枚1枚個性が違う葉っぱをしっかりと観察し、その特徴を川柳にし

て歌うことでその特徴を際立たせ、読み手の感性を養う活動である。「フィールドビンゴ」は「見つける、聞く、触る、嗅ぐ」など体の様々な感覚を使って自然物や自然現象を見つける活動である。このような五感を使って自然に触れるという活動的な授業の中に、ナンキンハゼの姿をちりばめることで、ナンキンハゼの第一印象を良いものにしたい。第一印象を感動的で親しみのあるものにすることで、児童が第二次以降のナンキンハゼの良い面、悪い面を学ぶ際に、主体的、意欲的に授業に参加できると考える。

次にその後のディベートでの準備から本番に向けての授業については、ディベートの競技的な醍醐味や難しさについて説明し、児童の意欲を高める。その上で、準備の時間は児童の主体性にある程度任せ、教員はそのサポートをする。この段階で児童が主体的、協力的に活動できるようにするために、また、活動の内容が充実したものになるために、ディベートの手順の説明や、資料の準備は徹底する必要がある。ディベート本番は肯定側否定側がそれぞれ調べてまとめた情報を全力で出せるようにする。ジャッジは公正に冷静に判断ができるようにする。そのためにも席の並びや時間設定など場づくりを丁寧に行っていく必要がある。

4. 単元で育成を目指す能力

【国語科としての能力】

- ・資料や情報の収集力・分析力を身に付ける。

小学校学習指導要領（平成 29 年告示）国語編の「思考・判断・表現」A（1）アに該当

- ・発表能力や説得能力を身に付ける。

小学校学習指導要領（平成 29 年告示）国語編の「思考・判断・表現」A（1）イ、ウに該当

- ・聞く能力を身に付ける。

小学校学習指導要領（平成 29 年告示）国語編の「思考・判断・表現」A（1）エに該当

- ・批判能力を身に付ける。

小学校学習指導要領（平成 29 年告示）国語編の「思考・判断・表現」A（2）ウに該当

【ESD の視点】

- ・批判的に考える力を養う
- ・多面的・総合的に考える力を身につける
- ・コミュニケーションを行う力を身につける
- ・他人と協力する態度を育成する

5. 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習へ取り組む態度
・物事を判断する際の情報を収集し、その情報を相手に的確に伝えるための工夫をしようとしている。	・ディベートを行う際は相手チームの意見を受け入れつつ自分達の意見を分かりやすく伝えようとしている。	・仲間と協力してディベートを行い、自分の考えの変容について理解するとともに、その考えについて行動化しようとしている。

6. 指導計画（16 時間）

次	学習活動	指導上の留意点	評価規準と評価方法など
第一次	○学習の見通しをもつ。		

	●「ディベートにて、自分のチームを勝利に導こう」という学習の目標を提示して、学習計画を立てる。 ●最後に行うディベートのテーマをあらかじめ知る。 お題「奈良公園のナンキンハゼは全て伐採すべきである」 ●軽くナンキンハゼについて知る。	どんな樹なのか、姿や色、形など実物や写真などを使って紹介する。	
第二次	○身近な題材で、ディベートの練習をする。 ●ディベートを行っている教材ビデオを用意して、大まかなディベートの流れや様子を見せる。 ●「携帯電話は学校に持ってくるべきである」というお題でディベートを行う。 〔1回戦〕 肯定 A VS 否定 A （審判：肯定 B 否定 B） 〔2回戦〕 肯定 B VS 否定 B （審判：肯定 A 否定 A）	メンバーの役割と、立論の文章を書くスペースと、メモをするスペースを用意したワークシートを作成する。 チーム分けは、4パターンのくじ引きをあらかじめ用意して置き、それを児童に順番に引かせる。 （肯定 A、肯定 B、否定 A、否定 B の 4 種類） 自分たちのチームに愛着を持てるように、チーム名を決めてから活動に入る。	◇ワークシート ・資料や情報の収集力・分析力を身に付ける。 ・多面的・総合的に考える力 ・他人と協力する態度 ・発表能力や説得能力を身に付ける。 ・聞く能力を身に付ける。 ・批判的に考える力 ・コミュニケーションを行う力
第三次	○「奈良公園のナンキンハゼは全て伐採すべきである」というお題でディベートを行う。 ●今回のお題でディベートをするために、まず何をする必要があるのかを考える。 ●どうすれば、知る必要のある内容を知ることができるのか考える。 ●情報収集の為の活動を行う。 〔フィールドワーク〕 ●ネイチャーゲームを行う ＜落ち葉の百人一首＞ ＜フィールドビンゴ＞ 〔ナンキンハゼに詳しい方から	□前回のディベートで、準備の時に何を行ったか考えさせる。 □奈良公園植栽検討委	◇ビンゴカード ・資料や情報の収集力・分析力を身に付ける。 ・他人と協力する態度 ◇メモ ・資料や情報の収集力・分析力を身に付ける。 ・多面的・総合的に考える力 ◇ワークシート ・資料や情報の収集力・分析力を

	話を聞く] ●奈良公園植栽検討委員会の方と、春日山原始林を未来へつなぐ会の方に話をして頂くよう依頼する。 ●得た情報から、再度チーム分けをし、ディベートの準備を始める。 ●ディベートを行う。	員会の方や、春日山原始林を未来へつなぐ会の方について話をして頂くことで、経験や活動、実績など具体的な実話を基にした、説得力のある話が聞くことができる。 □前回と同様、チーム名決めから始め、フォーマットに書き込む形で準備を始める。	身に付ける。 ・多面的・総合的に考える力 ・他人と協力する態度 ・発表能力や説得能力を身に付ける。 ・聞く能力を身に付ける。 ・批判的に考える力 ・コミュニケーションを行う力
第四次	○自分たちの考えたお題でディベートを行う。 ●自分たちの身の回りで、問題になっていること、解決したいことを挙げる。 ●出たお題から一つ題材を選ぶ。 ●チーム分けをし、準備を行う。 ●ディベートを行う。	□選ばれたお題を、「○ ○は、○○すべきである」という形式にしてディベートのお題にする。	□第二次と同様

ディベート大会 作戦用紙 (肯定側)

表

チーム名: _____

名前	役職
○○ ○○	肯定側立論
○○ ○○	肯定側立論
○○ ○○	肯定側質疑
○○ ○○	肯定側質疑
○○ ○○	肯定側反駁
○○ ○○	肯定側反駁

お題 _____

立論 _____

裏

メモ _____

フィールドビンゴ カード

なまえ: _____

どんぐり 	虫が食べた葉っぱ 	 ? 固いもの
かぜの音 	ナンキンハゼの葉っぱ 	鳥の声 
赤色のもの 	きのこ 	鹿の親子 

ディベート用のワークシートの1例

フィールドビンゴで使うカードの1例

第6学年 総合的な学習の時間学習指導案

奈良教育大学 教育学部 社会科教育専修 3 回生 足立 繁郁

1. 単元名

「戦争をしないために私たちが出来ることを考えよう」

2. 単元の目標

- 戦時中を生きた人の想いを捉え、戦争は体験した人達の心に深い傷をもたらすことを理解する（知識・技能）
- 今なお戦争が続いている現代を見つめ、国や組織が戦争をする理由を、現代に起きている問題と過去の問題を関連させながら考えられる（思考力・表現力・判断力）
- 自分たちも国民として、戦争を引き起こさないためにできることを考える学習を通して、戦争をしないための行動ができるようになる（主体的に学習に取り組む態度）

3. 単元について

（1）教材観

2015 年 9 月の国連総会で、「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」が採択され、「持続可能な開発目標 (SDGs)」が揚げられた。この SDGs の目標 16 (平和と公正をすべての人に) のターゲット 16.1 に「あらゆる場所において、すべての形態の暴力及び暴力に関連する死亡率を大幅に減少させる。」ことが掲げられている。しかしながら、2015 年以降も世界では、戦争や紛争はまだまだ無くなっていない現状である。

本実践では、地域で戦争を体験した方との出会いから、戦争の恐ろしさ、非日常を実感し、戦争を無くそうと努力する地域の人々の営みに憧れ、自分たちも戦争の解決につながる行動を起こしていく学習である。その際、戦争の仕組みや解決法の理解、自分たちが戦争に巻き込まれないために、戦争が起こる前に自分自身ができることを考えることが大切だと考える。そこで「奈良での戦争体験」と「戦争のメカニズム」の二つのことを教材として学習する。

一つ目は、「奈良での戦争体験」である。ここでは、奈良で戦争を体験された鈴木知英子氏をゲストティーチャーとして児童に出合わせる。鈴木氏は、奈良で空襲の被害に遭われ、戦後も後遺症と闘い、現在語り部として戦争の体験を語り継いでいる方である。鈴木氏の戦争体験を児童が聞くことで、戦争の恐ろしさ（当たり前でない日常など）を実感するだろう。さらに、鈴木氏は戦争体験を伝えるだけでなく、「平和とは何か」「命とは何か」語り掛けてくれる。この語りを聞くことで子どもは、当たり前にあった平和について深く考えることができるだろう。そして、鈴木氏が戦争を無くすために努力している営みを紹介してもらおう。鈴木氏は、「子どもたちは、命のことについてあまり知らない。そんな子どもたちに命は一つしかないことをわかってほしい」という想いからこの活動が続けている。命の危機に直面し、命の大切さを実感した鈴木氏が語り継いでいる姿は、児童に大きな感動をもたせ、さらに自分もそうなりたいと憧れ、行動化につながるだろう。さらに鈴木氏はインタビューの中で「戦争は勝った方も負けた方も深

い傷を残します」ということを話してくれた。戦争はいけないものだということは分かっている児童に改めて、「戦争とはなにか」について投げかけ、戦争がもたらすものを児童に考えさせてくれると考えた。

二つ目は、「戦争のメカニズム」である。ここでは「りぼんぷろじえくと（2014）の『新・戦争のつくり方』」に出合わせる。「新・戦争のつくり方」は、社会の仕組みが変化することで「日本が戦争をできる国になる」ということを九つの事例をもとに絵と文章で分かりやすく書かれてある。九つの事例の説明の後、文章は「戦争ができる国になりましたね」と続いていく。本書を児童と一緒に読み進めていくことで、社会システムの変化が、戦争を引き起こすメカニズムになっていることに気づくことができると考えた。一人の国民として、戦争に巻き込まれないために、社会システムに目を背けず、考え、行動を促していく教材である。

（２）指導観

はじめに、戦争という言葉聞いて思いつく場所を児童に聞く。原子爆弾が投下された広島や長崎、地上戦が起きた沖縄などが児童の考えとして挙げられるが、自分たちが住んでいる奈良でも空襲が起きたことを、実際に奈良市で焼夷弾が投下された「法蓮の空襲跡」に訪れ、児童に実感させる。実際に「法蓮の空襲跡」を訪れることで、自分たちの町にも戦争があったことに驚き、戦争が遠い存在のものではなくなる。「この場所で戦争を体験した人はどのような気持ちだったのだろう」という問いが生まれるだろう。

つぎに、奈良で戦争を体験されたゲストティーチャーの講話に移る。ゲストティーチャーに鈴木氏をお招きする。鈴木氏は「戦争がいかにいけないことか」を訴えるのではなく、「戦争が何をもたらすか」を訴える。鈴木氏の話聞く中で、児童は鈴木氏の体験と営みに想いを馳せる。また自分事でない「戦争とは何か」について、体験者の視点から、見つめるきっかけになるだろう。

そして、戦争を過去のものとして児童が考えないように、今も起きている現実を知り、どうして国や組織が戦争を今も起こしているのかについて児童に考えさせる。その際、太平洋戦争が起きている理由についても学習することで、現代と昔のつながりを意識できるようにする。戦争がどうして起こるのか「アメリカ同時多発テロとイラク戦争」と「太平洋戦争」が起きたきっかけから児童に考えさせる。両者は時間軸が異なるが、どちらも国や組織の「利益」や「報復」のために起きた戦争である。「国民一人ひとりの犠牲」を前記の鈴木氏の講話をもとにイメージしながら、国や組織が戦争を起こしていることを考えられるよう「戦争が起こるきっかけってなんだろう」という発問を軸に児童に考えさせる。

さらに、「りぼんぷろじえくと（2014）の『新・戦争のつくり方』」を用いて、戦争が繰り返される前に国民一人ひとりができることを考えさせる。戦争はいけないことという実感を持ち、国や組織が戦争を起こすことを知った上で、「一人ひとりが戦争をしないためにできること」について交流を通して考え、戦争が繰り返される前にできる行動を自分事として考えられるようにする。児童は学習を通して、「社会や国で起きていることに興味を持って、行動することが大切」という行動への意欲が見られる発言を出すだろう。最後の時間に向けてこの時間では、児童の行動したいという意欲を持たせる。

最後に、鈴木氏と連携して「語り部継承プロジェクト」を行う。児童が実感してきた「戦争の恐ろしさ」や、本単元で考えてきた「戦争を繰り返さないために自分自身ができること」を地域の人達に伝える。「戦争の恐ろしさ」については、鈴木氏の講話を踏まえて、自分がどのように感じたのかについて伝えるよう指導する。ポスターや新聞、パワーポイントなどを用いて、鈴木氏のアドバイスをもらいながら児童は発

表資料を作成し、地域の方々に発表する。児童は知り、考える側から、伝え、相手を考えさせる側へ変容できるよう指導する。

4. ESDとの関連

①ESDの視点

➤ 相互性

戦争が起こるきっかけは、昔も今も国や組織の「利益」や「報復」であることが多い。昔と今の戦争を別の視点で見るのではなく、つながりを意識して見ることができる。

➤ 責任性

戦争体験を語り継ぐ鈴木氏の想いに児童は胸を馳せ、語り継いでいく責任性を実感できる。

また、戦争を繰り返さないための自分自身の行動を考え、地域の人達に伝えることで、一人ひとりが自覚をもって、平和な社会の実現を目指していくことができる。

②育てたいESDの資質・能力

➤ 進んで参加する態度

児童がこれから平和な社会を作っていく一員として、再び日本で戦争を繰り返さないために、進んで行動していこうとする態度を育てる。

③育てたいESDの価値観

➤ 世代間の公正

鈴木氏の戦時中の体験、戦後の営みを児童が聞く中で、「戦争」を軸に過去と今をつなげることができる。また、過去の出来事と現代の問題のつながりを意識しながら、これから起こりうる可能性を示唆することで、過去と今、そして未来をつなげることができる。

➤ 人権・文化・平和を尊重できる

本単元で「戦争はだめだ」とは教えない。戦争や平和について児童自身が考え、自分なりの答えを見つける。児童が見つけた答えは、自分事としてこれからも尊重していくことができる。

④達成に貢献すると思われるSDGs

➤ 16 平和と公正をすべての人に

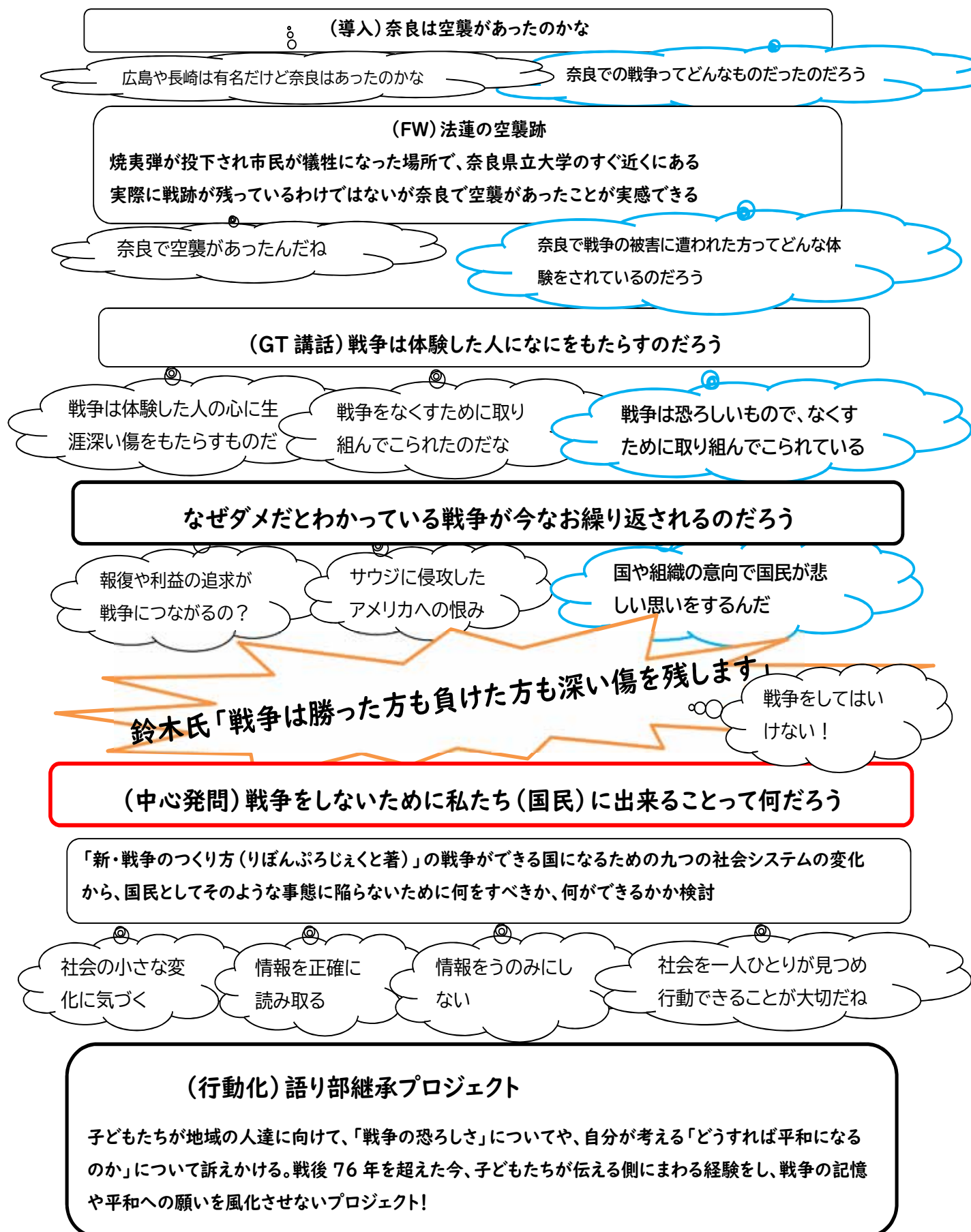
5. 単元計画（13 時間）

	○学習活動 ・児童の発言	学習の支援、指導上の留意点	評価
み つ め る (① ②)	(問い) 奈良にも空襲はあったのだろうか？ ○実際に法蓮の空襲跡に訪れ、奈良で戦争があったことについて知る。 ・広島や長崎は有名だけれど、奈良も空襲の被害を受けたんだね ・奈良で戦争を体験した人はどのような経験をしているのだろう	・法蓮の空襲跡に児童を連れていき、戦争が身近に起きていたことについて実感させる。	

み つ め る (3) (4)	(問い) 戦争は体験した人に何をもたらすのだろうか ○鈴木氏の講話を聞き、「戦争とは何か」について考える。 ・戦争は体験した人の心に、生涯深い傷をもたらすものだ。 ・鈴木氏は戦争を無くしていくために取り組んでこられているんだ。	・鈴木氏の講話をただ聞くのではなく、「戦争は体験した人に何をもたらすのか」という視点で聞くよう促す。	
し ら べ る (5) (6)	(問い) 戦争って無くなりましたか？ ・日本ではないのかも ・世界では起きている気がする (問い) 戦争って、誰が起こしているの？ ・国かなあ ○学習問題をつくる。 なぜだめだとわかっている戦争が今なお繰り返されるの？ ○戦争が起こるきっかけを、「アメリカ同時多発テロ・イラク戦争」「太平洋戦争」から考える。 ・アメリカ同時多発テロのきっかけは、組織による“報復”なのかも。 ・イラク戦争は“報復”戦争って呼ばれるんだね ・太平洋戦争は、日本が領土拡大っていう“利益”を求めすぎたことがきっかけになっているのかな ・真珠湾攻撃に対する“報復”で戦争が激化したのかな ・アメリカは日本への資源輸出を止めたよね。日本は“利益”が得られなくなったのかも。 ・国や組織は、“利益”や“報復”のために戦争をするのかもしれない 戦争をしないために私たち（国民）に出来ることって何だろう？	・今も起きている戦争、紛争一覧を示す (1) ・戦争は国や組織が起こしていることを伝える。 ・アメリカ同時多発テロ (1) ・アメリカ同時多発テロが起こるきっかけと、その後のイラク戦争について (1) (1) ・太平洋戦争は教科書から学ぶ ・本学習の振り返りは、戦争を体験する国民の視点で見たときの感想を書かせる	

ふかめる (7) (8) (9)	○戦争ができる国になるための仕組みの変化（事例）について知る学習から、その仕組みが確立されるとどうなるのかについて考える。 九つの事例があるので、それぞれ一つずつ考え、交流する。 （問い）九つの事例に対して、このような事態にならないために国民としてなにをすべきか、なにができるだろうか。 ・社会の小さな変化に気づくべき ・情報を正確に読み取り、鵜呑みにしないことができる ・社会を一人ひとりが見つめ、行動できることが大切だね ○自分たちができることについて話し合う。	・りぼんぷろじえくと（2014）の『新・戦争のつくり方』から九つの仕組みの変化の事例をもとに考えさせる。 ・鈴木氏にも来てもらい、戦争体験者として評価をしてもらう。	
ひろげる (10) (11) (12) (13)	○「語り部継承プロジェクト」で、地域の人達に「戦争の恐ろしさ」や「自分が考える平和」について訴えかける。	・原稿や発表資料（紙芝居、パワーポイントなど）の作成の支援を行う。 ・地域の人達とあらかじめ連携を取り、児童の話を聞いてもらえる場を準備する。	

6. 単元構想図



中学校第2学年 社会科学習指導案

社会科教育専修中等教育履修分野

3回生 187619 北 将伍

1. 単元名「歴史を学ぶって？」

2. 単元の目標

- ・坂上田村麻呂と蝦夷の関わりを通して、歴史を多面的に見るという経験をすることで、歴史を学ぶことの意義について考えることができるようになる。
- ・歴史を学ぶ意義を理解することで、今後の歴史的分野の学習の意欲向上につなげる。
- ・多面的な歴史の捉え方を通して、歴史が社会にどのように作用しているかを捉える社会的な考え方を身に付けることができるようになる。
- ・歴史を多面的に見るという見方を、現在の事象に応用して活用することができる。

3. 単元について

I. 教材観

東北の多くの県において坂上田村麻呂は神格化された存在であり、明らかな脚色と分かる物語が流布しているほど英雄視されている存在である。その田村麻呂の存在は東北の様々な文化にも影響を及ぼしており、その代表例が青森のねぶた祭である。

ねぶた祭の本来の(つまり史学的な)起源は奈良時代に中国から渡来した七夕祭りや日本の諸祭が融合したものであるとされるが、伝承的な起源としては田村麻呂の陸奥国征伐における音頭にあると言われていた。しかし、史実上、現在の青森県域へ征伐が入るのは田村麻呂以降の文屋綿麻呂の時代であり、田村麻呂は行っていない。それにも関わらず、青森県のみならず東北全域へ坂上田村麻呂の伝説があるというのは不思議な話である。この点からも田村麻呂伝説が東北全域に影響を及ぼしていることが分かる。そもそも東北の蝦夷の人たちが住んでいた土地にとっては、征服者である朝廷の人間を称えるという文化があるということが非常に疑問視されている。なお、この疑問については史学的な見解は未だ出ていない。高橋崇は「蝦夷」の読みが「エミシ」から「エゾ」、つまりアイヌの人々を指すように後世の歴史が変わっていった結果、エミシという存在が忘れられ、後世、東北以外で英雄譚として流布していた田村麻呂の伝説を受け入れることに抵抗がなかったのではないかとするが、これについても明確な根拠はない。

これを1時間目の教材とし、ESDの価値観における人権・文化の尊重という点から考えていく。青森ねぶた祭において田村麻呂英雄史観が征服者という観点から排除されたように、田村麻呂による征伐は蝦夷、および東北の征服であり、東北の当時の蝦夷の人たちにとっては負の歴史とも言える。このように、歴史の見方は視点によって大きく変わってくる。これはESDにおいて双方の人権や文化を尊重するということはもとより、歴史を学ぶのは何を考えるためかということにも繋がるだろう。

2時間目では1時間目で学んだことを活かしてコロナ禍を多面的に見るという活動を行う。歴史を学ぶ上で培える能力をいかに現在に応用するかということに重点をおいた活動である。コロナ禍も捉え方次第では現在の生活に悪影響のみではなく、良い影響ももたらした。様々な見方ができることを自らの活動で学ぶことで、歴史の学習においても同様の見方ができるようになることを目指す。「コロナ」というキーワードから様々な見方ができるよう意識する。ウェビングマップを元に考えを広げたり、他の人とも意見交流をしたりすることで様々な見方があることを経験的に学び取る。最終的に自分で教科書のようにしてみるというまとめを取ることで、現在の出来事が歴史になるということにも意識を向けさせる。

II. 生徒観

割愛する。

III. 指導観

1時間目は軸としてねぶた祭を導入とし、朝廷と蝦夷の対立を軸として歴史をどのように見るかという内容を扱う。これは教科書の学習内容に至る前の導入として単元として設けているので、生徒にとって今後の歴史的分野の授業の指針になる内容であることを目的とする。授業として詳しい内容を解説するのではなく、歴史を捉えるためのきっかけとしての内容なので、詳しい語句の解説は必要以上に行わず、その語句の詳細を知らなくても生徒が理解できるよう努める。

2時間目は現在の社会の出来事をどのように捉えることができるかを自ら経験させる。ウェビングマップを元に様々な見方や考え方に触れることで経験的に学習をする。

この指導案における「より良い歴史認識」という語の用い方は、生徒の多様な視点から見た客観的で多義的に考えられるようになる力を身に付けることを指す。

今回身に付けた見方や考え方は歴史的分野の中において長期的に扱い、別表1のように、単元の中で適宜、レポートを書かせたり、考えを交流させたりする。

イ) 本学習で働かせる ESD の視点(見方・考え方)

- 公平性…過去における朝廷側と蝦夷側という対立構造を把握し、それが現在の社会にどのような影響を及ぼしているのかを捉えるという点で。
- 連携性…歴史を一方の視点ではなく、多面的な視点で捉えるという点で。

ロ) 本学習で育てたい ESD の資質・能力

- クリティカルシンキング…歴史の内容や、現在の社会の在り方を一つの見方だけではなく多面的に、疑ったり、新しい見方を発見したりする点で。また、コロナ禍においては一面的な見方だけではなく、本当にそれだけかと疑うことで多様な見方や考え方をできるようになるという点で。
- 長期的思考力…東北における歴史が現在にどのような影響を及ぼしているかをデータ・情報

として捉えた上で、今後の社会ではどうすれば自分たちの現在や歴史を踏まえて、より良い歴史認識や社会に繋がるのかを考える点で。

- コミュニケーション力…発問を議論し意見交流をする点で。

ハ) 本学習で変容を促す ESD の価値観

- 人権・文化を尊重する…歴史を踏まえた現在の文化やアイデンティティの在り方を考える点で。
- 世代間の公正を意識する…今後の社会ではどうすれば自分たちの現在や歴史を踏まえて、より良い歴史認識や社会に繋がるのかを考える点で。

ニ) 達成が期待される SDGs

⑩ 人や国の不平等をなくそう…ターゲット 10.3「差別的な法律、政策及び慣行の撤廃、並びに適切な関連法規、政策、行動の促進などを通じて、機会均等を確保し、成果の不平等を是正する。」に関連する内容を特に期待する。

⑯ 平和と公正をすべての人に…ターゲット 16.7「あらゆるレベルにおいて、対応的、包摂的、参加型及び代表的な意思決定を確保する。」及びターゲット 16.b「持続可能な開発のための非差別的な法規及び政策を推進し、実施する。」に関連する内容を特に期待する。

4. 単元の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
①東北における古代史の展開を理解する。 ②コロナ禍について多様な見方をすることができるようになる。	①一方の視点だけではなく多面的な視点での理解ができている。 ②歴史が現在にどのような影響を与え、また現在の時代が将来に何を齎すかを想像することができている。 ※①②はワークシートで評価。	①積極的に自分の意見を考えまとめようとしている。 ②相手の意見を聞き、それを基にした議論をすることができている。

5. 単元の指導計画(全2時間)

50 分	学習活動	指導上の留意点
	教師の発問→<<>> 教師の質問→<> 予想させる生徒の発言→「」 教師の説明や動き→・	
Ⅰ 時間目		
導入	・青森ねぶた祭に関する動画を見せる。 <この祭りはなんという祭りだろう?> 「ねぶた祭」 ・この祭りの起源が奈良時代まで遡ることができる。史実的な説明と、坂上田村麻呂に関する伝承的な説明の両方を行う。	・動画の使用に許可が必要な場合は必ず申請する。 ・地理的分野の授業において青森ねぶた祭は学習済みなので、答えが出なければヒントを促す。
展開	・奈良時代の蝦夷や隼人、蝦夷征伐、坂上田村麻呂という存在や、東北各所に城柵を築いて攻めたことを概略的に扱う。 →青森ねぶた祭のねぶたの由来ともされた田村麻呂は青森まで来ていないことに気付かせる。(ここではまだ気づかせるのみ。) Q1、<<朝廷からしたら蝦夷のいた東北を征服したわけだが、東北の蝦夷からしたらそれで良いのだろうか?蝦夷側の気持ちを考えよう。>> A1、自分たちの住んでいたところが奪われて悔しい 等 ・しかし実際には東北に田村麻呂を称える伝説が多い。田村麻呂伝説や江戸時代の悪路王にまつわる物語を読ませるなど。 ・青森ねぶた祭もまた田村麻呂の伝説に基づく祭とされていた。 →蝦夷の土地としての歴史はどうなったのだろうかという疑問へ。 Q2、<<どうして蝦夷の土地だった東北の人たちが、征服者である坂上田村麻呂を称えるようになるのだろうか?>> A2、江戸時代など時代が下ると伝言ゲームのように間違っ子孫に歴史が伝わったから 等	・東北地方の地図を活用する。 ・自由記述→近くの人と交 ・解答者を指名 ・別紙資料プリント ・自由記述→近くの人と交流 ・解答者を指名 ・征服した側によって創作された歴史の可能性に気付かせる
まとめ	・実際にどうしてかは明確に分かっていないが、征服された土地において征服者を称えるという逆転現象が起きていることは確か。 ・青森ねぶた祭の最高賞の1つに「田村磨賞」があったが歴史的な征服者を称えた賞を設けるのはおかしい、また実際に田村麻呂は青森に来ていないのではないかという理由からその賞の名前は変更になった。またねぶたの由来と	

	しても言われることが無くなった。 →歴史がその土地の文化や郷土に大きな影響を与えている。歴史の中で伝説が生まれ、現在に影響を及ぼすこともある。 ・1つの出来事を見ても様々な視点から見ることができる。正しい見方があるわけではない。光の当て方や視点1つで人物像は大きく変わってしまう。 ・とはいえ、被征服史観のみを重視すると敗者的、卑屈な視点になり、現在の地域においてもアイデンティティに劣等性を感じてしまいうる。しかしこの地域での現状は蝦夷の歴史を尊重している状態だったのか？ ・現在に息づく歴史や伝承において今後の社会ではどうすれば自分たちの現在や歴史を踏まえて、より良い歴史認識や社会に繋がるのか。どうすればそれができるのか。	・これから歴史をどう考えるかという考えのまとめは次回に行うので本時は問題提起のみ。
--	---	--

2時間目		
導入	・前回の簡単な振り返り	・同じ出来事や人物でも見方によって大きく変わってしまうことを強調
展開	・坂上田村麻呂の時代が彼らの「現在」であったように、私たちの現在の社会の出来事も何十年後、何百年後の子どもは「歴史」として勉強するかもしれない。 Q1、＜私たちの社会の中で今後、歴史の教科書に載りそうなことって何だろう？＞ 「コロナ」「東日本大震災」 ・今回はコロナについて扱う。 ・近い将来、教科書にコロナ禍の問題が載るかもしれない。その時に書かれる教科書にはどのようなことが載るだろうか考える。 Q2、＜「コロナ」と聞いて連想されることは何だろうか？＞ ・まず自分の抱いている率直な思いを記す。 ・方法としてウェビングマップを使う。中心に「コロナ」を置き、そこから連想されることを広げていく。 ・まずは自分で広げ、ある程度完成したら周りの人と意見交換する。 ・意見交換したものを元に更に自分のウェビングマップに書き加える。書き加えたものや新しく思いついたものは別に分かるように記しておく。	・自由発言 ・コロナ禍に関することがでなければ教師から提案 ・思いついたことをとりあえず書かせる。手が動かない生徒には簡単な切り口や、最初に思ったことから連想できないか助言する。

	・完成したウェビングマップの中で誰にとっての出来事であるか、や、良いことや悪いことという風に観点ごとに下線や色線を引くなどで分類する。 ・周りの人とどのような観点で分類したかなど意見を交流する。(一回目に意見交流した人とは別の人で。) ・ウェビングマップをもとに未来の教科書を作ってみる。 ・私たちの現在の社会の出来事も何十年後、何百年後の子どもは「歴史」として勉強するかもしれないということを意識。 ・Q2 で分けた分類に基づき、自分の考えた全ての観点が入るように要約してまとめてみる。 ・作った架空の教科書を周りの人と読み合う。	・あくまで文章としてまとめ活動であり、教科書のように書けているかという文章能力は大きく評価しないことを伝えておく。(書き方にとらわれて内容が薄くならないために。)
まとめ	・前回と本時で歴史をどう見るかという授業を行ったが、それを踏まえてこれからの自分たちの生活に活かしたいことや、これから歴史の授業を受けるときにはどう注意して受けていきたいかをワークシートに記す。	・ワークシートは回収する。

6. 参考文献

- ・関幸彦『武士の原像』(吉川弘文館、2020 年、第1刷発行)
- ・高橋崇『坂上田村麻呂 新装版』(吉川弘文館、2003 年、新稿版第6刷発行)
- ・東北の基層文化を探る③ 田村麻呂伝説と蝦夷復権 | あきた森づくり活動サポートセンター(2021/01/12)
<http://www.forest-akita.jp/data/kiso-bunka/kisobunka03/kiso-03.html>
- ・青森ねぶた祭 オフィシャルサイト(2021/01/12)
<https://www.nebuta.jp/>

小学校高学年音楽科学習指導案

音楽教育専修 初等教育履修分野 3 回生

187903 狗飼 菜々子

1. 単元名 共通教材『ふるさと』～自分のふるさとについて考えよう～

(小学校高学年 音楽科)

2. 目標

(1)音楽科としての目標

- ・旋律の重なりやそれらが生み出す美しさを感じ取りながら演奏することができる。(知識・技能)
- ・歌詞を深く理解し、自分たちのふるさとに思いを馳せながら感情豊かに演奏することができる。(思考・判断・表現)
- ・主体的に音楽づくりに関わり、表現方法を模索しようとしている。(主体的に学習に取り組む態度)

(2)ESD の目標

- ・自分たちの大切なふるさとの良さをこれからも守っていくためには自分たちにどのようなことが出来るか、具体的に考え行動することができる。

3. 評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①旋律やリズム、歌詞を読み取り、「ふるさと」がどのような曲なのかについて理解することができる。 ②曲の雰囲気を生かしながら実際に表現豊かに演奏しようとしている。	①ふるさとの情景をイメージし、どのような楽器を使用してどのような方法で演奏するかについて自分なりに考えを持つことができる。	①ふるさとを守るためにどのような行動が求められるか、主体的に考えている。 ②どのような楽器を使用して表現豊かに演奏するか、どのように工夫して歌うかについて主体的に考え、取り組もうとしている。

4. 単元について

この曲は作者の生家一帯である長野県中野市の「高野辰之記念館」の周辺をモデルとしており、第1節で故郷の思い出が、第2節では両親と友人に対する思いが、そして第3節では故郷に錦を飾る思いが具体的な風景描写とともにゆったりとした3拍子で表現されている。

日本人であれば誰もが知る、世代を超えて愛される曲である。

「ふるさと」を題材として取り扱うことの意義として、ふるさとの古き良き風景などを感じながら感情豊かに歌うことができる点が挙げられる。そのため、子どもたちには情景を思い浮かべながら感情豊かに歌わせたい。また、4小節単位の長い強弱記号が連続してあることも特徴的である。歌詞に感情を乗せるのと同時にスラーや強弱の変化を意識させて歌わせたい。また、子どもたちがどのような歌詞理解を行い、表現方法を模索したのかを明確にするために、子どもたちが選択した楽器を使用して合奏を行う。

また、ESD の学びとして、自分のふるさとの良さに気づき、それらの持続可能性について考えることができたり、行動することができる力を身に付けさせたい。また、ただ「かつてのふるさと」に戻すことや、「今のふるさと」に固執するのではなく、何を残して、何を作り替えていくか、変えるならどのように変えていくかを子どもたちに考えさせたい。

5. 単元の ESD 的観点

(1) その題材で働かせる ESD の見方・考え方

- ・ **責任性**…日々の自分の何気ない行動がふるさとを変えてしまっているかもしれないという自覚を持つ
- ・ **公平性**…世代間の公平を考える(自分たちだけが気持ちよく過ごせばよいのか?)
- ・ **相互性**…日々の行動が環境の変化に循環していることを知る

(2) その学習を通して育てられる ESD の資質・能力

・ **未来を予測して計画を立てる力**

…自分の住んでいるふるさとが将来どのようなになっているか、またどのようなになっていたいか、そのために自分にできることは何かを考える

・ **他者と協力する力、つながりを尊重する態度**

…自分だけの行動の変革よりも、他者を巻き込んだ変革の方が大きな変化を得られる

(3) その学習を通して育てられる ESD の価値観

・ **世代間、世代内の公正**

…ふるさとを守り続けるためにはどうすべきか

・ **生物多様性の尊重**

…自分たちの生活の中で使われる水の使い方によっては、生物の生きる環境を変えてしまう恐れがある。

(4) その学習で達成される SDGs

⑪ **まちづくり**

…自分たちの住んでいるふるさとが住み続けられるためにはどのような行動が必要なのか

考えを深める

⑭海洋資源・⑮陸上資源

…自分の住んでいるふるさとの環境について考えを深める

6. 単元展開の概要

次	主な学習活動と内容	◇教師の支援
1	(1)『ふるさと』を歌う。 (2)歌詞に注目し、どのような曲なのか考えさせる。 (3)歌詞の意味を考えながら歌う。	◇歌詞・旋律が適切か確認する。 ◇子どもたちがリズムに関して不安な部分がないか確認し、適宜補助を行う。 ◇第1節、第2節、第3節はそれぞれどのような歌詞の内容であるのかを考えさせる。
2	(1)第1節に焦点を当て、自分たちの「ふるさと」の美しい風景にはどのようなものがあるかについて考えさせる。 (2)子どもたち一人一人がお気に入りのふるさとの風景を1つ考えさせる。 (3)自分のお気に入りのふるさとの風景に置き換えた替え歌を作る。 (4)前時で自分たちのふるさとの風景について考えさせたことを踏まえ、子どもたちが(2)で挙げたお気に入りの風景は本当に未来に残せるのか考えさせる。	◇「うさぎ追いし かの川」などの歌詞のような風景を自分たちのふるさとに置き換え、どんなものがあるか、またその風景の良さについて考えさせる。 ◇替え歌を作る活動を行う中で子どもたちがふるさとをより自分事と捉えられるようにする。 ◇クリティカルな主発問を子どもたちに投げかけることで子どもに問題意識・危機意識を持たせる。 自分たちのふるさとの風景は未来に残っていくだろうか？
3	(1)日本の風景がそれぞれの時代の環境問題とともに変化している様子を紹介する。そこでどこが変化しているのか、どこが変化していないのかを考えさせる。 (2)子どもたちに	◇1970年代の東京の河川が生活用水で汚染されている写真を見せ、当時どのような環境問題があったのか考えさせる。また、同じ場所の現在の写真と比較させる。 ◇これらの風景は人々の行動の変化など、どのような経緯で現在の風景に変化していったのか、そしてそれらがこれからも同じ状態でいられるためにはどのような行動が必要になるのかを考えさせる。

	①自分たちの町に何が起きたら守りたいものが壊れてしまうのか。 ②自分たちがどんなことを繰り返すと、街の風景は壊れるのか。 の2つを考えさせる。	◇近年大きな問題になっている地球温暖化やごみ問題など、子どもたちにとっても身近な問題とリンクさせ考えさせることで当事者意識を持たせる。
4	(1)自分たちのふるさとの美しい風景を守っていくために自分が出来ることを考えさせる。 (2)考えたことを作文にする。 (3)自分が考えたことを食らう全体で発表し合う。	◇子どもたち一人一人が守りたいふるさとの風景を具体的にどのような行動を行うことによって守っていくか考えさせる。
5	(1)今まで考えてきたことを踏まえ、どのような楽器を使用すれば「ふるさと」をさらに豊かに表現できるかグループごとに考える。 (2)楽器を使用するパートを決め、どのようにその楽器を鳴らすか考える。 (3)自分たちのふるさとに想いを馳せながら「ふるさと」の合奏発表を行う。 (4)振り返りシートに、これまで学んだこと、考えたことを踏まえてどのようなことを意識し演奏を行ったか記入させる。	◇第1、2次で考えた、自分たちのふるさとの風景を思い浮かべながら感情豊かに歌わせ、合奏させる。 ◇楽器を使用し、具体的にどのような表現方法でふるさとへの思いを歌うかを考えさせる。 ◇発声法・スラーの使い方によって表現方法を工夫できることを伝える。

7. 使用する資料など

・昭和45年(1970年) 品川区の東京港が生活用水で汚染された写真(左)

https://www.kankyo.metro.tokyo.lg.jp/data/photo/scenery/water/film_08.html

[写真 水質汚染\(8\) | 東京都環境局 \(tokyo.lg.jp\)](#)



- ・昭和 54（1979）年 12 月 多摩川丸子堰下の写真(右)

生活排水に含まれる洗剤などにより白く泡立った多摩川の写真。奥に見えているのは丸子堰で、手前に架かっているのは東急東横線の鉄橋である。昭和 40 年代後半、合成洗剤は生物に分解されやすいソフト型に切り替えられ、泡の発生は、40 年代前半に比べてかなり改善された。しかし、完全に改消されたわけではなく、風が強い日には、吹きちぎられた泡が舞い飛ぶような状況であった。

https://www.kankyo.metro.tokyo.lg.jp/data/photo/scenery/water/film_02.html

[写真 水質汚染\(2\) | 東京都環境局 \(tokyo.lg.jp\)](#)

- ・現在の品川区東京港周辺の写真(左)
- ・現在の多摩川周辺の写真(右)

https://www.bing.com/images/search?view=detailV2&ccid=1FSvewP3&id=419E8ECA82736022D6494B62FFBA310BC3FE3475&thid=OIP.1FSvewP3iHM7Lxp9LwabjQHaFj&mediaurl=https%3a%2f%2fcdn.4travel.jp%2fimg%2fthumbnails%2fimg%2ftravelogue_pict%2f44%2f09%2f29%2f650x_44092936.jpg%3fupdated_at%3d1465647036&exph=487&expw=650&q=%e5%a4%9a%e6%91%a9%e5%b7%9d%e4%b8%b8%e5%ad%90%e5%a0%b0%e4%b8%8b&simid=608040109821265351&ck=2F14D37691F74D3F33F88451620F2003&se

lectedIndex=22&FORM=IRPRST&ajaxhist=0



7. 参考文献

音楽之友社 小学校教員養成課程用 最新初等科音楽教育法

1. 題材名

『世界から画材が消えたなら』

2. 単元の目標

今回の単元では、筆や絵の具などの画材は使えない。その代わりに、木の葉や石、砂などをつかい、その色彩を使って絵画的アプローチをしていく。自然の中の色彩というと、葉っぱは緑、紅葉は赤、石は灰色など、決まったイメージを持ちがちだが、自然には思っているよりもたくさんの色彩がある。それを発見しに行くために実際に木の葉や石を観察しに行き、その中で日の光や影により色の見え方が変わったり、近くで物質を見るとときと、遠くから物質を見るとときで色の見え方が変わったり、物質一つ一つも多様な色相やトーンが存在することに気が付く。これにより、自然の中には多様な色彩があることを知り、その美しさに気づくことと、決まったイメージを壊し、柔軟なものの見方が出来るようになる視点を養う。

また、授業内では色彩の学習をする。二つ以上の色を組み合わせることを「配色」といい、それを作品制作に活かす。配色には時代や個人差などの違いを超えた、高い普遍性を備えたものも存在している。ここでは、高校ならではの専門性の高い美術の分野の知識を身につけることと、配色イメージを自身の制作の意図に応じて利用できる力をつけることが目的である。(補足：配色は様々なところに隠されている。立ち入り禁止の赤と白の看板はビコロールカラー配色といい、コントラストが高く、誘目性の高い配色である。その他広告、おもちゃ、装丁、あらゆるところに配色が存在し、相手に伝えたいイメージに応じて使用されるものである。配色は世の中に幅広く必要とされるスキルである。)

最後には、環境保全について考えて行く。芸術活動もたくさんの自然からの恩恵を受けており、絵画では黄土、緑土、辰砂(硫化水銀)、ラピスラズリ、珊瑚、胡粉(牡蠣)など。工芸、彫刻では、木材、粘土、漆、藍、夜光貝、絹など。陸上の環境保全がなされなければ、黄土や緑土、木材、粘土などが使えなくなり、海の環境が保全がなされなければ、珊瑚や胡粉などが使えなくなる。このように、環境保全がなされなければ芸術活動は衰退していき、私たちのいつもの生活にもかかわってくるだろう。今回の授業で、環境保全についての問題意識を養う。

3. 単元について

(1) 教材観

・画材には〈色材〉〈支持体〉〈描画道具〉が存在し、絵画制作にはこれらが欠かすことが出来ない。しかしそれらがなくなったとき、どうすれば絵画的なアプローチが出来るのだろうか。方法の一つとして自然に存在するものを活用し、モチーフを構成するということで絵画的なアプローチが出来る。自然を使った芸術ということで、環境芸術の一つ〈アースワーク〉、とくに作家でいえば Andy Goldsworthy との関連性が強く、近代美術との繋がりからインスピレーションが得られる。自然の色彩の豊かさについては、課題設定時期は秋を想定しているため、紅葉の美しさを作品に取り入れることが出来、身近な自然素材の美しさや素

材の良さを触って使って実感できる。

・自然素材を使い芸術表現が出来たことから、授業の締めでは自然界からの芸術的恩恵について話す。今回の自然素材を使った制作活動もふくめ、洋画や日本画では緑土や黄土、辰砂に瑠璃、珊瑚などが使われ、彫刻や工芸では粘土や木材、石材や漆などが使われる。しかし、自然環境保全がなされなければ芸術活動は推定していってしまうということを切り口に問題意識を芽生えさせることが出来ると考えられる。

(2) 指導観

第一次の導入では、絵を描くには何が必要かを問いかける。恐らくは筆や絵の具やキャンバス（紙などの支持体）と答える生徒がいると考えられる。しかし、それらがなくなったらどのように絵画的アプローチが出来るかを考えたとき、木の葉や枝、石、砂利、砂などを使った表現手法ができることが生徒の意見の中から出てくると思われる。そこで、今回の授業では、筆や絵の具などの画材を使わないという縛りを課し、自然素材のみの活動を行う。

展開では、生徒のインスピレーションを刺激するために、自然を使った作品例として、アースワークの作家である Andy Goldsworthy の作品を見せる。彼の作品は木の葉や石を使った色彩のグラデーションや、枝を組み合わせた幾何学的な作品が多くみられ、どのように素材が使われているか、色の使い方からどんな印象を受けるかなどを考える。

自然の中に存在する色彩は、どのようなものがあるかをひとまず考えてみる。そのあと、実際の木の葉等々を観察してみる。そこで、思っていたよりも多様な色彩があったということを知る。それを知ったうえで、色相環を頼りに配色を考えて行く。配色は色相のグラデーション、トーンのグラデーション、軽重感、軟硬感、ダイナミック配色、モダン配色、クリア配色、カジュアル配色、ナチュラル配色、など基本的な配色イメージ法を実際の自然素材を使って学習する。

色彩の学習がすんだのち、配色イメージ法を使い自分が現したいもののイメージを書き出す。制作のテーマは、「自然の中にある音」。外に出て、どんな音が聞こえるかを耳を澄ませて感じ取り、その音を聞いてどこから聞こえてくるのかを想像したり、その音が自分に与える心理的影響をオリジナルの図形として表す。音の聞き方については、校内の木々が生い茂る場所を活用する。まずは立ったまま、座ったまま、動かずに静かに音を聞き、次は歩き回り、音を聞いてみる。その際は足元の地面を踏みしめる感覚にも注意させる。歩くたび、足裏と地面との摩擦で音が生まれるからだ。また、なぜこの作品を作ろうと思ったのかを作者の思いとして考えを書く。作品の大まかな制作計画については、色鉛筆などの画材は使えないので鉛筆で形や色彩の構成方法、素材の使い方などを明確に書いていく。

制作を始めていく。制作では竹熊手や竹箒、軍手や籠を使う。自身の制作計画にのっとり、制作を進める。制作が終わった後は、講評会を開く。講評会はクラスを二つに分け、質問グループと解答グループに分かれる。作品を見て回り、素材の使い方や、配色イメージ法に着目し、どのような美しさがあるに迫って行く。

制作や授業を通したまとめでは、今回の制作は自然素材を使ったことから、芸術における自然界の恩恵や、環境保全がなされなければ芸術活動は衰退してしまうことを伝えて、授業の締めとする。

(3) ESD との関連

○ESD の視点

1. 多様性

自然には本当に多様な色彩が存在する。例でいえば、自然界には日に当たった部分は明度が高い黄みがかって見え、陰になった部分は明度の低い青みがかった色に見える。さらに、それらの色彩を配色することにより、おなじ自然素材を使っている、生徒の考えの数だけ多様な色彩イメージを作り出すことが出来る。

2. 責任性

授業では自然素材を使うことで、生徒は素材の良さを感じる。同じ自然素材と絡めて、芸術活動にはたくさんの自然からの恩恵を受けていることにつなげていき、自然を守らなければ芸術活動は衰退していくことを知る。このことから、自然の恩恵を受けている私たちは、環境を守らなければならないという責任性が生まれると考える。

○ESD で育てる資質能力

1. クリティカルシンキング

自然には、私たちが思っているよりも多くの色彩が存在する。もみじの紅葉の赤だけでも、日に当たっている部分は明度の高い黄みがかった赤色、陰になっている部分は明度の低い青みがかった赤色となる。また、緑から赤に変わりつつあるグラデーションも見受けられるものもあれば、虫喰いや腐食が進み、赤茶けた色の色彩も見発見できる。このように、よく観察すれば自身が思っていたよりも本当は多様な色彩が発見できる。またそれらの発見を基に、作品案をより良いものにするための上方修正ができるので、クリティカルシンキングの育成が期待できる。

○ESD で育てたい価値観

1. 自然環境の保全

今回の単元では、自然素材をおもに使用した作品制作をおこなう。自然素材を使ったことで作品をつくる事が出来たということを切り口に、芸術で使う自然由来の道具があることを伝え、自然環境の保全がなされなければ、芸術活動ができなくなる。ここから自然環境の保全の問題意識を芽生えさせる。

○この単元で期待できる SDG s

1. SDG s 14 海の豊かさを守ろう

2. SDG s 15 陸の豊かさを守ろう

自然の豊かさは、芸術にも恩恵をもたらしている。今回の単元で自然素材を使用したこともそうだが、彫刻であれば木彫に石彫、塑像があり、工芸でも木材をつかい、そのほかにも粘土や漆、螺鈿細工の夜光貝、洋画では黄土や緑土、辰砂（硫化水銀の鉱石）、日本画では珊

瑚やラピスラズリなど、多様な自然の恩恵の形が芸術でもある。海水の温度上昇や汚染が続けば珊瑚の紅や夜光貝を使うことが出来なくなり、森林の手入れが行き届かなければ木彫や石彫や粘土、黄土などが使えない。このように、芸術活動は自然の豊かさから恩恵を受けており、環境保全がなされなければ芸術活動は衰退していくということから、自然の豊かさを守るという意識を芽生えさせる。

4. 単元の評価の観点と規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に取り組む態度
(1) 自然の中にある決まったイメージの色彩ではなく、多様な色彩を発見することが出来る。 (2) 自然の中に見出した色彩を、配色イメージを使用して、自分の作品の意図に合わせて使うことが出来る。	(1) まず、自然の中にどのような色彩があるか、考えていくことが出来る。 (2) 自然の中にある多様な色彩を活用し、考えた配色を基に、実際に作品を構成していくことが出来る。 (3) お互いの作品を、色彩の構成の活用法や、素材の使い方などに注目して、どのような美しさがあるか、考えることが出来る。	講評会において、作者の生徒と対話的に作品の美しさや作品の制作意図について話すことが出来る。

5. 本時の展開計画

学習展開過程

	学習活動	教師の動き	指導上の留意点
第一時			
1	絵を描くためには、何が必要になるか考える。	パワポを用意する。生徒に投げかける問いをパワポに映す。	
2	画材が使えない状態で美術作品を作るとなると、何をすればいいかを答える。	画材が使えない中、作品を作るには代替品として何をすればいいかを問いかける。	
3	今回は自然素材を使う。 Andy Goldsworthy の作品を見せる。	パワポに作家、作家作品を載せる。	作品の素材の使い方や、色彩の構成の仕方に注目させる。
第二時			
4	ひとまず、自然の中にどん	生徒の意見を黒板にまとめる。	

5	な色彩があるか考える。 実際にどんな色彩があるのか、校内を観察して周り、自然の音を聞いて回る。	ここでは指示を通しやすくするため班で行動させる。	遠くから見てみたり、陰影の違いによる色彩の変化に注目させる。気になったものは採集する 実際に世の中に使われてる配色イメージを提示する。
第三時 6 7	色彩の勉強をする。配色には様々なイメージがあることを学習する。 自分が造りたいものの計画を立てる。	配色イメージのパワーポイントを映写する。	自分が表現しようとした動機まで明確に書くようにさせる。
8 9 10 11	自分の作品に必要な素材を集め、制作をしていく。 講評会をする。 片付け。 まとめ。	生徒に道具の準備をするよう指示をする。 クラスを半分に分け、質問する側、される側に分ける。 環境保全についての話をする。	素材の使い方、色彩イメージの使用法、などに注目し、美しさに迫って行く。 芸術活動は自然からの恩寵を受けていることを話し、環境保全につなげる。

第5学年家庭科学習指導案

奈良教育大学家庭科教育専修

福井彩乃

1. 単元名「より良い買い物の仕方を考えようーごみや無駄を減らす面からー」

2. 単元の目標

- ・地球規模で起こっている環境・社会問題について理解する。自分の生活と環境との関わりや環境に配慮した消費行動について理解する。 (知識・技能)
- ・環境・社会に配慮した買い物について考え、自分ができる物の選び方、買い方を考え工夫する。 (思考力・判断力・表現力)
- ・環境問題について関心を持つとともに、消費者としての責任を自覚して持続可能な社会の構築に向けて、日常生活で継続して取り組む。 (学びに向かう力・人間性等)

3. 単元について

(1)教材について

本単元はC消費生活・環境の領域である。その中でも、ごみを減らすためにどのような買い物をすべきかをきっかけに、自分の生活と環境・社会問題との関わりに気づき、消費行動に責任があることを理解できる。本単元はごみ問題から、環境への配慮を中心に消費行動を考えるが、学習後、社会への配慮(フェアトレード商品を買う)、地域への配慮(被災地の特産品を買う、地産地消する)生物多様性の配慮(SFC 森林認証商品を買う)のように、環境面以外にも自分たちの消費行動で世界を変えることができることに気付かせたい。

ごみ問題について、戦後の復興後、高度経済成長期を迎え、大量消費、大量生産、大量消費の社会へとなり、消費社会により生まれたごみは地球の環境汚染に大きくかかわっている。自然の再生システムが間に合わないほどにごみがどんどん増えていくことで環境に負荷がかかる。例えば、埋め立て処理をする場合、埋め立て場所がなくなっていくこと、地下水の汚染につながるという問題がある。焼却処理をする場合、燃やすことで熱エネルギーが得られるが、設備に莫大な費用が掛かっていること、発生したガスで大気汚染につながるという問題がある。そのためできるだけごみをたくさん出さない工夫や、ごみを資源として再利用できるように私たちが工夫する必要がある。

本単元を通してより良い消費者、とくに環境・社会に配慮した消費者になることを目指したい。価格や利便性だけでなく、環境のことを考えて商品や店を選ぶ消費者のことをグリーンコンシューマーという。より良い消費生活の面から、ごみを減らすためにできることを考えると、「必要なものを必要なだけ買うようにする」、「使い捨て商品ではなく、長く使えるものを選ぶ」、「容器や包装はない物を優先し、次に最小限の物、容器は再利用できるものを選ぶ」があり、間接的な方法では「リサイクルされた物、リサイクルシステムの

あるものを選ぶ」などが方法に挙げられる。これらはグリーンコンシューマーの 10 原則にも入っている。グリーンコンシューマーは商品を購入するときに環境に配慮した商品を選ぶところで終わってしまうのではなく、購入後、その商品をどのように使うか、また、使い終わった後はどうするのかを考えることも大切である。商品を購入したあとでは、食べ残しを減らす、牛乳パックを回収ボックスへもっていく(リサイクル)、捨てずにおさがりにする(リユース)、最後まで大切に使い切る(リデュース)、修理して使う(リペア)問題のある商品に意見を反映させる(消費者の権利)などの行動ができる。

購入・使用・廃棄の消費生活の流れのなかの、消費者が商品を選び購入することは、選挙で一票を入れることと同じであり、一人の消費者の力は小さく思えるが、その 1 票は大きな社会参加であること。より良い商品を買ひ、問題のある商品は買わない(=投票しない)ことで、商品が改善されたり、事業者の姿勢を変えたりすることができる。

(2)児童について

(3)指導について

この題材を通して自分の消費行動が自然環境や社会に関わっていて消費行動に責任があることを理解させたい。本単元では初めに買い物をする時に気を付けることは何かを考える。気を付けることとしてデザイン性、安さ、好み、鮮度、環境への負荷などが予想されるが児童にとってはデザイン性、安さ、好み、鮮度が身近に感じるもので環境への負荷について身近に感じる児童は少ないと予想する。そのために、まず、自分の消費行動が自然環境、社会にどのような影響を与えているのか、どのようにかかわっているのかを気付かせたい。消費行動が自然環境、社会に与える影響の 1 つとしてごみの問題がある。使い捨て商品を購入する、必要以上に購入する、過剰包装の商品を買うことで捨てるごみの量が増えることになる。ごみの処理の方法に焼却があるが、それにはお金がかかってしまうこと、燃やすことで熱エネルギーが得られるが設備に莫大な費用が掛かること、焼却の際のガスで大気汚染につながる、埋め立てでは地下水の汚染につながる、埋め立ての場所がなくなっていくという問題がある。このような問題に自分たちが関わっていることを理解させるために、小学生にとって身近なお菓子の包装を挙げ、そこに捨てなければならないものが多いことを理解し自分事としてとらえる。例えばチョコレート菓子では、リボン、箱のふた、段ボール紙のつめもの、チョコレートの説明書、プラスチックの型トレイ、箱の底蓋、チョコを包む銀紙と様々な包装があることがわかる。ここでごみを増やすことで様々な問題があることがわかったが、ごみを出してはいけないという意味ではなく、必要以上のごみを出さないこと、ごみを出したとしてもそのごみが資源として再利用できれば最終的にごみになっていないことを確認し、誤解しないように指導する。

自分の消費行動、特にごみを増やすという面で環境や社会に影響を与えていることが理解できた。次に買い物の仕方を工夫することでどうすれば捨てるものを減らすことができるか買い物をする時に気を付けるポイントを考える。気を付けるポイントとして、「必要なものを必要なだけ買うようにする」、「使い捨て商品ではなく、長く使えるものを選ぶ」、「容

器やほうそうはない物を優先し、次に最小限の物、容器は再利用できるものを選ぶ」、「リサイクルされた物、リサイクルシステムのあるものを選ぶ」などが挙げられる。

ここまでごみ問題の面で環境に配慮した買い物の仕方を考えた。次に消費行動の中には、購入・使用・廃棄の流れがあり、商品を購入するときだけでなく、購入後、その商品をどのように使うか、また、使い終わった後はどうするのかを考えることも大切であることに気付き、購入後にできることを考える。

消費者が商品を選び購入することは、選挙で一票を入れることと同じである。これを本単元に当てはめて考えると、リサイクルに熱心な企業や再生資源を使用した商品、再生資源として使える商品を買ひ、そうでない商品は買わないことで、商品が環境に配慮した物に改善されたり、事業者の姿勢を変えたりすることができる。このことから、自分たち消費者には責任があり、環境・社会に配慮した消費行動が必要であることを理解する。

環境・社会全体で考えたよりよい消費行動を考えた。これらの行動はグリーンコンシューマーの 10 原則の内容であり、それをきっかけによりよい消費行動とは何かについて学んだ。自分が今日からできる「よりよい消費行動」を具体的に挙げて、クラスと交流することで自分のより良い消費行動の幅を広げる。意見交流をして選択の幅を広げることで、消費者が我慢して商品を買わなければならない、という意味ではなく、洗剤やお菓子、調味料など、必要な分だけ購入できる量り売りのお店を選択するなど楽しく環境に配慮した消費行動があるということを理解させたい。また、宿題としてより良い消費行動を見つける際に、家のごみを確認することにより、児童と児童の家庭と一緒に消費生活を意識できるようにしたい。

(4)ESD との関連

○この題材で働かせる E S D の視点 (見方・考え方)

【相互性】

普段の消費生活が身近な自然にもたらす影響があるこり、これを無視して続けていけば地球環境に大きな負荷をかけるということ。

【責任性】

私たちが環境全体を考えた消費行動を意識して生活を変えていくことが何よりも大切なこと。

○この学習を通して育てたい E S D の資質・能力

【クリティカル・シンキング】

自分の生活を見つめ直す。便利なものが本当に良いのか、自分だけでなく環境に配慮した生活や消費行動をしているかを考える。

【長期的思考力】

私たちの生活が、今後の地球環境にどう影響するか、商品購入した後のことまで考える。

【コミュニケーションを行う力】

これからの環境に配慮した生活を送るために、自分たちができる消費行動について、意見交流を通して自分の考えをつくりあげる。

○この学習を通して育てたいE S Dの価値観

【世代間の公正】

自分たちも、将来の人も、豊かな地球環境で生活できるような消費生活を追求することが大切である。

【自然環境や生態系保全を重視する】

環境に配慮した消費生活でないと、環境に負荷をかけてしまい、「より良い消費行動」とは言えない。

○達成が期待される SDGs

【12 作る責任・使う責任】

4. 単元の評価規準

知識・技能	思考力・判断力・表現力	学びに向かう力・人間性等
・地球規模で起こっている環境・社会問題について知り、自分の消費生活と環境・社会に関わりがあることを理解する。 ・環境に配慮した消費行動の方法を理解する。	・環境・社会に配慮した買い物の仕方を考え、方法を伝えている。 ・様々な買い物の方法を聞き自身の考えを深めている。	・環境問題について関心を持っている。 ・消費者としての責任を自覚して、日常生活で実践しようとする。

5. 単元展開の概要

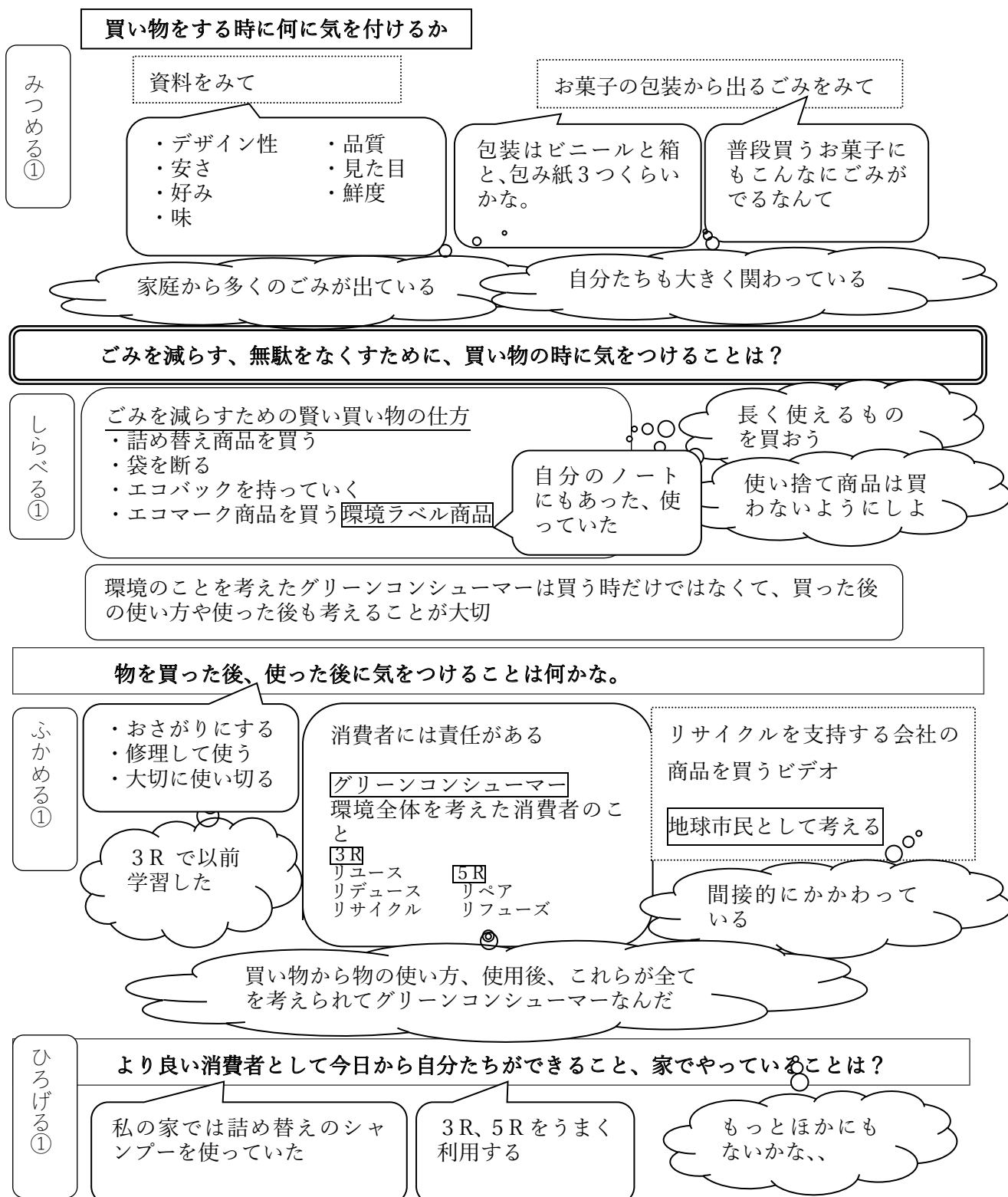
	学習活動	指導上の留意点	評価
み つ め る	○買い物をする時に何に気を付けるか考えを挙げる	●思いつかない場合はヒントで具体的な商品を提示する(資料1)	
①	○ごみ問題の写真から、ごみが増えることで環境に負荷を与えていることを理解する ○お菓子の包装から、ごみは家庭など自分たちから出ていることに気付く	●黒板にごみ山の写真を貼る ●お菓子の包装を少し予想させてから包装の分解を進める	環境問題について関心を持っている(学びに向かう人間性)

		●ごみを出してはいけないという意味ではなく、ごみを出したとしても資源として再利用できれば最終的にごみになっていないことを確認する	地球規模で起きている環境・社会問題について知り、自分の消費生活と環境・社会に関わりがあることを理解する (知・技)
し ら べ る ①	○ごみを減らすために買い物でできることを考える ○買い物の仕方を全体で発表する ○消費行動は商品を購入するときだけでないことに気づき、購入後の使い方や使い終わった後はどうするのかについて問題意識を持つ	●「買い物時」にできることで考えるように言う ●具体的な意見が多く出たらグリーンコンシューマー10原則より「必要なものを必要なだけ買うようにする」、「使い捨て商品ではなく、長く使えるものを選ぶ」、「容器や包装はない物を優先し、次に最小限の物、容器は再利用できるものを選ぶ」「リサイクルされた物、リサイクルシステムのあるものを選ぶ」の4点で分類し買い物の仕方をまとめて整理する ●実際に自分の持ち物から環境ラベル商品がないか探す時間を作る ●購入・使用・廃棄の流れが消費行動にあることを伝える	環境・社会に配慮した買い物の仕方を考え、方法を伝えている。(思・判・表)
ふ か め	○全時で児童から出なかった案について、ビデオを視聴してさらに環境に配慮した買い	●間接的な行動となる、消費者が商品を選び購入することは、選挙で一票を入れること	・次回までの宿題として、より良い消費行動で、家庭でや

る ①	物の方法を理解する ○商品購入後の使い方や使い終わった後で、環境・社会を考えた行動は何か考える ○意見を発表する	についてビデオから理解できるようにする ●古紙回収→リサイクル、最後まで使う→リデュース、おさがり→リユースと関連付けられるように補足する	っていたこと、自分ができることを見つけておく 環境に配慮した消費行動の方法を理解する（知・技）
ひろげる ①	○宿題で見つけてきたより良い消費行動について全体で意見交流する ○全体の意見交流を通して良いと思った行動や真似したい行動を見つけ、さらに自身のより良い消費行動について考えを深める	●黒板に案を書いていく ●案が出た時に、消費者が環境に配慮して我慢をしなければならないという考えに偏ってしまった場合は、量り売り等、必要な分だけを購入できるお店を選択するという方法もあることを伝える ●交流を通して様々な消費行動が挙がるようにする	様々な買い物の方法を聞き自身の考えを深めている（思・判・表） 消費者としての責任を自覚して、日常生活で実践しようとする（学びに向かう人間性）

6. 授業構想案

5年家庭科「よりよい買い物の仕方を考えよう」(全4時間)



7. 参考資料

1) 商品を購入するときに気をつけること、ヒント

きゅうり 価格：1本80円 産地：北海道産 その他：まっすぐな形	きゅうり 価格：1本60円 産地：奈良県産 その他：まっすぐな形	きゅうり 価格：3本160円 産地：奈良県産 その他：曲がっている
Tシャツ 素材：綿100% 生産国：日本 価格：2000円 その他：白い無地	Tシャツ 素材：ポリエステル100% 生産国：日本 価格：1000円 その他：白地に紺色の横じま	Tシャツ 素材：綿100% 生産国：イタリア 価格：3500円 その他：自分好みのブランドデザイン

(東京書籍中学校家庭科 p 230)

2) 過剰包装の例

バーバラ・ジェームズ(著)小田英智(翻訳) (1991)『ごみとリサイクル 地球をゴミから
守るために』 p10

3) ビデオ「よりよい買物の仕方を考えよう～エシカル消費ってなあに?～」

チャプター：地球の資源、環境を守る (9分40秒～11分12秒)

[啓発資料等 | 消費者庁 \(caa.go.jp\)](http://caa.go.jp)

令和2年度
ESDティーチャープログラム ESD学習指導案集

2021年3月31日

近畿ESDコンソーシアム 国立大学法人 奈良教育大学
〒630-8528 奈良市高畑町 奈良教育大学
教育研究支援課

E-mail k-soumu@nara-edu.ac.jp

Tel 0742-27-9367

Fax 0742-27-9147